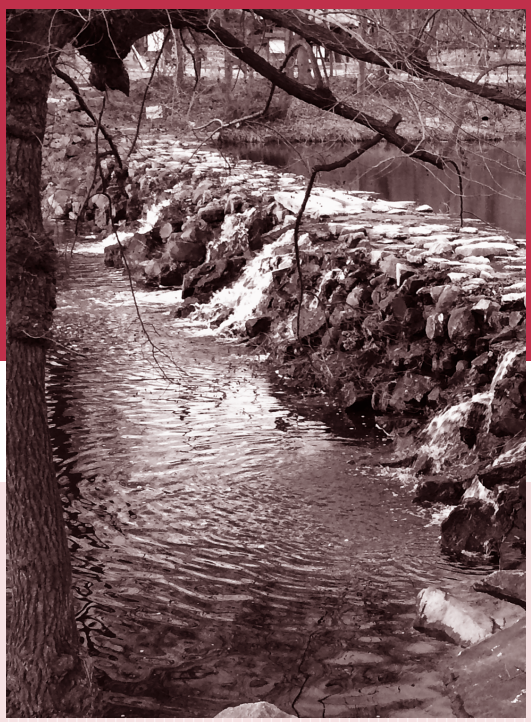
ISSN 0913-8439

Review of Asian and Pacific Studies

2015 No. 40

アジア太平洋研究



特集：〈アジア〉を読む／聴く　記憶・アイデンティティ・共生

花崎皋平の思想をめぐって

〈特別掲載〉ワークショップ報告：アジアの思想を読む　中江兆民を中心に

Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
成蹊大学アジア太平洋研究センター

『アジア太平洋研究』

Review of Asian and Pacific Studies

投稿案内

編集方針

『アジア太平洋研究』は、日本・北米を含むアジア・太平洋地域に関する問題や政策課題の理論的、経験的研究を促進するために、これらの領域に関する研究論文の投稿を歓迎する。本誌は多分野を扱うことによってそれぞれの専門研究の充実を図るとともに、異分野の研究者間の交流促進に寄与することも狙いとする。

投稿規程

1．論文は和文または英文に限定する。和文の場合、図表込みで１編およそ400字詰め横書き原稿60枚（同等のワープロ原稿）以内とする。英文の場合、図表込みでダブルスペースA4判40枚（10,000語）程度とする。また論文には英文のアブストラクト（300語程度）をつけるものとする。投稿はワードプロセッサーによって作成された論文が望ましく、完成原稿とその電子データを、成蹊大学アジア太平洋研究センターに送付する。なお、電子データの送付については、電子メールの添付ファイルで送信してもよい。

2．投稿された論文は原則として複数のレフリーの審査を受ける。採用・不採用にかかわらず、投稿原稿は返却しない。

3．投稿の書式などの詳細はセンターに直接問い合わせるか、ホームページ（http://www.seikei.ac.jp/university/caps/japanese/04publication/info.html）を参照されたい。

編集委員会
委員長：李 静和
委　員：遠藤 不比人、挾本 佳代、渕 史彦、山本 真基、田浪 亜央江
編集事務局：神田 昭子、関島 広祥、山中 佐智子

2015年11月発行
発行所　成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒 180-8633　東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1
TEL: 0422-37-3549　FAX: 0422-37-3866
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
発行者　成蹊大学アジア太平洋研究センター
『アジア太平洋研究』編集委員会
表紙デザイン　山口 敦
印刷所　株式会社 東京技術協会
〒 108-0073　東京都港区三田 4-8-41

No. 40 2015

目　　次

[特集：〈アジア〉を読む／聴く　記憶・アイデンティティ・共生]

記憶の痛み、物語の力――井上ひさし「父と暮せば」論―― …… 村上 陽子 (1)

パレスチナの場所と記憶をめぐる考察
タウフィーク・カナアーンの痕跡と業績を手掛かりに …… 田浪 亜央江 (11)

[ワークショップ報告] 放浪かもめは千年の語りの道をゆく。 …… 姜 信子 (23)

〈花崎皋平の思想をめぐって〉

〝連続講座　花崎皋平〟を回顧する
――「三人称のわたし」はひらかれたか …… 川本 隆史 (39)

〈回心〉の倫理ではなく、〈求め〉の政治を …… 金井 淑子 (53)

[講演録] 共生とアイデンティティの思想 …… 花崎 皋平 (75)

〈特別掲載〉

[ワークショップ報告]
アジアの思想を読む　中江兆民を中心に …… 宮村 治雄・井田 進也 (85)

[論文]

An Insight into Asian Trade Regionalism: Japan's Double Membership
in the Exclusive Games of TPP, and RCEP. ……Sebastian Bobowski (141)

Direct Investment of Chinese Enterprises on the
European Market by Industries ……Łopacińska Karolina (167)

[パイロットプロジェクト報告]

異文化理解のためのロールプレイゲームの開発と
多国間比較実験の実施 …… 中野 有紀子 (191)

Who Issues Debt Securities in Emerging Economies? ……Mamoru Nagano (209)

ポリビニルアルコールのネットワーク構造を利用した
ジオポリマー粉末の調製 …… 井上 元基 (241)

Review of Asian and Pacific Studies

No. 40 **2015**

CONTENTS

[Special Issue: Reviewing Asia: Memory, Identity and Coexistence]

Pain of the Memory, Power of the Story: On Hisashi Inoue's *Chichi to Kuraseba*
……Yoko Murakami (1)

Place and Memory of Palestine: Around Tawfiq Canaan's Traces and His Achievements ……Aoe Tanami (11)

[Workshop Report]

The Vagabond Seagulls Tell Tales for a Thousand Years — and Beyond
……Nobuko Kyo / Shinja Kang (23)

--- On Kohei Hanazaki's Thoughts

A Personal Retrospection of the Serial Lecture on *Kohei HANAZAKI*'s Thought: From the Perspective of the Third Person "I"……Takashi Kawamoto (39)

For the Politics of "Demand", Not for the Ethics of "Conversion"……Yoshiko Kanai (53)

[Lecture] Thoughts of Coexistence and Identity ……Kohei Hanazaki (75)

--- Special Report

[Workshop Report] Reading Asian Thought — Around Chōmin Nakae
……Haruo Miyamura, Shinya Ida (85)

[Articles]

An Insight into Asian Trade Regionalism: Japan's Double Membership in the Exclusive Games of TPP, and RCEP. ……Sebastian Bobowski (141)

Direct Investment of Chinese Enterprises on the European Market by Industries
……Łopacińska Karolina (167)

[Pilot Project Report]

Developing a Role-Playing Game for Cultural Understanding and Conducting a Comparative Experiment between Multiple Countries……Yukiko Nakano (191)

Who Issues Debt Securities in Emerging Economies?……Mamoru Nagano (209)

Preparation of Geopolymer Powder Using Network Structure of Polyvinyl Alcohol
……Motoki Inoue (241)

記憶の痛み、物語の力
―井上ひさし「父と暮せば」論―

Pain of the Memory, Power of the Story:
On Hisashi Inoue's *Chichi to Kuraseba*

村上 陽子*
Yoko Murakami

Abstract

In this paper, I study about the power of the story in Hisashi Inoue's drama *Chichi to Kuraseba*. It is difficult to comprehensively perceive the event of atomic bombing of Hiroshima. Countless materials and testimonies have been accumulated to have clear understanding of the event. Inoue wrote *Chichi to Kuraseba* with the will to collect and read as many testimonies and memories as possible, and to make them into a bigger one. I have been interested in his making a single story by collecting pieces of memories. A created story has more strength, power, and influence on people than pieces of materials and testimonies. Stories often try to compete for the strength and to overpower other stories. Through this paper, I examine the power of the story which arouse pain as well as delight by reading *Chichi to Kuraseba*.

A young female called Mitsue is a main character who feels a debt to the dead of the atomic bombing. She especially feels regret for leaving her father behind. But her father tells that it was his request that she ran away by herself. Since two people articulate the same event from two different viewpoints, there are clash between the stories. Mitsue's father reverses her story from his perspective.

Although Mitsue's marriage is suggested at the end of the story, this is not a happy ending. Mitsue's father entrusted her with the sense of obligation toward the dead. That is the severe request that the power of the story brings. Through text analysis of *Chichi to Kuraseba*, I would like to clarify how the living is constrained by the power of the story as a request of the dead.

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター特別研究員、Assistant Researcher, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

Ⅰ．はじめに

井上ひさし「父と暮せば」は、1994年9月のこまつ座第34回公演（紀伊國屋ホール）の初演以降、幾度も再演されてきた人気の高い芝居である。戯曲は1994年10月に『新潮』に掲載され、1998年に新潮社より単行本として刊行、2001年に新潮文庫になって順調に版を重ねている。

黒木和雄監督の映画「父と暮せば」（2004年）も、主演の宮沢りえと原田芳雄の好演もあり、各方面で高い評価を受けた。映画化の際、井上ひさしは黒木和雄に「芝居はフランスとロシアではやったのだけど、海外に持って行くのはとてもお金がかかる。映画だったら持って行きやすいから、世界中でこの映画を見せてほしい」と「お願い」したという（黒木・土本 2004）。芝居、戯曲、映画という三つのかたちで展開された「父と暮せば」は、20年以上にわたり、日本国内に留まらない広がりを持って、多くの人々に愛されてきた物語だと言える。まずはその概要に触れておこう。

原爆投下から3年後、1948年7月の最終火曜日の午後5時半。雷におびえた福吉美津江が家の中に駆け込むと、父・竹造が押入れの中から美津江を手招きする。美津江は原爆の閃光を想起させる雷がひどく苦手になっていたのだ。そして亡霊としてよみがえってきた竹造もまた、雷に恐怖を感じている。ここから美津江と竹造の数日間の物語が幕を開ける。

23歳の美津江は図書館に勤務しており、広島文理科大学の助手を務める26歳の青年、木下に恋心を抱いていた。原爆投下時、呉の海軍工廠で教官をしていた木下は、敗戦後に故郷の岩手に引き上げる前に広島の焼け野原を歩き、原爆のすさまじさを痛感した。木下は原爆瓦などを資料として保存しなければならないという思いに駆られる。1948年に広島に戻った彼は原爆資料を集め始めるが、下宿の小母さんに嫌な顔をされ、置き場所に困って図書館を訪ねたのだった。美津江は、図書館で預かることはできないが、自分の家でならと占領軍の目が光る中、原爆資料を預かることにする。

竹造は美津江と木下のやりとりを見守り、互いに思い合っていることを知りながらも一歩を踏み出せない美津江をときに励まし、ときに叱りつけて「恋の応援団長」の役割を果たす。死者への罪悪感でがんじがらめになっている美津江と、それを解きほぐそうとする竹造のやりとりを通して、原爆がこの父娘をどのように死と生の両極に引き裂いたか、生き残った美津江がなぜ自らの人生を生きることに前向きになれないのかが徐々に明かされるという筋立てである。

被爆者に「自分史」を書いてもらう取り組みを続けてきた栗原淑江は、「父と暮せば」を見たときの衝撃を「この一時間半ほどの短い芝居には、私が長年にわたって被爆者たちから学んできたことのエッセンスがぎっしりと凝縮されていた」と表現している（栗原 2004）。高橋敏男も竹造が「背後の無数の死者たちとつながっている」存在だと指摘している（高橋 2010）。体験の「凝縮」や「背後の無数の死者」の存在が「父と暮せば」に見出せるのは、膨大な数にのぼる被爆者の手記を「聖書のように読み続けてきた」と語る井上ひさしの、「演劇で、あの日、広島や長崎に具体的にどんなことが起きたのかを語りたい。あの日の一人ひとりの伝記を編みたいぐらいだ。しつこく記憶し、記憶を持ち寄って大きくしたい」（朝日新聞 2000）という意志がこの作品に反映されているからにほかならない。だからこそ、「父と暮せば」はトラウマ、サバイバーズ・ギルト、原爆をいかに記憶するか・いかに語るかなど、さまざまな問題を提起する作品となっている。

たとえば陣野俊史は「言葉の力」に着目している。陣野は美津江が親友の昭子への手紙を落としたために石灯籠の根元にしゃがみ、被爆の瞬間に生命を拾ったことを重視する。手紙という物理的重さを持つ言葉の力が美津江を救う一方で、なぜ昭子ではなくあなたが生きているの

かという昭子の母の言葉に美津江は深く傷つく。その状態を破り、未来を切り拓くのは美津江が木下に宛てた手紙であり、その手紙を出すよう「命令」する竹造の言葉なのだと陣野は論じている（陣野 2011）。

陣野の指摘には娘が父によって支えられ、赦されるだけの存在ではなく、昭子や木下との関係の中で自らがつづった言葉（手紙）によって再生していったのだという認識がある。そして言葉が人を救う力を持つのと同時に、言葉こそが人を傷つけるのだということも明確に言及されている。

本稿では陣野の指摘を踏まえた上で、戯曲「父と暮せば」をめぐって、言葉によって構築される物語の力について考えていきたい。美津江と竹造は、原爆資料や偶然の積み重なりなど、断片的な出来事のかけらを言葉によってつなぎあわせ、それぞれが強固な物語を構築している。父による娘への赦しというような慰撫とはほど遠い、物語の強度を競う闘争を秘めたテクストとして戯曲「父と暮せば」を読むことを試みる。

Ⅱ．資料から言葉へ――「おはなし」づくりの要請

ある晩、美津江は「夏休みおはなし会」のために昔話の練習をしていた。そこへあらわれた竹造は、オチが「いまの子によう受けん」と言い、「おまいのオチよりゃあ笑える」とオチをつくりかえてしまう。美津江はこれに憤り、「前の世代が語ってくれた話をあとの世代にそっくりそのまま忠実に伝える」のが「広島女専の昔話研究会のやり方」だと主張する[1]。

この日の昼間、美津江は木下とも同じことで対立していた。木下が「あなたの被爆体験を子どもたちに伝えるためにも、ぼくの原爆資料を使うて、なんかええおはなしがつくれないものでしょうか」と口にし、美津江は「できん」と言下に否定したのである。

おはなしの魅力を子どもたちに伝えるために時代に合わせてアレンジしたり、創作したりすることを美津江がかたくなに拒否する背景には、一人の死者の存在があった。美津江は女学生時代、親友の福村昭子とともに昔話研究会をつくり、昭子が会長、美津江が副会長として活動をしていた。「はなしをいじっちゃいけんちゅう根本方針も二人で話し合うて決めたこと」であり、昭子が被爆死した後も美津江はこの方針を絶対的なものとして守りつづけている。そしてこの方針は、原爆をいかに語るかという問題においても美津江の立場を強く規定しているのである。

まず、美津江にとって原爆は言葉を越えたものである。それは原爆をおはなしにすることの可否の議論に先立つ以下の美津江のせりふによくあらわれている。

> ……四日前、先週金曜のお昼すぎ、「原爆関係の資料がありますか。市役所へ行ったら、図書館で訊いてみてくださいと言われたんですが」いうてこられた方があって、その人が木下さんじゃったんよ。ふだんのうちなら、おいとりません、ですませてしまうんじゃけど、なんかしらん、木下さんの声の調子が一途じゃった。ほいで、こげえ説明してあげたんよ。「原爆資料の収集には占領軍の目が光っとってです。たとえ集めたとしても公表は禁止されとってです。それに一人の被爆者としては、あの八月を忘れよう忘れようと思うとります。

---

[1] 長崎の被爆者としての体験を書き続けてきた作家、林京子は、井上ひさしに「井上さんの『父と暮せば』を読んで、そのとおりだと思ったのは、娘さんが民話をはなすときに、お父さんが「こうしたら面白い話になる」と言うと、娘さんが「伝えられたことに対して、手を加えてはいけない」と言いますね」、「あのセリフは、被爆者が体験を話したり書いたりする場合の、基本的な姿勢だと思います」と語っている（井上・小森 2004）。

あの八月は、お話もない、絵になるようなこともない、詩も小説もない、学問になるようなこともない、一瞬のうちに人の世のすべてがのうなっていました。そがいなわけですけえ、資料はよう集めておらんのです。それどころか資料が残っとるようなら処分してしまいたい思うぐらいです。うちも父の思い出になるようなものはなんもかも焼き捨ててしまいました」……。

美津江自身が原爆を「忘れよう忘れよう」と思っていることに加えて、「父と暮せば」の舞台となっている1948年には、原爆について語ることそのものがタブーであった。原爆資料の置き場所に木下が苦心しているのも、ここで言われている通り、占領軍の目があちこちに光っているという状況だからである。

しかし1952年4月のサンフランシスコ講和条約発効以降、原爆を主題とする小説や映画はそれ以前に比べるとはるかに多く発表されはじめた[2]。その頃、『広島文学』会員であり、作家でもあった志条みよ子による「「原爆文学」について」(『中国新聞』1953年1月25日)という投書が一つの波紋を広げた。被爆者の父を持ち、原爆に触れられることに強い苦痛を感じてきた志条は、この投書で「人生の本質へ向って美しく突き進むことのみが文学なのだ。あんなむごたらしい地獄絵図なんか、もはや見たくも聞きたくもない」と記している。志条のこの言葉は賛否両論の応酬を引き起こし、第一次原爆文学論争に発展していった。

自身も被爆者であった詩人の栗原貞子は、志条の発言に触れて「「ふれられたくない。忘れたい」と言う思いでいるところへ、講和条約発効で、原爆映画や、写真集、体験記など次々に制作され出版されて、原爆の痛みを文学に避難することで忘れようとしている志条氏が原爆文学に対して憎悪に近い反発を感じたのであろう」と語り、「原爆を売り物にするな」という批判が被爆者の間に根強く存在していたことを指摘している(栗原 1978)。

美津江の立場は志条に近いものだと言える。美津江は原爆で竹造を失い、原爆の閃光を彷彿とさせる雷に脅える日々を送っていた。その美津江に、被爆体験を子どもたちに伝えるために原爆資料で「おはなし」をつくるよう要請することがいかに苛酷なものか、おそらくまだ木下は気づいていない。

木下は原爆を体験してはいない。彼は、原爆の高熱で表面が溶け、爆風で表面がそそけだった原爆瓦を見てその威力に驚き、「この爆弾のことをよう知らにゃいけん」という動機で広島の町を歩きまわり、原爆資料を集め続ける存在である。忘れようとしても甦ってきてしまう記憶を抱えた被爆者としての美津江と、体験していない出来事に近付くために原爆資料を求めて歩きまわる木下には大きな認識の違いが存在している。「資料」という言葉によくあらわれているように、木下にとって原爆の痕跡は科学的に分析する研究の対象である。原爆資料を蓄積し、研究し、多くの人に原爆を知らせるために生かすべきだと考える木下は、美津江の仕事と自分の仕事を結び合わせようとする。

「忘れよう忘れよう」としている美津江と、「知らにゃいけん」と考える木下がわかりあうことは難しい。うつむき、沈黙し、それでもなおせりあがってくる記憶と格闘する美津江にとって、木下といっしょに過ごすことは、原爆の記憶に引き戻されることを意味するのである。

しかし木下と美津江の出会いは、木下が原爆資料を熱心に収集していればこそもたらされたものだった。そして美津江もまた、原爆資料を収集する木下の行為を否定しようとはしていない。なぜなら美津江がかつて昭子とともに広島の村々を歩き、土地の食べ物をふるまわれながら行っ

---

[2] たとえば1952年8月6日には、「原爆被害初公開」という特集で被爆者の写真やインタビューを掲載した『アサヒグラフ』(1952年8月6日号)が発売され、新藤兼人監督の映画「原爆の子」が劇場公開された。

た昔話の収集と、木下が下宿の小母さんににらまれて食事をあからさまに減らされながらもやめることのない原爆資料の収集は、どちらも記憶を集積する行為にほかならないからだ。

ただ、美津江が「お年寄り」から聞かせてもらった昔話を「そっくりそのまま忠実に伝える」ことに心を砕くのに対し、木下が収集しているのは語る者のいない記憶のかけらとしての原爆資料である。原爆瓦や熱で曲がった水薬の瓶と同じ熱線を浴びた人はどうなったのか、深く刺さって肉の内側にもぐりこんでしまったガラスのかけらがいかに被爆者の体を苛んだのかを、原爆資料はそこにあることで示している。そして、木下は変形した物質からその被害や痛みを想像することのできる知識を備えている。だが、もの言わぬ原爆資料が示す痛みを言葉であらわそうとすれば、新たな「おはなし」をつくるしかない。美津江がどうしても着手できないその仕事に挑んだのが、語ることのできない死者であるはずの、竹造だったのである。

Ⅲ.「おはなし」が持つ力——言葉が喚起する痛み

美津江が木下から預かってきた原爆資料の包みを解いたとき、竹造はその資料に手を触れることさえできなかった。竹造に代わり、美津江が被爆者の体から出たガラスのかけら、原爆瓦、熱で曲がった瓶を取り出した。しかし美津江と木下の仲を取り持とうとする竹造は、原爆資料を使って「おはなし」をつくるという木下の願いを実現させたいと考える。美津江が収集した昔話ではなく、だれもが知っている話に原爆資料をくるみ込むことを竹造は提案し、ひらめきと、美津江のことばが「よい子たちのこころの中を通り抜け」、風に乗って四方八方へ拡散していくイメージに励まされるようにして、エプロンのポケットに原爆資料を忍ばせてヒロシマの一寸法師を演じはじめるのである。一寸法師は赤鬼の腹の中で原爆資料を振りかざし、激しく暴れまわる。赤鬼の体内で肝臓やしりの穴、大腸、小腸、盲腸を攻撃する一寸法師を竹造は演じ、「やい、鬼」と呼びかけながら鬼を苛む。

竹造の語りには、原爆投下時に死んだ竹造が知りえるはずのない数字——「ヒロシマの上空五百八十メートル」のところに浮いていた火の玉の温度「摂氏一万二千度」、「秒速三百五十メートル」の「音より速い爆風」——がくるみ込まれている。原爆を生きのびた、あるいは原爆の後に生まれた者にしか知りようのないこの数字を用いて、竹造は人間、鳥、虫、魚、建物、石灯籠が「根こそぎ火泡を吹いて溶けてしもうた」こと、爆風が溶けた瓦の表面を毛羽立たせたこと、爆風で木っ端微塵になった「ヒロシマ中のありとあらゆる窓ガラス」が人間の身体を「針ネズミ」にしたことを涙声で語る。その語りは美津江を怯えさせる。美津江はときどきシクシクと痛み出す自分の左の二の腕を押さえて、「やめて！」と叫ぶ。そして竹造も、しぼりだすように「非道いものを落としおったもんよのう」とつぶやいて、ヒロシマの一寸法師を最後まで演じることを断念し、「原爆資料を話の中に折り込むいうんは、それがどげな話であれ、広島の人間には、やっぱあ辛いことかもしれん」と言って木下の願いを叶えることをあきらめる。

竹造の語りが途絶したために、ヒロシマの一寸法師は鬼の体内から飛び出てお姫様と幸せに暮らすという結末を迎えることができない。鬼は苦しみ、一寸法師は暴れ続ける。それは、被爆者の身体に潜んで突如原爆症を発症させる放射性物質や、肉の奥深くに入り込んでしまったガラスのかけらを連想させる。だからこそ、美津江は自らの二の腕をかばうように押さえ、竹造は「広島の人間」にとって原爆資料がもたらす重さや辛さをあらためて突きつけられるのではないだろうか。

手を触れることすらためらわれる原爆資料は、「おはなし」におとなしくくるみ込まれてはく

れない。むしろ「おはなし」の力を借りて、語る者と聞く者の身体を出来事の内部に引き込んでいってしまう。一寸法師として鬼をやっつけていたはずが、いつのまにか語り手も聞き手も、鬼の内臓をこそげとるような痛みを自分の内に感じてしまう。それが「おはなし」の力であり、原爆という出来事を伝えることなのだとすれば、「おはなし」をつくること、語ることは痛みや辛さを常に喚起してしまうことになる。その痛みや辛さからの退路を、美津江も竹造も持ちえていない。結末のないヒロシマの一寸法師という「おはなし」は、原爆が現在の痛みであることを如実に示している。

木下が原爆資料を持ち帰ることを露骨に嫌がる下宿の小母さんも、「広島の人間」のひとりなのかもしれない。美津江は、下宿の小母さんが「そんなもん持ち込んで気味が悪い」と言い、食事の盛りを少なくし、下宿代の値上げを口にするのだと聞いて木下に同情するのだが、おかみさんの「気味が悪い」という言葉もまた、原爆資料が身近にあふれることによってもたらされる苦痛への抵抗なのではないだろうか。

この後、美津江は木下が置き場所を見つけあぐねている原爆資料を自宅で預かろうと申し出る。そこに木下への思いがあったとしても、美津江にとってそれは原爆の記憶という爆弾を身の内に抱え込むようなものであった。そしてやはり、原爆資料は美津江が胸に秘めていた死者への負い目を顕在化させていくのである。

Ⅳ．美津江の後ろめたさと死者の言葉――負い目が生んだ罪の物語

美津江の「恋の応援団長」として出てきた竹造が美津江と木下の恋を成就させるためには、死者に深い負い目を感じている美津江のこころを解きほぐし、自らの人生に前向きにさせる必要があった。美津江を生の方向に向けるためにさまざまな励ましを与える竹造は、やがて美津江を強く縛っている罪の物語に直面することになる。

美津江が木下からプロポーズに近いことばをもらったことを知って有頂天にある竹造に対し、美津江は「うちよりもっとえっとしあわせになってええ人たちがぎょうさんおってでした。そいじゃけえ、その人たちを押しのけて、うちがしあわせになるいうわけには行かんのです」と語り出す。美津江が言う「うちよりもっとえっとしあわせになってええ人たち」の代表が、美津江の親友でもあった福村昭子である。美津江にとって昭子は「うちより美しゅうて、うちより勉強ができて、うちより人望があって、ほいでうちを、ピカから救うてくれんさった」という存在だった。

美津江は死者に対する罪の物語を自ら強固に構築しているのだが、その物語は大きく二つに分けられる。昭子に対する罪の物語と、竹造に対する罪の物語である。ここではまず、昭子に対する罪の物語について見ていきたい。

美津江は3年前の8月5日に昭子からの手紙を受け取り、うれしくて徹夜で返事を書いた。翌6日、図書館に行く道すがら手紙を投函しようと思って手に持って外に出たが、B29に気をとられて手紙を落とし、石灯籠の根元にしゃがみこんだところで原爆の閃光が来た。石灯籠にかばわれて美津江は命を拾った。反対に昭子は、不運な偶然によってむごい被爆死を遂げている。美津江が原爆投下から3日後に昭子の母に対面したとき、最初は喜んで抱きしめてくれた昭子の母は、急に「うちの子じゃのうて、あんたが生きとるんはなんでですか」と言い放った。そして月末には昭子の母も死んでしまった。

昭子の手紙が届いたこと、美津江がその返事を落としたこと、たまたま石灯籠の蔭にしゃがんだことは、本来まったく因果関係のない、偶然としか言いようのない出来事のつらなりだ。しか

し偶然が重なって命を拾った美津江に対して昭子が「運のない」死に方をしたこと、さらに昭子の母に責められたことで、美津江はこれらの偶然をつなぎあわせ、一つの物語を仕立てあげる。「あんときの広島では死ぬるんが自然」であったにもかかわらず、昭子が自分を救ってくれたために自分は「不自然」な生を拾ってしまった、もっとしあわせになるべき人たちがいたにもかかわらず自分が「生きとんのが申し訳のうてならん」という物語である。この物語に縛られて美津江はしあわせになることを自分に禁じている。

竹造は昭子の死を詳細に語る美津江に対して、「じゃがのう、こうよな考え方もあるで。昭子さんの分までしあわせにならにゃいけんいう考え方が……」と言い出す。この誰もが口にしそうな慰めは、「昭子さんのおかあさんとの、……約束」をしりぞけられるものでは到底なかった。美津江は昭子の母から投げつけられた「うちの子じゃのうて、あんたが生きとるんはなんでですか」という答えようのない問いを、しあわせになってはいけないという「約束」として抱え込んでいたのである。生き残ってしあわせになるのは、昭子やほかの友人たちでもよかったはずなのだ。自分より優れていた彼女たちがしあわせになれなかったのに、生き残った自分がしあわせになることはできない——。美津江が恋の気配をやりすごし、「できるだけ静かに」生きることを選ぼうとすることの理由である。

竹造には、この美津江の論理を解体することができない。それは、この物語の中に登場する昭子の母という死者の声を竹造が代弁することができないからである。「死んだ者はそうよには考えとらん」と言ってみても、竹造という死者と昭子の母という死者の思いは異なる。美津江はすでに娘の不運を惜しむ昭子の母の言葉を聞き取ってしまっているのだ。竹造が「そうよに考えとらん」といくら言ったところで、美津江に向けられた昭子の母の言葉が消えるわけではない。昭子の母の言葉は無念さをまとわりつかせて、いまも美津江に取り憑いている。そしてそれは竹造が取り消したり、赦したりすることのできる思いではない。竹造は、美津江が構築した昭子に対する罪の物語の前で、自分の無力を突きつけられる。竹造の言葉がすべての原爆の死者の思いを代弁するものではないという、死者と死者のせめぎあいがここにはあらわれている。

Ⅴ．竹造の赦しと要請——記憶の補完から生まれた新しい物語

やがて木下は美津江の家にオート三輪いっぱいの原爆資料を運び込む。一度では運び切れず、オート三輪は再び木下の下宿に引き返していった。美津江は木下に食べさせる夕飯や、入浴に必要なものをまめまめしく用意する一方、もう木下と顔を合わせずに済むように置手紙を残して家を出ようとする。木下への思いを断ち切るため、宮島で女学校時代の生け花の教師だった堀内の手伝いをするという決断を美津江はひそかに固めていたのである。竹造は、美津江が「うしろめとうて申し訳ない病」にかかっていると言い、「おまいは生きとる、これからも生きにゃいけん。そいじゃけん、そよな病気は、はよう治さにゃいけんで」と言い聞かせる。ここで美津江は、自分のもう一つの罪の物語を竹造に聞かせる。木下が運び込んだ原爆資料のうちの一つ、顔面が溶解した地蔵の首が「あんときの、おとったん」の姿を美津江に突きつけたのである。その地蔵の首の存在は、美津江が悔いに悔いている自分の行為、すなわち「うちはおとったんを地獄よりひどい火の海に置き去りにして逃げた」という竹造に対する罪の物語を開示するきっかけになった。

竹造はこの二つ目の罪の物語に真正面から立ち向かう。昭子やその母をめぐる物語の前で無力であった竹造は、美津江が構築した罪の物語の中に登場人物の一人として入り込み、その物語を補完することを通して新たな物語に作り変えていくのである。順を追ってそのプロセスを見てい

きたい。

まず、美津江は「覚えとってですか、おとったん」とあの8月6日の情景を語り始める。何の道具もなく、生爪をはがしながら竹造を助けようとしたがどうにもならなかったと美津江が言うと、竹造は「ほんまによう頑張ってくれたよのう」、「わしをからだで庇うて、おまいは何度となくわしに取りついた火を消してくれたよのう。……ありがとありました」と労いや感謝を口にする。あのときには伝えられなかったであろう思いを、竹造は美津江の行為ひとつひとつに対して表明していくのである。そして、「逃げい」「いやじゃ」の押し問答を打開するため、竹造は美津江に自分はグーを出すから「ちゃんぽんげ」で勝負しようと持ちかけた。美津江が幼い頃からいつも、決まった手を出して勝たせてやるのが竹造の手だった。しかし立ち去りがたい美津江は勝負が終わらないよう、自分もグーを出し続ける。以下にその後の二人のやり取りを引いておく。

竹造　（怒鳴る）なひてパーを出さんのじゃ。はよう勝って、はよう逃げろいうとんのがわからんか、このひねくれもんが。親に孝行する思うてはよう逃げいや。（血を吐くように）おとったんに最後の親孝行をしてくれや。たのむで。ほいでもよう逃げんいうんなら、わしゃ今すぐ死んじゃるど。

短い沈黙

竹造　……こいでわかったな。おまいが生きのこったんもわしが死によったんも、双方納得ずくじゃった。

美津江　じゃけんど、やっぱあ見捨てたことにかわりがない。うち、おとったんと死なにゃならんかったんじゃ。

竹造　（また怒鳴る）このあほたれが。

〔中略〕

竹造　わしの一等おしまいのことばがおまいに聞こえとったんじゃろうか。

「わしの分まで生きてちょんだいよぉー」

美津江　（強く頷く）……。

竹造　そいじゃけえ、おまいはわしによって生かされとる。

美津江　生かされとる？

竹造　ほいじゃが。あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとるんじゃ。おまいの勤めとる図書館もそよなことを伝えるところじゃないんか。

美津江　え……？

竹造　人間のかなしいかったこと、たのしいかったこと、それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが。そいがおまいに分からんようなら、もうおまいのようなあほたれのばかたれにはたよらん。ほかのだれかを代わりに出してくれいや。

美津江　ほかのだれかを？

竹造　わしの孫じゃが、ひ孫じゃが。

竹造は「ちゃんぽんげ」の勝負を美津江とともに再現しながら、美津江が自分を「見捨てた」のではなく、竹造自身の願いで逃げのびたのだということを美津江に確認させていく。また、「わしの分まで生きてちょんだいよぉー」という「一等おしまいの言葉」があらためて強調され、「父を見捨てて逃げた」という美津江の罪の物語は、竹造の視点からの最期の別れの捉え直しによって「父に生かされた」という物語に読みかえられ、美津江の罪の意識を解きほぐしていくのだ。

しかし、これだけではまだ十分ではない。すぐにまた美津江の「うしろめとうて申し訳ない病」が発症し、「父に生かされた」という物語を覆していくかもしれない。そこで竹造は美津江が人生をかけて達成するべき使命を課すことで、「父に生かされた」という物語の強度を高めていこうとしている。

竹造の要請は、原爆資料をつくって「おはなし」をつくれという木下の要請を凌駕する過酷なものである。まず、竹造は木下とのつながりを絶つために図書館を辞めるという美津江の逃げ道を塞いでしまう。記憶のアーカイヴである図書館に勤める美津江の仕事は、「人間のかなしいかったこと、たのしいかったこと」を蓄積し、伝えることにあると竹造は言う。美津江は「あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとる」、すなわち次の世代に原爆という出来事の記憶を語り伝える存在になっていくことを竹造から要請されるのである。原爆資料を「おはなし」にすることの困難や痛みをすでにまざまざと感じている竹造は、自分の要請が美津江にとって過酷なものであることを理解しながらも一歩も引かない。美津江が図書館を辞め、木下の前から姿を消すとすれば達成できないもう一つの要請を美津江に突きつける。それが「わしの孫」や「ひ孫」を出せという要請である。

竹造の一つ目の要請、図書館に勤めて次世代に原爆を語り伝えることを選ぶとすれば、美津江は「利用者」として訪ねてくる木下を追い返すわけにはいかない。それに、図書館にいるからといって原爆を語り伝えられるかどうかも定かではない。一生をかけて取り組まねばならない仕事なのだ。もしその要請をしりぞけて図書館を辞めるとすれば、美津江が「わしの孫」や「ひ孫」を、木下との未来に存在するかもしれない生命を竹造に差し出すこともかなわなくなる。

竹造の要請を飲み込んだ美津江は、「短い沈黙」をはさんだ後、荷造りした荷物をそのままに、台所で包丁を握る。それはその場に留まって図書館に勤め続け、木下や無数の原爆資料とともに生きると美津江が決意したことを示す行為だ。次はいつ来てくれるのかという美津江の問いかけに、竹造は「おまい次第じゃ」と答える。美津江が笑顔を見せ、「しばらく会えんかもしれんね」と言うと、オート三輪の音が聞こえてくる。木下が戻ってきたのだ。そして竹造は舞台から去り、幕が下りる。

竹造の赦しは、甘くも優しくもない。美津江の生に過酷な要請を刻みこむことでしかなされない赦しだ。それを受け入れた美津江は、それまで目を背け続けていた原爆に向き合うことをライフワークにしていくのだと思われる。また、木下との結婚、出産も選ぶべき道として美津江の前に拓かれた。だが、それも明るい未来を象徴するものとしてのみ捉えることはできない。原爆症を抱えた美津江が出産にのぞむことは、本来であれば美津江と木下の選択の結果であるべきはずである。しかし竹造の要請を果たすために美津江が出産することを選択するのだとすれば、「わしの孫」という新しい生命は、原爆症の潜伏が懸念される美津江に身体的なリスクを課しながら、死者に対する義務として生まれてくるかのようだ。被爆者の、特に女性たちが結婚や出産をめぐって深く悩んだことを示す証言や文学作品の存在を上げれば、枚挙に暇がない。「代わり」となるべき者をよこせという竹造の要請は、死者によるものであるがゆえに退けがたい。その退けがたさが、時に美津江や、美津江の子どもの自己決定を阻害するほどの力を発揮してしまうことに注意を払っておきたい。[3]

この結末に、出来事の後に生まれる世代が記憶を受け取って成長していくことの希望を見出す

---

[3] 嶋田直哉は「「ヒロシマ」の記憶―井上ひさし『父と暮せば』を中心に」（日本近代文学会2014年度11月例会口頭発表）において、『父と暮せば』の記憶を獲得していく物語としての重要性を評価する一方、父と娘の関係性に終始する場面設定からくる他者への視点の欠如や、父が娘に対して孫やひ孫を作ることを要請することの暴力性を強調していた。

とすれば、最後の竹造の言葉を血のつながりに基づく体験の継承という狭い解釈から解き放っていく必要があるだろう。「わしの孫」「ひ孫」は、「広島の人間」の子孫に留まらず、世界中のどこにでも存在するべきなのだと。さまざまな核の存在を通して、そして資料や物語を通して出来事に近づいていくという意味において。井上ひさし自身が「前口上」で述べたように、「核の存在から逃れることのできない二十世紀後半の世界中の人間」たちは、核と否応なくかかわりながら、潜在的なヒバクシャとして生きているのだから。

VI. おわりに——ヒロシマの一寸法師としての竹造

美津江の罪の物語を解体することは、竹造にとっても全力で取り組まなければならない仕事だった。竹造は美津江の罪の物語の中にもぐり込み、あのときの状況を再現しながらふたたびそこで死んでいくことを通して「わしの一等おしまいのことば」を響かせた。これはあるいは、途絶したヒロシマの一寸法師の変奏だとも言えるかもしれない。つまり、既存の物語の内側にもぐり込み、そこで全力を尽くして闘って新しい物語につくり変えていくという行為が、竹造がヒロシマの一寸法師を演じる際と美津江の罪の物語を解体する際に共通しているのである。語りは常に一回性のものであり、その結末や結果がどうなるのかはまったくわからない。ヒロシマの一寸法師のときには責めさいなまれる鬼の痛みが被爆者の痛みと重なって途絶してしまった竹造の語りが、罪の物語を解体する過程においては完遂され、美津江を生の方向に向かわせる峻厳な赦しの物語として立ち上げられたのだと言える。

既存の物語に深く深くもぐり込むとき、ヒロシマの一寸法師に出会うことができるかもしれない。原爆資料を携えて、内側から物語をつくり変えていくヒロシマの一寸法師は、既存の物語に安住することを許してはくれない。ときにおそろしくて手に負えず、ときに思いがけない力を与えてくれる、そのような両義的な存在としてヒロシマの一寸法師はあるのではないか。ヒロシマの一寸法師にめぐりあえるかどうか、そこから何を受け取るのかは、読者であり観客である「おまい次第じゃ」。竹造のことばは美津江だけでなく、「核の存在から逃れることのできない二十世紀後半の世界中の人間」すべてに向けられている。

参考文献

『朝日新聞』 2000年 「作家　井上ひさしさん／手記は「聖書」 記憶持ち寄り力に」、8月6日。
井上ひさし　2001年 『父と暮せば』、新潮文庫。
井上ひさし・小森陽一編著　2004年 『座談会昭和文学史』第5巻、集英社。
黒木和雄・土本典昭　2004年 「対談　黒木和雄監督　土本典昭監督」、『キネマ旬報』（2004年8月）。
栗原貞子　1978年 『核・天皇・被爆者』、三一書房。
栗原淑江　2004年 「死者たちとともに生きる　映画「父と暮せば」に寄せて」、『世界』（2004年9月）。
陣野俊史　2011年 『戦争へ、文学へ 「その後」の戦争小説論』、集英社。
高橋敏男　2010年 『井上ひさし　希望としての笑い』、角川SSC新書。

パレスチナの場所と記憶をめぐる考察
タウフィーク・カナアーンの痕跡と業績を手掛かりに

Place and Memory of Palestine:
Around Tawfiq Canaan's Traces and His Achievements

田浪 亜央江*
Aoe Tanami

Abstract

This article concerns the difficulty of preserving collective memory of Palestinian society before the Nakba, the Catastrophe wrought on the population by the creation of the State of Israel, as read through the works of famous Palestinian folklorist Tawfiq Canaan.

A former leprosy hospital in Jerusalem has eliminated all traces of its Arab history including its Arab patients and staff. This was the place where Canaan served as director and physician. It is ironic that his legacy here has been completely erased since he was a figure who made great efforts to collect Palestinian traditions, foreseeing that they would be lost or forgotten in the near future.

Still, beyond the hospital, there are more elaborate ways of controlling Palestinian collective memory in Israeli public space. While a Palestinian motif may be presented on the outside, something related to the Nakba or the distinct identities of a Palestinian village are prevented from being expressed, as seen in an exhibition on Palestinian embroidery.

This article highlights Canaan's works, arguing that they have the potential to resist such maneuvers. Additionally, his articles present specific problems of preserving collective memory, such as "Palestinian Arab House." In detailing the ways of building houses, customs related to the home, and living habits, Canaan provides rich information on Palestinian habitations.

We find the paradox of memory in these efforts "not to forget" – that they sometimes bring about selective memory. However, Canaan's works are left open in front of us.

I. エルサレムの「ハンセンの家」と記憶の上書き

「英国委任統治期（1918 ～ 48年）、当機関は通常通り活動を続けた。第二次大戦中、職員や備

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員、Chief Researcher, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University.
E-mail: tanami@ejs.seikei.ac.jp

品の不足に苦しんだが、ハダサー病院の援助を受け、当施設は機能し続けた。1950年、当機関はイスラエル保健省に移管され、その名はハンセン病院へと変わった」。

これは現在の西エルサレムのタルビヤ地区にあるかつての「らい病院」[1]で、現在「ハンセンの家（ベート・ハンセン）」の名で呼ばれている建物[2]の内部に掲示されている解説パネルの一節だ。かつての歴史を伝える資料室とされている一角のどこを見渡しても、わずかな展示物と簡潔な内容のパネルしか見出せないのだが、この一節のぞんざいさは、特に衝撃的である。

1917年からパレスチナの占領を開始した英国は同年ユダヤ人組織に対し、パレスチナでの「ナショナル・ホーム」建設を支持する「バルフォア宣言」を出した。1920年から正式に開始された英国委任統治下でパレスチナへのユダヤ人移民が急増するなか、パレスチナ社会は激変し、次第に混乱の度を高めてゆく。パレスチナ統治に行き詰った英国は国連に解決を委ね、国連総会はパレスチナをユダヤ国家とアラブ国家に分ける「パレスチナ分割案」を決議する。英国がもともとの予定を前倒ししてパレスチナ統治を終了させた1948年5月14日、「イスラエル独立宣言」が読み上げられ、同日、アラブ諸国とイスラエルの間で戦争が始まった。すでにそれまでに40万人から50万人のパレスチナ人が、イスラエル軍の前身であるハガナーによる追放作戦によって、難民とされていた。

こうしたパレスチナ情勢の激動のなかで、タルビヤ地区の「らい病院」のありようは激変した。イスラエル保健省に移管されたとか名称が変わったなどという次元では、決して済まない話なのである。

タルビヤ地区の「らい病院」は、まだこの地域がオスマン帝国の一部であった時期である1873年、エルサレム総監カーミル・パシャによって建設が決定され、1887年に完成した。20世紀に入ってからもしばらく、大シリア地方唯一の「らい病院」であった（現在の「ハンセンの家」の案内文では「中東唯一の」という表現がとられている）。ベッド数は60で、1867年からパレスチナで活動を開始していたモラヴィア兄弟団（モラヴィア教会）によって運営されていた。開設当時の患者の出自や性別等に関する情報は不明であるが、当時の人口比からすれば、大多数がアラブ人ムスリムであったと考えてよい。

中庭から見た「ハンセンの家」
（田浪撮影）

ここで焦点を当てたいのは、「パレスチナ分割」決議（そのなかでエルサレムは、「国際管理」都市になることが謳われていた）が成立した1947年11月以降の状況である。さしあたり筆者の手元にあるのは、モラヴィア教会の事業実施団体である「福音促進信託協会（Trust Society for the Furtherance of the Gospel）」の出納局長の名で、パレスチナ高等弁務官宛に送られた1948年1月7日付の文書と、その返信だ。冒頭、委任統治政府

---

[1] もとの正式名称は、ドイツ語で「イエスによる救済」を意味するJesus Hilfeであり、「らい病院」は通称である。明らかに差別的な文脈で用いられてきた「らい病」の語を使用することについては慎重であるべきだが、ここでは原文がleprosy（ヘブライ語でצרעת）の場合、あるいは文脈上その語が当てはまる場合には、歴史上の文脈を明らかにするために「らい病」の語を用いた。

[2] イスラエル建国後に同国保健省に移管されて「ハンセン病院」となった後、患者数の減少のなか2000年以降は外来診療施設に変わり、2009年にハダサー病院の部局となり、その機能は他の場所に移動された。残された「ハンセン病院」の建物は文化遺産指定され2011年にエルサレム市の管理下に置かれた。現在「ハンセンの家」の大部分は、アート関係のNGOが展覧会を行うのに利用されている。

から「らい病院」に対して1700ポンドの助成金が与えられたことについての感謝の意が伝えられ、次に一転して切羽詰った心情を伝える言葉が続く。「来るべき英国軍のパレスチナ撤退について、当院の看護婦たちは大いなる不安をもって見ております。我々も同様に、いかなる政府が現在の行政を引き継ぐのかを懸念の目で探っております」。「もしも助成が継続され、らい病院が国の保健サービスのなかで公認された地位を保ち続けることが確認できれば、曖昧な現状に引き比べ、将来の業務についてはるかに確固たる意識をもてることでしょう」[Israel State Archive]。そして政府が困難な任務を抱えているさなかではあるが、何らかの情報があればぜひ知らせて欲しいと懇願している。それに対する返信はM. H. Dormanという役人からのもので、残念ながら英国撤退後のエルサレム行政についてはいかなる情報も与えられない、と慇懃ながらそっけない返答がなれている［ibid.］。

今日我々の知る歴史的事実は、1948年の戦争の結果、イスラエルは「パレスチナ分割」決議の内容に違反するかたちでパレスチナの77パーセントの土地を支配下に入れ、国際管理下に置かれるはずだったエルサレムは、西側をイスラエルが、東側をヨルダンが占領するかたちで休戦になったということである。タルビヤ地区は、イスラエルの支配下に入った。Tamariは次のように述べている。「1948年の戦争中のタルビヤのらい病院のアラブ人とユダヤ人らい病患者の分離は、エルサレムおよびアラブ・イスラエル紛争の年代記において、決定的な瞬間を記した」。「1948年のエルサレムにおける戦争によって、約80万人のパレスチナ人とともに、アラブ人のらい病患者全員が東側に追放されたことは、歴史の大いなる皮肉であった」[Tamari, 2009: 94]。

冒頭で紹介した解説パネルの内容が衝撃的であるのは、こうした出来事の重み、その背後に折り重なる膨大なディテールが、簡素で粗雑なテキストによって上書きされているためだけではない。「らい病院」からのアラブ人患者の追放の詳細についてほとんど資料がないとTamariが述べているように、現在も歴史的な事実が「隠されている」というよりは、出来事の所在そのものがほとんど知られないまま闇に葬られ、もはや回復する手立てがないことが突きつけられるからである。筆者はそのことを認識しつつもイスラエル国立公文書館（アーカイブ）に向かい、そこで見い出した関連資料の一つが、上述のらい病院側と委任統治政府側のやりとりの文書であった。

筆者はまた、イスラエル建国からおよそ1年後の1949年5月9日のPalestine Post 紙において、一人の記者によるタルビヤの「らい病院」訪問記を見つけた。1906年からここで働いていたという70代のデンマーク人のシスター Ogelineがインタビューに答えている[3]。それによると、この当時の入院者数は24名、うち13名がユダヤ人（うち女性5人）、11名がアラブ人（同3人）である。記者はOgelineとともに中庭に入り、そこで数人のアラブ人患者が、陽の当たる壁に背をもたれたり、水タバコを吸っていたりするのを目にしている。つまりTamariが書いているように、アラブ人患者たちが1948年の戦争のさなかに一気にここから追われた、というわけではないということが少なくとも分かる。事態はいっそう複雑であったのだ。

1950年、「らい病院」はユダヤ民族基金の手に渡り、イスラエル保健省の管轄下に置かれる。ユダヤ人患者だけがイスラエル政府の医療制度に入り、アラブ人患者の立場は一切保証されることはなかったであろうし、モラヴィア教会に属する看護婦たちの立場も、同様のものだっただろう。この時期について、最近のモラヴィア教会のニュースレターの記事は「政治的な紛争と先行き不明状態のなかの、不安的な時期であった」と伝え、さらに1953年になって、15人の

---

[3] ここでは割愛するが、この記事ではパレスチナのハンセン病患者を取り巻く当時の状況に触れられており、たいへん興味深い。（イギリス委任統治下の）パレスチナではハンセン病患者を隔離する法は存在しなかったと伝え、また患者は囚人ではなく、一定の条件のもとに彼らが町に出ることを認めている、という趣旨のシスター Ogelineの発言を引用している。

アラブ人患者が二人の看護婦に付き添われながら、東エルサレムのシルワーン村にある、古く狭い療養所に移動したと述べている[4]［Moravia Archive, 2010］。土地とユダヤ人だけをイスラエル国家に組み込みアラブ人はできる限り追放するという、イスラエル建国にあたっての原則を、建国から5年後に、この国は「らい病」患者たちにも適用したことになる。イスラエルは1949年、「可能な限り早期の難民の帰還」を決議した国連総会決議194号を受け入れることを実質的な条件にしながら国連加盟を果たしたが、アラブ人「らい病」患者の追放はむろん、国際社会に向けた態度表明とは完全に矛盾する措置であった。

Ⅱ．タウフィーク・カナアーンと「らい病院」

筆者にとってPalestine Postの記事が注目に値するのは、1949年の時点でもここにアラブ人患者がいたという事実を伝えているからだけではない。ここに「カナアーン博士」の名前が、かろうじて登場しているのである。彼は1919年から、この「らい病院」の院長の立場にいた人物だが、1948年の戦争中、エルサレムの自宅が直接攻撃を受けたため、家族を連れて旧市街へと避難した。「らい病院」のあるタルビヤ地区はイスラエル領内に組み込まれてしまい、再びそちら側に戻ることは出来なくなってしまったのである。この記事はカナアーンについて、わずかにこう言及するばかりだ。「クリスチャンのアラブ人、カナアーン博士に代わって、現在［ユダヤ系の］ハダサー病院[5]の医師が患者を診ている」。

タウフィーク・カナアーン（1982－1964）の名前は、現在医師としてよりも、ナクバ以前のパレスチナにおいて、フォークロアや民衆信仰の研究を行った人物として知られている。オスマン帝国時代末期から英国委任統治期、そしてイスラエル建国後のパレスチナにおいて、これだけ長期間、幅広い社会的・文化的活動を行なった人物は、ほかにそう見当たるまい。彼は当時パレスチナに数少なかったアラブ人内科医であり、自宅を診療所として患者の治療にあたったほか、いくつもの病院の運営に関わり、1944年からパレスチナ医療協会の初代会長をつとめた。自宅での診療や訪問診療に加え、1923年からドイツ病院の内科医療局長に就いたカナアーンが「らい病院」にどこまで深くコミットすることが出来たのかは不明である。しかしモラヴィア教会によるレポートの中の次のような一節は、社交辞令ばかりではあるまい。「我々の医師であるカナアーン博士は、我々の患者を救うために最大限の努力をしている。自分を救うものがほとんど何もないと知り苦しんでいるのはその患者だけでなく、らいを治療するにふさわしい薬をいまだ手にしていない同医師もまた苦しむのである」[6]［Trust Society, 1946］。上述のPalestine Postの記事が伝えているような「らい病院」の一定の開放的雰囲気が、院長であったカナアーンの関与のなかで作り出されたと考えるのは、好意的にすぎる想像だろうか。

---

[4] 1960年にラーマッラーに病院が建てられたが、患者数の減少に伴い、1974年以降は障害児の受け入れ施設となり、今日に至っている。

[5] ハダサー病院を運営するハダサー医療センターは、1912年「ハダサー（米国女性シオニスト機構）」によって設立され、1918年に最初の病院がエルサレムにオープンした。現在約1000床をもち、ヘブライ大学と提携している。ハダサーは米国人女性シオニスト活動家ヘンリエッタ・ゾルド（1860-1945）が設立した団体で、フェミニズム、女性のリプロダクティブ・ライツ、ヘルスケア促進を掲げ、同時にアメリカ・イスラエルの関係強化の推進役にもなっている。

[6] 1943年にプロミンを用いた化学療法の効果が報告されたが、その治療法が世界的に広まるのは1950年代である。［犀川ほか、2012］なおNashefによれば、カナアーン自身は当時一般的だった大風子油による治療を行ないつつ顕微鏡検査にも携わり、「どれほど小さくとも回復の可能性があれば、らい病院で治療された」と述べているという。［Nashef, 2002: 20］

ともかくもカナアーンは、1919年から20年近くにわたり、この病院の唯一の医師であった。だが、「ハンセンの家」の展示からアラブ人の痕跡が一切消されているなかで、カナアーンの痕跡もここで伺うことはまったくできない。1900年代、1940年代、50年代、60年代、80年代と計5枚、「スタッフ」というキャプションの下に白衣を着た人物たちの写真が一枚のパネルに小さく載せられており、カナアーンの時代の写真がないことからしても、カナアーンほかアラブ系の人物の姿を意図的に出さないようにしていると判断せざるを得ない。

タウフィーク・カナアーンと妻マルゴット（1915年）［Tamari, 2009: 94］

カナアーンは医師としての仕事の合間にパレスチナの伝承や風習について研究し、1920年以降、Journal of Palestine Oriental Study を主な舞台に、欧米の考古学者や聖書学者らに混じり、ドイツ語や英語で数々の論文を発表した。1947年末からシオニストの組織した軍によるパレスチナ人の追放作戦が開始され、多くの有力者たちがパレスチナから避難するなか、彼はドイツ人の妻とともにパレスチナに残ることを選んだ。自宅が攻撃を受け、家族を連れて避難したのちに自宅は略奪に遭い、高価な家具類がすべて持ち出されたあと放火された。彼が書き残した未刊行の論文や書簡、資料の類はすべて失われたのである［Mantoura, 1998: 14］。

筆者はカナアーンの仕事のなかで、パレスチナの民衆信仰が多文化性の表現として捉えらえている点に特に注目し、別稿で論じた［田浪、2016］。「文化」と「宗教」が対立しているかのような構図、すなわち「多様性や自由を本義とする文化活動」と「不寛容で閉鎖的な、文化活動に敵対するイスラーム」といった図式が作られてしまっている現在のパレスチナにあって、そもそもそうした二項分類の存在しなかったパレスチナ社会の宗教＝文化状況をつぶさに記録に残したというだけでも、カナアーンの業績の今日的価値は高いと考えている。

またナクバの過程で自宅や自身の所有財産を失う一方で、カナアーンはパレスチナの人々の精神世界のありようを伝えるコレクションを残すことに成功した。貧しい農民患者を診察すると、報酬の代わりに彼らが身につけている護符をお礼として受け取るようになり、次第に意識的にその意味や役割について農民たちから聞き取り、丹念に記録を残し始めていたのである。戦争の開始と略奪の危険性を予測し、約1400点におよぶこの膨大な護符のコレクションだけは、国際機関に預けていた。現在これは、タウフィーク・カナアーン・コレクションとして、ビールゼイト大学に保管されている[7]。

一方で「ハンセンの家」の伝える歴史のなかでは、患者が主にアラブ人であったことばかりか、そもそもイスラエル建国までパレスチナ全土がアラブの地であったことさえ、一切分からなくなっている。ナクバ以前のパレスチナの社会のありようを記録し、生き生きと今日に伝えるカナアーンの仕事を振り返り、カナアーンが抱いていたパレスチナの文化に対する愛情や敬意を想像するとき、当のカナアーンがそこにいた現場であるはずの「らい病院」で、その痕跡が完全に拭い取られていることの皮肉と不気味さは、いっそう際立つように思う。

---

[7] 1998年10月から99年2月にかけて、ビールゼイト大学でこのコレクションが公開され、カタログが刊行されたが、残念ながらその後一般の目に触れる機会はないようである。*Ya Kafi, Ya shafi… The Tawfik Canaan Collection of Palestinian Amulets*. Birzeit University.1998.

Ⅲ．アートによって隠蔽される〈村〉の記憶

他方で近年、イスラエル建国の負の記憶を浮かび上がらせない範囲で、アラブやパレスチナ、イスラームを自国の文化や歴史に取り込もうとする動きは、むしろかなり広がっている。そこでは、アラブ・パレスチナの文化の一面について語ることで別の何かを語らずに済ませ、結果的に対象のアイデンティティを都合よく操作するという複雑な手続きが行われている。ここでいったんタウフィーク・カナアーンを離れ、そうした状況の一事例を見ておきたい。

「ハンセンの家」の隣接地区で2015年に開催された、パレスチナの刺繍に関する特設展「各地の刺繍　女性・記憶・アイデンティティ」[8]は、アラブの記憶の痕跡を完全に抹消した「ハンセンの家」とは一見きわめて対照的だ。副題は「パレスチナ人の衣装　クリードマン・コレクションより」となっており、メイン・タイトルのなかではないものの「パレスチナ」の名が明記されている。刺繍はパレスチナの伝統文化の筆頭に挙がるものだが、70年代以降のパレスチナ文化復興運動のなかで、とくに絵画のなかでは頻繁に描きこまれるモチーフとなり、ナショナルなシンボル性を帯びるようにもなった。現在でもパレスチナに関わるメディアや商品に頻繁に使われるとともに新しいデザインが開発され、販売ルートも多岐に渡り、競争も激しくなっている。したがってイスラエルの公共施設でパレスチナの刺繍展が開かれることそれ自体が、本来大きな可能性を持ちうるものである。

はじめの解説パネルには、「1948年の英国委任統治の終わりまで、パレスチナのアラブ人は、沿岸部の平地、西部、山間部、中部、北部地域の800以上の村々に住んでいた」とある。1948年のイスラエル建国とせずに「英国委任統治の終わり」としているのは、イスラエル建国と「800以上の村々（の消滅）」が結びつくことを避けるためであろうが、ともかくもパレスチナのあちこちにアラブ人が住んでいたことには触れているのだ。アラブ性をすべて消し去っている「ハンセンの家」の歴史観とは大違いであり、ヘブライ語の下にアラビア語、その下に英語の説明が配列され、訳文も簡略化されていない（「ハンセンの家」の解説パネルは、ヘブライ語および英語のみ）。

しかし、全体のパネルに目を通すと、はっきりとある傾向が浮かび上がる。例えば、「中央平原沿岸部の衣装」と題する解説の全文は、次のようなものだ。「ベイト・ダジャンは19世紀、織物と刺繍の名高い中心地で、他の多くの村に影響を与えた。ベイト・ダジャンの婚礼ドレス（ジュワラーヤ）は青い綿で作られ、袖の短いものだった。胴体正面は、赤い絹の糸の刺繍と赤、黄、緑の絹のキルトで飾られている。普段着は白か藍色のリネンで作られており、そのカットは、二つの羽に似た細い長短の袖を除くと、ユダヤ山地のものと似ている。ベイト・ダジャンの女性は頭に小さな刺繍の施された被り物（「ダマーダ」、「フーカー」、「サッファー」）をしており、顎の下で結んだ。被り物の後ろに結び付けられた長い二本の紐（「ラファーイフ」）は、髪の先を隠すために使われた」[9]。

イスラエルの公共の場で、アラブの文化に関するここまで詳細な説明を目にすることは通常ないため、一瞬ひじょうに丁寧な解説内容だとさえ思える。しかしこれでは仮に「ベイト・ダジャン」

---

[8] カタモン地区にある「イスラーム芸術博物館」の特設展として開催された（2015年7月から2016年2月）。「イスラーム芸術博物館」は「最初のユダヤ系ロンドン市長」Sir David Lionel Salomonsの娘で社会事業家のVera Bryceによって1978年に設立された私設博物館。イスラエル観光省HPを参照（http://www.goisrael.com/）。なお同博物館のある一帯は大統領公邸やエルサレム劇場などのある高級住宅街である。

[9] ヘブライ語、アラビア語を比べながら訳出した。英文はアラビア語からの翻訳と思われるが、誤訳と未訳箇所が多少散見される。

ではなく他の村の名前が入っていても分からないだろう。ベイト・ダジャンの場所を示す地図は、どこにもない。確かにベイト・ダジャンは刺繍に関して名前の知られた村であり、またジャッファ地区でもっとも大きな村の一つだったが、一般的には現在まったく知られていない地名である。また、パレスチナの刺繍展を企画するキュレーターなら当然目を通すはずの基本資料に書かれている次のような情報は、一切用いられていないのである。

――19世紀の後半、開墾した土地の一部の所有を認める土地法改正がインセンティブとなり、ベイト・ダジャンではオレンジ栽培が広がった。また19世紀末にはエルサレムとジャッファを結ぶ鉄道や幹線道路の建設に従事する労働者によって現金収入が増大した。

――ベイト・ダジャンの刺繍が知られるようになった背景には、こうした好調な経済状況と、道路建設による利便性の向上により、この村の市場が近隣の村から買い手を集めるようになったことがある。

――1882年、パレスチナ最初のシオニスト入植地リション・レツィヨンが近隣に建設され、ここへ働きに出る者もいた。

――ベイト・ダジャンの婚礼ドレス（ジッラーヤ）は前部に実用機能のない深い切れ目の入ったデザインで、そこには明らかに性的な暗喩が込められていた。第一次大戦後、帰還兵たちのあいだに意識の変化が起こり、婚礼ドレス（ジッラーヤ）のデザインを恥ずかしいものだと見なすようになったため、これは1920年代に廃れた。

――代わりに1930年代に新たに登場したのはナアニーと呼ばれる切れ目の入っていないドレスで、婚礼ドレス（ジッラーヤ）のように広い面に刺繍が施されたものではばく、一部に刺繍を入れたものである。刺繍のデザインはいっそう洗練されたものが求められ、果樹園の防風林に使われた糸杉の木のデザインが好まれた。［Weir, 1989: 203-239］［Kawar, 2010: 227-245］

ベイト・ダジャンの婚礼（ジッラーヤ）衣装
［Weir, 1989: 212］

このようにベイト・ダジャン村一つをとっても、その刺繍の背景にはさまざまな歴史的事実が存在することが分かるが、そうした側面はこの刺繍展の解説パネルからは排除され、衣装の様式に関わる説明だけが饒舌に語られているのである。これは、ラーマッラーやガリラヤ地方など、場所を特定し、そこでの「典型的」な様式を説明している他のパネルすべてに共通している姿勢である。一般的に言えば、衣装や装飾品に関する展示において、素材やステッチ、布地の色や種類、意匠などアートの側面に限定した解説が行われるということはむろんありうるだろう。しかしここでの場合、純粋に刺繍のアート性を追及するためにテーマが限定されたのではなく、それは刺繍を生み出したパレスチナの具体的な村や町の記憶への言及を回避するために残された選択肢だったと言えるのではないだろうか。

さらに言えば、ナクバに関して一切触れないというイスラエル国内における暗黙のガイドラインを外すならば、次のことも当然付け加えられるべき情報である。1948年にイスラエル建国に伴うパレスチナ人の追放作戦によって、刺繍で名を知られたベイト・ダジャンの住民およそ5000人は、ガザやヨルダンへと追放された。そのあとにはベート・ダガンというイスラエルの町が建てられ、イエメンや北アフリカからのユダヤ人移民が住んだ。ベイト・ダジャンの人々は、難民の状況にあっても彼らの伝統文化を残す努力を怠らず、現在も刺繍製作を続けている。

展示の最後の解説パネルは、次のような文章で終わっている。「女性の刺繍は女性特有の言語

を生み出す。装いによって示される事柄を女性が選び取ることで、女性のアイデンティティや、個人的・経済的・社会的な位置づけを示す複雑な言語である。／今日、これら刺繍の施された服装は、歴史的地理的なアイデンティティを反映させる、パレスチナ人の過去のシンボルだと考えられている。イスラエル建国後いくつもの村で、伝統的なアートの遺産を保持し、家庭の経済を支えるため、女性の刺繍家たちの支援組織が作られた」。

もっともらしい文章ではあるが、まず前半部で刺繍が女性のアイデンティティにのみ結び付けられているのは、意図的な操作であろう。刺繍が村ごとに異なった色やデザインを持ち、村のアイデンティティを表現していることはパレスチナの刺繍に関して必ず言われることである。それが逆に陳腐でステロタイプな言説になっているという問題意識はありえるだろう。しかし女性の「個人的・経済的・社会的な位置づけを示す」という記述は服装一般に言えることで、刺繍の特性を何ら表わしていない。

後半部には歴史的地理的なアイデンティティという言葉が使われているものの、それは「過去のシンボル」であるという。「イスラエル建国後」に唯一ふれた一文も、「伝統的なアートの遺産」の保持と収入獲得手段のための刺繍であって、現在刺繍がナショナルなシンボルとなっている側面は当然ながら無視されている。ここでパレスチナ人の土地や固有の場所に結びついたアイデンティティは〈女性〉へと抽象化され、現在の営みは過去の〈記憶〉へと変えられているのだ。

Ⅳ．タウフィーク・カナアーンと「パレスチナのアラブ家屋」

カナアーンに話を戻そう。パレスチナの〈場所〉と〈記憶〉をめぐる本稿での議論に引きつけて言及すべきは、Journal of Palestine Oriental Studyに二回に渡って掲載された「パレスチナのアラブ家屋　その建築様式とフォークロア」（1931－32、以下「アラブ家屋」）である。残念ながらカナアーンは、そのオリエンタリスト的な語彙や、執筆当時のパレスチナにある伝承や風習をことさら聖書の記述内容と結びつけようとする記述のために、現代の論者から必要以上に低い評価をされるきらいがある。その点についてはさらに今後別に論じたいが、少なくとも「アラブ家屋」については、家屋の建設プロセスや構造、建築技術や労働のありようが具体的かつ詳細に記録されているという点で、カナアーンの他の論文に対するのと同様の批判をこれに向けるのは的外れであろう[10]。なるほど「一般的に言って、現在のパレスチナの人々は、古代に通常そうであったのとあまり変わらない様式で住んでいる」［Canaan, 1931: 225］というように、「オリエントの不変性」といった典型的なオリエンタリストの捉え方をなぞった記述は存在する。家の機能や家に関わる伝承についての記述のあとに、聖書上の類似した箇所についてわざわざ註が加えられてもいる。衒学趣味的であるかもしれず、現在の目で見れば確かに余計な記述だが、決してそれが主要なテーマになっているわけではない。

「アラブ家屋」の前半はカナアーンの論文の中では際立って技術面の記述に力の割かれた箇所であるが、後半は家のもつ社会的機能、家と村との有機的な関係へと焦点が移ってゆく。人々が自分の家に住んでいると信じ怖れる霊さえも、その場所にもとから住んでいたものであり、

[10] Fuchsはカナアーンの「アラブ家屋」について、グスタフ・ダルマンの*Arbeit und Sitte in Palästina*, 1928（『パレスチナにおける労働と習俗』）の「家」章と並び、パレスチナの伝統的家屋に関する「役立たずの」古典だと延べ、筆者が建設に関する知識を持っておらず、もっぱら聖書や考古学、フォークロアへの観点からこのテーマを扱っていることを酷評している。ただしFuchsは「アラブ家屋」の冒頭部分の記述にしか言及していない。［Fuchs, 1998］

近所の人たちを交え、生贄を捧げることによってなだめられる存在である。カナアーン自身の関心がもともとフォークロアにあるのは事実だが、パレスチナのアラブの家が近隣の人々とのコミュニケーションの場であり、その住民と村とを結びつけるものである以上、記述の上からも必然の流れであろう。

「パレスチナの西欧化がひじょうに早く進んでいるのは確かであり、多くの村々で西欧の建築方式が導入され、古いオリエンタルな方式が次第に廃れている」[ibid,: 231]。カナアーンはこうした認識のなかで、ともかく今のうちに、出来るだけ正確にパレスチナの伝統的な社会のあり方を記録に残すという点のみを心がけて、この「アラブ家屋」を書いたはずだ。ユダヤ人移民の急増によってパレスチナ社会が激変していることを認識しつつも、ナクバのような出来事が起こるとは、誰が予想しただろうか。しかし今日我々がこの論文を読むさいには、ここで記録されているようなパレスチナの家屋の多くがナクバのさなかで全村民追放の直後に爆破されたり、のちにユダヤ人移民者によって占拠されたり、あるいは半壊状態で現在のイスラエルの町の片隅に残されていること、つまりここに描かれている世界の多くはナクバによってすでに失われてしまったのだという事実をつねに確認させられることになる。

例えばパレスチナの山間部の家屋に用いられる代表的な石7種の名と特徴が記述されている箇所がある。ミッズィー・ヤフーディーと呼ばれる石灰岩のうち、黄色のものはハジャル・ヤースィーニー［ヤースィーンの石］と呼ばれており、デイル・ヤースィーンで産出されていることを示している、という。現代の読者なら、当然にも1948年4月9日にデイル・ヤースィーンで起きた虐殺[11]のイメージがすぐに頭に浮かぶであろうし、さらにはこの村の男性の多くが近隣の石切り場で働いていたこと、その石切り場が虐殺現場の一つにもなったことなども思い起こされよう。現在デイル・ヤースィーンと言えば〈デイル・ヤースィーンの虐殺〉であって、この出来事以前の通常の村の暮らしの記憶に対し、一般の意識がほとんど喚起されてこなかったことに、改めて気づかされるのだ。

カナアーンは客観的な観察と描写に徹しており、彼はパレスチナの特に貧しい農民の家屋は決して居心地が良いわけではないということを率直に伝える。煙突や窓もないため、火をたてればその煙が目を痛ませ、昼間でも暗い。「簡素なタイプの農民の家の内部を観察すると、人間がどうやってこのような環境でいられるのかという驚きが生じる。西洋では当たり前のあらゆる快適さを欠いているのだ」[Canaan, 1932: 68]。西洋人のオリエンタリストなら、こうした感想をそのまま述べるに留めるかもしれない。しかしカナアーンは、住民たちが屋上や入り口、中庭で長時間過ごしているからだという方向に筆を進める。暑い季節は屋上で寝るし、近所の人とのあいだで屋上から声が交わされ、しばし会話が続いたり、近所の不幸の知らせが屋上からアナウンスされたりする。日よけのために蔦を這わせた格子状の日陰（アリーシェ）が作られもすれば、穀物などの一時置き場にもなる、という具合に、屋上一つとっても多様な社会的機能を担っている。このくだりを読むと、現在のパレスチナ人の一般の家屋はもとより、難民キャンプのなかでさえそうしたありようが一部再生産されていることに気がついて、筆者には微笑ましくさえ感じられる[12]。このように「アラブ家屋」は現在、執筆当時のカナアーンが意図しなかった読まれ方

---

[11] ハガナー［イスラエル軍の前身］による組織的なパレスチナ人追放作戦のなかで起きた虐殺のなかでも、もっともよく知られているものの一つ。144軒の家屋のあるこの村にユダヤ兵が押し入り、無差別にマシンガンで砲撃し、93名が虐殺された上にその遺体は損壊された。女性多数がレイプされ、生き残った村民たちはエルサレムまで徒歩で行進させられた。［Pappe, 2006］

[12] 1970年代以降のパレスチナ文化復興期の代表的なフォークロア研究者であるニムル・シルハーンは、『パレスチナフォークロア百科』の「庶民の家屋」項で、国連からテントや一部屋分の資材を与えられた

www.palestineremembered.comに投稿されている数多くの写真の一つ。1948年撮影の、デイル・ヤースィーンの家だという。

をされていることになる。

ナクバを経た現在、パレスチナ人の〈家〉は一般に、具体的な場所や建物というよりもシンボリックなイメージとなり、とりわけナショナルな記号として機能している。帰還の日を待ちわびる家の持ち主によって保持され続ける〈鍵〉は、絵画や写真のモチーフとなったり、さまざまなイベントで繰り返しシンボルとして使われたりするなかで、しばしば陳腐な表現ともなっている。しかしパレスチナの家の記憶がナショナルな記号ではなかった時代にカナアーンが記録したのは、〈家〉を作るために当時の人々が持っていた技術や社会関係、〈家〉の資材を生み出すパレスチナの土地の固有名や、それと結びついた石の名称、〈家〉の恐ろしさ暗さ、不快さといった側面、また〈家〉のために人々が提供したとてつもない労力や手間、であった。ここには決してシンボリックなイメージに回収されることのない〈家〉、理想化されようのない〈家〉があり、それがいかに深みある記憶を刻んだ存在なのかが読み取れる。

それは1934年生まれでパレスチナの北部ソフマータ村出身のムハンマド・ハッシャーンの自伝「北の境界線」の一節とも重なる。ハッシャーンが幼かった頃、一家は借家暮らしで、約3年間は教会の敷地内の家に住んでいた。そこに住みながら、ハッシャーンの父親は村の中心部に近い「ハサン・ムーサー」という区域に土地を購入し、新しい家の建築の準備を始める。父親は二頭のロバを使いながら、石切り場から家の建設予定地まで石を運び続けた（さすがに自分で石を切り出すことはなかったようであるが）。「父は建物の基礎を深さ約1.5メートル、幅にして75センチ掘った。まず岩盤に届くまで堀ることが原則で、建物は必ず岩盤の上に建てなくてはならない。掘った基礎の上に、石と、石灰と粘土のモルタルを入れた。地面の高さに近づいたところで、建物本体の建築が始まる。親方はサファド出身のグヌームという男で、弟子の若者が1人いた。（中略）親方と弟子には食事を無料で提供するのが普通だったが、グヌームは自分で食事を作るから、代わりに日当を増やすよう要求した。こうして談判は成立したのだが、にもかかわらず母は、食事を毎日用意していた」［خشان, 2012: 18］。こうした具合に家が建てられるまでの記述が続く。これはハッシャーンの7歳の頃の記憶であり、その記憶力の良さはもちろんのことだが、シオニストの軍によりソフマータが攻撃を受け、彼の一家がそこから離れざるを得なかった家は、決して単なる不動産などではなかったことに気づかされる。

こうした記憶はしかし、ナクバの記憶を中心とするパレスチナの〈集団的記憶〉のなかでは場所を得にくい。2014年10月18日、成蹊大学で「パレスチナ難民のオーラルヒストリーを聴く」と題してハッシャーンによる講演会が行われたが、このような場では、パレスチナ人の普遍的な歴史経験を語ることが不可避的に求められる。ハッシャーンは自分が直接経験していない伝聞による出来事や歴史的経緯の説明も加えつつ、パレスチナ人の〈集団的記憶〉としてのナクバに至るプロセスを語ることで、場に応じた自身の役割を果たした。ソフマータが攻撃を受け、レバノンに逃れるまでについての証言は彼自身の固有の経験と記憶に依った詳細なものだったが、繰り返し語られてきた証言に必然的にともなうものとして、定型的な語り口を感じさせた。

パレスチナ人たちはナクバを経験してこそ、パレスチナの過去の歴史やそこにあった日々の

難民たちが、自力で建て増ししたり家を建てたりし、また果樹を植えることでかつての暮らしぶりに類似した環境を生み出そうとしていることに言及している［سرحان, 1977: 133］。

暮らしのかけがえのなさを実感し、その記憶を「忘れない」ためにさまざまな手段で記録の発掘、収集、記録を行ってきた[13]。そのなかでとりわけオーラルヒストリーの聞き書きは必然的に、ナクバの経験を中心に蓄積されてきた。その重要性はまったく否定すべくもないが、一方でハッシャーンの膨大な自伝全体に目を通せば、きわめて当然のことながら、ナクバの経験だけがパレスチナ人の記憶のすべてではなく、その経験だけがパレスチナ人の現在を形作っているわけではないことに気づく。というよりも、ナクバの記憶に回収されないパレスチナ人の生活や文化の奥行きある記憶を回復することこそが、パレスチナ人の〈集団的記憶〉に生命を与えるのではないか。

分析的な観察眼を動員しながらパレスチナの家屋やそれに関わる伝承を観察・記録したカナアーンの残した仕事は、ナショナルな記憶のフィルターを通して再構成されたパレスチナ人の記憶とは異なる記憶を思い起こすさいにそれらを裏付け、それらに深みとニュアンスを与えてくれる。パレスチナ社会における記憶とネイションの関係について批判的に言及している文脈の中でBenvenistiは、イスラエル人によるものであれパレスチナ人によるものであれ、「風景のナショナライゼーションを拒否する者は、カナアーンの記述を悲しみの情でもって、あるいは少なくとも消えてしまって戻らないこの無垢で絵画的で汚れていない世界へのノスタルジアとともに読むしかない」と述べている［Benvenisti, 2000: 253］。しかしとりわけこれまで述べてきたような状況のなかで、カナアーンの残した仕事を媒介にナクバ以前のパレスチナ社会を想像し再構成しようとする作業は、決して単なる過去への回顧にとどまることはないだろう。

Ⅴ．おわりに

現在のイスラエルには、一方でⅠ節で取り上げた「ハンセンの家」のようにアラブ・パレスチナ人の存在の痕跡や記憶を抹消する操作があり、他方でⅢ節で取り上げた刺繍展のように、不都合な存在を過去の〈記憶〉へと変換するという操作がある。現実的に言って、こうしたありようにパレスチナ人が直接抗することはひじょうに難しい。

また時間の経過や世代の交代とともに、記憶の抽象化自体は、ナショナルな〈集団的記憶〉を保持し続けようとするパレスチナ人自身の営みのなかにも必然的に起きている。それは「忘れない」ための行為が記憶の選別をもたらしてしまうというパラドクスであり、失われたものが何であるのかの記憶そのものが結果として失われるという皮肉に満ちた結末かもしれない。こうした問題は、パレスチナ人だけが抱えていることではなく、虐殺など集団的な悲劇を体験した社会のなかで、生き残った人間や次世代の人々が共通して抱えるジレンマであり、戦後日本の文脈では沖縄戦の記憶をめぐる問題がただちに想起されよう。それは、その存在が当事者たちに意識されることさえないかもしれない、あるいはそれについての表現手段の獲得されていないジレンマであり、だからこそそこから逃れるすべが容易に見出されることはない。

しかし少なくともタウフィーク・カナアーンが収集・記録したパレスチナ社会や文化の記憶は、ナショナルな言説に完全に回収されることのない幅をもち、またシンボル化されることで陳腐化

[13] ナクバを直接経験した人々の高齢化や死去に対する危機感の高まりのなかで、とりわけ2000年代に入ってから、ナクバ以前に存在していたパレスチナの村や町についての情報や、ナクバに関する証言の集積が進んだ。ネット上でもっともよく知られているのは、約600本、総計3000時間におよぶインタビューの動画を掲載しているwww.palestineremembered.comである。ナクバに関するオーラルヒストリーに取り組むための啓発書、証言を聴き取るためのマニュアルなどもNGOなどが刊行している。高校での授業の一環や自由活動として、証言を聴き取る取り組みも活発である。

や平板化を導くような作用を受けつけない奥行きと多様性をもつものとして、私たちの前に残されている。

参考文献

Benvenisti, Meron. 2000. *Sacred Landscape: The Buried History of the Holy Land since 1948*. University of California press.

Canaan, Tawfiq. 1931, 1932. The Palestinian Arab House: Its architecture and folklore. In *Journal of Palestine Oriental Study*. 223-247(1931), 1-83(1932).

Fuchs, Ron. 1998. The Palestinian Arab House and the Islamic 'Primitive Hut'. In Muqarnas XV: An Annual on the Visual Culture of the Islamic World. Gülru Necipoglu (ed.) Leiden: E.J. Brill, 157-177.

Israel State Archive. 4986/42-מ

Kawar, Widad. 2010. *Threads of Identity: Costumes and Traditions from Palestine*. Rimal Publications

Mantoura, Leila. 1998 Father, Friend, and inspiration. in *Ya Kafi, Ya shafi… The Tawfik Canaan Collection of Palestinian Amulets*. Birzeit University.

Moravian Archive, 2010. This Month in Moravian History. Issue 54, June 2010.

Nashef, Khaled. 2002. Tawfik Canaan: His Life and Works. in *Jerusalem Quarterly*, November 2002. Issue 16.

Pappe, Ilan. 2006. *The Ethnic Cleansing of Palestine*. One World Oxford.

Tamari, Salim. 2009. *Mountain against the Sea: Essays on Palestine Society and Culture*. University of California press.

Trust Society, 1946. *Periodical Accounts of the Work of the Moravian Missions*. Trust Society for the Furtherance of the Gospel.

Weir, Shelagh.1989. *Palestinian Costume*. The Trustees of the British Museum.

خشان, محمد. 2012. الخط الشمالي. منشورات الجمل.

سرحان, نمر. 1977. موسوعة الفولكلور الفلسطيني. البيادر: الأردن.

犀川一夫、森修一、石井則久　2012年　『世界ハンセン病疫病史　―ヨーロッパを中心として―』皓星社

田浪亜央江　2016年　「タウフィーク・カナアーンの民衆信仰研究とパレスチナ文化復興運動」『変わるイスラーム社会　宗教と紛争の実態』所収、明石書店（近刊）

放浪かもめは千年の語りの道をゆく。*

The Vagabond Seagulls Tell Tales for a Thousand Years — and Beyond

姜 信子**
Nobuko Kyo/Shinja Kang

＜私は蝦夷である＞

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah、それは2012年1月のこと、新潟でのこと、私の傍らに浪曲師玉川奈々福がいたときのこと、耳にはこんな歌が聞こえていたときのことなのです。

Ho!Ho!Ho!
　むかし達谷（たった）の悪路王
　まっくらくらの二里の洞
　わたるは夢と黒夜神
　首は刻まれ漬けられ
アンドロメダもかゞりにゆすれ

これは宮澤賢治の歌う「原体剣舞連」、その一節、大昔、ヤマトから北上してきた征夷大将軍坂上田村麻呂に敗れて斬られて踏んづけられて平泉の達谷窟（たっこくのいわや）に封じ込められた蝦夷の王の物語、賢治の声に耳を澄ませば、ほら、思い出す、思い出す、かつては蝦夷と呼ばれた者たちが主（ぬし）だった地、みちのくに行けば、蝦夷を封じたヤマトの神々があっちこっちに祀られている、ヤマトの神々がやってくるその前には、ヤマトに蝦夷と呼ばれて、今はもう本当の名前も忘れられた人々の命や息吹とともに脈々語り伝えられてきた神々がそこにはいたではないか、人々が神々とともに歌い語った物語があったではないか、ほら、耳を澄まして、身を乗り出して、封じられた物語のほうへ、見えない聞こえない声のほうへ、

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah
太刀は稲妻　萱穂のさやぎ
獅子の星座に散る火の雨の
消えてあとない天のがはら

---

* 本稿は、2015年7月12日、成蹊大学にて行なわれたワークショップ「浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ　旅するカタリ、千年さすらいかもめ組」の報告として、新たに書き起こしたものである。〈かもめ組〉の演者は以下の通りであった。玉川奈々福（浪曲師）、安聖民（パンソリソリクン）、澤村豊子（曲師）、趙倫子（鼓手）、姜信子（道案内）。

** 作家、成蹊大学アジア太平洋研究センター客員研究員
Writer/ Visiting Researcher, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

打つも果てるもひとつのいのち
dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

打つも果てるもひとつのいのち、そうだよ、ひとつのいのちだ、そう歌う賢治の声に誘われて、命を打つ者たちの物語る声の下に押し込められた、命果てる者たちの声に耳を澄ます、その歌声に耳をゆだねる。
青森のねぶたは、そもそもは、蝦夷を油断させてやっつけるために坂上田村麻呂が仕組んだこと、笛に太鼓に灯篭のお祭り騒ぎから始まったんだってねぇ、そのお祭り騒ぎで騙し打ちにされた者たちの末裔も今では知らず覚えずねぶたの大灯篭を担いでいるんだってねぇ、あの大灯篭の光の下の闇の底には、封じ込められた声が蠢いているんだってねぇ……。

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah、封じられた声を聴け、見えない物語をひもとけ、そんな思いが激しく胸に渦巻く2012年1月の私は、もう既に、2011年3月のあの日に東京の三河島の朝鮮部落の路上で足元から激しく揺さぶられ突き上げられた私でした。ぎざぎざと目には見えない大地の裂け目から、88年前に東京の路上で斃れた者たちが這いずり出してくる、その姿をじわじわじわと目に焼きつけた私でした。あの日、見えない声が、思い出せ、思い出せ、私の足をつかんで揺さぶって、慄いて、声に追われて、飛び込んだ喫茶店のテレビの画面の中では東北の海辺の町と人々とその暮らしが黒々とした大津波にごっそりと押し流されて、テレビの脇では猫が怯えて震えていて、思い出せ、思い出せ、押し寄せる見えない声に私は荒々しくも心をさらわれて、あの日、そう気がつけば、あの日を境に三河島からさまよいの道へと漂い出した私なのでした。

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah、日本の真っ只中にぽっかり浮かぶ小島のような朝鮮人の町のことを歌って、それは確かに存在する町なのに、そこには人間たちが暮らしているというのに、日本というカラクリのなかでは、それは「見えない町」なのだと、その詩にしかと書きつけたのは、詩人金時鐘でした。なんの因果か、私は3月のあの日に詩人に逢うはずだったというのに、世界がぐらぐら揺らぐものだから、詩人に逢うための道もぎざぎざに裂けて、隠された道が姿を現して、日本の近代が封じ込めた日本中の見えない町、見えない人々、見えない物語、聞こえない声が、ここだ、ここだ、わたしはここだと叫びだしたようで、それは詩人の歌う「見えない町」に導かれていくようでもあったのです。

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah、私は東北へと向かった、福島で勿来の関を越えた、ここからは蝦夷の土地だ、大昔からのヤマトのひそかな植民地だ、福島と宮城の県境あたりで北緯38度線を越えた、ここからは北だ、飢饉干ばつ侵略を生き抜いてきた者たちの大地だ、半島の「北」と列島の「北」の記憶が結ばれる、一衣帯水の「北」だ、かつて日本にコメを送り、人を送り、日本の戦後の大化学工業のひな型を作った新興財閥日本窒素に土地を奪われ、資源を奪われ、命を奪われた半島の「北」があり、近代日本が半島を失ったあとに、半島の代わりに、日本にコメを送り、人を送り、資源を送り、電気を送りつづけた列島の「北」がある、「北」は植民地だ、目にも明らかな半島の植民地と、目にはそうは映らない列島のひそかな植民地と。

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah、見えない町に行こう、見えない人に逢おう、見えない物語を聞こう、語ろう、さまよいの旅に出よう、見えない声に導かれて…。
2012年1月、「北」を想い、見えない道へとおずおず足を踏み出した私と、浪曲師玉川奈々福

は、新潟におりました。その2か月前に、二人は列島の「北」へと38度線を越えたばかりでした。玉川奈々福は、「北」の声を聴きながら私が書いた一篇の物語を朗々と読みました。

私は蝦夷である。
そんな想いがむらむらと。平泉、達谷窟（たっこくのいわや）毘沙門堂。切り立った崖の下の大きな窟に半分入り込む形で清水の舞台を模して建てられた簡素なお堂に、北方鎮護の願いを背負った何体もの軍神・毘沙門天がまことにいかめしい面構えで立っている。
その毘沙門天に向かって、仁王立ちで、
私は蝦夷である。

Ho!Ho!Ho! そうだよ、私も奈々福も蝦夷なんだよ、この世がこの世であるために、この世がこの世で完結するために、千年万年封じられた者どもの一味なんだよ、終わりの世界に厳しく封じられても、はじまりをもとめて漏れ出る声たちの耳なんだよ、口なんだよ。そうやって声をあげれば何かが兆す、そう、この日、われらは、もうひとつのはじまりを孕むこととなりました。もうひとりの蝦夷、大阪猪飼野見えない町に生まれ育ったパンソリ唱者（ソリクン）、安聖民にわれらの声はひそかに届き、安聖民はひそかに震えて、やがてそれぞれの道は交わって、かもめ組誕生と相成ります。それは、2012年10月、「北」を眼差す新潟の水辺のかもめシアターでのことでした。Ho!Ho!Ho!

＜愚かな心＞

安聖民のパンソリを初めて聞いたのは、2010年5月、大阪の生野の観音寺。済州島4・3事件追悼の会でのこと。私は初めての済州島への旅から戻ったばかり。島にひそかに斃していた死者たちの声で心がいっぱいになっている。そのときの私は目の前で鎮魂の声をあげるソリクンが安聖民であることを知らない。二年後に語りの旅の道連れになろうとは、夢にも思っていない。
玉川奈々福とは、2006年以来の道連れだ。沖縄最後のお座敷芸者、歌で人々を喜ばせて七〇数年の三線おばあナミイの、歌いだしたら果てしなくつづく歌声で結ばれた縁だ。
2011年3月を境に、その縁は深まる、絡み合う。
こんな時代だからこそ。
それがかもめ組の合言葉。揺さぶられて、目を覆っていたものが剥がれおちれば、観るべきものも見えてくる。なにより、高みの小賢しい言葉や理屈に人間の命が軽々と弄ばれるこの時代に、われらはひたすら地べたをさすらう語りの者であろうと、愚かな心を分かち合った。

＜私はメクラである＞

あたしゃ、文字も読めないあきめくら、そう言いながら、その生涯を歌って身過ぎ世過ぎの旅に生きてきた石垣島の三線おばあに、あんたの頭の上には神様がいないと言われたのは、さまよいの旅の始まりの頃のことでした。不思議です、あきめくらの三線おばあは、私の目には見えないものがよく見えるようなのです。人間は誰もが頭の上に神をのせている、神をのせているひとりひとりの人間が神のようでもある、人間だけではない、草にも木にも石にも水にも

風にも神はいる、そう三線おばあは言いました。あたしは神を喜ばすために歌うんだ、そう三線おばあは言いました。同じ言葉を私は済州島で聴きました。神を呼び出す神房は、神の物語を滔々と歌い語る、神はわが物語が語られるのを聴けば、大いに喜ぶ、呼ばれて天から降りてくる、そしてそれは神だけではない、名もなき死者たちも同じ、家族や血族しか知らぬその名を呼ばれ、そのたったひとりのために、その者がこの世に生を享けるまでに脈々と受け継がれてきた命の名が呼ばれ、その者が生まれてからこの世を去るまでの物語が語られ、死者は神として地上に招かれる、神として遇される、その喜び。それはこの世のどんな片隅に生きて死んでいったとしても、誰もがこの世の主であり、かけがえのない命であることを歌い、語り、伝える、物語。ひとりひとりに神話があるのだ、ひとりひとりが神話を生きて死ぬのだ。ひとりひとりの人間の誕生こそがはじまりなのだと語ったアレントの言葉を私は思い出す。アレントの言葉を待つまでもなく、この世に語り伝えられるすべての物語は、ひとりの人間の命とともに、命という名の神とともにはじまるのだ。すべての物語ははじまりをもたらす神の物語、神話から生まれ出たのだ。この世の語り部という語り部は、神と人を結んで神話を歌い語る原初の声を祖先に持つ者たちなのだ。ところがね、文字で声を追うようになると、人は命が見えなくなるらしいんだね、文字の論理につぶされた目には、神は見えないらしいんだね。見えないどころか、見失ってしまうらしいんだね。歌うように書きたいと、私はもう四半世紀も言い続けてきたのですが、この世の島々を彷徨い歩いた末に、自分があきめくらですらないことに気づくまでは、それは実に見事に絵空事の話でありました。人は何のために歌うのか、語るのか、それは命とつながるためだろ、つながってこそはじまる命の、そのはじまりをくりかえしこの世にもたらす言霊を放つことだろ、そんなこともわからずに歌い語ろうとはまことに空恐ろしいことでありました。何も見えていない者がこの世のことを軽々に歌うことほど危ういことはないということも、見えてないからこそわからぬものなのです。

＜浪曲とパンソリと語りと＞

さて、浪曲師玉川奈々福とパンソリソリクン安聖民の話です。二人は千年前に半島と列島とに生き別れた放浪姉妹であります。それは語りの旅のはじまりにまつわる話です。済州島の神房が神話を語りつづけているように、人と神の交わるその場所、この世の最も聖なる場所であると同時に、この世の最も賤しい場所で、人と神と命の由来を語る最初の声をあげた者たち、それこそが玉川奈々福と安聖民のはるかな父であり母でありました。旅する語りの者たちでありました。声というものは、放てばそのまま漂いだしていずこかへと旅立ってしまうから、声は記憶をもたないと、これはトリン・ミンハが呟いたことですが、記憶に縛られない自由な声を吐き出して語って生きる者は、おのれの吐き出した声を追って旅するほかはない。ただよう声が道を作ります。物語を織り上げます。記憶を持たない声が語り出す物語は、実のところは空っぽの器です。素晴らしい空っぽです。その器には、道々で出会った行き場のない声たちが流れ込んでは、出会いの歓びに心を温められ洗われて、ふたたび力強くも漂い出す。たとえば、玉川奈々福は名工左甚五郎の旅日記を演じます、新作『金魚夢幻』を、歌い語ります、どれもこれも素晴らしい空っぽの物語です。安聖民は『沈清歌』を、『春香歌』を『水宮歌』を歌い語ります。もちろん素晴らしい空っぽの物語です。そこには押しつけがましく人間を縛り上げる記憶はない。あるのは、人間を縛り上げる記憶を振りほどいて、さあ、ひとりでしっかり歩いて行けよと背を押す声。語りの者とは、そのような声の道を生きる者たちなのです。みずからを縛るものを持たず、携えているのはただ

「空っぽな器」であるゆえに、おそろしく孤独な旅人たちなのです。もう千年も万年も、最初に声がこの世に放たれたそのときから、その旅は果てしなく続いている。すべての声の旅人は生き別れた孤独な兄弟姉妹。この世の異人（まれびと）。

＜その文字は白骨の歌えるものか？＞

2010年3月、済州島を初めて旅したとき、じゃりじゃりじゃり、私はずっと私の靴が踏みつける白骨の音を聴いていました。済州国際空港に飛行機が着陸したその時から、飛行機の車輪に踏みしだかれる白骨の音を聴いていました。済州島へと旅立つ前に、済州島に故郷を持つ私のおじが、絶対に飛行機では済州島には行きたくない、なぜならば、滑走路にたくさんの白骨が埋まっているから、と言ったのでした。4・3事件という、朝鮮半島の南北分断に深く関わる、韓国ではずっと封印されてきた、国家によるアカ狩りを口実とした島民虐殺のその記憶は、言葉にはならぬ、ただ、足下の大地で、しゃりしゃりと、じゃりじゃりと、親兄弟にも知られずに無造作に殺されて埋め捨てられた犠牲者たちの骨が、踏まれるたびに乾いた音をあげる、その骨の声が済州島にはひそやかに鳴り響いているのだと、たった十五歳で全身の骨が砕け散るほどの拷問を受けて、山野にころがる死体を踏み越えて、玄界灘へと漂いだして、日本へと密航してきたというおじが、ひそかな声でそう言うのでした。人間の骨のうちで、土中に埋めて、一番最後まできれいに残っているのは歯だと言いますね、身は朽ちても、骨は溶けても、カチカチカチと小刻みに震えるあの音だけは千年、万年、未来永劫、聴こえつづけるのかもしれませんね､私たちにそれを聴く耳があるのならば。おじは拷問で片耳の聴力を失ったのだそうです。おかげで、ずっと、この世ならぬ声が聞こえるのだそうです。

白骨の音といえば、ハンセン病療養所。ここも日本の中の見えない島、見えない町です。一度この島に流れ着いたなら、かつては死んでも出ることはできなかったから、実のところは今でもそう変わりはないのだけれども、それでもかつては納骨堂だけではなく、火葬場までもこの見えない町にはありました､(そういえば、大阪の見えない町猪飼野も、大阪の目に見える町々のはずれの火葬場のあたりの湿地に生まれた町だった)、火葬場は地獄谷と呼ばれる見えない町のはずれの谷のすぐ上の野っ原にあって、見えない町の住人たちが薪を積んで、死んでも死にきれないと言いつづけている遺体を焼いて、焼ききれない骨のかけらは野っ原にまいて、野っ原には白い砂利のように骨片がじゃりじゃりとね､じゃりじゃりと骨片がね､踏めば声をあげる､この声が聴こえるか、おまえはこの声を語る言葉を持っているのかと、それは骨が歯ぎしりする音のようでもある、じゃりじゃりと突きつけられるようでもある、おまえが歌うように語りたい書きたいというその文字は白い骨の文字なのか、見えない世界、聴こえない声を、見えるもの聞こえるものにきつく縛り上げられている者たちに送り届ける文字なのか、死ぬに死ねず、生きるに生きられない者たちに、ほんとうの命のはじまりを、もたらす文字なのか。

＜道行き＞

これは地獄谷の白骨が教えてくれたこと。その昔、道をすみかに白骨の声で物語を語り伝えた者たちがおりました。その物語とは、たとえば、踊念仏の一遍上人が興した時宗の総本山、相模の国は藤沢の遊行寺から出発して、熊野の湯の峯へと、生きながら死に蝕まれて腐り果てた

体を土車に乗せられて、一引き引きては千僧供養、二引き引きては万僧供養と唱える無縁の衆生に延々曳かれていった餓鬼阿弥こと、小栗判官の物語であり、そうやって熊野の命のよみがえりの湯につけられる餓鬼阿弥とは、語り手自身のことでもあり、餓鬼阿弥の物語を聴いて、その物語につかることで命をよみがえらせるすべての者たちのことでもありました。語る者も聴く者も、物語の土車の綱を引き、藤沢をあとに、えいさらえい、はや、小田原に、入りぬれば、狭い小路に、けはの橋、湯本の地蔵と、伏し拝み、足柄、箱根はこれかとよ、山中三里、四つの辻、伊豆の三島や、浦島や、三枚橋を、えいさらえいと、引き渡し、流れもやらぬ、浮島が原、小鳥囀る、吉原の、富士の裾野を、まんのぼり、はや富士川で、垢離を取り、心しずかに、伏し拝み、ものをも言わぬ、餓鬼阿弥に、語りかける、息を吹き込む。物語とは、こうして道ゆく者たちが、みずからの足で道を拓き、道に惑い、地べたを這いずり、立ち尽くして、また彷徨いだしてゆくその道行きによってこそ紡ぎ出されるもの、物言わぬ餓鬼阿弥とともに果てしなく繰り返されるその道行きこそが、われらが生きて歌って語り伝える物語なのだということ、白骨の声は確かにそう言っているようなのです。その声を文字に書きつけようとするならば、文字もまた惑って、彷徨って、ぽろぽろと行間からこぼれ落ちて、漂いだしてこそ、白骨の文字となる、そのように白骨の声は語りかけているようなのです。

＜もう一度。声には記憶はない＞

もう一度、トリン・ミンハから聞き取ったあの印象的な言葉。
「声は記憶をもたない」。
確かにそう。声は記憶をもたない。
（ところで、記憶をもたない文字なんてあるのだろうか？）
記憶をもたぬものに境はない。おのずと境を踏み越えてゆくもの、境を消し去っていくもの、それが声。
（三次元、四次元、五次元へと、論理を越えて、形をすりぬけて、境もなく広がり、漂い、滔々と流れてゆく文字、それは文字に携わる者の夢だろう）
思うに、いま、私たちが語る物語とは、既に終わった物語ばかり。いつの頃からか、おそらく人間が文字に縛られるようになってから、わたしたちは終わりばかりを繰り返し語っているようなのです。

語りはもう一度、はじまりの旅に出なければならない。

＜かもめ組＞

浪曲師玉川奈々福、パンソリ唱者（ソリクン）安聖民、物書き姜信子。
三人の旅の道が交わって、かもめ組として飛び立ってから三年、それぞれがそれまでに生きてきた語りをひとつに織り上げた、はじまりの物語を歌い語ってみたいという思いがだんだんに満ちてきた。
日本の大阪の猪飼野に生まれ育った安聖民は、韓国でパンソリの修業をし、韓国語で歌い語りながら、いつか、日本に生きる自分の言葉で、自分の声で、済州島から猪飼野へと渡ってきた祖

父母たちの旅をたどりなおし、新たなはじまりの物語を紡ぎ出したいと願っていた。
安聖民とともに、かもめ組として新たな物語を紡ぎ出す、共に歌い語る、それは玉川奈々福の願うところでもあった。
姜信子は、かもめ組の物語を書くならば、それは白骨の文字でなければならぬと信じて願っていた。
その願いの結びあうところ、それが、2015年7月12日、成蹊大学において演じられた「かもめ組　ソリフシ公演『ケンカドリの伝記』」であった。

「ソリ」は韓国語。それは声であり、音である。
「フシ」は日本語。それもまた声であり、音である。
「ケンカドリ」とは、姜信子が、済州島から密航してきたおじの声と沈黙の中から聴き取った物語。

ケンカドリに、安聖民は祖父母の旅を重ね合わせて語ることだろう。とはいえ、わずか公演10日前に姜信子より送られてきたこの物語の、パンソリとはあまりに違う一人語りの形式に、安聖民は大いに戸惑い、そして、自分の声の求めるところにしたがって、物語の言葉に息を吹き込み、物語の文字を声として立ち上げていくことだろう。

玉川奈々福は、済州島4・3事件を背景に置く「ケンカドリ」の物語に加わることは、ひとりの日本人として、日韓の歴史への自分なりの確かな認識と歴史に向き合う覚悟なくしては、厳しくも困難なことなのだときっぱりと言うことだろう。この物語の語り手のひとりとなることに大いに戸惑い、この語りへの参加は控えるべきと、誠実なる判断を下す玉川奈々福は、しかし、安聖民の語りの声を聴くうちに、みずからが引いた境界線を越えて、三味線を手に物語の中へ中へと深く入り込み、はじまりの音を放つことだろう。それもまた記憶を持たず境も持たぬ声や音に誠実な語り手の魂のなせる業だろう。その魂こそが、物語に生き生きと息づくはじまりを呼び寄せるのだろう。

文字に縛られているその息苦しさに、なんとか振りほどこうと、東に西に駆け回り、南に北へとさまよい歩くその日々の末に、姜信子は白骨の文字にたどりつけるのか、白骨の声はそこにあるのか。玉川奈々福に当てて書かれた「ケンカドリ」の語りの部分を、みずから代わって語ることとなった姜信子は、語りの声をあげつつも、その声は、しゃりしゃりと、ぎりぎりと、問いにまみれていることだろう。

かくて、放浪かもめは、またふたたびの千年の語りの道をゆく。

かもめ組　ソリフシ公演　『ケンカドリの伝記』

空白の声を聴く者：姜信子
空白の声を伝える者：安聖民
楽士：玉川奈々福、趙倫子

チンの音2回（厳かに。重たく）
（チンの2回目のしっぽをつかまえてチャンゴの音。安聖民歌いながら登場）
※이어도 사나 아아아 아아아아 이어도 사나 으샤　으샤※

물로야 뱅뱅 돌아진 섬에 먹으나 굶으나 아아아 물질을 허여 으샤 으샤
（水がぐるぐるまわる島で　食えても食えなくても　潜るのさ）
（歌声に呼ばれて姜信子登場。ゆっくり安聖民に向かって歩いていく）

※이어도 사나 아아아 아아아아 이어도 사나 으샤　으샤※
（二人の定位置はリハの時に決める。「으샤　으샤」で安聖民は歌い終わり、目を閉じる）

姜信子：（沈黙の後、静かに遠くを見ながら話し始める）」
　イオドサナ、イオドサナ……。
　それは、長い長い戦争のあとのことでした。東の海にぽっかり浮かぶ火山島チェジュドでは、戦争で傷ついて悲しむ心、舞いあがる心、狂った心、祈る心が行き場もなく渦を巻いて、惑うばかりでした。
　火山島チェジュドは、人々の心をアカだのシロだのクロだのと塗り分けて、捕まえて、責めて、殴って、殺し合う修羅の島となっておりました。
　あまりの恐ろしさに、それはもうたくさんの人々が、この修羅の島をあとにした。人々が目指したのは、はるか彼方にあるという夢の島、幻のイオド。そこにたどりついたなら、誰も二度とは帰ってこないという。
　誰も二度と帰ってこないから、イオドはいつまでも幻の島なのだという。

（少し長い沈黙の後）
　ひとりの少年がおりました。その名もケンカドリ。ケンカドリもまた、木の葉のような小さな舟に乗り、闇をくぐって、波を越えて、修羅の島チェジュドをあとにした。
　それはケンカドリにとって二度目の旅立ちだったのだともいいます。
　そう、ケンカドリは、もともとはニッポンのイカイノという小さな町で生まれ育ち、長い戦争のさなかに、空から落ちてくる爆弾から逃れて、父と母のふるさとチェジュドへと海を渡ったのです。そして、また、戦争のあとに、イオドをめざして二度目の旅立ち。

　ここに、目には見えない一冊の本。

旅ゆくケンカドリの心からこぼれ落ちたつぶやきが、見えない文字で記されている。
読んでみましょう。

少年の記憶に／船出は／いつも／不吉だった。／すべては／帰ることを／知らない／流木なのだ。*

ケンカドリ、ケンカドリ、流木のように船出した、おまえはいまどこにいる？

チンの音

安聖民：（韓国語で呪文のように呟く）
눈에 보이는 길을 꼭 가야한다고　생각하지 마.
（目に映る／通りを／道と／決めてはならない）
눈에 보이는 길이 꼭 내 길이라 생각하지 마. 그러니까 이아도에 갈 길을 못 찾는 거지.
（目に映る通りを／道と思い込んでしまうから／イオドへの道が見つからぬ）
安聖民：（我に返ったように）
思い出ってのはね、匂いなんだな。匂いがするんだよ。ボクはね、もう六〇年以上も前に、日本の東京に流れついて、ずっと東京で生きてきた、なのに、生まれ育って、ほんの十歳まで暮らした大阪の、イカイノの匂いが鼻の奥でずきずき疼く。
匂いは、痛い、忘れたい、忘れられない、あの頃への道しるべ。
あのね、大阪の鶴橋駅で降りるでしょ、その途端にぷんと焼肉の匂いが鼻を打つ。その瞬間に、ボクは七十年前の少年のボクに戻っている。ほら、目の前にはヘドロくさいどぶ川だ。鮒が泳いでる。よし、どぶ川に浮かぶ藻を餌にしてあの鮒を釣ってやろう。鮒を釣ったら、今度はトンボ釣りだ。糸の両はしに重りの石をつけて、パッと投げる。それを餌と勘違いしたトンボが飛びついてきて、糸に絡まって落ちてくる。
バカだな、トンボは。
バカだったな、ボクも……。
あの頃、ボクはまだ10歳になるかならぬかの、半島出身の、大日本帝国の少国民でありました。

姜信子、安聖民：（機械的に。かつ、熱をもって）
私共は　大日本帝国の臣民であります
私共は　心を合わせて天皇陛下に忠義を尽くします
私共は　忍苦鍛錬して立派な強い国民となります

あの頃、大阪でよく聞いたセリフ。
「あかん、あかん、朝鮮人と沖縄人には家は貸さん！」
「しっしっ！帰れ、帰れ！うちの店にはな、犬に食わす餌はあっても、朝鮮人と沖縄人に食わす飯はないんや！」

ボクの兄貴なんてまだほんの十五、六で、ガラス工場の熱い風を浴びながら朝から晩まで働

---

* 以下、姜信子が読む見えない本の言葉は、金時鐘の長編詩「新潟」より引用したものである。

いて、もらう金は、ひと月たったの一円。朝鮮人が日本の工場で働いてもらう金は雀の涙、そのわずかな金が一家の支えでありました。
それでも島で暮らすよりはよかったんだろうか…。
人間のように扱われなくとも、それでも生きいければいいんだろうか…。
それでも生きていくのが人間なんだろうか…。

ボクは、毎日、学校で、先生に呼び出されては殴られました。

姜信子：「おい、この野郎！なんだその眼は！この朝鮮人野郎！」

「この野郎、この野郎！」
ボクも、毎日、学校で、教室の誰かを殴っていました。
「この野郎、この野郎！！」
あの頃、ボクはバカでした。誰と何のためにケンカしているのか、ちっともわかっていなかった。
「この野郎、この野郎！！！」
心の中でそう叫びながら、竹槍と防空頭巾でB29とだって闘える、そう信じていたのです、闘って死ねば金鵄勲章、ボクも靖国に祀られたいと思っていたのです。

ボクのアボジとオモニのふるさとは朝鮮のチェジュドです。戦争疎開でボクは初めてチェジュドに行きました。
十六歳の兄貴と一緒に、大阪から汽車に乗って下関、下関から船で玄界灘を渡れば、かもめ群れ飛ぶ釜山港、釜山から港町の木浦まで汽車に揺られて、木浦からまた小さな船に乗り、ようようたどりついた遥かなチェジュドでした。
なのにねぇ……。大阪のイカイノで生まれて、大阪しか知らなかったボクは心の底からがっかりしました。（チェジュドって、朝鮮ってこんなにちっぽけなのか！）

ボクは本当にバカなケンカドリ。人間どもにけしかけられて、むやみに闘う、あの殺気立ったシャモのような、愚かなケンカドリ。
本当のケンカの相手を知るまでには、それからボクの心は何度も何度も死ぬのです。

チンの音
姜信子：（見えない本を読む）
「それがたとえ／祖国であろうと／自己がまさぐり当てた／感触のあるものでないかぎり／肉体はもう／あてにしないものなのだ」

ケンカドリ、少年ケンカドリ、
おまえはチェジュドで何を見たんだい？
おまえの肉体はいったい何を探り当てたんだい？
安聖民：（少し長い沈黙の後、韓国語で呪文のように）
아버지는 혼자 일본에 계시고
어머니는 먼저 제주도로 떠나시고

ボクは兄貴に連れられて、母を訪ねて、チェジュドに渡る。

ボクは12で、兄貴は16。しかし、ほんの16歳なのに、兄貴は本当に大人なんです。
「じいちゃんの墓だ！」。
ようやくたどりついたオモニの実家の裏山で、兄貴が墓にすがりついてわんわん泣いている。ボクはぼんやりとそれを見ていました。ガラス工場で大人のように働いてた兄貴は、もう体で人の世の情や心の機微というのを知っているみたいで。しばらく泣いて、涙をぬぐうと、口笛吹きながら裏山を降りて「オモニ！ただいま！」って家に入っていきました。

兄貴は日本からレーニンの社会主義の本も隠し持ってきていました。十六歳で一家の大黒柱になって、ガラス工場で生き血を搾り取られるように働いたその体はそのわけを知りたがっておりました。
「何かがおかしい、世の中何かが間違っている」
チェジュドには、兄貴みたいな若者がひそかに沢山おりました。

そして、ボク。ボクは、朝鮮の、立派な大日本帝国の少国民。
いいえ。ボクは、ボクはみじめなひとりの奴隷でありました。

それは戦争も終わりの頃のこと、追い詰められた日本はアメリカ軍のチェジュド上陸に備えて、20万人もの兵隊をチェジュドに連れてきた。慌てて高射砲陣地、特攻艇基地を作った。飛行場も整備した。その工事には、チェジュの人々が牛馬のように駆り出された。子供のボクも働かされました。
ぎらぎらの炎天下、土を運んで、石を運んで、いつまでも家には帰してもらえない。ボク、倒れてしまったの、倒れて鞭で叩かれて、赤い血が噴き出した。まるでローマの奴隷みたいだったよ。そう、ボクは奴隷だった。植民地の奴隷だった！
ああ、これが植民地ということなんだ。ボクはそのとき初めてわかったのです。

やがて戦争が終わりました。もう労働奉仕はおしまい。「おまえは自由だ、もう家に帰っていいぞ」そう言われました。嬉しかったなぁ、飛び跳ねて喜んだ。そのときが、ボクの解放。ボクにとっての植民地支配からの解放でした。

でもね､解放のあとも､ボクは牛でした。牛のように働きました。ほかの子供たちは学校に行ったけど、ボクのうちは働き手がいないから、アボジは日本にいたから、兄貴は役場に働きに出たから、野良仕事はボクがやる。中学の月謝を払うには牛一頭売らなければならないから、牛一頭はボクの家の生命線だから、ボク、中学行かないってオモニに言いました。

ボク、小学校までは日本語の読み書きしか教わってない。朝鮮語は全く分からないまんまで、ひたすら野良仕事。そしたらオモニが可哀そうに思って、村の寺子屋に行かせてくれた。野良仕事の前に、朝4時から千字文の漢字を習いました。そのとき初めて、あ、これやらなきゃダメだ、勉強しなくちゃ、そう思いました。

ボクは人間になりたいと思いました。14歳でした。ボクはまだ、ボクを世の中につなぐ言葉

を持っていなかった。

チンの音

姜信子：（淡々と語る）

14歳のケンカドリは、解放後まもなく、チェジュドを襲った大きな災いに飲み込まれていきます。それがどれほどの災いであったかといえば、たとえば、沖縄戦では「鉄の暴風」が吹き荒れて、4人にひとりが亡くなった。チェジュドでは、「アカ狩りの狂った風」のために、公式発表では9人にひとり。実際には4人にひとりが、大韓民国政府の差し向けた軍隊や極右団体や警察に殺されたのではないかと言われています。殺された者の多くは、実のところ、アカくもシロくもクロくもない、ただ右往左往するばかりの、つまりはごく普通の庶民。

でも、いったいなぜにチェジュドが？

チェジュドの人々だけが、唯一、南北分断を既成事実にしようと目論む南朝鮮単独選挙に島ぐるみ参加しなかったから。

貧しく小さな島の共同体には、半島の国家からも、列島の国家からも搾り取られ、虐げられてきた皮膚感覚としての記憶があります。だから、島の人々はおろおろしながらも、権力者たちの理不尽と非道に憤る島の若者たちの、朝鮮統一の願いに寄り添った。それは思想とか主義とか以前のこと。記憶を刻んで生きてきた島の人々の体が選んだこと。

1948年4月3日、若者たちは山に入って武装蜂起する。そして大韓民国政府による見せしめの虐殺が始まる。山を拠点に闘う通称山部隊のなかにはケンカドリの兄もいる。

安聖民：사람이 사람으로서 저지르면 안 되는 배반이 있다.
여태껏 밝혀지지 않는 고통스러운 기억들, 피 맺힌 공백이 있다.
가득 찬 의심으로 이루어진 세계에서 안간은 인간답게 살 수 있을까?
（人間が人間であることに対して犯した裏切りがある。
未だ明かされない痛みに満ちた記憶、血の色をした空白がある。
裏切りから生まれでた世界で、人は人として生きられるのか？）

あの頃ボクはまだ14歳の子どもでした。右も左も関係ない、何もわからない。島ではアカを探せ、アカを殺せと、誰もがだんだん疑心暗鬼になっていきました。

（あいつは警察隊と通じてるんじゃないか）（あの村は山部隊の側なのか）

疑われたら、殺される。警察隊にも、山部隊にも。警察隊はそれこそ見境がない。山部隊に入りそうな男だけでなく、女も子どもも年寄りも容赦なし……。

兄貴が山に入ってしまったから、ボクは警察に引っ張られ、拷問を受けました。

「아이고—！ 아이고—！」

ギザギザの木の板に正座させられて、膝の上に石を置かれて、泣き叫んでいるオモニを見て、ボクは取り調べの人間にすがりつきました。

安聖民：「お願いです、オモニには何の罪もありません。代わりにボクを殺してください！どうかオモニだけは家に帰してください！」

姜信子：「ならば、兄貴が山から下りてきたら報告するか？」
安聖民：「します！」
姜信子：「兄貴が目の前に現れたらどうするか？」
安聖民：「竹槍で突き殺します」
姜信子：「ほんとか？」
安聖民：「ほんとです」

一度は釈放されました。でも、またすぐに捕まって拷問だ。くりかえし15回も捕まりました。殴られて、電気を通されて、耳から血を流して、体が膨れあがって、棺桶がわりの担架に乗せられたら、もうおしまい。留置所の裏の麦畑に捨てられて息絶える。
そして、ついにボクのための担架が用意されました。（ああ。ボク、もう死ぬんだ）
その時でした。兄貴が目の前に現れたのです。兄貴は頑張りぬいたボクを抱きしめてくれました。（ああ。ボク、もうこれで死んでもいいや）そう思いました。
でも、不思議だね、人間って、そう簡単には死なないんだ。

オモニは長男の兄貴を助けたくて、田畑を全部売りはらい、警察に賄賂を贈りました。そしたら警察は兄貴じゃなく、今にも死にそうなボクを釈放した。

（せめてこの子だけでも生かさないと家が絶える）
オモニはボクを日本行きの木の葉のように小さな船に乗せました。
「살아라!生き延びろ！」
無言の見送りを背に、激しく荒れる国境の海、玄界灘をボクは越えたのです。

チンの音
姜信子：（見えない本を読むように）
「常に／故郷が／海の向こうに／あるものにとって／もはや／海は願いでしかなくなる」

ケンカドリ、おまえは木の葉のような密航船で、荒ぶる海を渡って、痛む心と体を引きずって、ただ懐かしいあの匂いに導かれて、闇夜を越えて旅をしたんだってねぇ。
ねえ、ケンカドリ、おまえは闇夜の先に何を見た？

安聖民：まったく記憶にないんです。ボクは船がたどり着いた場所すらわからない。アボジが暮らす東京の上野にも、どうやって行ったのかわからない。覚えていない。
でも、不思議だなぁ。あの時、大阪の鶴橋にたどりついてからあとの、ほんの束の間のことは覚えている。そう、あの時も、どぶ川の匂い……。あの匂いの中で、ボクは幼馴染みの友達を一生懸命探した。あいつの匂いを探して、ひくひくと、ボクは生きている、ここにいるよって。でも、会えなかった。

東京は見渡すかぎりの焼け野原でした。まるで津波のあとの光景のようでした。アボジは御徒町あたりのバラックに住んで、ろうそくをつくって売っていました。ろうそくは、戦後の電

気もまだない頃の、闇夜の灯り。ろうそく作りは、アボヂが大阪のイカイノで身に着けた生きぬくための技でした。

ボクは朝鮮学校に通うようになりました。もう17歳になっていました。
ボクね、あのとき鉛筆というものを生まれて初めて握ったの、ノートというのに初めて字を書いたの、17歳なのに中1のクラス。ABCのAも知らない、算数は足し算引き算がやっと、クラスでビリ。何をしたらいいのかもわからない。そのうちチェジュドに帰るんだろうってぼんやりそう思っていました。

1950年、それは朝鮮戦争が始まった年のことでした。兄貴は軍事裁判を受けて全羅南道の木浦の刑務所におりました。北朝鮮の軍隊が38度線を越えて南へ南へ。おそれおののく韓国側は“刑務所のアカの政治犯など殺してしまえ！”兄貴は、港町木浦の沖合に、船で連れ出され、沈められて、殺されました。

「아이고— ! 아이고— ! 」
チェジュドのオモニからの手紙からは涙がほとばしる。ボクはオモニの涙を全身に浴びました。ボクの目からも血の涙が噴き出しました。手紙を読んだその瞬間、ボクは死んでしまいました。死んで、生まれかわりました。ボクの命、ボクのすべてが変わってしまいました。それまでからっぽだったボクの頭に、いきなり国家や世界が飛び込んできました。頭がいきなり、この世界と同じくらい大きくなってしまいました。

ボクはケンカの相手誰なのか、ようやくわかりました。
このケンカに勝つためには、ボクは言葉を持たなきゃいけない。島を殺し、兄貴を殺し、人間を裏切りつづける者たちに立ち向かう言葉を、裏切りから生まれた国や世界を越える言葉を、ボクは持たなきゃいけないのだ、それが本当に人間になるということなんだ。
ボクは心底人間になりたいと思いました。

その日からボクは死に物狂いで勉強しました。何も知らない悔しさに涙を流して勉強しました。東京中の灯りがすべて消えても、ボクの部屋の灯りだけは消えることはありませんでした。

チンの音2回
安聖民：ああ、なんだかしゃべりすぎたようです。もうここまでだ。心が痛いから、生きているから、わからないから、話せないこともある。生きるために話さないこともある。
人間はひとりひとり、それぞれの喜び、それぞれの傷、それぞれの哀しみ、だから、ひとりひとり言葉も違うんだろう。ボクにはボクの、キミにはキミの、嬉しくて痛くて哀しくて、それでも生きて乗り越えてゆく言葉、人間の言葉がある。キミにもわかるでしょ？

姜信子：（少し長い沈黙の後）ケンカドリ、あなたは、いまどこにいるのですか？

安聖民：ボクはここにいる。そう、ここにいる。今では、朝鮮も、チェジュドも、日本も、つかの間の宿り木のように思われます。流れ流れて生きていく、その人生こそがぼくの場所。宗教に

も思想にも政治にも、ボクはよりかかりたくはないのです、のまれたくはないのです。

ボクの人生こそが、ボクの領土、ボクの民族。
風の匂い、水の匂い、埃の匂い、ボクの領土。
汗の匂い、垢の匂い、血の匂い、涙の匂い、ボクの民族。

（セリフの途中でチャンゴの音（굿거리）が入り、安聖民が歌い始める）
우리 어멍 날 날 적에 어느 바당에 아아아　미역국 먹엉 으샤 으샤
※이어도 사나 아아아 아아아아 이어도 사나 으샤　으샤※
（歌いながら退場。余韻を残した後、チンの音で締める）

〝連続講座　花崎皋平〟を回顧する
――「三人称のわたし」はひらかれたか

A Personal Retrospection of the Serial Lecture on *Kohei HANAZAKI*'s Thought: From the Perspective of the Third Person "I"

川本隆史*
Takashi Kawamoto

Abstract

The People's Plan Study Group (PPSG http://www.peoples-plan.org/jp/), set up in 1998 as a network of social movement activists and action-committed intellectuals, aims to search for alternative social, economic, and cultural systems controlled by the people that will eventually take over global capitalism with all its destructive consequences. PPSG initiated an alternative school, OPEN (an abbreviation for "An Opening for People's Education Network") in 2008. And this school offered a serial lecture on the thought of a Japanese philosopher, Kohei HANAZAKI (born in 1931) from 2014 to 2015.

In this paper, I will try to make a retrospective review of this lecture in series from the perspective of the Third Person "I", which unites the first person's subjectivity and the third person's objectivity.

Ⅰ．PP研と花崎連続講座の幕開き

ピープルズ・プラン研究所[1]（略称PP研）は、「民衆（ピープル）の目線でいまの社会を批判し、世界の人々と手をつないで「もうひとつの世界」をめざし」、1998年6月に設立された。この研究所（といっても、その実態は文京区の雑居ビルの一角に集う多種多彩な人びとの総称以上のものではない）が、2008年秋から「オルタ・キャンパス　OPEN」という〝もうひとつの学びの場〟を開校している。校名は"An Opening for People's Education Network"（民衆教育ネットワークの開口点）の頭文字四つを並べたもの。この学校が六回シリーズの講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」を丸一年間続けた（2014年5月31日～2015年5月23日）。ほかならぬ皋平さん（以下、本文では、「皋平さん」もしくは「花崎」の呼び捨てで通す）の誘いを受けて、本研究所の立ち上げ前から関与してきた私は、講座世話人グループ（天野恵一、丹波博紀、鶴

* 国際基督教大学教養学部 International Christian University
E-mail: kawamoto@p.u-tokyo.ac.jp

[1] http://www.peoples-plan.org/jp/

田雅英、松井隆志、道場親信――アイウエオ順）の末席に連なり、企画・運営にあたっている。準備と後始末までを含めると、二年近く皋平さんの文字と声に接し続けたことになり、手もとの印刷物やコピー、メモ類（および電子メールのメッセージ群）は相当な量に達している。

そこで本紀要の特集号への寄稿を依頼された好機を捉えて、連続講座にまつわるパーソナルな「記憶」を振り返りながら、これを共有可能な「記録」へと鍛え上げていく骨折り仕事――花崎独自の用語でもって言い換えれば、一人称単数の「わたし」を「三人称のわたし」〔花崎1976〕へとひろげる「対自化の作業」〔花崎1987〕[2]――に取り組もうと思う。インパーソナルな（impersonal＝非人称にして没人格的な）記述をこととする学術論文の作法から逸脱する作文となる点を、あらかじめお断りしておかねばならない。

手始めに、本講座の趣旨説明を兼ねた第一回（「著作以前の時代」／2014年5月31日）の呼びかけ文を見ておくとする。企画のイニシアチブをとった天野が稿を起こし、世話人および関係者のメーリングリスト（ML）で回覧のうえ、ウェブ公開・チラシ印刷にいたったものである。

第1回：著作以前の時代

「オルタキャンパスOPEN 連続講座〈運動と思想〉 花崎皋平が花崎皋平を語る」がスタートします。花崎さんは、1975年に書いた、ある論文で、このように論じています。

――「総括」と一口にいうけれど、いざとなるととてもむずかしい。自分のことは語れるようで語れないものだ。第一、なにがどうなったのかをみきわめるのもおぼつかない。ゴタゴタのままでは表現にいたらないし、さりとてスッキリと整理してしまえば、キレイゴトの偽善におちいる。思わせぶりもいやだし、ざんげ、告白も売物にしたくない。しかし、個の次元での少なからぬ変化を抜かし運動の上での経緯をたどったのでは、経験の思想化の過程がぬけおちる。――

この「連続講座」を準備してきた私たちは、花崎さんに、今日にまで続くこの長い長い運動の経験の思想化のプロセスを、語りつくしていただこうと思いたち、集まりました。マルクス主義（哲学者）を自認し続けた花崎さんは、くりかえし、「マルクス主義を自分自身の（自前の手づくり）の思想という方向へつよく引き寄せて血肉化しなければならない」と主張し、そういう「手づくり」の作業をつみあげ続けてきました。

世代もバラバラで、花崎さんの思想そして運動への共感度には、当然にも、大いに個人差のある私たちに共通しているのは、まちがいなく、花崎さんのこういう思想（行動）の姿勢への強い共感です。

さて、花崎さんの最初の著作は、1969年に出版された『マルクスにおける科学と哲学』です。第一回目は、まずこの〈著作以前〉の青年・花崎さんの時間を、話していただきます。1931年東京に生まれた花崎少年が敗戦（占領）から朝鮮戦争へ向かう時間のなかで、反戦運動へのコミットを開始し、実存主義・キリスト教、そしてマルクス主義の思想を自分の生きる思想の問題として考えはじめた時代です。

混沌とした思想と行動のはじまりの時から、今日まで、花崎さんと共に歩んできた武藤一羊さんを第一回目のゲストの討論参加者に迎えて、花崎さんの報告のあと、講座参加者が、自由に質問して、話を引きだす、こういうスタイルで、連続講座を持っていきたいと考えています。

[2] 「一人称単数の私の陳述（＝経験の基礎に立つ証言、反省、総括）から出発して、一人称複数の私たちに通底する歴史意識や社会認識を獲得し、そこからさらに時間（世代）と空間（地域）の制約をこえた三人称の普遍性の世界を構築する叙述に進む。そして過去に獲得されたその叙述から出発して、一人称の陳述を検証する。その往復です。」〔花崎1987：30〕

積極的な参加を呼びかけます。

「経験の思想化」に努めて止まない花崎へ寄せる、世話人一同の敬意を過不足なく表しており、手前味噌のようだが、今読み直しても心に響くものがある。関係者から事前に届けられたファイル群――①花崎本人の「精神史的歩み〔1945年～1969年〕」、②ゲスト討論者・武藤一羊のコメント「〈著作以前〉についていくつかのポイント――交友のなかから」、③道場親信の質問項目「「ぼくたちの未来のために」をめぐって」、④花崎の著作・翻訳リスト――のコピー一式をA3判にそろえ、ホッチキス留めした小冊子が仕上がった。こうして初回の幕が切って落とされたのである。事前の割り振りに従い、私は司会を受け持った。MLでの事後報告によると、参加者51名に上る盛会であった。

私個人にとって初回の最大の成果は、コミュニズムにコミットする一歩手前の花崎の（ういういしい！）発言に触れたことである。14歳で敗戦を迎えた少年が「なにか頼りになるものを求めてさまよう」過程で、キリスト教会の門をたたき、大学に進んでからは詩のサークルに加入する[3]。道場から存在を教わった同人誌の創刊号（1952年11月5日発行）は、日本の現代詩を研究する田口麻奈の厚意により全頁コピーを入手し得た。創刊の辞（「ぼくたちの未来のために」）の冒頭、「共通の価値基準に立って、相互批判、自己批判が絶えず行われるところにのみ、生きた共同体としての集いの存在理由がある。それならばぼくたちの共通の価値基準は何かということを説明しなければならないだろう」と決意表明した21歳の皋平さんは、このマニフェストを次のように結んでいる〔花崎1952：3〕。

> 「ぼくたちの未来のために」、ぼくたちは何を望み、何を価値基準として行こうとするか、ぼくたちは単純に、人間を守るということだ、と言うつもりだ。未来は何処にあるのか？あらゆる偶像の支配、権力、機構、兵器、観念、それら一切の支配に抗して人間を擁護することなしに、未来は存在し得ないのだ。幸いに詩作とは人間を守る仕事である。詩を作ることの出来る間、ぼくたちは人間であることを忘れずにすむ。それ故にこそ、現在、この疎外された人間関係のなかで詩作するとは何と困難なことであろう。言語すらが共通であり得ない関係のなかで、人間から人間に伝わる詩を書くことが出来なければ、ぼくたちの意図は実現されないだろう。あらゆるものに抗してひたすら人間をうたうこと、その弱さにせよ、そのかけがえのなさにせよ、それが持つ意識の広大な拡がりにせよ、又行動の崇高さにせよ、とにもかくにもぼくたちの眼を人間に据えよう。あらゆる偽装と仮面を剝して、偽りのない眼で人間の在り様をうたい、人間に愛情を抱き、これを守るために一切を賭して努力することによってのみ、ぼくたちはぼくたちの未来を獲得することが出来るであろう。その日のために、ともよ、美しいうたをつくり出さねばならないのだ。人間のための、人間のうたを！

《自由》の証言[4]および《共通の価値基準》の探究とを二つながら追い求める若き詩人の身構え

---

[3] 講座第二回のレジュメの補足として花崎から送られてきたファイルに、詩人を志す心境を綴った1951年5月18日の日記（大学二年生）が抜粋されている――「私はとにかく詩人になりたい。詩人とは存在へ思辨的観照的に、即ち哲学者的に関わるのではなくて、存在の核心へ、自らの体をもって情熱的に関わる者であると理解する。詩人はまず生きて歌う。哲学者は、考えはするが生きようとはしない。むしろ自分が平静に生きるのにふさわしいように思想を引き込む」（資料通しページ7枚目）。

[4] 「この〔敗戦後の〕時期の成果が試されるのは、自由がぼくたちの実感となって居り、それが人間性の解放であったことをぼくたちが身をもって証しすることによって以外にはないであろう」〔花崎1952:1〕。

は、その後《アイデンティティ》と《共生》の哲学の構想へとトーンを変えながらも、根底のところでは見事な一貫性を保持している。

Ⅱ．第2回講座と「記憶のケア」

二回目の講座（2014年9月7日）のやや長めの告知を下に掲げておく。これまた力強いアピール文である。

第2回：『力と理性』の時代

連続講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」の第２回をご案内します。

北大本館封鎖解除に対決し、本館内で実力抵抗を試み、「現住建造物放火」・「非現住建造物放火」・「公務執行妨害」・「兇器準備集合」・「建造物侵入」の５つの罪名で起訴された「北大全共闘」の四人の学生の裁判（1970年２月～71年９月まで）の特別弁護人としての活動をふりかえって書かれた「幻の大学の立ち拠――北大本館封鎖解除事件裁判の特別弁護人の座をおりて――」（『日本読書新聞』71年12月６日号。『力と理性―実践的潜勢力の地平から』〈現代評論社・1972年〉所収）、で花崎さんは自分の「最終弁論」を引いています。

「…。この事件で、私をしてこの席に座ることに、むなしさと矛盾をおぼえさせてきたのは私もまた文部教官・北海道大学助教授・文学部というレッテルを身につけた教授会メンバーとして、被告諸君を今日この席につけたことに責任があるということである。その私がこの被告諸君を弁護することのむなしさと矛盾がある。この被告諸君は、われわれによって弁護されるべきではなくわれわれも本来、弁護などすべきではない。ここでの弁護人としての位置づけは、真の関係をおおいかくす。私は教師らしくふるまい、学生諸君は学生らしくふるまうという関係、私が特別弁護人であるらしくふるまい、裁判所へ大学で生じた事実経過を立証しようと努める…それらはすべて演じられる一種の演技であった。大学の中で、われわれはギリギリのところで、対立しあわざるをえなくなる。学生諸君は、われわれにむかって、あなたは文部教官であることによって無罪ではないとせまる。われわれは、君達も受験競争によって他の人を蹴落とし、きまった大きさのパイのわけ前にあずかっていることにおいて無実ではない、と言い返す。そうしたところではじめてなにか共同の場がひらけてくる。そこには、教師らしさと学生らしさでよそおわれない関係がひらけてくる。いまのわれわれの関係は、被告と特別弁護人との関係である。この関係は今終わろうとしている。この席に座わるのもあと一回だけである。この席をおりることは、私にとってはひとつの解放である。被告諸君にとっては、あるいはその逆のことがおこるかもしれない。私が、そこで、やれやれ苦しかった裁判は終わった。あれだけやれば、まあよかろうと自分に言いわけして、研究室へ戻り、69年に読みさしておいた本をひらいて読み出すとしたら、私と被告諸君のつながりは又切れてつながらぬものになってしまうであろう。そうならないために、この際この席をおりるとともに、もうひとつもっている席の方もおりることにしようと思う。この一年余、この席に座っただけで、なんにもできなかったこと、まったく無力であったことを被告諸君にも、その他の支援された方々にも申し訳なく思うと告げて終りとする」。

この引用の後、花崎さんは、こう書いています。

「先生ごっこはやめるべきときだと思った」。

この、あの〈学生反乱の時代〉の精神を象徴する言葉（態度）を、ある種の強い共感をもって受けとめた人間は、当時少なくはなかったはずです。それから四十年以上が流れた今、その〈共感〉の思想的な意味をめぐって、花崎さん本人をふくめて論議する、そんなことが可能になればいいなと考え、私たちは今回の講座を準備しています。対象とするテキストは、この『力と理性』と、そこの「あとがき」で、「マルクスにそくして」、自分の哲学の課題である実践的潜勢力を引きだす試みをしたと述べている『マルクスにおける科学と哲学』（1969年盛田書店）の二冊です。運動的には全共闘と札幌べ平連スタートの時代です。

前回同様、質問と討論の時間も長くとるつもりです。積極的に参加してください。

第2回も私が司会を仰せつかった（参加は40名ほど）。なおこの回から、花崎のレジュメ（「精神史の歩み　その2〔1970年～ 1973年〕」）と「事前準備コメント＆質問集」に当人および関係者の書き物のコピーを添えたため、会場配布物のヴォリュームが大幅に増えている（初回は表紙を除いてA3判両面印刷4枚だったのが、A3判18枚に！）。今回の収穫は、これまた道場が発掘し、PDF化してくれた『11・8北大本部裁判斗争記録（Ⅳ）』所収の特別弁護人・花崎の「最終意見陳述」（1971年7月14日付け）〔花崎1971a〕である。上記の案内文に引かれている「総括的意見」の結びは、たしかに「あの〈学生反乱の時代〉の精神を象徴する言葉（態度）」として少なからぬ人びとに「ある種の強い共感をもって受けとめ」られたに相違ない。19歳だった私は、定期購読していた『日本読書新聞』第一面トップの檄文「幻の大学の立ち拠」〔花崎1971b〕に賛嘆の気持ちを抑えられなかった記憶がある。ただし、当時の私が花崎の痛苦の念を心底から理解できていたとは、とうてい言えない。「高校暴動世代」の一員として、「造反教官」のひとりが示した出処進退の潔さに感心しただけの可能性も否定できない。

そうした歪みのある記憶を「ケア（＝世話･手入れ）」[5]し、「三人称のわたし」へとひらいていくべく、40数年ぶりに初出の紙面を確認してみた（もちろん縮刷版でである）。タイトルと闘争現場写真（『北緯43度･荒野に火柱が』､北海道解放大学出版会､1970年より）の下に組まれたリード文（無署名）は、こう触れ込んでいる――「戦後民主主義支配構造の、その基底に孕まれた諸矛盾を一挙に噴出させた全共闘運動。しかし己れ自身の解体をも内在したそのダイナミクスが奪われてから二年を経過した。〝運動〟によって突きつけられ､抉り出された諸矛盾は､だが〝運動〟の消滅によって消え去るものではない。この間､「北大本館封鎖解除」裁判闘争に関与してきた花崎皋平氏に､「闘争の場」と「研究室の場」との落差を見つめる中から〝知識人存在〟の現在的様相を探ってもらった」。

記事本文半ばの以下のようなくだりに、現在の私が（おそらく初読の際とは異なる）深い感慨を覚えたことを打ち明けておこう。

私がいまここで焦点としたいことは［……］全共闘運動がうみだし､それの敗北後も､けっしてほろびることはないと思われる思想の問題である。それはほんとうに単純なことだ。あたりまえのことだった。ひとは自由であり、自由に生きることができるし、そう生きなければならない。ひとは自分のものと他人のものということにこだわる必要がなければ平

[5] 「全国被爆二世教職員の会」の地道な活動を知らされた私は、原爆の「記憶」を固定化してしまうのでなく、その「記憶」のゆがみや欠落をていねいに見直す作業を通じて、固定観念へと凝固した「記憶」をほぐしつつ､共通の認識に向かって歩むことを「記憶のケア（世話･手入れ）」と名づけたことがある〔川本2004〕。

等になれる。ひととひとは協力してなにごとかをなすことに情熱を感じられれば、一身の保障のために他人を敵としてあくせくするよりはずっとたのしい……そういうたぐいのことである。根底的な問いかけといわれたものがはらみ、予感していたことはそうした真実をたしかめようとする知的活動であった。そこにこそ、幻の大学の立ち拠があった。

「単純なこと」、「あたりまえのこと」として措定された《自由》、《平等》、《友愛》という理念、それらの考究を「立ち拠」とする「幻の大学」――花崎（たち）から手渡されたこうした展望を、私（たち）はけっして断念してはなるまい。

Ⅲ.『生きる場の哲学』再読

三回目の講座は、2014年11月15日に挙行された。

第3回：1970年代『生きる場の哲学』まで

連続講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」の第3回をご案内します。

第3回は、1970年代の時間、著作としては、おそらく花崎さんのものとしてはもっともポピュラーに読まれた『生きる場の哲学――共感からの出発』（1981年）までを話していただきます。

85年に刊行された『社会的左翼の可能性』の中で、花崎さんは、この時代をこのように回想しています。

1980年代になって、私は深刻な思想的転回を経験しました。そのひとつは、北海道という地域に根ざすことを真剣に考えるところからぶつかった問題です。北海道は、先住アイヌ民族の自由の土地であったこと、そこへ本州から渡来した和人（シャモとアイヌでは呼ばれています）が力づくで入り込み、全土を占拠し、アイヌ民族からその言語と文化をうばって同化を強制してきたことを、アイヌ自身からつきつけられ、どう考えるのかを問われたのです。私が日本国家への根底からの批判を志すもうひとつの、より強い動機はここにあります。日本人であることを批判的にとらえかえし、日本国家をその近代の成立までさかのぼって否定する思想的立場に立たずには、この地で、アイヌ民族と共に生きる希望を望み見ることはできない、と考えるからです。

伊達火力発電所建設反対などの北海道での地域住民運動への深いコミットは、実に深刻な「思想的転回」を花崎さんに強いたようです。その転回は先住民（アイヌ）の発見であり、唯物論者である花崎さんがスピリチュアルな世界とエコロジーの問題へ接近していく回路の発見だったようです。この「転回」をもたらした運動と思想のプロセスを語っていただきます。

毎回、質問は自由です。参加者相互の討論も歓迎です。積極的なご参加をお待ちしております！

なお、今回は主に以下の４冊を中心に議論します。ぜひ読んでいらしてください！

――花崎皋平『風はおのが好むところに吹く』田畑書店、1976

――渋谷定輔・北沢恒彦・花崎皋平『朋あり遠方より来る：現場からの哲学』風媒社、1976

――花崎皋平『いのちをわかちあう』田畑書店、1980

――花崎皋平『生きる場の哲学―共感からの出発』岩波新書、1981

この回は、司会と質問者を道場が兼務してくれた。花崎のレジュメ（「精神史の歩み　その3〔1973年～1980年〕」、道場の質問への回答および米沢薫の意見への応答）、「伊達火力に関する年表」、「伊達裁判に勝ってもらう会ビラ」ほかの各種ドキュメントを綴じ合わせたら、A3判19枚に膨らんだ。裏方に回って気は楽だったとはいえ、密度の濃い議論を追いかけるだけで疲れ果てた半日だった。毎回、日記と自作を丹念に再読して詳しいレジュメを用意してくる皋平さんの労苦は察して余りある。だが、こうした協働・努力の積み重ねによってこそ「三人称のわたし」への活路が切り拓かれるのではないだろうか。

第3回のハイライトは『生きる場の哲学』――たぶん最初に通読した花崎の単著だったろうし、刊行前年の1980年4月から大学の教壇に立つようになった私にとって、忘れられない一冊となっている。初体験となる一般教育科目「倫理学」の教材に、私は吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』（1937年初版）を採用した。鶴見俊輔がこの児童書を絶賛していたのを思い出したからである。講義の枠組みも、鶴見のデビュー作『哲学の反省』（1946年／『鶴見俊輔集』第三巻、筑摩書房、一九九二年所収）が打ち出した新機軸――「哲学は次の三条の道に従って把握される場合、現代の社会においても生きた意味をもつことが出来る。第一に思索の方法の綜合的批判として把握される場合、第二に個人生活及び社会生活の指導原理探求として把握される場合、第三に人々の世界への同情として把握される場合、即ちこれである」――に沿って、「批判」、「原理」、「共感」（「同情」の言い換え）の三本柱でもって編成しようとした。学生有志の要望で課外に始めた読書会のテキストとして、新刊の『生きる場の哲学』を候補に推したのは、著者の名前に馴染みがあったのと何よりも「共感」が副題に掲げられていたからにほかならない。

花崎のレジュメによれば、「1970年代の実践と思索のとりあえずのまとめである」この本は、1979年10月19日から80年12月6日までの一年以上を費やして書き下ろされている。ここでは久々の読み返しを通じて、新たな示唆を受けた所論を二つばかり抜き書きするにとどめよう。

> 「「やさしさ」とは、疎外された社会的個人のありようを、共感という方法でとらえるときに生ずる感情である。このような感情を触媒にしてはじめて、人民相互の社会連帯が結晶となるのではないだろうか。この「やさしさ」と「決断をふくむ理性」――形式的合理性に対立する実質的合理性――とのむすびつきに、私は社会変革をめざす実践の領域を見ようとした。」〔花崎1981：12〕
>
> 「主体形成の基礎になるもっとも大事なものは、共生の感覚とでもいうべきものである。共生の感覚とは、人と人、人と風景との有機的一体性の感覚である。［……］今日、その復活を希求するとき、価値理念の側から刺戟をおくって感覚をめざめさせ、敏感にする働きかけが必要であるように思う。その価値理念として、わたしは、共感と友愛の理念をあげた。このような理念にみちびかれ、その刺戟によってめざめる共生の感覚を土台にしてはじめて、共同社会建設にまつわるさまざまな理論課題と取り組む知的営為も、実践者から浮き上がらずに、関係の相互性のなかで批判され、確かめ合われ、一人一人の主体の力能として定着されるであろう。そのような意味での「根拠地」関係においては、運動や闘争の遂行と同時に、あたらしい実践者群を生みだす教育の契機と、自前の文化や遊びを創造し表現する安息と祝祭の契機とがあわせ持たれなければならない。」〔花崎1981：177-178〕

「やさしさ」の前提に〝疎外〟が控えていること、〝共生の感覚〟を土台とする「根拠地」での運動・闘争を持続させるためには〝教育〟や〝安息と祝祭〟が欠かせないこと――以上の二点をしっかり銘記しておきたい。

Ⅳ．評伝『静かな大地』の背景

講座第四回は、年明けの2015年1月24日に催された。今回の予告は簡明なアナウンスに収まっている。

第4回：「地域をひらく」シンポジウム／近代化とアイヌ民族

伊達火力発電所や泊原発の反対運動など、さまざまな市民運動のただ中で、生きた哲学と手づくりの思想を追求してこられた花崎皋平さん。この半世紀近くの日本社会の変化を、花崎さんご自身の生から照射してお話しいただく連続講座です。第４回は、70年代の運動をくぐりぬけてまとめられた『静かな大地　松浦武四郎とアイヌ民族』（1988年）を中心において、花崎さんのお話をうかがいたいと考えています。

ぜひ多くの方にご参加いただければと思います。

会場で配ったのは、花崎のレジュメ（「精神史の歩み　4〔1981年～ 1988年〕」および「事前質問への返事」）、二人の担当者（道場と鶴田）による質問メモ、花崎の文章〔花崎1982〕、『静かな大地』書評ほかを合わせてA3判14枚の資料である。

司会を買って出た手前もあって、メイン・テキストである『静かな大地――松浦武四郎とアイヌ民族』〔花崎1988〕を熟読玩味した。幕末の蝦夷地を踏査した松浦武四郎（1818年～ 1888年）が、「アイヌ民族のその内なる怒りの火に〔……〕ふれたことによって人生が変った」という「彼自身の意図せざる自己変革のドラマ」を活写して余すところがない。

たまたま同書と並行して、森鷗外の史伝の傑作『澀江抽斎』を旺文社文庫版（1968年）で初めて読み切ったばかりだったので、この評伝の世界にも「共感」をもって参入し得た気がする。ちなみに花崎その人も「森鷗外『澀江抽斎』論」（初出1979年／〔花崎1984〕に収録）が「私自身に即しては重要である。鷗外が渋江抽斎の日常と研鑽を淡々と叙述する態度から学ぶところは多かった。田中正造論と平行して松浦武四郎の、幕末の蝦夷地を地理取調にくまなく歩いた記録から、当時のアイヌ民族の困窮、その生きる姿勢などをとらえだす仕事をしたのも、この鷗外の史伝を読んだことと関係している」と述懐していた（「精神史の歩み　4」）。また『静かな大地』に対して、「私の仕事のなかで、田中正造論とともに重要なものである」との自註が付されている点も注目に値しよう（「精神史の歩み　4」）。

Ⅴ．「共生」と「三人称のわたし」をめぐる問答

第5回は2015年3月28日に設定され、天野が司会、私はメイン質問者に指名された。まずはPRの文章を引用する。

第5回：「ピープルズ・プラン21世紀」（1989年）とその後
―『アイデンティティと共生の哲学』、『個人／個人を超えるもの』の時代

「1989年夏に、世界の民衆運動の活動家が日本列島に集まって多様な民衆行事を行い、最後に水俣で総括会議を開いて採択した文章」である「水俣宣言」について、花崎さんはこう、解説している。

まず、森林にすんでいる先住民の前に突然ブルドーザーが入ってきて、森の木が伐り倒されるような事態。「自分たちの生存に関わる」決定への先住民が関与できない事態が世界のいたるところに生まれている。これに抗するために、「多国籍企業のグローバルな開発行為に応じたトランスナショナルな権利が必要ではないかというメッセージが含まれている」。「この他者の決定による自主的な決定の排除に対して、決定権は自分たちにあると、侵害された権利の回復を要求する主張、回復的人権としての自己決定権という」、開発伐採に対決する「回復的人権」こそが「民主主義」であるというメッセージもそこに含まれている。

この「PP21」に北海道の世界先住民族会議の事務局メンバーとして、積極的にコミットした花崎さんが、その運動体験をバネにつむいだ思想（論理）を中心に討論します。
ご本人の報告だけなく、今回も討論の時間をたっぷりとります。
ぜひ積極的に参加してください。
なお、今回は主に以下の２冊を中心に議論します。ぜひ読んでいらしてください！
――『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房、1993.05
――『個人／個人を超えるもの』岩波書店（21世紀問題群ブックス4）、1996.01

配布資料はA3判22枚の大冊になった。主なものは、花崎のレジュメ（「精神史の歩み　5〔1989年～1996年〕」）、質問レジュメ（運営委員会および川本から）、花崎のリプライ、世界先住民族会議記録集1989年、各種関連文献（拙論〔川本1997〕、書評〔川本1993〕、対談〔花崎×川本1998〕などを含む）である。この時期（1989年から96年）に上梓された花崎の作品群に即して質問項目をまとめるにあたり、19歳の冬に発する読書と交流の記録を年譜風に整理してみたところ、A4判8枚びっしりの分量になった[6]。この文書のタイトルには「少しのことにも、先達はあらまほしき事なり」という『徒然草』（第52段）の名言を拝借している。私にとって皋平さんこそ、言葉の真の意味での「先達」だったと痛感したからである。

ところで肝心の私の質問（三点）については、これを「三人称のわたし」へとひらき、つなげてみるため、とりあえずもとのファイルのまま下に貼り付けておく。

(1)花崎さんの思索と実践における「ケアと正義」

「共感」から（再）出発された花崎さんの哲学（**『生きる場の哲学』**1981年）は、どのような「条件と事情」（ニーチェ**『道徳の系譜』**）のもとで90年代の「共生」論へとシフトしていったのでしょうか。

『民衆主体への転生の思想』（1989年）において提起された「生き方を重ね合わせる運動の原則」――①「共感と友愛の原則」および②「正義と道理の原則」――と**『アイデンティティと共生の哲学』**（1993年）における「反差別」の二原則――①関係の非対称性の暴露と対称性の関係の設定、②「共生の義務と権利」――とは、どのような関係にあるのでしょうか。後者は前者の「系」もしくは具体的問題への「応用」例と考えてよろしいのでしょうか。

総じて、《ケア》（目の前の苦しみへの応答）と《正義》（全体を視野に収めた公平性の追求）との二

---

[6] 花崎をダイレクトに引き合いに出した拙稿として、〔川本1985〕、〔川本1991〕、〔川本1997〕、〔川本2008〕ほかがある。

つをどのように編み合わせようとなさっているか、をこの機会にぜひ花崎さんにうかがいたいです。

(2)花崎さんの方法論の「転換」について

『**風はおのが好むところに吹く**』(1976年)で打ち出された「三人称のわたし」(わたしを三人称化して異化すると同時に、三人称的他者とわたしを共感でつなぐ手法)と、『週刊読書人』のリレー連載(1993年6月14日号)において示唆された「理解の方法的抑制」――「理解できないものは理解しようとしないこと」および「理解できなくとも屈託せず、くつろいでいられる相互関係をつくること」を通じて、「自分の意識のうちに丸ごとの他者の占める場所を空けるゆとりをもたらすこと」――との間には、微妙なニュアンスの違いや力点の変化が見てとれます。こうした花崎さんの方法論の「転換」を促した背景やねらいについて説明してください。また「三人称のわたし」や「理解の方法的抑制」と花崎さんが早くから自家薬篭中のものとされたはずの「弁証法」との異同についても、教えてもらえませんか。

『**アイデンティティと共生の哲学**』(1993年)終章で明示された「ピープルになる」という課題(私と他者とがいつでも加害と受苦の関係になる可能性と必然性、その歴史的被規定性を承知したうえで、しかもその場から「共に生きる」関係をめざすこと)は、花崎さんの同時代人にして先行者二人の問題意識とどんな関係があるのでしょうか。すなわち①吉本隆明が訴えた「大衆の原像をたえずみずからのなかに繰り込むという知識人の思想的な課題」(『**自立の思想的拠点**』1966年)および②鶴見俊輔の『**哲学の反省**』(1946年)が展望した哲学再生のための「三条の道」(批判、原理、同情――とくに三番目の「人々の世界への同情」)や『**日常的思想の可能性**』(1967年)の探究といったスタンスから、花崎さんは何を学びとられ、両者との間にどのような距離をとろうとなさっているのでしょうか。これは、花崎さんの著作ワールドに馴染む以前、吉本や鶴見を読みふけっていた一読者からの素朴な疑問でもあります。

(3)お父上のこと

お母上の介護体験が〈「世話」と「共感」の文化〉を(再)評価するきっかけを与えたことについては、繰り返し語ってらっしゃいますし(『**個人／個人を超えるもの**』1996年、東別院ブックレットⅢ『**世話と共感の文化**』1998年ほか)、ご母堂から論語や孝経の素読を習われたこと(「森鷗外『澀江抽斎』論」1979年)も花崎さんの思想形成において重要な契機となっているものと思われます。お母上・花崎貞(采琰)さん(1903～1998)の自伝『**墜露のような人生**』(私家版1992年)も興味深く拝読しました。

では花崎さんにとって、お父上・利義さんとの関係はどのようなかたちで思索の誘因・モチーフとなっているのでしょうか。公開の席上では言明しにくいところも多々あろうかと予想されますが、愛読者のひとりとして一度は尋ねておきたいという気がつのります。差し支えの無い範囲でお答えいただければ有り難いです。

花崎のリプライをかいつまんで再現しておこう――(1)に対しては、「生き方を重ね合わせる運動の原則」は三里塚と水俣の闘いを通じて考えたものであり、新左翼諸党派に対する批判が含意されていたこと、「反差別」の二原則は、アイヌの人びととの共同作業から学んだことが大きいとの舞台裏を明かしてもらえた。また「ケアと正義についての問いには、クリアカットの答えを持ちません。そのつど、生ずる具体的問題に、緊急度、必要度に応じて答えようとすることしかできません」と率直に認めている。「経験の思想化」を率先垂範する皋平さんを手本と仰いできたつもりの私だったのに、(1)の中身は「経験」から遊離した机上のクエスチョンの域を出ていない。そこを衝かれたような思いがした。

(2)に関しては、次のような返答を頂戴した――まず「理解の方法的抑制」という着想は「共

に暮らした相手（アイヌ女性）との関係で痛切に自覚したことです。無理に理解しようとすることが、強制、理解しない相手を非難し、機嫌を悪くする態度になる経験からです。理解とは、自分の解釈システムに取り込むことに通じると気がつきました」とあり、さらに「それは自己相対化としての自己否定であり、あいだを空けることによる他者の承認となり、それを通じての自己承認へといたる道ではないかと考えました。これは弁証法といえるのではないでしょうか」と。そして「吉本隆明、鶴見俊輔からの影響はありません」と。〝ひいきの引き倒し〟のような愚問を投げた私を、やんわりたしなめてくれる応対だった。

(3) への答えはこう戻ってきた――父は「大正時代の文化を身につけてきた人で、農村出で保守的ではありましたが、子どもの進む道の選択には寛容でした。妻の学問好きも許していました。画家になりたかった人で、晩年はアマチュア画家として画業に打ち込んでいました。画家では安井曾太郎、曾宮一念を敬愛していました。学者、思想家では谷川徹三、安倍能成などと交流がありました」、と。

〝すれちがい〟を含んだ以上の質疑応答を介して、「三人称のわたし」へと幾分なりとも接近しえたと自己評価したいところではある。

VI. 〈ピープル〉と「百戦百敗」の思想

2015年5月23日、いよいよ最後の講座を迎えた。司会は道場が担当する。

最終回：〈ピープルの思想〉をめぐって

花崎さんは、自分の使う「ピープル」という概念について石牟礼道子さんの言葉にそくして、以下のように説明しています。

「石牟礼さんは最近、深い宗教的思いを作品にこめているのですが、石牟礼さんの場合も、浄土真宗に近いけれど、より基層の、より底辺の虫や魚といっしょに生きてきた民衆の心の中にある宗教的な威厳、敬虔な感情というものに自分も帰依するというあり方に立っていると思います。天地自然に対する畏敬から出発しても、それもナショナリズムというかたちで、国家という力に結びつけて、他を支配する欲望を強化する方向と、石牟礼さんのようにごくごく小さなものの中に生きる思いや優しさ、威厳を見つけていく方向とがあるわけです。

私は、石牟礼さんのような民衆観、人間観に基づく精神のあり方、一人一人が真に民衆性に目ざめるあり方としてとらえ、『ピープルネスに生きる』という言葉で、世界のどこにでも通じる普遍的なあり方へつなぎたく思っています。日本の伝統的な宗教感情にしても、権力と結びつく方向と『ピープルネス』に向かう方向とにはっきり分かれると思います」(『ピープルの思想を紡ぐ』)。

第6回の「花崎講座」は、最終回ということもあり、花崎さんが、「価値理念」を担う「変革主体」として発見したこの、「ピープル」あるいは「ピープルネス」とは、なんであるのか、という問題を中心に、話していただき、討論していきたいと思います。

なお、今回の参考書籍は次のとおりです。ぜひ読んでいらしてください！

――『ピープルの思想を紡ぐ』(七つ森書館　2006年)
――『田中正造と民衆思想の継承』(七つ森書館　2010年)
――『天と地と人と』(七つ森書館　2011年)

配布資料は、花崎のレジュメ（「精神史の歩み　6〔1995年～1999年〕」）、丹波の「事前準備の質問」、〔花崎2002〕をめぐる論争文献ほか、それらがA3判11枚に詰め込まれている。本番では天野および大橋成子との対論も組み入れ、まさしく有終の美を飾るイベントとなった。紹介・吟味しておきたい論点は多岐にわたるが、立ち入って詳論する紙数が残っていない。最終日の主題である《ピープル（ネス）》や田中正造と石牟礼道子の思想については、本誌掲載の花崎の講演記録から直接・間接の教示が得られるだろう。よって小論は、最終回の花崎のレジュメの一節を引いて結ぶとする。1996年の9月初旬「新設するPP21研究所〔＝構想段階にあったPP研のこと〕で、私は何をやりたいかについて考えてみた」メモである。

> 次の世代の哲学・倫理学の研究者といっしょに、アジア太平洋地域の実践的課題を踏まえたうえでの思想と理論の創造に取り組みたい。そこには先住民族・少数民族が提起する課題、ジェンダー、環境とエコロジー、生命論、サブシステンスとスピリチュアリティなどが絡んでくる。それらを思想の切り口でとらえる作業をしたい。
>
> 振り返ってみて、私個人は，この方向にすこし進んだけれども、次の世代（大学闘争・全共闘運動の世代を念頭に置いていた）との共同、協力関係つくりは成功しなかった。PP研究所という場に出てくる人は少なく、多くはアカデミーでの研究活動に重点をおく姿勢であった。

この部分を読み上げた花崎は、「残念だった」との真情を吐露した。上記の反省から20年近く経た時点でも、花崎らの活動を継承しつつ「アジア太平洋地域の実践的課題を踏まえたうえでの思想と理論の創造に取り組」もうとする後続世代の哲学・倫理学研究者が、着実に育っているとは判定しがたい。「私が続きましょう」と名乗りを挙げたいのはやまやまだが、私ひとりではあまりに非力である。だがここで、皋平さんから教わった田中正造の日記（1909年8月24日）の一節――「困苦、貧苦、節義、言行一致、主義貫徹に対する困苦艱難が…経験の度数の数十百回ニ達して、百戦百敗、その研磨に得たる自得力堅忍となりて、夫れより発動せる以上の良知良能の付合せるにあらざれバ…時勢を造る人とは云へず」――を思い起こそう。次世代との「共同、協力関係つくりは成功しなかった」のかも知れないけれども、そうした失敗＝敗北の「経験」に学ぶことはできる。正造の「「百戦百敗」の思想こそ、今日、私たちが堅持すべき思想ではないか」〔花崎2006：ii〕との提言の正しさを、私は信じて疑わない。

参考文献

川本隆史1985年「科学と倫理のあいだ――「科学者の社会的責任」をめぐって」、『理想』628号、理想社。

――――1991年「抵抗の倫理学へむかって」、『現代哲学の冒険13制度と自由』、岩波書店、所収。

――――1993年「書評：花崎皋平著『アイデンティティと共生の哲学』」、『週刊読書人』7月26日号。

――――1997年「「共生」の事実と規範――《いのちのケア》に向かって」、栗原彬編『講座 差別の社会学4　共生の方へ』、弘文堂、所収。

――――2004年「記憶のケアから記憶の共有へ――エノラ・ゲイ展示論争の教訓」、『思想』967号、岩波書店。

――――2008年『共生から』、双書《哲学塾》、岩波書店。

花崎皋平1952年「ぼくたちの未来のために」、『ぼくたちの未来のために』創刊号、編輯・発行＝明日の会。
————1969年『マルクスにおける科学と哲学』、盛田書店（増補改訂版、社会思想社、1972年）。
————1970年「《書評》新しい地平とは何か——廣松渉『マルクス主義の地平』」、『思想』552号、岩波書店。
————1971年a「最終意見陳述」、『11・8北大本部裁判斗争記録（Ⅳ）』、編集・発行＝公判斗争記録刊行委員会。
————1971年b「幻の大学の立ち拠——北大本館封鎖解除事件裁判の特別弁護人の座をおりて」、『日本読書新聞』12月6日号＝1624号（〔花崎1972〕に再録）。
————1972年『力と理性——実践的潜勢力の地平から』、現代評論社。
————1976年『風はおのが好むところに吹く』、田畑書店。
————1980年『いのちをわかちあう』、田畑書店。
————1981年『生きる場の哲学——共感からの出発』、岩波新書。
————1982年「「地域をひらく」たたかいとその交流運動——基調試案」（上・下）、『新地平：月刊労働者総合誌』3-4月合併号＆5月号、新地平社。
————1984年『生きる場の風景——その継承と創造』、朝日新聞社。
————1987年「批評に答えて」、『書斎の窓』367号、有斐閣。
————1988年『静かな大地——松浦武四郎とアイヌ民族』、岩波書店（岩波現代文庫、2008年）。
————1993年『アイデンティティと共生の哲学』、筑摩書房（平凡社ライブラリー、2001年）。
————2002年『「共生」への触発——脱植民地・多文化・倫理をめぐって』、みすず書房。
————2006年『ピープルの思想を紡ぐ』、七つ森書館。
花崎皋平×川本隆史1998年「対談：自己決定権とは何か」、『現代思想』第28巻第8号、青土社。

〈回心〉の倫理ではなく、〈求め〉の政治を

For the Politics of “Demand”, Not for the Ethics of “Conversion”

金井 淑子*
Yoshiko Kanai

Abstract

The ethos and the emotion found in the heart of Hanazaki’s (1932～) thought and philosophy seem not only to be supported by Buddhistic perspective of the world and life, handed down within the spiritual tradition of Japanese culture, but also have something to do with animistic view of nature.

This article was aroused by my “dissent and suspicion” about Hanazaki’s basic stance of his thinking which came out clearly in his *Identity and the philosophy of Coexistence* (Hanazaki, 1993). It was the stance he took in his intellectual strife with the discrimination and coexistence since 1970s.

Hanazaki has been tackling from a critical point of view with the issues of anything modern, anything Japonistic and also the sectionalism and dogmatism of Marxism, He thus tried to open up a new sphere of thought, ideal and value. Whether the ethics of coexistence of people and the people-ness could be the end of his lifelong critical thinking about the concept of the modern? I am going to discuss as follows.

The first issue is about his idea of the world of coexistence within which the “people” are idealized, universalized and even naturalized, However, whether the idea of “people” which means the collective subject of the oppressed could imply the reality of the people who suffer from the discrimination in the actual world? Although he advocates “to become people” and “the ethics of conversion” would not he weaken the very foundation for anti-discrimination rather than he could change this complex reality, entangled with competitive various values?

Secondly, I am trying to consider Hanazaki’s ethics from a different perspective rather than the modern concept of human rights. What underlies his ethics seems to be the idea of equality from the Buddhistic view of the world which forms the origin of Japanese spirit. It is the world where everyone stands equal before the divine “Bosatsu”: that is the idea of “the thought of conviction (Hongaku-shiso).”

In the third place comes the discussion on “the world of Person” and “I as the third Person.” I wonder if the idea of the first Person of “I as the third Person,” which Hanazaki proposes as the foundation of the identity of the coexistence and the sympathy among human beings, could allow the existence of “others”. Consequently this idea might simply mean the world of self-identity of the subject. Therefore my question here turn out to be: whether his world could open its way to the second person relationship between I and others, or may it lead us to the relationship between I and God as in Christianity in Hanazaki’s sense?

* 前立正大学文学部哲学科教授、Former Professor, the Department of Philosophy, Rissho University

Ⅰ．はじめに

いつのまにか　正造は境界を越えていった
苦しみと嘆きの渦巻く現場へと出かけ
その人びとの群れに入った
見る側から見られる側へ越えていった
下層人民の中に入らなければ　真実は学べないと

向こう側は　人も　けものも
鳥も　木も　草も　風も　雨も　雪も
ひとしなみ対等な　いのちの世界

向こう側に渡った正造に
公共相愛協力　自治の思想
裸体直立の思想
愚の思想
天地に合一する思想が
開けた

（「向こう側へ渡る――田中正造」 花崎皋平2012所収）

戦後日本の思想界において特異な存在として哲学思想界にとどまらず社会運動各方面に少なからぬ影響を与えた花崎皋平の、その思想・哲学の核心にあるエートス・感情を支えているものは、日本文化の精神史的伝統に受け継がれてきている仏教的世界観さらにはアニミズム的自然観が関わっているのではないか。花崎といえば、資本主義近代の経済社会体制批判からさらに反差別と共生の理念実現に向けて社会運動家としてまた思想研究者として課題に向き合い、さらに20世紀後半期の社会主義社会の歴史的解体過程に伴走しつつマルクス主義の理論的革新にも深くかかわってきた人物である。近代的なるもの、日本的なるもの、さらにマルクス主義の党派性や教条主義化にも批判的に対峙しつつ、それらを超えうる思想・理念・価値の位相を拓くことに向けて、非妥協的生き方を貫き問い続けてきたはずである。

その花崎の近代批判、近代的理性と主体概念への批判の行き着いたところが、この詩に描かれる「境地」であるというのか。田中正造の生き方に深く心酔する「向こう側へ渡る」回心であり、「ピープル」「ピープルネス」の共生の倫理を説くことだというのか。

本稿が考えたい一つの問題軸はこの点にある。

フェミニズムの場面の差別をめぐる議論で、私が最初に直面したジレンマは、「障害者」解放運動と「女性」解放運動との間の解放像をめぐる「非和解的対立」ともいうべき問題であった。フェミニズムが立てる「働く人間としての平等」観が一面で持つ「障害者」への差別性の問題は、「労働不可能性を前提とする」平等観の思想・倫理を考えるきっかけとなった。さらにフェミニズム内での、マイノリティ問題に直面する。すなわちフェミニズムが他者化・不在化してきた女性たち、障害者、在日、アイヌ、オキナワ、レズビアンなど、マイノリティ女性諸当事者からの厳しい批判の声に促されて、自らのマジョリティであることの無知を自覚させられる場面があり、幾度かの批判される「痛みの経験」もしてきた。このようなフェミニズムの場面での経験にかぎっても、差別問題との向き合いにおいては、つねに個別具体的な「他者」の存在や

顔がある。

「ピープル」の共生倫理の世界は、そうした私の実感からはひどく遠いものとして映らざるをえない。

Ⅱ.「回心」の人

「近代批判」が「ポストモダン」にではなく、逆に「プレモダン」へさらにそれをも突き抜け下降し、アニミズム的自然観の世界にまで回帰してしまうのか。もとより日本的文化土壌における近代批判の議論が、伝統的なるものの回帰に向かうことは珍しいことではない。むしろよく見られることである。しかし花崎は、古典古代ギリシャ世界から現代までの人文知・哲学への造詣深く、帰依傾倒したキリスト教やマルクス主義に対しても自らの実存的主体を賭けて知的格闘し、思想的「回心」を図ってきた人である。なぜに、そのような「理知の人」が、人もけものも風も雨もひとしなみ対等な世界、主客融合、自他同一の、現実の絶対肯定の世界の是認に至ってしまうのか？これは花崎の思考世界が、自らの生き直しを賭して北大教員を辞した1972年の「あの回心」からの、さらなる最後のもう一つの新たな「回心」を遂げていることを意味するのか？

「あの回心」とは、言うまでもない。全国学園紛争も末期の1971年11月23日、「幻の大学の立ち処　北大本館封鎖解除事件裁判の特別弁護人の座をおりて」の一文をもって、花崎が北大教員の座を去った時のことである[1]。先立つ二年前北大本部封鎖解除闘争で逮捕された4人の学生の裁判において学生側の特別弁護人に立った花崎が、「造反教員」として学生の側に立つ信念を貫き、裁判の結審を迎え、出した「大学とは別の世界に生きる」決定的な選択であった。

少年期を軍国主義の中で皇国少年として成長し、戦後、10代の学生時代から詩の創作に手を染め、キリスト教に帰依・離脱し、マルクス主義の思想にも傾倒、共産党入党・離党というドラスティックな生の経緯の中で、多感な青年時代にすでに三度にわたる「回心」的転換点――皇国青年・キリスト教・共産党員からの離脱――を経ての、四度目の回心である。花崎のその後の人生を決定的に方向づけることとなった選択であった。

「このときの『回心』を一度たりとも悔いたことはない」。

この言葉はのちのち著書等で繰り返し触れられる。この「回心」の原点を生涯堅持し、その後の本土の大学からの数度の招聘の誘いをすべて断ったともいう。北海道の地にとどまり、妻と二人の娘との生活も捨て、文字通り身一つの無主・無縁の生き方に身を転じ、その後一人の女性と暮らすことになる。市民運動の出会いの中で女性から「アイヌ」の出自を告げられ「そんなことなんでもないよ」と返し「何にもわかってない」と激しい怒りを買う。このときの自らの無知ゆえの気休めに放った言葉の取り返しのなさを深く悔い、以後、先住民族・アイヌ差別の問題と生涯をかけて向き合うことを決意する。さらに札幌のリブの女性たちとの運動と生活両面でのつき合いの中では、己の「男性イデオロギーと家父長制的な生活意識」にも厳しく対峙し、フェミニズムをより深く理解することをこれもまた生涯の課題とする。アイヌに対する、アジアに対する、「在日」に対する、男としての、日本人としての自らの差別性と向き合い、運動と生活の現場から自己改革と内省的な思惟を貫いてきた稀有な知識人である。絶えざる自己変革の人・回心の人である。

いま少しプロフィールを加えれば、ベトナム反戦運動、成田空港や伊達火力、泊原発などの

---

[1] 花崎皋平『力と理性』現代評論社、1972所収（花崎2009、巻末資料再掲）

地域住民運動、アイヌ民族の復権運動への支援連帯運動に参加し、その間に国内外の民衆運動、アジア・農民・先住民・沖縄・水俣・足尾鉱山・ハンセン病患者の現場を歩く。「敗北の運動の闘いは地面に染み込む」、その民衆の闘いの場所に立ち、民衆の闘いの記憶の声に耳を傾け、思索を続ける中から執筆・翻訳活動を続け、貴重な「社会運動私史」も残している。1990年代後半期からは、ピープルズ・プラン21世紀・国際民衆行事で世界先住民会議や「ピープルズ・プラン研究所」の立ち上げと共同代表としての活動を札幌に生活の拠点を置きつつ展開する。その中からアイヌとミナマタを結ぶ視座の中で、「共生」の倫理性・普遍的理念を担保する「ピープル」「ピープルネス」の概念が掴まれることとなる。大地に足をつけ生活に根ざし『生きる場の哲学』（花崎1981）そのものを実践してきたと言ってよい。

花崎皋平こそまさに、田中正造その人の生き方に同一化し、「向こう側に渡った人」であった、といってよいのかもしれない[2]。上記詩以外にも詩集には音楽や絵画など芸術文化への深い教養造詣に裏打ちされた抒情性豊かな感情世界が描かれ、風や土、海や空、自然の生きとし生けるものに同一化する著者のまなざしが浮かび出る。この花崎のポエティクな表現世界には、著書・論文など多数の書かれたビブリオグラフィーを超えるポリフォニックな声、花崎皋平の〈生〉の世界の広がりがあり、思考世界の真髄を垣間見ることができる。花崎を評する・論ずるにあたっては、この詩的表現世界まで含めたナラティヴが、花崎の一つの〈生〉である、あるいは〈生〉がそのまま花崎のビオ＝グラフィ（伝記的評伝）である、とする視点からのアプローチが必要なのではないだろうか。いやそうでないと花崎の差別論・共生論のコアにある思考・思想の特徴を取り落とすことになるのではないか[3]。本稿は、花崎その人を「回心」の人、常に自己への内省的思考を通して普遍的なるものを求め、そこから共生の「倫理」を説く人と位置づけ、しかし花崎のそうした思考が、差別論を論ずる上での花崎の「躓き」となってはいまいか、ということについて考えたい。

Ⅲ.「共生の思想的地平」への〈違和〉

花崎のビオ＝グラフィ（伝記的評伝）を前にして、私の気持ちは複雑で、敬愛と違和のアンビバレントな感情を伴わずには対することが難しい。干支で一回り余の年の差の私は、花崎が大学人を降り北大を去ったちょうど同時期に、26歳で地方の小さな新設短大に職を得ている。キリスト教・マルクス主義への接近、卒論・修論で初期マルクス、ヘーゲルをとりあげ、また哲学・倫理学から出発し女性学・フェミニズム・ジェンダー研究との二つの領域を架橋する問題意識の中で、近代的主体像・人間観批判の主題と向き合ってきた。その思想的課題の重なりにおいて、私にとって花崎は思想・理論上の問題意識形成期の一つの重要な参照軸であった。けっしてよき読み手であったとは言えないのだが、その生き方・発言ともに無関心でおれない存在であったのだ。

---

[2] 「かもしれない」の留保的な物言いに、本論稿の課題を担保しておきたい。「向こう側に渡る」とは、思想上あるいは運動上そもそもどのような立ち位置に自らをおくことを意味するのか、そのことを花崎皋平その人を参照軸として問いたいという思いがあるからだ。

[3] 「生は一つのナラティヴである」の表現は、自己が物語・物語りであることの含意を突き詰めていくと、この「生そのものがナラティヴである」ことに行き着くことの含意で使っている。ジュリア・クリステヴァが描いた『女性の天才シリーズ』の「H.アーレント」の巻の訳者・松葉祥一が、『H.アーレント〈生〉は一つのナラティヴである』と原題にはない副題を付したその問題意識に訳者あとがきで記していることに共感をもったところからの意想である。

だが『アイデンティティと共生の哲学』（花崎1993）で、70年代以降の差別と共生をめぐる花崎の知的格闘の集大成として提示された思想的地平が輪郭を現してきたとき、ざわつき感を覚えずにはおれなかったのである。著書の最終章で､21世紀を作り出す希望の原理として「ピープル」「ピープルネス」の言葉が概念化され、人が「ピープルであること」から「ピープルになること」への転生の倫理が説かれるに至って、花崎哲学が行きついているこの思想的地点に強く〈違和〉を感じ始めたのである。

とは言え当時の私にはまだその違和のよってきたる問題の所在が見えていたわけではなく、なにか得体のしれないものがぬっと顔を出してきたという感覚的なものだった。それでも一つ言えることは、この著書そのものが70年代以降の差別論のけっこう厳しい論争も通った一つの思想的地平であるはずなのに、その痕跡が見えてこないのはなぜか、という思いであった。論争過程では、花崎自身にも向けられた厳しい批判もあり、それらのいくつかの論点・論題には当然応答があってしかるべきなのにそれが果たされていない。文中では批判者にも言及しさまざまな論者を登場させてはいるのだが、多くが花崎の自説のコンテクストに呼び込むための論及にとどまるもので、浩瀚な文献の渉猟が自身の論の構成に恣意的にいささか羅列的に傍証とされているという印象を残し、論争の中にあった、差別論の議論のより深く積極的に推し進めるための論点とすべき問題は反映されていないという思いであった。

顧みれば､「1968年5月革命」のあの政治の季節の熱風が去った世界の70年以降、差別と共生をめぐる花崎の一つの思想的地平に結実するに至るまでの20年間には、様々な社会運動の動きがあった。全共闘運動・新左翼運動内の激しい内ゲバ的抗争を経験した運動の総括をめぐる議論もあった。反戦・平和、反核運動、反公害の地域運動、環境保護・エコロジー運動など「新しい社会運動」の登場もあった。差別問題では、女性・アイヌ・沖縄・障害者・被差別部落・「在日」等、被差別運動側の「差別・抑圧からの解放と自立」のための反差別諸運動が登場し、運動内部でまた諸運動主体間で、それぞれの要求とアイデンティティをめぐる対立・抗争があり、さらに運動の支援・被支援関係に働く権力関係の問題まで含んで、それらの対立・抗争を超えうる「共生」の論理と倫理への新たな思想的・理論的地平が模索されていた時期であった。

差別論での私自身の関心に即しても、70年代のウーマン・リブの「女であること」のアイデンティティと差別を問う問題意識に軸をおきつつ、80年代のフェミニズム論争の場に巻き込まれることとなる。障害者・部落・「在日」・レズビアン（セクシュアル・マイノリティ）等の問題へと、フェミニズムの場面での性差別の議論も、もはや「女という同一性」に依拠しては語れなくなっている状況にあった。人権の普遍性の名のもとに女性の権利・人権の主張を掲げた当のフェミニズムが、他者化･不在化してきた女性の存在、フェミニズム内のマイノリティ女性問題について、フェミニズムはマイノリティ当事者から鋭く突き付けられていたからである。

フェミニズムの場面だけでない。70年代の人権論の地平､また反差別への運動が､「当事者運動･研究」として登場するにはまだ至ってなかったものの、個々の運動の現場や支援者たちの周辺では運動のプライオリティをめぐって抗争的な議論が起こっていた時期である。知る限りでも、社会体制全体の転覆（革命）を目指すか、個々の反差別運動を闘うか、あらゆる差別・抑圧の根源である川上の鬼を退治することが先決課題か、川下に流されてくる現に今にも溺れそうな者を救うことを優先するかの､体制変革か反差別運動か､運動のプライオリティをめぐる議論もあった。

差別問題の個別具体の諸相に及べば問題は複雑に交錯し、諸当事者のニーズの錯綜する差別の現実を前にして、花崎の民衆へと視線を下降させていくのとはベクトルが違う、視ている現実が違う、そういう印象からの花崎への違和感であった。

そこで出会うこととなった､「ピープル」「ピープルネス」である。

この花崎の「ピープル」をどう受け止めるか？　人が「ピープルであること」から「ピープルになること」への転生・回心を支える倫理的基盤はどこにあるのか？

本稿では、私の中にくすぶっている花崎に対するこの「疑念・違和」について以下の三点の問題に焦点化して考えたい。

まず一つは、前掲した詩に描かれる回心・悟りの境地が思想の言葉として概念化された「ピープル」「ピープルネス」、「ピープルであること」から「ピープルになること」の批判的吟味を行うという課題にある。

二つに、ピープルに託された「回心の倫理」は、日本的精神の源流にある仏教的世界観の平等観、菩薩の前では人は皆平等とする「本覚思想」の系譜とも通底しているのではないかということ、近代的人権思想とは系譜を異にする平等観から共生の倫理を検討することである。

三つに、上記の「ピープル」という被抑圧者の集合主体観念に深くかかわって花崎が出してくる「人称世界」の議論、「三人称の私」の問題を取り上げたい。個人を超えた人間の共感・共生のアイデンティティの基盤として立てる「三人称の私」と言う一人称には、「他者」の存在はあるのか、結局のところ主観内部の自己同一に帰結する世界であり、したがって二人称の自他関係には拓かれていかないのではないか、という疑問について考えたい。

ここであえて付言すれば、本稿がなそうとしている、花崎の共生観の思想的原理となっている諸概念への（批判的）検討を試みようとすることは、じつは私自身への自己言及的な問いを迫ってくる問題でもある。そのような自覚からの取組みだということにある。

後述するように（Ⅶ以下）、フェミニズム・倫理学両領域を架橋する私自身の近年の問題意識の中では、近代的主体や自我の倫理に対する対抗視点を問う「近代」批判が、「女（わたし）／母」の一人称主体と身体性の概念提起をするところに行きついている。（金井2011、金井2013）つまり、私も花崎も近代的人間観や自然観の価値の地平に対する対抗視座を問いながら、花崎の近代批判は「ピープル」の具体的普遍化と「自然」に、私のそれは「女（わたし）／母の一人称」と「女（わたし）／母の身体性」に至りついている。そしてここで私が立てる「母」という言葉に必ずついて回るのが、フェミニズムの場面からの「母性本質主義」という批判である。この批判にどう対するかということが、もっかのところの私に強く迫られている問題としてあるからである。

Ⅳ．ピープルであること／ピープルになること

冒頭のポエティックな表現世界の花崎の自然観・世界観が思想の言葉に概念化され、「ピープルであることからピープルになること」の提案になる発言は次のようなくだりである。ここでも田中正造が理想化されて語られる。

> ピープルであることと、ピープルになることとは、前者が存在についての叙述、後者が価値についての陳述というふうに区別することができる。存在と価値とは、一つの事柄の違う側面をなすもので、別々のことではない。（花崎1993、p.263）

> 精神の次元におけるピープルのモデルとなる最初のものは「自然」である。東アジアの文化圏には、天地山川に倫理･道徳の範型を認める思想がある。私が親しんだ民衆の思想家では、田中正造がそうである。
> 自然を所有し、開発することを進歩であり、道徳的に善であると考える文化から、自然との

> 共生を目的とする文化への転換を求めるとすれば、天地山川を生ける自然として、すなわち客体ではなくて主体＝他者として遇し、そうするにふさわしい礼をはらって接する関わりをしなければならない。（同、p.300）

> 「ピープルになる」とは…私と他者とがいつでも加害と受苦との関係になる可能性と必然性、その歴史的規定性を承知したうえで、しかもその場から「ともに生きる」関係をめざすことである。
> 「ピープルになること」を可能にする、私の自身へのかかわり方とはどのようなものなのか。それは自己同一性にしがみついて他者が目に入らない自己中心的世界を脱することである。それを私は「三人称のわたし」を見出すこととして考えてきた。自分の内面 に「三人称のわたし」の場所をひらくことができれば、「私は私」と言う閉じた世界を破ることができ…「三人称のわたし」の場をひらくことが、対人関係の非対称性という各人にとっての所与の構造に橋を架ける主体のあり方になると、私は考えてきた。自分と他者とのあいだにある加害－被害の関係は、一人一人の人間が壊れやすいものである（バルネラビリティ）点で、根本において等しいという認識から問いなおされる。また逆に、おのおのが自分のバルネラビリティを自覚させられるのは、関係の非対称性において弱者の立場におかれる経験であろう。（同、p.298）

以下、整理してみたい。

1）ピープルのモデルとなる最初のものは「自然」である。「天地山川を生ける自然として、すなわち客体ではなくて主体＝他者として遇し、関わらなければならない」。つまり、「天地山川」と人間を区別、対立させずに、共主体として関わること。

2）自己同一性にしがみついて他者が目に入らない自己中心的世界を脱すること。自分の内面 に「三人称のわたし」の場所をひらくことができれば、「私は私」と言う閉じた世界を破ることができ…対人関係の非対称性という所与の構造に橋を架ける主体のあり方になる。つまり、私と他者（他の人間）とを区別、対立させずに、共主体「三人称のわたし」という立場に立つこと。

実際には加害／被害の関係にある対人関係を前にして、両者の区別対立を越えて「ピープルになる」こと、誰もが「ともに生きる」関係をめざすこと、を主張するもので、現実の加害者側にとってまことに都合のよいことであろうが、ともかくここまでは、「ピープル」は「人間一般」のようである。

しかし、花崎「共生」論はそこで終わってはいない。

3）他者との間の区別対立を越えるのは、どのようにしてか。「自分と他者とのあいだにある加害－被害関係が、一人一人の人間が壊れやすいものである（バルネラビリティ）点で等しいという認識から問いなおされる。」「人間は加害・被害の関係が不可避であるが、その故にこそ共苦においてつながり合える」。ということで、「おのおのが自分のバルネラビリティを自覚」しないといけないのだが、そのためには、「関係の非対称性において弱者の立場におかれる経験」が必要となる。ということは、平たくいえば、被害意識の共有、共苦の意識が核となるのでろうか。マルクス的にいえば、共苦の階級意識から階級を越えた普遍意識へ、であろうか。

「ピープル」とは人類一般か被害者階級か。もとよりこのピープルの概念のルーツとすべき背景はあり、必ずしも実体のない空疎な概念というわけではない。「今のようでない世の中」を志向する民衆としてあるその存在が顔の見えているような関係としてあり、その集合的主体の理念化・普遍化であるといってよい。そのことは、「ピープルという被抑圧者の集合主体観念」とい

うことばでも表されている。

しかしそういう経緯を理解した上でなお、私自身が関わってきた差別問題の現場、女内部の対立抗争的な差別の現実からは、強い違和感が残る。「ピープル」が理念化・普遍化されさらにそれが自然化され、天地山川、自他一如にまでつながっていくとき、そこで現実の差別や抑圧の個別の事象にどう向き合えるというのか。人々に「ピープルになる」「回心の倫理」を説くことで、この現実の価値抗争的な複雑に錯綜する差別の現実を変えることができるというのだろうか。それは反差別の思想的基盤を無化してしまうものではないか。

ここから問題は、今風に言う「被害者」「弱者」の絶対視といった問題にもかかわって、上記の私の疑問は、以下の菅孝行の発言に重なる。

> かの著書（『アイデンティティと共生の哲学』、引用者補）におけるピープルとはいったい何なのか。実体なのか、到達点なのか、過程なのか、彼岸のイデアなのか。それを不明にしてしまった原因は議論の次元混淆というより、実体としての被差別者・被抑圧者の現実変革力に対する過剰な信頼にあったのではあるまいか。（菅編1994）［下線引用者］

> つまり人権・平等を「人間的なるもの」の尊厳の実現として考えるかぎり「人権尊重」の思想も、「平等」の理念も差別を排除するものではない。個別の差別を権利づけること抜きの「人間の尊厳」とか「人権の保障」という思想は、、、限りなく人の下に人を作り出す。人権なんてなくてもよい例外者を無数に作り出すことを妨げないのである。在日韓国・朝鮮人に人権なし、部落民に人権なし、障害者に人権なし、、、と。（同）

菅の批判の要点は、花崎の「ピープル像」は実体としての被差別的存在に対する過剰な思い入れによる虚構でしかない。運動の側の自己実体化、経験の絶対化・普遍化による具体的普遍の抽出、すなわち、非差別者を理想化するのも差別ではないのか。そう厳しく問うているのだ。菅がかように厳しい口調で花崎に対するにはいささか事情がある。それは『アイデンティティと共生の哲学』第6章「反差別の論理と倫理」でもっとも厳しく批判的に論及されているのが菅孝行その人であるからである。菅の前記発言は、その反批判として書かれている[4]。

花崎のピープル像の背景にある「受苦的存在」の祖形となっているのは、アイヌ・先住民族であり水俣の患者たち被害者である。アイデンティティや共生と言っても、花崎の見ている現実、聴いている声、問題としていることがらと、菅の以下のような発言が視ている問題とは違う。菅は「人間の「自由」としての〈差異〉または了解困難性」を次のように語る。

> いずれにせよ、ここで重要なのは何を「差異」と呼んだのかを明らかにして置くことであろう。そのために、スペイン戦争に従軍した唯一の日本人ジャック白井を主人公ジョニーのモデルにしたある戯曲[5]の一場面を引用しておく。

---

[4] 当時70年代以降の反差別運動の現場で、菅は、障害者、在日、被差別部落問題等、個別具体的差別の当事者性のかかった運動に深くコミットし、そこから「反差別の思想的地平」の理論化に向けて発言していた。その菅が、1985年の社会主義理論フォーラム「反差別」の分科会で行った報告に対して、花崎が強く反発し菅批判を行った場面に両者の間の対立は端を発しているようだ。花崎の著は、いわば菅を仮想敵として人権論の土俵を立て、当時のフェミニズムや政治学等からの多様な発言を論者に取り込んで、そこから最終的に「ピープル像」の自論に導いている。

[5] 福田善之 「れすとらん自由亭」（『れすとらん自由亭・希望』現代企画室、1993所収）

劇中、ジョニーは戦闘行為に参加するために義勇兵として従軍するが、料理の名人であるために毎日食事づくりに追われている。業を煮やしたジョニーが戦闘への参加を要求し、戦友たちがやめさせようと説得するがジョニーは納得しない。その時、舞台ではバイセクシュアルな感じの俳優が演じたピーターという青年がジョニーを援護する。

ピーター　トニー、君たちはジョニーに―いや、おれもさ、おれたちはジョニーに、ファシストとは俺たちが戦う、君は俺たちのために飯を作れって言ってるんだ。それをジョニーが拒否しているのは、彼の内面に理由があるんだ、きっと。

トニー　個人の内面、か。

ピーター　それがもしなかったら、そもそも彼がここへ来た理由がなくなっちまう―そういうなにかなんだ。俺たちはそれを尊重しなきゃならない。

マイク　なんだ、そりゃ？

ピーター　わからない。ケニーの言ったように、人種的ななにかかも知れない。もしかすると。―でも、そのわからないってことを大事にしたいんだ、おれは。

トニー　なぜ？

ピーター　だって、それが「自由」じゃないのか？

その人にとって重大なものであるがゆえに他者に理解困難ななにか、そこにその人のその人らしさがあり、それがその人の自由の根拠であり、自由の根拠であるような不可解さこそが他者との差異というものなのではないか。それは個体相互に識別できるものであるとともに、文化を異にする人間集団相互にも認知できるものである筈だ。当然その不可解性は、人間のとる態度如何で相互排斥の原因ともなる。それを受け入れ合うこと、それが差異の権利の尊重と私がいいたかったことの意味である。あの文章で読者に理解可能と思ったのが甘えであったのかも知れない。改めて、こう書くことで多少は理解し易くなっただろうか？

「人間」一般という概念を用いるとき、余程精密な注釈でも付けぬ限り、（花崎が、私の人間主義批判や、人間性一般に依拠した人権論を批判した意図を忖度してくれたときの先に引用した文章にほぼ尽きているように、）白人主義、合理主義、客観主義、論理主義、生産力主義、男性中心主義のイデオロギーでとらえられた「人間」が、同一性の地をつくり、その上に「差異」としての個別が図柄として描き出されるという以外の事態を招き寄せることは極めて困難なのである。画餅としてのユートピアでなく、一体どんな「人間」像が花崎に描けるのか？それが可能でなければ、人間というカテゴリー自体に問題はない、という物言いはカマトトぶりか、哲学的衒学趣味でしかあるまい。（同）

菅の花崎への最大の批判点は、菅の主張の中核をなす「差異の権利づけとしての反差別論」、「近代合理主義的思想としての人間中心主義批判」の趣意を花崎は完全に誤読・曲解しているという認識にある。誤読されたうえで批判されそれを通して「共生の倫理」、「ピープル像」の論理の正統性が主張されるという、議論のまったくのかみ合わなさへの苛立ちである。

人間は共苦存在において皆同じピープルである。人間存在の加害・被害の関係で自らも加害者となりうる自覚において回心するところに共生･平等の世界は拓かれる。「気持ちのもちよう」「お互い様」的な道徳論の次元の議論に「反差別の論理と倫理」が回収されてしまう。ジョニーをめぐるピーターたちの会話の意味するところの問題など理解されようもない。強い危機感のなせる語気強い反批判である。

菅の花崎への反論・反批判として書かれたこの文章については、当時の私には両者のあいだの対立点・争点がつかみとれないもどかしさを残したまま、考えることをエポケーしてきた問題の一つである。前記したような自らの無知による「批判される痛さ」の経験を通して、共生や反差別の問題を語ることの難しさにも気づかされてきた中で、菅の20年も前のこの論稿が提起していることの意味を理解しうるに至ったというのが正直のところである。

菅のここでの指摘は、当事者運動が大きく前景化して以降、支援・被支援関係に鋭く問われることとなる問題――「当事者主権」や「当事者研究」、他者表象における「名づけ」や「名指し」の暴力、「犠牲者の神話化」「被害者像の押しつけ」といった言葉が関わってくる事柄――にまで及び、現在の差別論におけるもっともセンシティブな問題がほとんど含まれている。本稿での花崎との向き合いの中でそれを確認しえたことが私にとっての収穫で、それをもって「ピープル」に抱いた〈違和〉の一つは氷解した感はある。花崎の「回心の倫理」と日本的精神の源流にある「本覚思想」に特徴づけられる自然観に論を進めたい。

Ⅴ．日本的精神の源流と本覚思想

花崎哲学・理論の根底にある思想のいのちの平等の考え方は、正造の渡った向こう側の世界の、「人も　けものも　鳥も　木も　草も　風も　雨も　雪も　ひとしなみ対等な　いのち」とする世界であるのだが、このようないのち観の背景には、日本古来の精神史的伝統・思想に広く根深く継承されてきている「本覚思想」に特徴づけられる自然観がある。そのことを本稿の取り組みを通して知ることとなった[6]。「本覚思想」なるものについての私の知識は、ほとんどゼロに近い。だがその思想内容の、現実の絶対肯定であることや菩薩の前では人は皆平等といった輪郭が見えてくるにつれ、花崎のアニミズム的世界への共感的思い入れが仏教的世界観ともつながっていく理由が読み解けそうに思えた。花崎は、著書の各所、民衆のアイテセンテイティやピープルネスに言及するところで、菩薩の前では人はみんな平等、みんな救済の対象であるとする浄土真宗の浄土と救済の思想に深くシンパシーを寄せていることを隠さず、さらに哲学的な理論づけのところでは西田哲学を引き込んでいる。このアニミズムの自然観と仏教的平等観と西田哲学までのつながるところの論理が、花崎の平等観を（批判的に）読み解く鍵になりそうだという予感の中での「本覚思想」との向き合いであった。

他方で、2011年日本社会が遭遇した「3・11東日本大震災」後の状況が本覚的な思想を呼び起こしていたということもある。この圧倒的な自然の暴力、理不尽な出来事を前にして、災害をどう受け止めるか、人々が「災禍」を乗り越えて生きる意思をつなぐ精神的な拠りどころとする思想が切実に求められていた。その震災後の、天災天罰論を始めとする百家争鳴の復興議論の中で、日本の精神史的伝統のその底流にある無常やあはれの感覚の独特の自然観に関心が向けられ、「草木成仏の思想」が人々の心を鎮め必ずこの「災厄」は乗り越えられる、それは日本人の精神史的伝統に引き継がれたDNAなのだとする考えは、人も物も大地も一切合財を失った被災者にとっての精神的よりどころとなったには違いない。（金井編2014）

菩薩の前では人はみんな平等、みんな救済の対象であるとする教え、このような本学思想のルーツは、日本仏教史においては天台本学思想に辿りうるとされる。田村芳朗『天台本覚論』によれば、その思想の特徴は、一般的には具体的絶対論ないし絶対肯定の思想と称しうるものであると

[6] 20年余にもなる差別をめぐる小さな研究会で宗教社会学研究者の門馬幸夫からご教示をいただいたことを記しておきたい。

いう。つまり、具体的な現実の事象そのまま絶対とみなし、また肯定することで、眼前の事々物々のすがたこそ、永遠の真理の活現のすがたであり、本来の覚醒（本覚）の顕現したものということである。

> 天台本覚思想は、煩悩と菩薩、生死と涅槃、あるいは永遠（久遠）と現在（今日）、本質（理）と現象（事）などの二元分別的な考えを余すところなく突破・超越し、絶対不二の境地をその極みまで追及していったもので、仏教哲理としてはクライマックスのものとすることができよう。、、、事実、天台本覚思想は、天台法華の教理を根幹としつつ、華厳・密教・禅などの代表的な大乗仏教思想を摂取し、それらを素材として絶対的一元論の哲学を体系づけたのであって、いわば大乗仏教の集大成とも言うべきものである。（田村1973、p.478）

さらにこの本学の平等思想が、インドの伝統仏教における「存在の平等性の価値」の思想に由来するものであり、この「存在の平等」観が、近代啓蒙思想に由来する「人権理念の平等」とは異なることについては、田辺明生の以下の引用に明らかである。

> インドの伝統思想における存在の平等性の価値は、現象世界の背後あるいは内奥にあると指定される存在のレベルにおいて、全てのものは等しく同一であるというものだ。、、、すべての存在は等しく、あらゆる人間は救われる可能性を持つということが高らかにうたわれてきた、こうした思想は、近代啓蒙思想における権利の平等とは異なり、具体的な社会思想レベルにおいて、あるべき関係を直接的に規定するものではない、しかし存在の平等と言う価値は、人間と人間、また人間と自然との関係において、他者に配慮しその存在を尊重するという、しばしば潜在的であるが決定的に重要な倫理的基盤を、インドの歴史社会のなかで提供してきたと、私は考える。（田辺2010、p.6）［下線引用者］

> インドの思想伝統のなかでの最良の可能性をもつのは、こうした〈多一論〉にもとづく〈存在の平等性〉の価値ではないかと私は考えている。それは、絶対存在、神あるいは仏は、全てを超越する者であると同時に、世界に遍満し個々のものに入り込んでいるという考えである。、、、それはまず、如来像思想、つまりすべての人に如来たる可能性、すべての人に仏性があるとする考え方として、日本に入ってきた、そしてそれは本覚思想、つまりわれわれは本来清浄な悟りの智慧が備わっているとする考えかたへ発展したのであった。（田辺2012、p.7）［同］

この「存在の平等」観が導かれる論理は、まさに花崎が、ピープルを理念化する論理、すなわち「ピープルであること」と「ピープルになること」、この存在（Sein）と当為（Sollen）をつなぐ論理と、そっくり重なる論法ではないか。しかもさらにこの本覚的な存在の平等思想が過去のインド社会に固有のものというのではなく、現在の日本社会の至る所で、以下のような俗流化した本覚論として溶け込んでいる。例えば、人が健やかに生きるための仏教道徳倫理として説かれるところで。

> 花は無心に、天地いっぱいよりさずかったそれぞれの姿で、それぞれの配役を勤めてくれる。高さを勤めてくれるもの、蔭にまわって奥ゆきを勤めてくれるもの、下に控えて全体をしっかりと受け止め、支えてくれるもの、そっと寄りそって固さをやわらげ、欠けるを補っ

てくれるもの。主役の花だけでは花にならない。名もなき草草の無私の協力あって初めて一瓶の花が成り立つ。

どの一枝もどの葉も、一瓶の花の全体を背負って、その持ち場を守っている。配役の場こそ異なれ、価値においてまったく平等。これを「共に仏子たり、同じく仏事を作す」という。まさに「春色高下なく、花枝自ら短長」であり、「高処は高平、低処は低平」である。・・・仏事というと葬式・法事のことかと思う。あるいは座禅とか写経とか、特別のことをするかと思う。そうではない。スミレがスミレの花を咲かせ、バラがバラの花を咲かせ、主役の枝、あしらいの枝、剣山の配役、典座の配役と、それぞれの配役をまく直に勤めあげることが、仏事であり、成仏道の当体なのである。（青山俊薫師1994）

ここに示された思想は、実際、瀬戸内静寂の講話などにもよく見られるじつに分かりやすい、だからこそ誰にも受け入れられやすい「現実の絶対肯定」の仏教の道徳倫理となって、現代の日本人の倫理観にも溶けこんできている。通俗仏教道徳論に見えるこの説法の原型は、清沢満之の『精神講話』の「平等観」の中にある。清沢は、明治初期、真宗大谷僧侶にして哲学者・宗教学者として36年の短い生涯に多数の著書を残し仏教哲学の普遍的構造を解くことに挑戦した人物であるが、その清沢が、まったく同じ論法で「平等」を説いているのだ。（今村編2001）

日本思想研究者の竹内整一は、本覚思想が、「あまりに現実肯定的な緊張感なき〈相即〉の面だけが強調され批判され、敬遠されて、それ自体の研究が立ち遅れてきたとされる思想である」一面を指摘し、それゆえ、安易にこの思想概念を振りかざすことは危険であることを指摘したうえで、そのことを踏まえたうえで少しく立ち止まって考えてみることの意味を以下のように記す。

「俗化俗流化した本覚論は有害無益だったとしても、それへの批判から、法然、道元、日蓮などの鎌倉仏教が生まれているのであって、その母体としての本覚的思想風土を排除するわけにはいかない」のであり、鎌倉新仏教を含めて日本的な思想文芸の「母体」とされる、そうした「本覚的思想風土」は、それ自体として改めて検討・評価されるべきであろう。

それは日本的「自然おのずから」を問う不可欠な要点のひとつであると同時にまた、日本人の無常感覚や「あはれ」という存在感覚のあり方を問う際の大切な要点のひとつでもある。（竹内2014、p.20-21）

本覚の思想をどう評価し現在につなぐのか。竹内は、日本的自然や日本人の無常観や「あはれ」という存在感覚のあり方を問う不可欠の要因として位置づけているのだが、本稿の反差別と共生の議論の文脈では、本覚思想の「存在の平等観」に着目したい。インド・カースト社会のすさまじい差別の現実の中から生まれたこの本覚の「存在の平等観」は、近代的人権の平等観や市民権的自由の限界、すなわち国民国家の外部･例外を作り出す平等観の対抗原理たりうるのか。もちろん「いのちの平等観」が、アニミズム的世界にまでつながっていく自然観や、「現実の絶対肯定」の仏教の道徳倫理に与してしまうことには批判的であるべきだが、「差異の権利づけとしての反差別論」「近代合理主義思想としての人間中心主義批判」の先にある「脱・近代の共生の思想・価値」を拓いていこうとするところでは、「存在の平等観」の言葉の鍛え直しによって、「いのちの平等観」と「存在の平等観」を分節する思想的原理を編みだしていくことはできないか。

理想化されたピープル像を理念化し規範化することをもって脱・近代への倫理的価値が描けようとは思えない。むしろ現代にも溶けこんでいる過去の思想・伝統への検討・評価の視点が

問われていることに留意しておきたいのである。実際、現在においても、神道的アニミズム、天台本覚、浄土思想、禅（西田）の関連や、広く日本思想の底流をなす非人為的自然観や無常諦念思想は、広く日本思想史にとっての一貫した課題として残っている。本覚思想のもつ「現実の絶対肯定」の倫理が、俗化俗流化した姿は現在の日本社会にも根深く生きているとしたら、それとの批判的交渉は不可避とされるであろう。

すなわち新しい倫理的価値は、共同体の中にエートス化された価値の意識化としての規範であるから、「反差別への共生の倫理」的価値の地平を拓いていくうえでは、一方で、受苦的存在としての人間の具体的な受苦の現実の只中に「声の場」を立て「被差別諸当事者の声の討議の場」の交渉関係を通って、そこに至る手続きを踏むことは不可避であろう。だが他方では、過去の思想・伝統への検討・評価を通して脱近代への新たな倫理的価値を切り拓くことも問われていよう。その時、本覚思想は、「俗流化した本覚思想」から「存在の平等」の価値を掬い上げそれをどうしたら現代的に受け止め直しるかといった問題を立てていくことも考え得る対象としてあるのではないか。本稿ではこの課題だけの問題提起にとどめるが、花崎の共生世界のいのちの平等とアニミズム的自然観さらに仏教との思想的密通への留意とともに、「存在の平等」を近代的人権理念を通った後の世界にどう練り直しうるのかの「問い」を残すこととしたい。

VI.「人称世界」の議論、「三人称の私」の問題

上記の「ピープル」という被抑圧者の集合主体観念に深くかかわって花崎が出してくる「人称世界」の議論、「三人称の私」の問題を取り上げたい。個人を超えた人間の共感・共生のアイデンティティの基盤として花崎が立てる「三人称の私」と言う一人称には、「他者」の存在はあるのか、結局のところ主観内部の自己同一に帰結する世界であり、したがって二人称の自他関係には拓かれていかないのではないか、という疑問について考えたい。

ピープルであることからピープルになる、存在から倫理へのヒトの主体化の契機を、個人の宗教的回心や実存的決断という行為の問題としてではなく、花崎共生論が人称世界の認識の議論に土俵を立てるべく、その概念として持ち込んでいるのが「三人称の私」である。

「三人称のわたし」を自覚し、「一人称－三人称」構造という二重性において自らをとらえることで、対人関係のあり方を反省する。「ピープルになる」ことを可能にする、私の自分自身へのかかわり方とは、自己同一性へしがみついて他者が目に入らない自己中心的世界を脱することで、それが「三人称としてのわたし」を見出すことであり、自分の内面に「三人称のわたし」の場所をひらくことができれば「私は私」という閉じた世界を破ることができ、対人関係の非対称性という各人にとっての所与の構造に橋をかける主体のあり方が拓けてくるというものだった。

著書の各所で言及されるこの「三人称のわたし」の、例示として言及される「わら人間」の話やカフカの小説『変身』の主人公グレゴール・ザムザなど、さらにそのときどきに自らの議論に引き入れている論者に若干の変化はあるものの（花崎の読書歴の開陳でもあるが）、「三人称の私」はおおむね上記のような説明であることには変わりはない。

ピープル概念に向けられたのと同様に、この「三人称の私」の人称世界論への疑問・批判が多方面から呈されることになるのだが、ここでは、花崎にとっての盟友ともいうべき武藤一羊が積年の思いを込めて発したと思われる批評を取りあげたい。これは花崎の『天と地と人と――民衆思想の実践と思索の往還から』（花崎2012）への走り書きと題された文章でありとくに公刊されたものではなく、註7に記したある講座の場面で配布された資料である。花崎の最初の「人称世界」

の「三人称としてのわたし」から、20年を経ての「人称世界」再論（第三部「人称世界」の議論）への批評である。

人称世界、非人称世界、さらに人称的世界と身体の関係についての議論に発展していることに関心を示しつつ、しかし武藤は、以前より抱いていたという疑問として、以下の二点の問題を指摘している。ここに本稿が花崎の人称世界の議論に提起したい問題の一つはほぼ言い尽くされているという感を抱いたので引用したい。

> 「人称」をめぐる疑問は二つあります。一つ目は、論じられている人称がすべて単数であること、二つ目は二人称が軽視されているように見えることです。まず第一点から見ていくと、われわれ、きみら、かれら（彼女らを含むものとして使用）は登場しません。複数人称は花崎世界ではどのようにして登場するのか。それは行論からは分かりません。言うまでもなく、現実世界では、複数人称は重大な意味を担っています。「われら」と「やつら」です。複数人称を導入すると人称世界は分裂した世界、葛藤によって引き裂かれた世界として現われます。開発主義にとって自然は「やつら」に属します。花崎世界では、三人称単数は開いていく個＝普遍の側に属します。指示対象をもつ三人称は普遍、非人称は超越といっていいでしょう。三人称複数は普遍の側に属することは（定義からしても）ありえません。
>
> 第二点は上記と関係しています。花崎人称論では、三人称はいつまでも三人称のままのように見えます。しかしそのような固定的三人称の仮定には無理があります。人称は遷移するのです。最初に触れたように、三人称としてのわたしは、そう気づいたとたんに二人称の位置に移っていないでしょうか。自分に向かって「なんてバカな奴だ、お前は」とならないでしょうか。そして何より、「やつ」は目の前に現れ、「おまえ」にならないでしょうか。複数の場合は、「やつら」は、「おまえ」に。世界の分裂はこのような関係を日々再生産し、グローバル化はそれを途方もない規模に拡大しています。「われら人間」と「やつら環境」の間にも。それらが解決を要求する途方もない大きさの、そして静寂ではなく喧噪の、共存ではなくしばしば流血を伴う葛藤の事態を出現させています。そしてそこでの解決を求めるとすれば、多くの個別の、また集合的な二人称関係を通じるしかないのです。当事者同士が向かい合うことなしに解決はありえないからです。では何を基準にしてか。何（誰）を仲立ちとしてか。そこで三人称の地平が求められ、参照されねばならないことは明らかです。二人称関係は三人称関係を求めるのです。おそらくそのような三人称は、二人称関係に結ばれた当事者の三人称としてのわれらであるとともに、複数の起源からの遺産を原料に次第に練り上げられ、多くの二人称関係のなかでの対決に媒介されて次第に形をとり、共有される非超越的規範であるだろうというのが、世俗人としてのぼくの見通しです。（プロセスとしての民衆連合と民衆憲章）僕としてはこの見通しと「人称的世界」という把握は親和的であると考えています。［下線引用者］

長い引用に及んだのは、ここにはⅣ節で菅孝行が花崎に投げかけた強い反論・疑問に対する応答が、花崎に替わり武藤によって応えられているのではないかと考えたからである。すなわち、自分の見ている世界の非抑圧者の像から普遍的抽象的主体を導き、現実の絶対肯定に陥る花崎の「ピープル」の世界に運動論からの批判を立てた菅に対して、武藤もまた、運動論からの「人称世界論」への批判として、運動の世界の人称構造の変化のダイナミズムを花崎人称論ではとらえられないと批判しているのである。そして「世俗人としてのぼく」の自己注釈には、盟友・花崎への最大級の配慮としかしあえて苦言を呈しておかねばという思いが込められているよう

にも思えたのである[7]。

さてここからは花崎の「人称世界」の議論に対する私自身の批評コメントとなる。二点に亘る。その一点目は、花崎のこの議論は、武藤の文章の最後部分に傍点を付したところの文脈に位置付けるには、そもそも無理があるということにかかわっている。花崎の人称世界論では、三人称が二人称に、三人称が二人称関係に結ばれた当事者の「三人称としてのわれら」であるような、すなわち弁証的な関係ともいうべき媒介による人称関係の世界のダイナミズムとは別の論理に立っている。人称関係はもともと一人称世界内のできごととしてスタティックな構造をとっており、一人称内で自己完結する自他関係の議論ではないかという問題である。

哲学の文脈では、キルケゴールの宗教的実存論の主体性論、「自己とは自己の自己への関係性としての自己」とする定義が思い起こされる。主体の構造の中での自他関係の議論である。この限りにおいては、人称世界論の舞台にとくに据えずとも、自己との関係性における自己の実存的決断（回心）において、ダメなやつである自分から自分を切り離して真の自己が立ち現れるという話であろうと考えるからである。花崎哲学の行為的な基盤となっている「回心の倫理」の自己超越的な導出は、まさにキルケゴールの宗教的実存の主体化の論理と親和性をもっている。

もとより、キルケゴールの立論そのものは、神を他者とする「二人称論」というべきものである。そのことを踏まえれば、「主体の構造の中では自他関係は成立しえない」と評するよりは、花崎の生き方の主題としてのキリスト教の問題が関わってくると見るべきではないかということだろう。教団キリスト教からは離れ回心しても、一神教なきキリスト教、イエスなきキリスト教、人格紳なきキリスト教への問いは、一貫して花崎の生き方を捉えていた問題である。『力と理性』（花崎1973）以来の、近代的理性主体の明晰な自我が崩壊した後の、主体を支える精神的よりどころへの問い、「一本の大木の前で自分の存在を小さく感じる」そのような感覚、ここに花崎哲学が西田哲学とつながっていく「絶対者と逆説する」という言葉に象徴される「回心」への、もう一つの生き方の探求へと花崎を駆動する思考の核があるのではないか。

その一方で、花崎の世界は、基本的に、私と友だちの関係で、友だち以上の人である「対関係・対幻想」の世界と、友だちと、私との三点構造で人間関係が成り立っている。その友だち世界には、たとえ見知らぬ理解できない人も私の寛容な心は迎え入れることができる。無理に自分の解釈図式に取り込んで解釈の暴力を発動せず、「理解の方法的エポケー」で相手の席を設け歓待する。こうして友だち世界は広がる。やがてその世界では、虫や鳥に広がり、さらに慣れ親しんだ立木も話しかける友だちとなる。そういう世界に三人称は生まれない。したがってそこでの二人称関係は三人称関係に媒介されることはない世界で、葛藤や対立に媒介されて共有される「非超越的規範」でつながり合う共同性を導くこともない。そもそも「友だちと私」という関係性は一・二

---

[7] 上記のこととかかわってここで一つのエピソードに触れたい。じつは本稿原稿依頼を受けるきっかけともなった場面のことである。2014－2015年にかけて都内で「花崎皋平が〈花崎皋平〉を語る」と題した6回の連続講座があった。二カ月に一度、花崎が上京し、20～30名の初期からの花崎ファン・花崎フォローワーが囲んで表題のテーマで話を聞くという構図となった。当然ながら、参加者は、花崎皋平が〈花崎皋平〉を語る、すなわち花崎が80年余の自らの思想の歩みを21世紀の地点でスーパーバイズし、これまでの菅や武藤たち諸論者からの批判に対する応答責任を果たすことも含めて、花崎が〈花崎皋平〉を批評する話を聴くことを期待していた。そこから21世紀へのこの状況に何を語るかということへの関心であったはずだ。しかしあの講座の企画趣意は何だったのか。花崎皋平の運動の軌跡のアーカイブづくりのための、『風の吹きわける道を歩いて――現代社会運動私史』の続編のための講座だったのだろうか。それならそれで「あの時はこうだった、ああだった」の回顧話も事実関係の確認も意味なしとはしないが、しかし期待がはずれた無念さから企画側にも花崎にもつい批判的発言を口走り、その自らの吐いた言葉の責任をこのような形で取ることになったものである。先に引いた武藤の文章も講座の中で配布された資料であるので、読者には目には触れにくいかと、長文の引用となった。

人称関係でもないのかもしれない。自分の前に二人称として立ち現れてくる他者の不在な友だち関係からは、「三人称としての自己」に出会い回路もないというべきなのかもしれない。花崎共生ワールドの他者不在、複数人称の不在の問題がここに浮かび出ているのではないか。

第二点目の問題は、以上の「人称世界」の議論、「三人称の私」の問題を見たうえで、二つに、本稿が触れたいのは、花崎がそれを「人称世界」の議論として立てようとした問題意識を、現在の人文学や社会科学さらに臨床科学の場面に新たに起こっている理論動向に接続するところ、ナラティヴ・プラクティス、ナラティヴ理論につなぐ関心についてである。

詳述の紙幅はもはやないが、少しだけ具体的なことでいえば、ナラティヴ理論では、物語化することで自己の中に二人称としての自己を呼び出すダイアローグが主題となる。これは、花崎の「三人称の私」の議論に非常によく符牒する考え方だということである。この場合、ナラティヴ・アプローチでは、ダメな無力なオレや、カラッポな藁人形のようなボク、周囲と上手くいかず問題ばかり起こすヤツのことを、自分の中の他者のように語る・物語化するが、それを三人称化して自分の外部におくことで真の自分を助け出そうというのではない。そういう自分とどう付き合うか、向き合い方を問うという手法をとる。自分の抱えた厄介な問題をどうケアするか、その「弱さ」を認め弱さにおいて同様の問題を抱えた者同士が他者として出会っていく。ナラティヴ・アプローチはそういうつながりを作っていくうえで有効な方法とされ臨床場面でも取り入れられているのである。現在、アルコール依存症など各種アディクション問題の症状を抱える当事者グループでも、それぞれの自分の中の弱さやダメな部分を語ることにより、問題を外在化し、回復を図る取り組みの中でも関心を持たれ実践されている方法でもある。（金井2012）

このナラティヴ・プラクティスは、哲学の中の主客二元論の認識論を書き換える可能性にも繋がっているのではないか。そのことが、哲学の世界からの関心を呼んでいるのである。こうした現在起こっている臨床知の世界の動きに花崎の「人称世界」論が接続されたなら、また別の可能性が拓かれるかもしれないという予感が私にもある。というのも、臨床現場の上記のようなアディクション問題を抱える当事者同士のグループ・ミーティングの場面では、会話的コミュニケーションのナラティヴ共同体の関係性において、どこかで主体内部のスピリチュアルな自己覚醒や回心の決定的な契機が不可欠とされることに気づかれていて、それがなければ、ナラティヴ共同体もかぎりなく内側に共依存的関係に閉じてしまう。覚醒や回心の主体内部に起こる、それを促すものがなんなのかという関心からの問題である。

花崎の人称世界の議論から惹起されたナラティヴ理論への接続という問題意識で言いたかったことは、以上のようなことである。そういう視点を持ち込まなければ、花崎の知的格闘は、自他関係の閉域から抜け出ることは難しいのではないか、そういう視点を持ち込めば、花崎皋平の「ナラティヴは一つの〈生〉である」世界から聴き取るべき声と出会い、そのナラティヴの世界の独我論的モノローグの世界を拓く一つの回路も作れるのではないかという思いもある。

Ⅶ. 脱・近代的価値への「いのちの視座」 思想的磁場の重なりとずれ

花崎その人を「回心」の人、常に自己への内省的思考を通して普遍的なるものを求め、そこから共生の「倫理」を説く人と位置づけ、しかしそうした思考が、差別論を論ずる上での、花崎の「躓き」となってはいまいかいうところからスタートした。そこから浮き彫りになったのは、花崎の「共生の倫理」vs.菅の「反差別の倫理」の問題構図であった。さらにまた、両者の「共生」

「平等」への考え方の対立を以下のように確認することともなった。

花崎哲学ワールドの「共生論の世界」は、「近代的人権思想、ピープル普遍主体像、アニミズム的自然観、本覚的平等思想に特徴づけられる〈いのちの対等〉の思想の共生の倫理を見る」ところにある。菅の「反差別の倫理」は、「近代的人権・ヒューマニズム批判、反差別運動諸主体の抗争的ネゴシエーションの場からの、非規範的共生の価値の導出」を志向する。このような対立構図を取り出したのであった。

本稿が花崎共生論を評するにあたって立てた三つの概念――「ピープルネス」の規範性、「いのち」の平等観、「三人称としてのわたし」の人称論――を検討してきて、そこから明らかになってきたのは、花崎の思考を特徴づける次のような側面であった。すなわち、実体としての被差別者・被抑圧者の現実変革力に対する過剰な思い入れともいうべき傾向であり、その自然観のアニミズム的世界観や「本覚思想」にも通底する自然観であり、さらに「三人称としてのわたし」の人称論の「他者不在」のスタティックな構造であった。

花崎共生論に対して抱いた〈違和〉の所在をこのような三つの問題において描き出したたのだが、しかし、まだそれらが花崎の思考と生き方の探求を特徴づけている「回心の人」の実存的基盤のところにある思想の核ともいうべき問題を捉えきれていないのではないか、という思いは残している。おそらくはそれは、花崎哲学の西田哲学とつながっていくところの問題、すなわち「絶対者と逆説する」という言葉に象徴される「回心」の主題とも無関係ではないのではないか。花崎の生き方の探求の根底にあるキリスト教の問題、大いなるもの・絶対や救済への志向性の問題と関係してくることであろうことの予感を抱いているのだが、もはや踏み込む紙幅はない。[8]

求道者の姿にも重なる回心の人の生き方に敬意を表しつつも、共生の論理と倫理、共生へのモラルが説かれることについての違和は残ることについて改めて確認しなければならない。「反差別への論理と政治」の視点を欠いた「共生の倫理」は、現実世界の差別や抑圧をめぐる問題状況の対立抗争に満ちた現実世界の、そこにある多様な声やニーズ、「求め」を時に封殺してしまうことにもつながりかねないからだ。そのことへの危惧が、本稿をして、花崎共生論への〈違和〉の問題と向き合わせこととなった最大の問題であることは確認しえたかと思う。

最後に、以下限られた紙幅で論及しておきたいことは、脱・近代への共生の思想原理を問う視座において私と花崎の思想的関心はかなり重なっているという問題についてである。とくに「いのち」や「女の身体性」、「産」や「育」が視界に入ってくるところでの、田中美津のウーマンリブや森崎和江の「女の思想」に寄せる関心と問題意識にそれは顕著である。かなり重なり合う思

---

[8] 本稿では、アニミズム的世界観と本覚的思想との自然観の二つを取り出しているが、しかし花崎の中では、これら二つは別のルーツ、すなわち前者は、アイヌ先住民族のさらに水俣の人々の土着のアニミズムに対する畏敬の念に起因するが、後者については日本精神の源流としての本覚思想の仏教的起源というよりは、花崎の中にある生き方の探求における宗教的あり方が関わっているのではないかということも浮かび出てきた。花崎のアニミズム的世界の自然観と本覚的思想に特徴づけられた自然観は、そのままつながっていくかに見える（本稿もそう論じた）が、どうもそうではなくて、花崎の思考の中での本覚思想の道元や親鸞へのそして西田哲学との結びつきを媒介するものは、宗教的主体性の意識が関わっている。

つまりアニミズム的世界観と本覚的思想との自然観の二つは、そのまま重なりあうものではない。そのことに留意しないと、花崎の思想世界にあるコアな問題を取り落とすことになるかもしれない。そう考えるに至ったのは、前節での「三人称のわたし」の問題の根底にあるものが、むしろ花崎の生き方の探求にあるキリスト教の問題（大いなるもの・絶対や救済への志向性）が深く関わっていると考える方が、理解しやすいと気づかされたことによるものである。この自らの主体・存在を支える精神的よりどころへの問いは、先に、花崎哲学の西田哲学とつながっていく「絶対者と逆説する」という言葉に象徴される「回心」への、もう一つの生き方の探求へと花崎を駆動する思考の核として指摘した問題につながっていくのではないかということである。

想的磁場にあって、私と花崎とが共生への倫理的視点として何を導き出しているか、その思想的磁場の重なりとずれ（距離）について言及しておきたい。

私もまた倫理学研究という場に身を置く立場上からの思考のさがというか癖・体質として、個別・特殊の事象よりは「普遍的なるもの」への価値志向が強い。「共生への価値」の理念づけや普遍的価値の志向において、私自身が主要に関わってきたフェミニズムやウーマリブの運動と思想に深く思い入れをし、そこから得たものすなわち「女性」に被差別者・被抑圧者の普遍的主体像を重ね解放への現実変革力を期待するという傾向が私にもないわけではない。したがって花崎の「ピープル主体像」に対して呈した違和・批判は、「〈女（わたし）／母〉の一人称・身体性」を立てての「反差別」「共生」論に、そのまま自己参照的に問い返されてくる問題でもあるのである。

おそらくはここにおいてこそ、本稿が花崎皋平を参照軸として、私自身のフェミニズム・倫理学の現在的な地点にある問題意識、確認しようとしたことの意味が明らかになるであろう。すなわち、私の「〈女（わたし）／母〉の一人称・身体性」を立てて問おうとしていることと、花崎がピープルネスと「三人称としての一人称」をもって脱・近代への変革の主体像を提示することとの、両者の見ている課題・問いの先にある社会の解放イメージやその主体像の違いを明らかにすることにつながるのではないかと考えるからである。

ビブリオグラフィに明らかなように、花崎にとっても、リブとの出会いは「己の男性イデオロギーと家父長制的意識」との厳しい対峙という課題を突き付けられた決定的なともいうべき回心のひとつの契機となっている。もとより私にとってのリブがフェミニズムの原点であることは論を待たない。そしてまた両者が、森崎和江の「女の思想」からのインスパイアによって「いのちの視座」を論じている。こうした重なりを意識しつつも、そして花崎のリブに対する深い思い入れをむげに否定はできないと思いつつも、やはり疑問・違和を呈さざるをえない。花崎にとってのリブとは、「女の思想」とはなんだったのか、フェミニズムから何を受け止めたのか、以下、私と花崎それぞれが田中や森崎に何を見て、脱近代への「いのちへの視座」に何を引き出しているかに焦点化して、本稿が「〈回心の倫理〉ではなく〈求めの政治を〉」の主題に託した問題意識につなぎたい。

Ⅷ. ウーマンリブ／フェミニズムからの共生論 「〈女（わたし）／母〉の一人称・身体性」から

花崎のいのちへのまなざしには、一方に、風土、自然に溶け込んでいくいのち観と、他方に、しかしそれとはまた別の文脈での、フェミニズムやリブ運動への思い入れを背景とするいのち観がある。リブの女たちを友として女たちのエロスの世界を賛歌し、いのちの継承にかかわる女たちの世界の産の営みへの深い畏敬・畏怖の感情に根差すいのちへのまなざしである。他方で、森崎和江の「おんなの思想」石牟礼道子の「苦界浄土」の世界、九州・水俣を舞台とする土着のリブともいうべき、女の身体性を介した土着のアニミズム的なものにもつながっていくいのちへのまなざしがある。森崎たちの表現世界への花崎の深い傾倒があり、私自身も強くインスパイアされるものを受けとめている[9]。

---

[9] 九州・水俣を舞台に近代批判への深い視座を問うてきた石牟礼道子や森崎和江たち女性の表現者・思想家たちがアニミズム的世界の人類史の行き行き着きそこで本覚思想とも出会い、そこに「ナショナリズムに回収されない土着の精神性」の意味を見ようとしていることは、留意すべきことであるかもしれない。石牟礼と鶴見和子の『対話まんだら、言葉果つるところ』でも、二人の対話は、民間信仰としての自然宗教・アニミズムのその基底に、人間と自然がともに生きあっている、その姿そのもの

ところで田中美津については、彼女の言葉に「わかってもらおうと思うは乞食の心」があるが、これを関係の非対称性を見事についた一言だと評し、花崎は「子殺しの女」に向ける田中美津のまなざしと表現に向き合わされて、自分も「女殺し」「子殺し」の男だというところへ追い詰められる思いがしたことを吐露している。（花崎1993.192）田中美津こそ「自己否定が持つ観念性をふりほどいて、生の痛みの場所から考えるというリブの思想を、新しいパラダイムを拓いたものとして位置づけ」うる女性思想家として最大級の賛辞を惜しまない。

さらに李静和の『つぶやきの政治思想――求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』（李 1998）の表現世界を評しては、ここでも、田中美津の先の言葉のもつその思想的ラディカルさに深く呼応する「生の痛みからつむぎ出された思想」が李静和の中にあることに出会って強く感動したことを語っている。まさに李の「ひとりの女の物語」の語りも、「徹底した一人称の営みだ」と評しているのである。（花崎2002.77）

だが上記のような田中や李に向けた賛辞が以下のような花崎の言葉に繋がっていくとき、田中美津のリブや李のつぶやきの政治・求めの政治の言葉をどの深さを受け止めているのかに、疑念を呈したい思いがもたげるのである。

「おんなが　子どもを育てること　そこに　世界がはらまれる　献身の豊穣」（花崎2015）。

「友の自宅出産を介助したことがあった　あたらしいいのちの誕生は　祝祭　美　創造　後産の胎盤は　暁天に星座が浮かぶ宇宙さながら　人が生まれることの　神秘があった」（同、下線引用者）

詩集の中の花崎の言葉であるが、生きとし生けるものすべてを平等とする「存在の平等」、いのちの世代的継承、産と育に関わる母性の神聖視が呈される。これらのことばの端々から垣間見える母・女の身体性への崇拝視にもいささか違和感がないわけではない。下線を付した箇所には、「いのちへの関わりの女と男の間にある決定的な非対称性」を見た思いがある[10]。

そもそも田中美津の「わかってもらおうと思うは乞食の心」の言は、男性である花崎に「妻に中絶させたこと」への懺悔の告解などを求めているものではない。なによりも女たちに向けて、おんなたちがつながり合うために、女たちの中に走るさまざまな分断・対立を越えて――女たちを分断する民族や国家、セクシュアリティ、「過去の被害」による分断――「出会い直す」ことに向けて発せられたことばである。女性自身の主体内部の自己との向き合い、女としての自らの「痛みの感覚」の回復に向けた呼びかけであり、「エロスの回復」であり、それらを通しての「自己肯定」であった。女の身体に記憶された「痛み」を通してつながり合う回路を求めて発せられたもの、そのような女たちにとって、そもそも女にとっての「産」の経験と意味、いのちの育み

があって、そしてその中に、仏教の南無阿弥陀仏を受け入れる、そして同じようにキリシタンを受け入れてきた土壌があるのだと、人間の精神の奥底に刷り込まれた風土、風景、身体の居場所に関わる親密圏があるのだと、意気投合のたいへんな盛り上がりであったことが印象深く残っている。「女／母」の一人称・身体性から反差別へのフェミニズムの要求を手放さずに、しかしフェミニズムが志向する反差別の思想的境位には、森崎たちのまなざしが捉えようとしている「風土、風景、身体の居場所に関わる親密圏」や「ナショナリズムに回収されない土着の精神性」の意味を問い、そうした共生やスピリチュアリティを要請する余地を残しておく必要があるのかもしれない。

[10] 拙著（金井201.297-8）で、いまも奥アマゾンで一万年にわたって独自の文化と風習を守り続ける人びと、ヤノマミ族のなかにあるという、産んだ子を精霊のまま手に送るか、人間として抱きとるか、すべて母親である女が決めるという風習があることに触れ次のように記した。避妊の知識もなく共同体の維持存続ギリギリのところで取られてきたさまざまないのちを間引く手法は、時代や社会が違っても、女たちの身体の経験には刻印されているであろう。女の身体のこの究極の自己決定は、「女のうらみ」の感情の、女たちの深層の集合意識に引き継がれているであろう。それに一切の口出しをせず見てきた男たちの内側には、この女の身体の自己決定に対するすさまじい恐れの感覚が潜在しているかもしれない。男たちのその潜在意識が、男たちを暴力に駆り立て、それが男の女に対するミソジニーの感覚にもつながっているかもしれない、と。

にかかわる問題は、無条件に賛美や神聖視の対象としては語りえない。いのちを語ることにおいて「おんなの経験」の原点に立つとき、「いのちを観賞する」花崎の目線と、「いのちを生きる」おんなの身体性との、いのちへの関わりは、決定的に非対称的であるだろう。このことを考え抜くところに、おそらくはひとつ、脱近代への視点の模索における私と花崎との重なりとその距離に関わる問題を解く鍵がありそうに思える。

わたし自身が田中や森崎たちの表現世界に深く揺さぶられて、しかしそれを自分自身の中で自分の言葉にしえないもどかしさに呻吟する中で、花崎が彼女たちの世界に共鳴し、男としての自らの回心への決意を表明されたりすることに、あなたに評価してもらったり、あなたに謝ってもらうといったそういうことではないのだ、これは「女の身体性」「女の経験世界」のそれぞれの痛みの中から自らを救いだす、語りであり、求めであり、政治の言葉であるのだ。この花崎と私との間の、田中美津や森崎さらに李に向けるまなざしの重なりの、しかしそこにある距離、私の側の違和感の拠ってきたる問題がここにある。

人称世界の議論に関わって、本質主義批判を招くことを承知の上で、女の身体性と一人称問題、女の身体が経験する「他者を呼び込む身体」の側面について、概念化した「女(わたし)／母」の一人称に触れよう。

そもそもこの「女(わたし)／母」という一人称主体こそ、私が森崎から受け止めた脱・近代への深いまなざしであった。森崎が、「女の一人称を不在化させてきた近代への問い」の中で、日本語の表現において女の一人称を語る言葉の不在に気づき、「胎児を内在化させた（わたし）へ」思考を深め、そこから「〈いのち〉の根への考察を欠いている」近代という問題意識を重ねている。そうした文脈を踏まえて立てた「女(わたし)／母」である。

したがって英語で〈私（おんな）〉のニュアンスを踏まえた表現はA Woman（Me）であり、このA Woman（Me）は、性の社会的構築性の含意を担保するジェンダーカテゴリーとしてのMan/Womanには納まりきらないのではないか。このような問題意識から一歩踏み込んで、ウーマン・リブの立てた〈女(わたし)〉の一人称に、あえて「母の経験」「母の身体」への問いをフェミニズムの女の一人称として担保しておきたいために、「〈女(わたし)／母〉の一人称・身体性」を提案するに及んだのであった。

この〈女／母（わたし）〉の一人称を英語で表記すれば、A Woman/Mother（Me)sとするか、あるいは森崎のいう「胎児を宿した女／母の一人称」の含意で言えば、A Woman/Mother（Me）in the first Person internalizing the Otherとなろうか。「近代」への対抗視座をどこに求めるかという問題意識からの「女／母（わたし）」と言う一人称には、このような問題意識が託されている。「女(わたし)／母」の一人称主体・身体性のテーマは、花崎の「三人称としての私」の人称世界の議論が陥っているモノローグ的世界への対抗視座となりうるのではないか。少なくとも「女(わたし)／母」の一人称主体・身体性からの倫理への眼差し・問いは、女の身体の経験を通った言葉、求めの政治・つぶやきの政治、記憶の政治につながっていくものであろう。まさにそこからのそこでの諸当事者の声からの倫理の立ち上げであろうからだ。「〈回心〉の倫理ではなく、〈痛み〉の政治を」の本稿テーマに託した含意である。

私にとっての共生論の現場はフェミニズムであるが、この世界では、もはや「女として同じ」ではつながれないまさに多声的な世界である。それは女性内部のマジョリティとされる側の「女であること」の経験の現在的な「痛み」、それは、ポスト・コロニアル思想家、スピヴックの言葉で言えば、現在のグローバリションの下での「女性身体再領土化」ともいうべき問題への気づきの深さにおいて、その「想像力の連帯」によって成り立つ「女の連帯」というべきであろうか

らだ。「痛みの政治を」ということはそういうことである。

Ⅷ. おわりに　　回心の倫理ではなく、痛みの倫理を

〈回心〉の人の説く倫理世界は他者を不在化させる。〈求め〉の政治を通って、他者が抗争的に出会うポリォニックな声の場、イマジネーションの共同体を呼び起こすには何が問われているのか。共生を倫理という言葉で性急に説くその手前に踏みとどまって、反差別のラディカリズムが、「相互了解の夢想」のかわりに、「了解不可能性への躓き方」の知恵を掘り起こしていく「場」をつくるために、「つぶやきの政治・求めの政治」を問い続けることが問われている。忘却の暴力に抗して「私たちの歴史」という塀域の外への回路に拓かれる出会いのための「声の場」を、トラウマ化された記憶の奥に降り立ち、死者の声を聴き、あなたを忘れないために。

求めの政治・痛みの倫理の言葉は、李静和の「求めの政治」から強く触発されたものである。李静和たちのアートという実践による、「アジア・政治・アート」というプロジェクトの、アートを介した不意なる遭遇において、アジアという地域を領土的観念とは異なる共生の場として新たに思考し、そして、政治を敵対性代表制といった制度的観念とは異なる間身体的な作用として感覚するという可能性を拓こうとする試みに関心を向けたい。過去の戦争による「被害の分断」を越えてアジアの女性たちが出会い直すために。次の言葉を引いておえたい。

> 大切なのは、これまで出会うことのなかった人たちとその人たちによって生きられた時間を、今に呼び返し、その時間を私たちがともに生き直そうとする困難を共に迎えることである。そのとき求められているのは、無防備なままに身体の共振にみずからを委ね、私たちが「私たち」というカテゴリー化の働きにおいて遠ざけ傷つけているかもしれぬ人たちとの共生を模索する「求めの政治学」（李静和）にほかならない。むろんその求めが容易なことではないことは確かだが、しかし、求めにおいてこそ、音と言葉が真に生きられるものとして具現化し、同時に身体そのものにありうべき変容を促していくはずである。（李編2009、p.28）

参考文献

青山俊薫師　1994年　『典座教訓　すこやかに生きる』大倉出版

石牟礼道子　1969年　『苦界浄土』講談社

今村仁司編訳　2001年　『現代語訳　清沢満之語録』岩波書店

賀来弓月　2014年　『インド現代史　独立50年を検証する』　中公新書

金井淑子　2011年　『依存と自立の倫理　女／母の身体性から』ナカニシヤ出版

――― 2012年　「〈女〉と〈女／母〉の間――ナラティヴ／トラウマ・アプローチから」立正大学人文科学研究所年報・別冊18

――― 2012年　「身体を悪魔払いしない〈哲学としてのフェミニズム〉」「立正大学文学部論叢」135号

――― 2013年　『倫理学とフェミニズム・ジェンダー、身体、他者をめぐるジレンマ』ナカニシヤ出版

金井淑子編　2014年　『〈ケアの思想〉の錨を―3・11、ポスト・フクシマ〈核災社会〉へ』ナカ

ニシヤ出版
菅孝行　1982年　『FOR BIGINNER'S 差別』現代書館
菅孝行編　1994年　『いまなぜ差別を問うのか』明石書店
最首悟　1984年　『生あるもの皆この海に染まり』新曜社
――― 1998年　『星子が居る――言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房
差別を考える会編　1994年『年報　差別問題研究2　在中・フェミニズム・差別の構造』明石書店
末木文美士　2015年　『草木成仏の思想　安然と日本人の自然観』サンガ
スピヴァク、ガヤトリ・C　1998年　『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房
竹内整一　2014年　『「おのずから」と「みずから」　日本思想の基層』春秋社
田辺明生　2012年　『カーストと平等性－インド社会の歴史人類学』東京大学出版
田村芳朗ほか　1973年　『天台本覚論』岩波書店
鶴見和子　2002年『鶴見和子・対話まんだら　言葉果つるところ　石牟礼道子の巻』藤原書店
花崎皋平　1972年　『力と理性』現代評論社
――― 1988年　『静かな大地』岩波書店
――― 1989年　『民衆主体への転生の思想』七つ森書店
――― 1981年　『生きる場の哲学』岩波書店
――― 1993年　『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房（増補版2001平凡社文庫版）
――― 2002年『〈共生〉への触発　脱植民地化・多文化・倫理をめぐって』みすず書房
――― 2009年　『風の吹きわける道を歩いて――現代社会運動私史』七つ森書店
――― 2012年　『詩集　風の通る道』北漠社
――― 2015年　『詩集　いのちへの旅』地湧社
森崎和江　1998年　『いのち、響きあう』藤原書店
李静和　1998年　『つぶやきの政治思想――求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたるものへ』青土社
李静和編　2009年　『残傷の音　「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店

共生とアイデンティティの思想*

Thoughts of Coexistence and Identity

花崎 皋平
Kohei Hanazaki

李静和所長冒頭挨拶

皆さん、こんにちは。この何日か東京は雨で、花崎さんが北海道からいらっしゃるので心配しておりましたが、今日はびっくりするくらい晴れて、良かったと思います。今日はこのアジア太平洋研究センター主催で、共生とアイデンティティの思想をめぐって、花崎皋平先生をお迎えし、講演会を開くことになりました。この教室で加藤節先生がなさっている「政治学原論」の授業とのコラボレーションのかたちになります。

研究センターの所長として挨拶をしたり、あるいはゲストの方をご紹介したりという時に、日本のマナーとしては、あまりプライベートなことを混じえずに客観的にお話するのが礼儀正しいとされていると思いますので恐縮なのですが、少しだけ触れさせて下さい。

私は韓国生まれで朝鮮半島から来まして、今はこうして成蹊のメンバーとなっておりますが、日本に来て本当に大事な友人たちに出会いました。友人というよりも、尊敬する方たち、それから一緒に生きる同志のような友人たちにも出会いました。その一人であり、本当に心から尊敬する花崎皋平先生を今日ここに、このキャンパスにお迎えできることを心から嬉しく思っています。

昔も今もではありますが、私たちにとって緊迫、あるいは抑圧的な状況が生まれているかと思います。私のように学生時代、本当に恐い時代を過ごして何とか免れ、こちらに来ている韓国の人間としては、最近の雰囲気はどこか抑圧的で、目に見えない重たい空気があります。唯一精神の自由を保っているアカデミア、大学のキャンパスの中にも、何となく重い空気が漂っているような気がします。それでもなお考えてゆく、自由な精神を保ち、個人を尊重し、風を感じ、楽しいことを考え、夢をもって一日一日を行きぬくことをどういうふうに保っていけるか、ということを考えるのを許された唯一の場所というのが、大学のキャンパスでもあるかなと思いながらここにいます。

そういう意味で、60年代以降の半世紀以上、歩きながらいろいろな人々と出会って、学んで、読んで、やはり書き続けてこられた花崎先生。本当にしなやかで、しかし強靭な精神を、静かに実践なさっている。朝鮮半島では文人と呼びます。静かに、しかし言葉の力、そして友だちの友情を信じて、ずっと長い間やってこられた花崎皋平先生を、今日この欅のキャンパスにお

---

* 本稿は、2015年7月10日、成蹊大学にて行なわれた講演会「共生とアイデンティティの思想」（主催：成蹊大学アジア太平洋研究センター）の内容をほぼ忠実に再現したものである。なお、質疑応答については紙面の都合上割愛した。

迎えでき、ご紹介できることを心から嬉しく思っています。長くなりましたが、では皆さん、花崎皋平先生を拍手でお迎え下さい。（拍手）

Ⅰ.「亡国」の憂慮のなかで

花崎皋平と申します。今、李静和先生から、――先生という言葉はあまり使いたくないのですが、大学ですから先生とお付けします――身にあまるご紹介を頂きました。大事なことをおっしゃってくださったので。一つ私は、歩くということをとても大事に思っていたことと、いい友達をもつというのが私にとっての大事な宝だという思いを持ってきましたので、そういう点でご紹介頂いたことを大変嬉しく思っています。

今日は「共生とアイデンティティ」というタイトルを頂いたのですが、それについてはいろいろな語り方があると思うんですね。理論的に、政治思想、政治理論の側からの語り方もあると思いますが、大学生の方、それから市民の方との対話ということを考えまして、具体的なかたちでお話をさせて頂きたいと思っております。具体的な、と申しますのは、「民衆思想家」たちに注目するという姿勢を、近年とってきております。そういう民衆思想のにない手の話を主にするということに致しますが、その前置きみたいなこととして、『世界』の7月号に、敗戦後70年の感想を書いたものがお手元に渡っていると思います。それはあとで読んでいただければいいのであまりお話しませんが、アイデンティティということは、一人ひとりが、自分の考え方・生き方の座標軸をかたちづくるということ。それがアイデンティティをもつということではないかと思っております。ですからいろいろなアイデンティティのあり方があっていい。自分で選んで、自分で、ある意味では編集して、自分はこれだというふうに自分で決める。とりあえずそういうことを基本に据えるといいのではないかと思っています。

なぜそういうことを考えるようになったかというと、『世界』の文章のなかで挙げましたが、内村鑑三という明治のキリスト思想家から学んだことがあります。内村鑑三の書いたことのなかにこんな言葉があります。「滅ぶべき日本あり、滅ぶべからざる日本あり。貴族、政治家、軍隊の代表する日本、是れ早晩必ず滅ぶべき日本にして、余輩が常に預言して止まざるの日本国の滅亡とは此種の日本を指して云ふなり」。「然れども、之と同時に亦亡ぶべからざる日本あり、即ち芙蓉峰千古の雪と共に不変不動の日本あり」。芙蓉峰というのは富士山ですね。「是れ勤勉正直（せいちょく）なる平民の日本なり、天壌と共に無窮なる日本とは此の日本を指して云ふなり。是れ蜻蜓（せいてい）洲が太平洋の底となるまで決して亡びざる日本なり」。蜻蜓洲というのはトンボが乱れ飛ぶ場所という意味で、昔から日本のことを指す言葉です。「余輩が忠実ならんと欲するはこの不朽不滅の日本に対してなり、彼の暫時的にして、蜉蝣的なる貴族、政治家、相場師の日本に対しては余輩はただ憤怒あるのみ、憎悪あるのみ」。蜉蝣的なるというのはボウフラのようにふらふらしている、という意味です。こういう激しい言葉で、このままでは日本は滅びるぞ、という言葉を発しております。

彼は二つの「Ｊ」を愛すと言っています。英語の「Ｊ」ですね。一つはジーザズ・クライストの「Ｊ」、もう一つはジャパンの「Ｊ」。彼の愛するのは平民の日本です。この考え方から私としては、自分自身のアイデンティティを選び取るべきだ。貴族、政治家、軍隊を選ばずして、勤勉正直（せいちょく）の平民を選ぶというあり方です。

この「亡国」、このままでいったら日本は早晩亡びるぞという言葉は、同じ明治期に、田中正造が、衆議院で「亡国論」と称される演説をしています。足尾鉱毒事件のことはご存知だと思い

ますが、その時に奮闘して、明治天皇に直訴した話が教科書に出てくる人です。彼は鉱毒を出す足尾銅山を即刻停止させてくれ、という要求を政府に出し続けるのですが、鉱業停止を要求する渡良瀬川沿岸の住民たちが、東京まで歩いて請願をしに行こうとしました。これは「押出し」と呼ばれていたものです。それを警察と憲兵が阻止して解散させた「川俣事件」というのがあり、それに憤激して衆議院で演説した。馬に乗った警官と憲兵がサーベルを振って「この土百姓、土百姓」と言ってなぐりつけて蹴散らした。これは人民を殺そうとしたに等しい。人民を殺そうとするならもう国は亡びつつある、いやすでに亡びているのである、という大演説を行ないます。そういう先人たちの、これでは国は亡びるぞ、という考え方は、戦後70年を経て、今あらためて、かみしめなければならないと思っております。

私が知る限り、太平洋戦争中には、敗戦後東大総長になる矢内原忠雄さんが、無教会派のクリスチャンで、自分の主催している小さい集会で、「神様どうか今の日本を滅ぼして下さい」と祈ったということが弟子によって伝えられています。そういう憂慮をもった思想家たち、例えば今、田中正造や内村鑑三や矢内原忠雄がいたら、今の状況をどう言うだろうな、ということを思わざるを得ないです。そういう意味で今の時代に学ぶべき民衆思想家として、今日は、一人は田中正造、そして戦後の1960年代に、『苦海浄土』という水俣病についての記録作品から思想文芸活動を出発させた石牟礼道子の二人についてお話をしたいと思います。

Ⅱ．民衆であることに徹する ― 田中正造をめぐって

田中正造については今、日本のなかで研究者は少ないのです。研究される方は、衆議院での田中正造の活動、そして直訴に到り、そしてそのあと、谷中村が廃村にして、鉱毒水をためる遊水地にするために、谷中村の人たちを全員追い出すという事件が起こるまでの田中正造を論じています。しかし私はそのあとがとても大事だと思っております。

田中正造の足尾鉱毒事件での闘いは、闘って闘って、銅山の操業停止という目的は果たせず、むしろ銅の生産活動は盛んに行なわれる状況で。闘いは敗北に終わるわけです、田中正造は政府の谷中村をつぶす活動に抵抗した人たちと生き方を共にします。最後に16戸が住まいの強制破壊に抵抗してとどまるのです。大雨のなか、その人たちといっしょにその場に座り込みます。そして、彼は、この谷中村の農民たちを見て「発明した」したといいます。自分が暗かったところを明らかにさせられたというのです。当時の小農民の多くは、文字を知らないのです。無学で、日々の生活に追われている。この人たちに「神を見る」という言葉を書き残しています。谷中村の人々から学ぶ。それまで彼は、この人たちを何とか教えて闘いに立ち上がらせようという指導者的な立場だったのですが、これ以後は、一番下層で粘り強く闘う人たちの仲間に入るということを心がけました。それ以後、被害民の若者たちを連れて、あるいは一人で、たくさんある渡良瀬川の支流を一筋一筋歩くのです。そして沿岸の人たちに、いつのときはどこまで水が来たか、あの洪水のときはどうだったか、ということを聞いてそれを記録に残してゆく。洪水が起こると鉱毒水が田畑に流れて田畑が荒れてしまう、政府の側は近代的な土木事業で流す道を変えたりしようとした、正造は、その国側のあり方を徹底的に批判します、それ以降は、自分を「今は治水をいう者なり」と考えるようになります。一筋一筋の支流を徹底的に歩くなかで書いた日記と手紙が残っております。木下尚江という正造の同時代の思想家で田中正造を非常に尊敬した人が、『田中正造の生涯』という本を作っているのですが、晩年の田中正造を聖人という言葉で讃えています。私は復刻されたその本を読んでから田中正造に強く惹かれるよ

うになりました。

田中正造の思想のことを述べましたが、彼は歩くことを通じて自然に触れることを自分の方法にしています。私も歩くのが好きで、よく歩くんですけれども、歩くことと思想をかたちづくることとは深いつながりがあると思っています。思想とか勉強とかいうことは、うつむいて集中して机に向かうこと、それは大事なことで、それなしには思想を形成できませんし学問もできませんが、それと同時に仰向いて、歩きながらものを考える。まとまらないと言えば、まとまらない。漠然として、細かいことは考えられないのですが、広がりのある大まかな枠組み、そういうことを考えるには歩くほうがいい、と私は個人的に思っております。

歩くことの意味、大事さということを考えるようになったのは、田中正造と、それからもう一人、北海道をくまなく歩いて「地理取調日誌」を残した松浦武四郎を知ってからです。松浦武四郎も北海道中をくまなく歩いて、アイヌの人たちに道案内をしてもらって親しくなりました。そういう人たちが、私にとっては導きになる人です。そういうふうに歩いているうちに、人間と自然が価値において対等･平等であるものに見えてくる。環境保全とか環境保護というと、人間の生活を基準に、人間にとって大事な環境だから大切にしましょう、というのが大方の環境保護の考え方ですが、田中正造の場合は違うんです。そうではなくて、自分がむしろ自然と一体化し、自然の一部としての人、と考える。田中正造はよく人類という言葉を使っていますが、これは魚類、鳥類と同じ目線で人類と言っているんです。人だけ高尚なものという考え方は否定しています。こういう自然との一致、全体としての自然の一部として考える環境思想というのが、日本だけではなくて、20世紀後半になってからですけれどもディープエコロジーという言葉で主張されるようになっています。だから田中正造だけの孤立した考えではないです。

それから三番目に、民衆であることに徹する生き方に神に通ずるものを見る、という。田中正造自身が､自分はまったく学問のない農民だ､といっています。いわゆる近代的な学校には行っていない、寺子屋で昔の儒教の勉強をした人です。議員になってから自分で勉強していますが、生涯、自分は無学であって、愚か、愚であるということに徹底しています。そして農民は偉い官吏などからは無知蒙昧だといわれる。彼の場合はそれを逆手にとって「衆愚は人に愚にして、天に愚にならず」。農民が土地を守って、政府のいうことを聞かない、何て分からない奴だというふうにいわれる、それは違う。農民が自分の経験に根ざして主張するときは、それは50年、100年、その土地に受け継がれていることに根ざして考えているのだから、それを否定することは間違いである。（政府は）谷中村の農民を強制的に移住させようとするんですね。そのときに農民とはその土地に400年も生えている大木のようなものだ、その大木を根っこごと引抜いたら死んでしまう。別のところに移すことはできないのだ。その土地と農民のつながりというのは、農民がその土地を商品なり、モノなりとして所有するのではなくて、むしろ農民のほうがその土地に属して、所有されている。そういう考え方を表しているんです。鉱毒地で耕作してはいけない、といわれているところを耕させろという陳情書を出したときにも、耕す土地は、谷中村の人たちが利益をこうむって､できたものを食べなくてもいい､そこを耕す人は中国人でもいい､どこの国の人でもいい、さらに人でなくてもいい。作られたものを鳥が食べてもいい、その土地にとってはそこに作物が育つこと自体、土地が生きることなのだから、そういうことでもいいという主張をしています。

田中正造は死が近くなると、神ということをしきりにいいます。もともとはキリスト教の影響を受けた人ですが、神というのは天地自然の規則的な運行にある。天地自然は、この人には雨を降らそう、この人は日照りにしてやろうというような差別をしない。すべてに平等な働きをする。そういう天地の働き方は、神が自然と人間に対する、人になぞらえていえば、愛して

いる姿なんだといいます。田中正造は最晩年の70代になる頃、そういう神の考え方に至ったと私は考えています。

そういう神の考え方は、日本列島各地に昔からある考え方に根ざしていると思っております。たとえば私は北海道でアイヌの人々と付き合っておりますが、アイヌの人たちの宗教、宗教と言っても教義がある宗教ではないんですが、カムイという言葉で自然のなかに至るところに、自然そのもののなかに宿る神様をうやまう、そういう考え方と、田中正造は繋がっているなあという思いをもちました。

彼は、このまま科学技術の発達を無条件に進めるようなことでは、文明そのものが亡びてしまうだろうという考えを晩年に残しております。

Ⅲ．石牟礼道子と水俣病

戦後、1950年代の末からですけれど、水俣で多くの方々が有機水銀中毒の被害を被りました。そのことを深く受け止めて思想にされた方に、石牟礼道子さんがおられます。思想家というと男性を思い浮かべるというのが常識です。女性に思想家なんていないんじゃないかと思われたりいわれたりすることがあります。というのは女性の方で思想についての著書を持つ人があまりいないせいもあると思うんですね。ただ、それはおかしい。というのは、住民運動であちこちを歩きますとよくわかるんですけれども、原発反対とか海を守れとか、地域の環境を守る運動で、決定の場に女性が参加して意見をいい、お茶汲みをしているのではない運動体と、男だけが座って話をしていて、女性はお茶汲みをしている運動体、に分かれるんですね。女性が活躍している運動体とか住民のグループは粘り強いです。簡単に負けない、いったん負けてもなお粘り強く活動を続けるという傾向があります、これは経験的な観察ですけれども。それは、女性のもつ思想性と関係があるんじゃないかと私は感じております。女性の中でも、ものを書き、そこに優れた思想が宿っている方の一人として、私は石牟礼道子さんをとても大切に思っております。石牟礼さんは主に小説とエッセーを書かれて、そのほかに詩歌もあり、晩年にはお能の台本を書かれたりしております。全集は全部で17巻あります。

私が石牟礼さんの書いたものに感銘を受けたのは、もちろん1969年、70年ごろに彼女が書かれた『苦海浄土』です。この作品は、水俣の患者さんたちのことを書いたものですが。そのなかにこんな一節がありますので、読ませていただきます。これは水俣病の証言です、杢太郎って被害を受けた胎児性患者の小さな子どもの爺さまが、「あねさん」と呼ぶ石牟礼さんに向けて語りかけている話です。

「そら海の上はよかもね」。良い漁になって帰ろうとすると凪になる。そういう時は舟の上で朝ご飯になる。「かかよい、飯炊け、おらが刺身とる。ちゅうわけで、かかは米とぐ海の水で。／沖のうつくしか潮で炊いた米の飯の、どげんうまかもんか、あねさんあんた食うたことのあるかな。そりゃ、うもうござすばい、ほんおり色のついて。かすかな潮の風味のして」。それでちょっと中略です。そういう「鯛の刺身を山盛りに盛り上げて、飯の蒸るるあいだに、かかさま、いっちょ、やろうかいちゅうて、まず、かかにさす」。これは焼酎ですね、「あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。／これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい」。

漁をするとか野菜を作るというのは、天のくれらすもの、無償の恵みなんですね。お金を払わなくとも、ただで恵まれる恵みです。無償のものとしてそれはある。そしてそれを「わが要

ると思うしことって、その日を暮らす」、つまり、たくさんとって商売にするというのではない。自分が要ると思ったぶんだけ取ってその日を暮らす。これより以上の栄華、幸せがあろうかい、っていうわけですね。

この語りはまだまだ続くんですけれども、海の魚、山の山菜や木の実、きのこ、麦、ひえ、アワ、これら無償の恵みがあり、それを必要な分だけ頂いてその日を暮らす、という考え方ですね。

私がアイヌの人たちと接していて、これとまったく同じ考え方があるわけことをおそわりました。山菜を取りにいく、山菜を取りすぎるんじゃないよ、来年の分もあるんだからね、全部根こそぎ取ってしまってはならないという昔からの教えがあるんですね。ところが商売にする人が入ってくると、それを皆取っていってしまう。そういう嘆きがアイヌの人たちの中に、最近はとても強くなっている。

こういう石牟礼さんのものの考え方の、基になっている方法があるんですね。それを自分で方法とはおっしゃってはいませんが、方法として読み取ることができる。

「もう一度、自分を無にして、自分を低くして、この世で一番低いところに自分を置いて、目線を低くして、山川を見直してみる。健やかだった私たちの、山や川や海。私たちには想像力というものがあるんですから、生存の環境みたいなものはたくさん失いましたけれども、考える力というのは残っておりますから、その考える力をフルに動員して、考え尽くして、もう一度健やかな山や川や海を蘇らせられない、ということはないだろうと思います。心にそれを蘇らせる、取り返す。自分だけじゃなくて、ご先祖様から頂いた大切な日本というものを」。

私は、これが石牟礼さんの方法だと思います。つまり目を低く、自分を低くして、目の付けどころを一番低いところに置いて、そして見るという方法です。これが書かれた文脈では自然との関係ですが、人との関係でも石牟礼さんは、最底辺の一番貧しい、一番下層の人々のところに自分を置いて、そこからものを考えていくというふうに心がけておられて、作品のなかに現れてきます。

石牟礼さんは、水俣という地域を離れずに、地域に生きた人なんですけれども、しかし地域に生きるといっても、自立を獲得する人とそうでない人がいて、石牟礼さんは本当に自前で、自分自身の自由な生き方を獲得された。それは例えば、夫と結婚した頃、結婚とは何か、毎夜毎夜のように夫と議論した。「自分は始めから妻というものになるつもりはなく、相手方を主人というものにする気もなかったようだ」、そういうふうに書かれているんですが、自前でそういう、自らの生き方を選んでこられた。それは例えば現代のフェミニズムの立場の人がいろいろ本を読んで、そこで学んでああそうかと気がつくのとは違って、暮らし方のなかで獲得した自由なあり方といっていいのではないかという気がします。

彼女の考え方は、生命というものが、人だけのものだけではなくて、世界のなかのすべてのものに生命が有形無形につながりあって存在しているんだというふうに考えて、それは幼児のありかたからも学ぶことが出来る。それでは石牟礼さんはどうやってこういうものを獲得されたのかといえば、一つは深い洞察力、共感力の働きなんですけれども、別の証言があります。原田正純さんという水俣病の治療、研究をなさった方の発言です。熊本大学でのあるシンポジウムでこういわれたのを私はお聞きしました。

「私は石牟礼さんを最初の頃から知っています。現場にぴたっと付いている人でしたね。やはりこれが石牟礼さんの優しさというか、強さだと思うのです。私たちが診療のために一軒一軒訪ねていると、女性がストーカーみたいに着いて来るんですよね。何だろうと思ってね。最初は保険婦さんかと思いました。だけど、われわれが一軒一軒訪ねて診察していると、遠慮して見ておられるのですね。どうも保健婦さんじゃないようだ。では何だろう。女性が後ろから付

いて来るというのは気になるじゃないですか。一年か二年ぐらいしてから、ある日ひょっと大学に訪ねて来られて、医学用語を教えてくれと言って見えたんですね。それが苦海浄土の原稿だったんです。作品のあちこちに医学用語が出てきていますが‥」、「これはすごい観察ですよ。石牟礼さんはある日突然現れたのではありません。現場にずっと通って、患者を見つめて付き合って来られたのです。器用な人がチョロッとと来てチョロッと書くというのではなく、道子さんのしつこいまでの観察はすごかったですね」。こういうふうにいわれて、原田さんは若い医学生たちに教えることとして、ですね。カルテというのは、ドイツ語で一言二言書いて済ますというのが医学界のなかで結構多い、というのですね。そんなことではダメなんだ。石牟礼さんが細かく観察して書いたもののほうに、よっぽどカルテになる質があるんだ、医学用語に頼って記述するのではなく、もっと患者の側に立つあり方でないといけないんだといわれました。

それから『苦界浄土』の中には死ぬということについて、こんな考察があります。

「年取った彼ら彼女たちは、人生の終わりに、確かにもっとも深く、何かに到達する。たぶんそれは、自他への無限の慈しみである。凡庸で名もない、普通の人々の魂が、そのようなところへ到達する。哲学も語らず、文学や宗教も語らず、道徳などということも語ったことのない人々が、何でもない、この世で一番優しいものになって死ぬ。自分がそのような優しいものになったことも知らないで死ぬ。ただただ尽きせぬ名残を残して。それこそがこのような村の魂というものだったに違いない」と。それは仏教の用語で言うと煩悩ということだ、というふうに言われています。水俣は、浄土真宗が多くの人たちに受け入れられている風土なんですね。そういう、石牟礼さんの育った浄土真宗の精神文化のなかで、煩悩というふうな言葉で表現されているわけです。

Ⅳ．石牟礼道子の民衆思想―『春の城』を手がかりに

石牟礼さんは、『西南役伝説』を書いておられます、タイトルは西南の役ですが、でも西郷隆盛のことは一言も出てこない、西南の役の戦士たちのことも出てこないのです。彼女がいうには、「目に一丁字もない人間が、この世をどう見ているか、それが大切である。権威も肩書きも地位もないただの人間がこの世の仕組みの最初のひとりであるから（『西南役伝説』あとがき）」と。そう考えたというんですね。「それを100年分くらい知りたい。それくらいあれば、一人の人間を軸とした家と村と都市と、その時代がわかる手がかりがつくだろう。そういう人間に百年前を思い出してもらうには、西南役が思い出しやすいだろう」。私には、これは非常に印象に残る言葉ですね。地域の人々の記憶を百年分くらい探りたいと。「目に一丁字もなき者たちが、生得的にそれを規範として生きた倫理とは、どのようにして生まれたものであるか。そういう目に一丁字もない人たちの魅力に満ちた人柄の中からこの世の綾を紡ぐ糸のように吐き出される語りかけは何を意味するのか。生得的とはどういうことか。いうまでもなく、どこにでもいた、ただの一百姓、一漁師に過ぎない者の実情である。けれどただの百姓漁師のごく普通の人間像が、なぜ風土の陰影を伴って浮上する劇のように美しいのか。そのような人間たちがこの列島の民族の資質のもっとも深い層をなしていたことは何を意味するのか。そこに出自をもっていたであろう民族の性情はいまどこにゆきつつあるのか。その思いは死せる水俣のありし徳性への痛恨と重なり続けているのである。そのような者たちが夢見ていたであろう、あってしかるべき未来はどこへ行ったのか。ありうべくもない近代への模索を私は続けていた」と。「だから水俣から文明を考える、水俣から宗教を考える、水俣から人類の歴史やモラルを考え直さなければ、

水俣から人間愛とは何なのか、哲学とは何なのか、科学とは何か。そういうのが渾然となった警告を人類の未来に対して発しなければならないと考えております。でないと悲惨な最期を遂げられた方々の魂は浮かばれません」。

こういう発想の仕方が民衆思想家の発想の仕方なんです。広く、あちこちを見渡して、鳥瞰図と言いますが、飛行機の上からのように全体を眺めるのではなくて、ある一点に立って、そこを深めることによって広がりを見いだしていく。そうしか出来ないということも含めて、そういうあり方が民衆思想のあり方なのだと思うんです。

石牟礼さんのお仕事は、私としては宗教哲学を孕むものになっていったという気がしております。彼女の宗教観、神の考え方、これも独特です。石牟礼さんは神を、人間が作ったもっとも深いものだというふうに考えるんですね。神は無名である。無名の人間とじかに接点を持っている。そういうものとしてイメージするんです。「人類が文明を持ち始めるとき、いずれの種族も神を創造していることを私は大切に思うようになった。多分その時、人は悪と罪とを知ったであろうか。救いを求める宗教ではなく、草木虫魚に至るまで、往生を共にする原始仏教、小さな神々」。そういうのを重んじると。「人のなかでもっとも美しく広い魂と等身大に向き合う小さな神々というのは、非権力、権力のない神であらねばならず、生命系の源から私たちの個体を還流して流れうる神でなければならない」。

そういう民衆のありかたというのを軸において、歴史を論述する側にある者と、歴史の内蔵そのものである基層民との違いを、自分は、はざまから見ている。そういう住み分け図を書くには、基層民の中にある宗教心の中身を取り出してみなければならない。そういうふうに宗教について考えて、展開されています。

島尾敏雄という小説家がいて、その連れ合いの島尾ミホさん、この人は加計呂麻島っていう南の島の生まれで、一種の巫女さんみたいな心をお持ちの方なんですが、その方と石牟礼さんとが対談したものがあるんです。石牟礼さんは浄土真宗の得度、お坊さんになる資格を取っておられるんですね。ミホさんは南島の民俗信仰をもっていらっしゃる。その二人が話されたときには、「発祥（はじめ）の頃」、つまり人間が生まれたはじめの頃、「たぶん人々は今の人間たちよりも豊穣で、透視的な感受性の持ち主であったに違いない。天界や自然界についてはもちろんのこと、人界のことについては、その感受性のゆえに、予感しうるすべての人間の運命に同化し、分裂せず、全体というものを見ている。大達観の上に立って生きていた。いわば完璧な感応能力の持ち主がいて、互いの運命をやわらげていたに違いない。神格とはそのようなものであったろう」。

これも私が心を打たれた一節です。民衆が宗教的世界に入るきっかけというのはいろいろであって、教義に近づきたいというあり方もあれば、存在のあり方そのものがすでに宗教的なものを孕んでいて、それを生かすあり方がある。

「前者は自覚的意識的な苦行者であり、後者はこの世における惨めさ、苦しみだけを担わされるものであろうと思われる」、というふうに人間の姿を考えれておられて、人間はいつ頃から祈るようになったのかなあということも考えておられる。そうすると人間の一番発祥の頃から祈るということを覚えたけれども、もっと遡ることが出来る。アフリカで大草原に住み夕日を眺めているお猿さんに、祈ることの始まりを見ている。この世で一番神秘な美しい尊いものを拝む、というか、空のほうに額づかずにはおられないということが、お猿さんの時代から存在したと考える。そういうふうになぜ祈るかということが自分のテーマだと思う、というふうに言われています。

彼女は宗教というものを体系化された教義、制度をもち教団になる前の姿、もっと始原の神

を訪ねて、そういう神は何だったかを考える姿勢をとられている。私はこの、無名、名前のない神様というのは意義深いと思っております。彼女はこんなふうに言うんですね。「キリストが物語に組込まれたとき、厩で生まれても、その誕生を予言する東方の三博士が現れて、なぜ最初から権威を付与されるのか。キリストは本当は無名の人だったろう。権威付けられない聖者はどうしてあり得ないか。無名の聖者は無数にいたし、今もいると思う。それは最下層の汚辱にまみれて、一切の受難を背負った人間だったろう。権威づけられず、なんの恩恵にも浴さない、いつも無名で生き続けていた最下層の人間たちが人類を生き変わらせてきた力なのではないか。慈愛とか愛とかは、仏や神が衆生に垂れるものではなくて、逆である。救われぬ人が充ち満ちているからこそ、宗教は救われ、かろうじて命脈を保っているのだ」。逆転した考え方です。「救われざる民の魂によって、宗教が逆に救われているのだ。人間の心を本当に揺り動かすことは、権威の力では出来ない」。こういう考え方、石牟礼さんの場合は浄土真宗から来ているんですが、キリスト教内部からの声としても出てきていると思います。

特に1970年代です。韓国において民衆神学が生まれ、南米では解放の神学が生まれました、そういうものには、石牟礼さんの言われていることと響きあうような考えがあります。

石牟礼さんのイメージしている宗教の姿は、長編小説では最後の『春の城』、単行本で出たときには『アニマの鳥』というタイトルでしたが､天草･島原のキリシタンの殉教のたたかいをテーマにした作品に現れています。

『春の城』という作品は、1971年に水俣病の未認定患者とともに東京のチッソ本社前に座り込んだときに、天草・島原の乱で原城に立てこもった名もなき人々の身の上がしきりに心に浮かんだ。そのときから天草・島原の乱の物語を書きたいという願いを持ったと書かれています。

この物語には実際の乱のことも少し出てくるんですが、それは中心ではないです。天草の農民である仁助の家、キリシタンですが、その家に、もともと仏教徒である家から娘さんがお嫁に行って暮らしている。物語はどんなにキリシタンたちが苦労して、ひどい目にあったかということが出てくるんですが、この農家に家事手伝いで働いている「おうめさん」というのが主な登場人物です。このおうめさんは、南無阿弥陀仏を信じている50過ぎの働き者なんです。農民は凶作が続いた上で、年貢の取り立てで生活に困窮して、どうしようかという話になるわけです。やがて天草四郎が登場し、彼を精神的な柱にして一揆に登り詰めるわけです。物語の流れの上では。侍はもとより、キリシタンの百姓たちの家族は皆、天上の楽土、アニマの国を目指して、原城で殉教します。

この物語のなかで石牟礼さんが書いているのは、おうめさんなんです。一揆に立ち上がる前に、仁助という家の主人が、仏教徒のおうめに里に帰るようにいいます、あんたはキリシタンではないのだから帰りなさいというと、おうめはそれを拒んで、それまでいわなかった自分の話をするわけです。自分が「ナマンダブ」を通して「アメン」にならなかったわけは、自分の父が観音様への信心の篤かった人で、木で観音様を作って、それを奉納して、赤ん坊のときに疱瘡で死にかけた自分が治るように祈ってくれた。ところが伴天連が来てから、観音信仰を邪宗だと決めつけて、仏像を全部打ち割って、よい焚き物が出来たと言ったと聞いたと。それに対して旦那様は「アメンも言わん人間をば責めもせず、大事にして今まで使うて下さりやした」、仏教の坊さんにも堕落した者がいるし、アメンの衆にもろくでもない者がいる。デウス様が観音様を焼き討ちにするとおっしゃるわけがない、と言うんですね。「あたいはここのお家に来て、本物のデウス様と本物の人の姿を見せてもらいよります。父っつぁまの願かけなさいた観音菩薩とマリア様が二人会われたなら､仲良う､いよいよ優しゅうなられるとあたいは思います」､と､こう言うんですね。だからこのおうめさんに、マリア様と観音様との和解と融和を語らせたと

思います。

仁助が「おうめ。お前が長い間、叩き割られた観音様を大切にして、心に仕舞いこんで、わしらのデウス様にも尽してくれたのにくらべ、わしは自分の宗門にあぐらをかいて、へりくだりを忘れておった。この期になって、わしは恥じ入るばかりじゃ。お前こそ観音様の化身じゃと、今にしてわかる」というふうに答えています。おうめさんは、これまで良い暮らしをさせてもらった、「死ぬ時は一緒でござす」といって一緒に殉教する、という物語です。

ここに石牟礼さんの宗教についての考え方がよく現れていると私は思います。権威付けられず、いつも無名で居続けてきた最下層の人間たちが、人類を生き変わらせてきたのではないか、宗教がこの人たちに愛と慈悲を垂れてきたのではなくて、この人たちが宗教を救ってきたのではないか、といった考え方ですね。しかし現実にはそうではなくて、和解と融和は実現しないのです。そういうイメージを持ちつつ、おうめさんは、キリシタンの仁助の一族とともに、原城に篭って死んでゆきます。宗教というのはこういう、現世を超える強い力、とくに否定を通じて肯定を実現しようとする、強い力を持っているように思います。そういうことが、この石牟礼さんのメッセージのなかに込められているというように思います。

アジアの思想を読む　中江兆民を中心に*

Reading Asian Thought — Around Chōmin Nakae

宮村 治雄**・井田 進也***
Haruo Miyamura, Shinya Ida

李静和所長　皆さん、こんにちは。お忙しいところ、お集まりいただいて本当に感謝します。今日は雨が降るのかなあと思ったら、晴天で、気温もわりと、風はまだつめたいんですけど、よかったなあと思っています。私は、成蹊大学のアジア太平洋研究センターの所長の李と申します。今日は本当にありがとうございます。「アジアの思想を読む」という、ちょっと不思議なタイトルがついておりますが、所長になって、三年間の間に何かセンター独自の企画をやってみては、というふうな意見をいただいて、それで、できれば今のこういう状況のなかで、何かをじっくりと考えるという時間をもちたいなという非常に素朴な意味で考える時間を、あるいは空間をもちたいという気持ちから、この企画を立てることになりました。今日は、井田進也先生と宮村治雄先生をお迎えしまして、その第一回目ということになります。ある意味で本当にはじまりというか、そういう時間として、今日のこの「アジアの思想を読む－中江兆民を中心に－」というワークショップを始めたいと思います。

それで進行役は、山田央子先生にお願いいたしました。改めてご紹介する必要はないかとも思いますが、山田先生は、青山学院大学法学部教授で、日本政治思想史の研究者であり、ここ成蹊大学で行っています思想史研究会のメンバーでもございます。

ワークショップの予定と致しましては、ちょっと長いかとも思いますが、6時45分終了ということを考えております。途中で二回ぐらいちょっと休憩をとります。

今日は、井田進也先生、宮村治雄先生という日頃から尊敬していますお二人の優れた中江兆民研究者をお招きして、こういう会をもつことになったということは、私自身、個人的にも大変うれしく思っていますし、実は大変緊張もしています。今日のお話、どういうふうに展開されていくのか、何と日本語で表現すればいいか分かりませんが、今改めて思索する時間と空間、言葉が非常に求められている、あるいは私自身求めている、そういう気持ちで、このワークショップに臨みたいと思います。

では、進行役をお願いしております山田央子先生、あらためてよろしくお願いします。

司会（山田央子）　進行役を仰せつかりました山田でございます。今日は、「アジアの思想を読む」、

---

* 本稿は、2015年2月22日、成蹊大学にて行なわれたワークショップ「アジアの思想を読む　中江兆民を中心に」（主催：成蹊大学アジア太平洋研究センター）の内容を再現し、加筆・修正を行なったものである。司会は山田央子青山学院大学法学部教授。

** 成蹊大学アジア太平洋研究センター客員研究員　Visiting Researcher, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

*** 大妻女子大学名誉教授　Professor Emeritus, Otsuma Women's University

特に中江兆民を中心にということで、あらためてご紹介するまでもないかとも思うんですけども、宮村治雄先生、井田進也先生のお二人、中江兆民の研究ということではもう本当に、お二人を措いては語れないというお二人をお迎えしています。紹介は、特にもういらないかと思うんですけども、宮村治雄先生は長く都立大学で日本政治思想史を専攻で、私自身も育てていただいたんですけれども、その後成蹊大学に移られて日本政治思想史の研究・教育にあたってこられました。兆民は、いうまでもないですけれども宮村先生のライフワークで、今日もまた新しいお話がうかがえるのではないかと、楽しみにしております。井田進也先生も、やはり都立大学に長くいらして、フランス文学科に属して、そちらからルソー、兆民を研究なさっていらっしゃった先生で、『中江兆民のフランス』というご本には、私たち日本政治思想史研究者としても、これなくしては研究できないという、とても大切なお仕事をしてくださっていらっしゃいます。都立大の後、大妻女子大に移られて、名誉教授でいらっしゃいます。このお二人の間にどのような中江兆民像が現れてくるか、とても楽しみにしています。

できるだけお二人のお話の時間をゆっくり取りたいと思いますので、第一部二時間程度、第二部二時間程度ということで、第一部、第二部、それぞれ宮村先生、井田先生からお話の切り出しをいただき、またお二人の対談も存分にしていただきたいと考えております。途中、休憩もとり、またフロアからの質問もいただく、一応そんな予定でいるということで、よろしくお願いします。まず第一部として、宮村治雄先生から、「「経綸」と「理学」の間――『三酔人経綸問答』を読む」ということで、ご報告を願います。その後質疑に移りたいと思いますので、よろしくお願いします。では、宮村先生、よろしくお願いします。

宮村治雄　本日は、このような機会を与えてくださった成蹊大学のアジア太平洋研究センターの李先生、亀嶋学長を初めとする関係者の皆様に心からお礼申し上げます。どうにも大風呂敷を広げすぎて、話が収束しないかもしれないんですけれども、もう表題つけちゃったものですから、それにできるだけ沿うようなお話ができるように心がけたいと思っています。

話に入ります前に、今日、この会にご登場いただきました井田先生について一言触れさせていただきます。

私の中江兆民研究にとりまして、この井田進也先生は、もうかけがえのない存在です。かけがえのない、と申しますのは、いろんな意味なんですけども、特に個人的には恥をさらすようなことでもあります。私は1977年ですか、博士論文で中江兆民について書いたんです。惨憺たる論文です。その惨憺さがたたりまして、就職しました都立大学に入りまして、入った時にえらい目にあいました。いまだに私の机の前にこれを置きつづけているんですけども、この『人文学報』都立大人文学部、1978年3月に出たものです。『政理叢談』という、後で触れますけれども、兆民が主宰する仏学塾が出していた『政理叢談』という翻訳雑誌なんですけども、いろんなものが翻訳されている、それの「原著者および原典一覧」というのをこの『人文学報』に発表されまして、私は兆民研究者として、正直に申しますと息の根を止められたわけです。それ以降、数年間私は兆民について一行も書けない事態になりまして、そこからどうやって立ち直るかというのが、私の兆民研究の再出発ということになって、現在まで来ているのです。とにかくそういう存在なので、今日はぜひとも井田さんに来ていただいて、私の話も聞いていただき、また井田さんのお話も私の方からお聞きしたいということで、会に臨んだ次第であります。では、本題に入ります。

もうあの、時間がかぎられていて、そして話のテーマが大風呂敷なので、用意した原稿はとても全部お話しできませんけれども、できるだけストーリーが分かるようにお話ししていきたいと

いうふうに思います。「はじめに」ということで、簡単なもので恐縮ですが、〈資料1〉として用意した「著作年表」というのを、ちょっとご覧ください。兆民の生涯というのを彼の文章に即してみますと、私は二つの系譜、系列があると思います。それが、今日のタイトル、「経綸」と「理学」ということにつながるんですけれども、若い時分から兆民の関心は「経綸」にありました。つまり、政治論です。それは、二度にわたる『社会契約論』の翻訳、それからさまざまな新聞論説、それから『国会論』その他の著作、そういう系列があります。しかし、分量としてみたときに、それに匹敵する分量をもった系列として、「理学」と兆民が名づける、フィロソフィーですね、その系列の著作があります。ざっとみましても、『維氏美学』、それから『理学沿革史』、哲学史ですね、それから『理学鉤玄』、これ、哲学概論です、『道徳大原論』。このうち、自分の著書と称したのは『理学鉤玄』だけですけれども、しかし他の翻訳も、これは井田さんが『兆民全集』別巻で非常にていねいに原文と照合して、そしてどういうふうに書き加えているのかということを示されています。「加筆箇所一覧」、これはすばらしい仕事です。で、そこから井田さんは、「兆民の翻訳作品はそれ自体思想作品としてみなすべきだ」という提言をされておられます。私はその通りだと思います。それで、兆民の「理学」の系列というのは、そういう翻訳書、それから著書、そして最後の『続一年有半』にいたるまでですね、ずっと続いています。ですから、兆民の生涯を考えようとするときに、「経綸」と「理学」という二つの焦点というのを抜きにしては語れない。そしてその関連を本当につきつめて考えようとすると、それは兆民評伝にならざるをえません。私は、兆民評伝をそういう視点から書きたいと思っていますけれども、今日はその話はできません。それで、『三酔人経綸問答』という、兆民のいわば主著に即して、これまで考えてきた問題を少しお話しできれば、というふうに思うわけです。

Ⅰ.『民約訳解』と『三酔人経綸問答』の間――「狂」または「狂戇」をめぐって

今日の主たる論点になりますのは兆民が明治20年、1888年に書きました『三酔人経綸問答』という作品です。兆民の主著といっていいかと思いますが、私は今まで正面からこの作品を論文で書いたことないんです。できなかった、という方が正確です。難しい、面白いけど難しい。そこで、恐る恐る今日はそれをとりあげるんですけれども、最初に、ここでの私の『三酔人経綸問答』に対する関心のあり方というのをお話ししておきたいと思います。

『三酔人経綸問答』のなかには、ルソーという名前は、ルソーとしては出てこない。「ジャン＝ジャック」という名前で二箇所出てくるだけです。それもごく脇役として、つまりサン・ピエールの書物をカントに引きついだ、そのコメンテーターとしてだけ登場します。『三酔人経綸問答』全体のなかでは、ルソーというのは言及されない。しかし、兆民といえば「東洋のルソー」というふうにいわれるわけで、それは『民約訳解』という、ルソーの『社会契約論』の翻訳であり、解説である本、これがあるから兆民の兆民たるところがある。だとしますと、『民約訳解』と『三酔人経綸問答』というのをどういうふうに関連づけて読めばいいのか、まずこれが基本的な問題にならざるをえません。そこで私は、この二つの作品が思想的主題としてどのように関連しているのかという問題、それにまず着目して考えてみたいと思ったわけです。

『民約訳解』には、兆民の見事な漢文でつけた「叙」があります。レジュメでその主要な部分を紹介してあるんですけれども、大変難しい。難しいんですけども、『三酔人経綸問答』を考えるときに、この『民約訳解』「叙」は、避けて通れない。そこで、簡単にそれにふれながら、問題を考えてみたいと思うわけです。

『民約訳解』の「叙」は、冒頭、「聖人ノ教ヲ垂レ法ヲ示スヤ、六経炳耀（ヘイヨウ）トシテ、日月ト光ヲ争フ。

人倫ノ道、至レリ」というふうに書き出しています。『民約訳解』「叙」は全部が漢文で、しかもまったく段落を切らないで書かれた700語余りの文章なんですけど、私はここで一旦切るべきだと考えます。これが第一主題で、そしてその次に、第二主題ともいうべき文章が続く。「其ノ政ヲ言フヤ、曰ク、「夏ノ時ヲ行ヒ、殷ノ輅(ロ)ニ乗リ、周ノ冕(ベン)ヲ服シ、楽ハ則チ韶舞(ショウブ)、鄭声(テイセイ)ヲ放チ佞人(ネイジン)ヲ遠ク」と。これは『論語』の引用です。で、その後に「蓋シ政ナルモノハ時ト推移シ、人情ニ逆ハザル、斯レ美ナリト為ス」。政治というのは、時と推移して人情に逆らわない、それが原則だと。これは、「語ニ曰ク、「善者ハ之ニ因リ、其ノ次ハ之ヲ利道シ、最モ下ナル者ハ之ト争フ」」。これは『史記』の引用です。『史記』の「貨殖列伝」からの引用です。

これは、この二つの命題を並立させて読むということが肝心で、つまり、ここで、兆民は、「人倫ノ道」に関しては普遍的なものが存在する、古今東西を問わず普遍的なものが存在する、しかし、政治というのは相対的な世界だと、この二つの命題を比較、対照的に提示しているわけです。兆民と漢学、とりわけ儒学との関連というのは大問題で、ここでは立ち入れませんが、たとえば、「論語の文は、何晏も解釈せり、刑昺も解釈せり、朱熹も、王守仁も、伊東涯も、物茂卿も解釈せり、之れが意義を定むることは、孔子自身の外、別に有るの理無し」(「憲法の解釈」M.24.3、⑫284)というように、論語に対しましても、特定の儒学の立場に立脚するというよりは、かなり自由に解釈しています。つまり、兆民は、『論語』の文章についての解釈はいろいろ可能でいろんな注釈があるけれども、そんなものは一通りは読んだけども、孔子が本当にどういうつもりでいったのかは誰も分からない、おれはこういうふうに解釈するというのが彼の論語の読み方です。ここでも、政治に関しては古代の理想的な三代、夏・殷・周の三代でも変遷があるということを、『論語』をもとにして説いているんですけれども、さらに『史記』から引いてその変遷の意味を強調しているわけですね。『史記』の文章、「貨殖列伝」冒頭に近いところなんですけども、これは、老子が理想としたような「小国寡民」、隣の国のことがもう手にとるように分かって、そしてみんな平和に暮らしている、そういう時代からはもうすでに、そこへ戻れないようになった。「貨殖」、つまりいろんな利益を求める動き、物を生産すること、そういうことについての関心が、すでに人々のなかに芽生え定着した。もう戻れないという、司馬遷の註釈がついてはじまる章なんですね。ですから、そういう世界においては、政治は相対的であらざるをえないということが強調されているわけです。

で、重要なのは、その後にですね、じゃあ政治が相対的な世界だとすれば、「人倫ノ道」という普遍的規範の世界との関係についてどういうふうに考えればいいかという問題が出てくるわけですが、兆民は、先の引用に続いて、「節ヲ砥キ道ヲ直クシテ行フト雖モ、抑モ時ヲ料リ人情ヲ揆ラズ、何ゾ狂戇ノ甚キヤ」というふうに書いてます。これも解釈が難しいんですけれども、「道ヲ直クシテ行フ」というのは、これも『論語』に出てくる言葉です。「唐虞三代」というのは非常に理想的な時代だったから、道というものが生きていた、だけども、その唐虞三代の時代の道というものをそのまま後生大事にかかえて相対的な政治の世界に飛び込む、それは「狂戇ノ甚キ」ものだというふうにいってるんですね。「狂戇」とは難しい言葉ですけれども、要するに正気じゃないというふうにいっているわけですね。これが、『民約訳解』「叙」での兆民の基本的な立場です。

ところで、この「狂戇」という言葉は、『三酔人経綸問答』にも出てきます。そして「狂戇」だけではなくて、『三酔人経綸問答』のなかには、「狂」という言葉がいたるところに出てきます。そのいちばん端的な例は、『三酔人経綸問答』のなかで、洋学紳士が民主政を徹底し、非武装に徹し、そして小国としての道を選びとるという議論を展開しますけれども、冒頭で、それに対して豪傑君といわれる人物が発する言葉、

「君は狂せしに非ざる乎。狂せり。狂せり。六尺男児、百千万人相聚りて一国を為しながら、

一刀刃を報ぜず、一弾丸を酬ひずして、坐ながら敵寇の為に奪はれて、敢て抗拒せざるとは、狂人の所為に非ず乎。僕は幸に未だ狂せず、先生も亦狂せず、他の同国人も亦狂せず、何ぞ紳士君の言の如く」

云々というふうにいうわけですね。つまり、「狂戇ノ甚キ」という『民約訳解』「叙」の「道ヲ直クシテ行フ」という態度に対するこの非難の言葉というのは、洋学紳士に対してまず豪傑君から発せられるわけです。

そしてこの「狂」あるいは「狂戇」という言葉は、『三酔人経綸問答』のなかにいたるところ出てきます。つまり洋学紳士を狂っている、で、狂っていると思うのは、自分だけじゃない、南海先生もそう思っている。いや、その背後にいる国民はみんなそう思っている。おまえはどうしてそんなことというのかというふうに、豪傑君は洋学紳士を問いつめるわけです。しかし「問答」は逆にここからはじまるんです。『民約訳解』「叙」は、「狂戇ノ甚キ」というので、「人倫ノ道」をふりかざす奴をやっつける。これは、一方的な命題です。しかし、『三酔人経綸問答』はここから「問答」がはじまる。この違いというのはどこから生み出されてくるのか、そして『三酔人経綸問答』のなかで、この狂ったといわれる洋学紳士とほかの二人の問答のなかで、この問題がどういう経過をたどっていくのか、これが私の『三酔人経綸問答』についての基本的な関心の一つなのです。

Ⅱ.「経綸」から「理学」へ――『民約訳解』と『理学鉤玄』の間

その問題を考えようとすると、『民約訳解』と『三酔人経綸問答』の間に、兆民および仏学塾の塾生たちが驚くべき集中力で翻訳し、著作し、考えたこの「理学」の世界というのが介在している。この「理学」の世界というものを考えていかないと、その問答における「狂」あるいは「狂戇」という非難に対する態度というのが読みとりきれない。そこから私、『民約訳解』から『三酔人経綸問答』への関連を、「理学」を介して考えるということに関心を向けたわけであります。だけども、これ大変難しいことになって、収拾つかないような話でもあるんですけれども、少し私の研究の経緯といったようなことも含めて順をたどって考えていきますと、私はいちばん最初の著作で『理学者兆民』という本を書きまして、『理学鉤玄』という、彼が自分の著といえる最初の書物というのはこれだといった本をとりあげて、それがどういうふうにできあがっていったのかということを跡づけたことがあります。いろいろ拙いこともある本なのですけれども、しかしそこで、その当時としてはできうるかぎりの視野を広げて西洋の「理学」の世界というものに分け入って、そして兆民がそれを整理し、概論として書き上げた、その経緯をみようとしたわけです。で、そのなかでもいろんな書物が取り上げられている。その「理学」というのがいかに兆民および兆民が主宰していた仏学塾の共同作業であったかということをまず知っていただきたいと思って、〈資料2〉、それから〈資料3〉、〈資料4・5〉というのを作って置きました。

〈資料2〉は、Chareles Jourdainという人の、これはフランスでの高等中学に当たるリセの教科書だったんですが、兆民の仏学塾の教科書としては最初から最後まで名前があがっている数少ない本の一つです。この本、実は仏学塾の教師から塾生までいろんな人間がかかわって、ほとんど全部訳しているんですけども、その翻訳を始めるに際して〈参考〉として紹介しておいた一文があります。下線部分ですが、「理学ノ旨遂ニ明カナラサレハ斯ノ政理叢談ヲ世ニ公ニスルモ将タ何ノ益カ之レアラン。空ク廃紙ニ属センノミ。」というほど、塾の存在理由とさえ位置付けています。それと、この〈資料2〉のいちばん下のところにですね、「理学」というのはほ

かに、つまり「心理」、「論理」、「神理」、これは神の学ですね、それから「倫理」と、この四つの領域を包摂するだけではなくて、そこに〈l'esthétique〉、それは「盡美学」というふうに訳していますけども、それと「理学沿革史」と、これをつけくわえないと「理学」の領域を網羅することにならないというふうに書いています。これはちょうど兆民の『理学沿革史』、あるいはそれに先立つ『維氏美学』の翻訳というものと、私は関連しているんだろうと思います。きっかけはいろんなことがありうるけれども、しかし兆民がこうして「理学」の領域、非常に網羅的に体系的に視野に入れようとしたという意図というのは、こういうところからはっきりしてみえてくる。

それからもう一つ、〈資料3〉の「Jules Barniの『民主政における道徳』と仏学塾」、これは井田さんが指摘されておられますけど、『三酔人経綸問答』を書くうえにおいてとても重要な役割をはたした本です。これもほとんど、いろんな人間がそれぞれ別個に、あるいは共同して翻訳していきます。いかに仏学塾でこの「理学」ということが共通の関心になっていたか、そしてそのなかで兆民が指導力を発揮していたかということが、こういう一覧表のようなもので分かるかと思います。

さらに今日のレジュメの1ページの中ほどに、「「理学」と仏学塾――（資料2・3）」というふうにしたところがございます。そこで、「旧君主を異にし生れ故郷を異にし封建の階級を異にし生業を異にし今日迄の交際を異にしたる等、総て偶然に生じたる社会的の牆壁」を打破するという兆民の文章の一節がございます。これは、兆民がくりかえし説いたことですけれども、仏学塾と「理学」との関係ということを考える際重要だと思います。私は、仏学塾の塾生名簿というのを一人ひとり、いろんな資料をたどって調べたことがあります。全部は無理ですが、だいたいの履歴が分かるんですけれども、実にいろんな藩の出身、いろんな身分の出身、いろんな職業の出身、そして政治的な立場もいろんな立場がある。そういう人たちが唯一共同できるジャンルとして「理学」というのを発見し、そして兆民の指導の下にこの「理学」という領域に対して挑んだ。それがこういう形で出てきている、というふうに考えるわけです。しかし、そのですから、『三酔人経綸問答』を考えるときに、まず「理学」というのが一つ視野に入れられなければならない理由として、こうした「理学」において共同した仏学塾という集団、そしてそれが作り出す言論空間というものが媒介としてあったということを、まずいいたいわけです。しかし、この空間は急速に圧迫されていく、「立身出世」の圧力は「理学」離れを加速しますし、また徴兵制度の締め付けは私塾の塾生の兵役猶予の特権を奪っていき、塾の存立自体を危うくしていきます。ですからそのなかで彼らが「理学」という媒介のなかで依拠して、その成果を形にして残したいという情熱をこれほどまでに燃やしていたというのは、そのこと自体、『三酔人』の歴史的背景の一つとして忘れてはならないと思います。

もう一つ、「理学」に関して私が「経綸」との関係ということをいいたい理由は、やっぱり『民約訳解』との関連ということにさかのぼります。『民約訳解』のなかでルソーがつけた最初の、第一篇第一巻の冒頭の文章がございます。おまえは政治について論じるというんだったら、君主か、立法者か。そうじゃない者がどうして論じるんだ、という問いを自分で立てて、私は君主でもない立法者でもないから政治を論ずるんだ、政治っていうのは〈écrire〉の対象である。それは、政治を〈faire〉する奴なら黙っていてもできる。だけども、そうじゃない者が政治について関わるのは言葉でしか関われない。それが自分、この本を書く理由だというふうにルソーはいっているんですけども、兆民はそれを漢文に訳すときに、こういうふうに訳しているんです。レジュメの1ページ目の「2「経綸」から「理学」へ」の冒頭のところですね。「人或ハ将ニ余ニ問フテ曰ントス、「吾子ノ政ヲ論ズル、亦タ民ニ莅ム者ナル乎」」、つまりこれ、君主という意味

ですね、「「将タ一邦ノ為ニ制作スル者ナル乎」ト」、これは立法者、「余ハ則チ之ニ応ジテ曰ントス、「吾民ニ莅ム者ニ非ズ、亦タ一邦ノ為ニ制作スル者ニ非ズ、此ノ著有ル所以ナリ」ト。若シ民ニ莅ミ一邦ノ為ニ制作センカ、余ハ則チ余ノ言フ所ヲ為サンノミ、複タ何ゾ空言ニ託スルコト之レ為サンノミ」。要するに、「政ヲ論ズル」という行為は、「君主」や「立法者」のように権力の座にあって黙ってでも「自分の為すべきこと」を為すことができると考える人間には不必要であるかもしれないが、そうでない人間にとっては、そうでないということ自体の中に「政ヲ論ズル」ということの根拠を有する。しかし、その行為を、兆民は「空言ニ託スル」という言葉で表現しています。この表現は、続く訳文の中で、「書ヲ著シ政ヲ論ズルモ亦タ余ノ本分内ノ事、未ダ空言ナルヲ以テ之ヲ斥クルヲ得ザルナリ」ともう一度強調されています。ルソーの原文とは、大きく外れた、この「空言ニ託スル」という行為こそ権力とは無縁な存在が「政ヲ論ズル」ことを「余ノ本分内ノ事」とできる根拠なのだ、という兆民の訳文は、「経綸」に関わるときの兆民の姿勢を意図的に表していたのだと思います。

では、「空言」という言葉はどういう意味か。「空言」という言葉をたどっていきますと、やはり『史記』につきあたります。幸徳秋水が『兆民先生』で「先生古今文に於て最も史記を推す」と伝えていますけれども、『史記』は兆民の愛読書でした。福沢の「左伝通読十一回」に相当するものでしょう。その『史記』のなかに「空言」という言葉が何度も出てきます。で、なぜ司馬遷がこの本を書いたかということを考えるときに、この「空言ニ託スル」という言葉の解釈が非常に重要だということを、いろんな人が論じていろんな解釈が出されています。私はその解釈史にここで立ち入るつもりはありませんけれども、ただ一つ、私が非常に影響を受けた『史記』解釈というのは、バートン・ワトソンの『司馬遷』（今鷹真訳、筑摩叢書）という本での解釈です。それは、無駄な言葉、むなしい言葉という意味ではない。その事柄の原理にさかのぼって事柄を語ろうとする、そういう言葉だというふうに指摘しています（p.121）。私はこのワトソンの『司馬遷』という本での解釈に、非常に大きな示唆をえました。そして、権力にいない者が政治について語る、それを「空言ニ託ス」といったときに、兆民は、それまでにない政治についての関わり方というものを確立しようとしたんだ、というふうに考えました。

『民約訳解』で示されたこの「政治」への接近態度は、『三酔人』にも引き継がれています。『三酔人』は冒頭、「南海先生、性酷だ酒を嗜み、又酷だ政事を論ずることを好む」という一文から始まっていますが、この「政事を論ずる」という言葉が重要です。それは「政事好き」とは明確に区別された独自の「政事」への接近態度です。そして、これは、他の二人に登場人物にも共通しています。実際、三人の登場人物は、いずれも「政事家」と無縁です。このことは、『三酔人』の趣向がどんな先行作品を下敷きにしているか、いろんな穿鑿は可能ですが、そうした先行作品と決定的に異なる「政治」への接近態度の上に成立していることを示すもので、その飛躍の契機としてルソーの『社会契約論』がいかに重要な意味を持っていたかが示唆されていると思います。しかし、兆民は、ルソーとも異なって、「理学」つまりルソーが『社会契約論』で「〈philosophie〉はここでの主題ではない」として斥けた「理学」という迂回路を通して「政治」＝「経綸」の世界に接近していったわけです。

こうし、「空言ニ託ス」ということと、「理学」の世界に深く入っていくこととは、兆民においては同じことを意味していたというふうに私は思いますが、どうして「理学」〈philosophie〉をめぐってルソーとは異なる接近がなされていくのかということが逆に新たな問題になるでしょう。私なりに、兆民の「理学」の世界を辿っていきますと、いわば『民約訳解』によって方向づけられた「理学」への独自の挑戦というのは、兆民においてルソーを考えるときに、実は大きな困惑というのをもたらすことになったのではないか。西洋「理学」の世界を知れば知るほど、

そこに大きな分岐、大きな分極というものが存在しているということがそこに見えてくるということがあったのではないか。。兆民の視野に入っていた著書のなかには、さまざまなルソー論が、あるいはルソーへの言及がありましたけれども、典型的な二つの例をレジュメ1ページの「ルソーをめぐる分極」というところで紹介しておきました。

フイエの『理学沿革史』、これは兆民が全部翻訳したものですけれども、そこでルソーの位置づけというのは、「精神ノ説〈spiritualisme〉ヲ守リテ失ハズ、以テ当時実質説〈sensualisme〉」、〈sensualisme〉を「実質説」というふうに訳すということ自身が、兆民の一つの立場をあらわしているんですけれども、「実質説〈sensualisme〉ノ蔓延スルヲ攻撃セリ」。「実質説」というのは、『理学鉤玄』のなかでは、〈positivisme〉も〈matérialisme〉も含む言葉として用いられていますけれども、しかしそういうものが蔓延していく。18世紀以降そういうのが蔓延していく。あるいはその前から、ルソーはそれに対して立ち向かったんだと。そして、その「理学」上のルソーの立場をもっともよく示しているのは、「サウォアーノ一僧ノ懺悔録ト題スル書」であると。兆民はこれに注釈をつけて、「〈教育書中ノ一節〉」である、つまり『エミール』の一節だといってるんですね。

で、兆民は『理学鉤玄』を書くときに、この〈spiritualisme〉とは対立する〈matérialisme〉の考え方を、いろんな本をたどっていくわけですけども、そのなかのもっとも重要な役割をはたしたのは、アンドレ・ルフェーブルという人の書いた哲学概説書です。このルフェーブルの本は、兆民はいろんなところで『理学鉤玄』に使っているんですけれども、兆民が訳してない部分というのもたくさんあって、私はまあ一応全部読んだつもりなんですけれども、そのなかでルソーというのはどう位置づけられていたか。いちばん下のところにですね、「彼の哲学は、使い古された精神の哲学〈spiritualisme〉である。その真のテクストは、サヴォアの助任司祭の信仰告白である」云々というふうに述べていて、ルソーは「形而上学的、また宗教的な反動のリーダー」だというふうに書いてるんですね。つまり、兆民の「理学」の世界のなかにルソーを位置づけ直すと、真っ二つの評価というののなかにルソーがさらされているという、これはおそらく、兆民にとっては大変な驚きと困惑をひきおこしたのではないかというふうに思います。

しかし、いろんないきさつは省いて、兆民はそこで困惑しただけではない。あるいは「理学」の世界がこういうふうに分かれているということをいっただけではない。そこから二つの豪傑像を引き出してくるんですね。一つは、2ページ目のところ、最初の方。「心ノ自由ノ性有ルコト」、これは〈spiritualisme〉の立場で、下線を引いたところだけたどっていきますと、「我心ノ奥底ニ於テ活潑自由ノ性有リテ、善ヲ為シ悪ヲ為スコトヲ得可クシテ、乃チ自ラ決スルノ一事ノ自由ニシテ、少モ他ノ妨碍ヲ受ルコト無キコト極テ明ナリ。……古来豪傑ノ士」、これが「唯正義ノ旨趣ト利己ノ旨趣トニ於テ選択スル有リ。是ニ於テ自ラ断ジテ正義ノ旨趣ニ従フ、是レ其躯命ヲ捐棄シテ自ラ避ケザル所以ナリ」。死をも賭して正義の旨趣を選択する、ここに「心ノ自由」の大切な点があるんだ。

「心ノ自由」は、兆民は新聞論説のなかでも使いますし、ルソーの『民約訳解』のなかでも使います。ですから、こういう〈spiritualisme〉の「自由」と「正義ノ旨趣」との関連、これは非常に重視したはずなんですね。しかし、兆民は『続一年有半』が示していますように、「無神無霊魂」の説に最終的には帰着します。いつからその立場を鮮明にしたか、難しい点があります。というのは、『理学鉤玄』で〈spiritualisme〉と〈matérialisme〉と比較対照して論じた後に書いた文章のなかで、両方そんなにどっちか簡単に決着がつくなどということはありえないんだ、それに決着をつけるには時間と、それから膨大な書物というものに対する読書、思索というものを要するんだという意味の文章を書いています。ですから、『三酔人経綸問答』を書いたとき、兆

民はある特定の「理学」の説に立脚する、それが最新学説であろうがなかろうがですね、そういう立場に立たない、立っていない。むしろ対立を対立のまま受けとめる、それが兆民の「理学」の精神。

あ、失礼、もう一つの方をまだいってなかったですね。兆民の『理学鉤玄』のなかにはですね、さっきいいましたように、〈matérialisme〉を解説した部分があります。そこでどういうふうにいっているか。それがその次の文章なんですね。ここでもですね、「古来豪傑ノ士」が「身ヲ挺シ節ニ殉ズル」という行動をどういうふうに捉えたらいいかという議論をしています。これは翻訳の部分じゃなくて、兆民が自分で書いている部分ですけれども、これは人間の行動というのは、「利己ノ一念」あるいは利益の一念、快楽の一念というものによって駆られるんだと。下線の部分から後を読みますと、「夫レ人其初メ利己ノ一念ノ為メニ駆ラレ、既ニシテ邦国制度ノ設有リ、善悪義不義ノ旨義出ルニ及ビテハ、或ハ専ラ理義ヲ以テ楽ト為シテ性命ト雖モ亦之ヲ惜マザルニ至ル。即チ古来豪傑ノ士身ヲ挺シ節ニ殉ズルガ如キ是レナリ」と。死を賭して「節ニ殉ズル」、理義に殉ずるというのを、その行為の旨趣、〈motif des actions〉というふうに使っていますけれども、行為の動機ということからいえば、それは快楽の追求、それを理義に快楽を感じるからだ、というふうに分析するわけです。つまり、「古来豪傑ノ士」の行動を〈spiritualisme〉の側からみたときと、〈matérialisme〉の側からみたときと、それは同じ行動でも違ったふうに捉えられる。こういう分極を示す根拠を、「理学」の世界というのは提供しているんだと。

ですから、兆民が「経綸」の世界から「理学」の世界へ迂回して、再び「経綸」の世界に立ち返ろうとするとき、「理学」から引き継ぐのは、特定の自己完結的な体系的理論ではないということ、むしろ「困惑」を通り越して、一層深刻なまでに深められた分極であったということ、そのことを確認できるかと思います。『三酔人経綸問答』執筆直後の兆民の文章に、その苦闘の跡を暗に語る文章があります。

> 「人或ハ問フテ曰ク、理ハ一ナリ、実質家ノ言是ナレバ虚質家ノ言非ナリ、是非孰レニ在ル乎。余輒チ喝シテ云フ、軽発スルコト勿レ、此古今無比ノ一大問題ニシテ既ニ是非ノ定論有ルトキハ尚ホ爰ゾ今ニ於テ紛々ノ議論有ルノ理在ラン。苟モ理学士ヲ以テ任ジ、書ヲ著シテ後ニ垂ルル者ハ皆宏覧深識ノ人ナリ、而テ言人々殊ナリ、亦以テ此学ノ重且難ナルヲ知ル可シ。然バ則チ如何ニシテ可ナラン。曰ク、学者唯当ニ広ク古今万国理学ノ諸書ヲ渉猟シ交互演繹シ推究考討シ、或ハ己ノ意ヲ出シテ之ヲ迎ヘ或ハ彼ノ旨ニ由テ之ヲ啓キ、是ノ如クニシテ懈ラザルトキハ一旦豁然ノ間ニ得ル有ルコト或ハ望ム可キナリ。」(「菅了法『哲学論網』序」m.20.6、⑰-p.30)

これはオクスフォード大学を修了したと称する著者の依頼に応えて与えた序文の一節ですが、著者の「軽発」を諫めるだけでなく、自分自身の「理学」の未解決状態をも示唆しています。また「吾等の如きは難解難釈の乱糸を胸中に蓄ふこと久し。襟を開て一刀の慈悲を受ること最も願ふ所なり。」(「懇親会を論ず」M.21.9.27、⑪238) という文章は、いっそう直截に彼の苦悩を語っています。この悲鳴にも似た分極の自覚が、彼が「理学」の世界から得たものにほかなりません。そこから「経綸」の世界は、どのように変わるでしょうか。「経綸」の問題というのは、モノローグで語れない。同じ行動がまったく違った意味で捉えられる。これが、「理学」の世界をくぐってもう一度「経綸」の世界に戻ってくるときの、兆民の立場であったといっていいだろうと思います。

Ⅲ.「理学」から「経綸」へ ――『三酔人経綸問答』の方法

兆民は、こうして「理学」の世界から改めて「経綸」の世界に戻って『三酔人経綸問答』を書く、

つまり「訳解」の世界ではなくて、「問答」の世界として「経綸」をおき直すのですが、『三酔人』に関しては、そのタイトルにいうほど「問答」になっていないのではないかという批評がいろんな形で出されてきています。いちいちは申しませんが、しかし、「問答」は実は、兆民の「理学」のなかから出てくる方法だと私は思います。『理学沿革史』のなかで「問答」というのはいろいろな形で出てきますが、基本は〈dialectique〉の訳語として出てきます。レジュメの2頁、「3「理学」から「経綸」へ」という箇所をご覧ください。「問答」というのは何か。これは、ソクラテスからはじまる精神の方法だと。「真理ヲ啓発スルノ手段」は「問答」だと。「道理」というものはどういう形で出てくるか。「衆意思相触ルルノ間ニ爆発スル者」だと。多様な意思がぶつかり合うところにはじめて「道理」があらわれてくる。だから、ソクラテスが説く「理学」の精神、「問答」の精神が大事なのは、これは兆民のつけ加えた言葉ですけど、「外ヨリ真理ヲ其人ノ心中ニ注入スルノ謂ニ非ズ」と。外側から真理をその人の心のなかに注ぎ込む、こんなことで真理は成立しない。成立しないから「問答」が必要なんだと。だから「問答」ということを、兆民は「理学」の世界からその重要さを引き出してきた。

私はこれを何回か読んでいるうちに、プラトンの『国家篇』の問題、一節を思い浮かべます。ソクラテスがソフィストの挑発のなかで、自分が考える国家のあり方というのを話し出すときに、こういうふうにいっているんですね。「世にも常識はずれなことが語られることになるだろうということが目に見えていた」。それだからこそ「口にすることをためら」わせてきたけれども、「さあ、とうとうわれわれが最大の浪にたとえていたものに、僕が直面するときがきた。だが、それは語られなければならぬ。たとえそれが、文字どおり笑いの大浪のように、嘲笑と軽蔑で僕を押し流してしまうことになろうとも」。ここに問答の精神、ソクラテスが体現したとプラトンが考えた「問答」の精神がある。

兆民はそれを読んでいたかどうか分かりません。『理学沿革史』のなかには、この言葉は出てきません。しかし、先ほども触れましたように、『三酔人経綸問答』のなかでは、洋学紳士の発言があり、そしてそれに対する「狂せり。狂せり」という豪傑君の非難があった後に、

> 「南海先生笑って曰く、豪傑君、姑く之れを待て。紳士君をして其論を畢らしめよ。豪傑の客笑つて曰く、唯」

こういうやりとりが出てきます。私、これはとても重要なやりとりだと思います。「狂戇」の一言で片づけない。まず話を聞こうじゃないかと。「狂」という言葉は、『論語』や『孟子』のなかにもいろいろ出てきます。陽明学まで含めれば、ものすごい数の「狂」についての言説があります。「狂」は、必ずしも一方的に非難されるだけではない。「狂」は「直」であって、「郷愿」の士よりも頼るべきものだ、というのが『論語』のなかにも出てきます。「郷愿」というのは八方美人という意味ですね。偽善者。まあそれよりはずっと「狂」の方が「直」でいい、という意味の発言があります。おそらく南海先生は、まあまず話を聞こうじゃないか、「狂戇」という言葉だけで切り捨てるというのは、君子にあらざる態度だということをいったんだろうと、そういうことを念頭に置いていってるんだろうと思います。

「豪傑の客笑つて曰く、唯」、これも『三酔人』を読むときにとても大切な言葉だと思います。「唯々諾々」という言葉がありますけれども、『論語』のなかでは、「唯」と「諾」とははっきり使い分けられています。「諾」というのは、不承不承うなずくときに「諾」という言葉が使われ、「唯」というときには、決然として受けるというときに使われています。『論語』の注釈書はみんなこれにふれています。ですから、古注から徂徠、仁斎、朱子、王陽明にいたるまでの注釈書を読んでいた兆民にとって、「唯」と「諾」の使い分けぐらいは当然のことだったんだろうと思います。

もう一つ、「方法」としての「問答」の自覚の成立には、やはりルソーの『社会契約論』の独

自な読みが介在していると思います。この点につきましては、以前兆民の二つの『社会契約論』を比較して「立法」の手続きをめぐるルソーと兆民とのズレを論じた論文（「中江兆民と「立法」、『開国経験の思想史』所収）で詳しく検討したことがありますので、ここでは簡単に触れるだけにします。兆民は「政事を論ずる」ことの独自な意義について『民約訳解』を介して気づくのですが、実は、ルソー自身は、『社会契約論』において、「政治を論ずる」ひとびとが、そこからいかにして「一般意志」を導出していくのかという具体的な手続きについては、明確な記述をしていません。彼は、「意見を表明し、提案し、分割討議に付し、討論する〈discuter〉権利については多くの考察をなす」必要があると認めながら、しかし「この重要な論題は別個の論考を必要とするであろう。したがってこの小論では、すべてを語るわけにはいかない」と断っていました（第四篇第一章「一般意志は破壊することができない」）。しかし、ルソーがその後この「重要な論題」について言及することはありませんでした。それは、「理学」が回避されたことと相互に繋がっていたと思います。なぜなら、ルソーは、『社会契約論』第2篇第7章で、「一般意志」を見出し「立法」にまで到達するためには、人間の「理性」はあまりにも脆弱であり、そのために「世俗的人間の理解能力を越えたもの」をもった「立法者」が必要であり、この「立法者」は、「人間的な思慮分別〈la prudence humaine〉では心を動かすことのできない人々を、神の権威をもって導くために、神々の口をかりてこの理性の決定を伝える」のだとしています（訳、p.263）。ルソーが「討議」や「説得」といった手続きについて語らないままに終わったのは、単に時間的制約からではなかったでしょう。そもそも「神の権威」〈l'autorité divine〉を備えた「立法者」を予定していればこそ、そうした問題への真剣な取り組みを必要としなかったからにほかなりません。

『民約訳解』ではルソーのテクストになかった「議」ないし「議論」という言葉が至るところで挿入され、それと対応するように、「立法者」を論じた第2篇第7章以下が削除されていました。兆民は、「立法者」論以下を削除すると同時に、ルソーが留保した「理学」に踏む込み、さらに「問答」の在り方を独自に論じています。これらのことは、兆民のルソーの批判的理解を示すものとして一連のつながりを与えられているのだと私は考えています。つまり、兆民自身が「立法者」たらんとする、あるいは何らかの「神」的な権威を想定するのではなく、ルソーとは逆に、人間が人間としての制約性をもちながら、「神にさへ出来可らざる事業を把り来たりて自ら任ぜん」とする通常人による「自己立法」の可能性に賭けようとしたからではないかと考えました（「中江兆民と「立法」、『開国経験の思想史』所収）。そして、ここでの文脈に沿って言い換えれば、「問答」という方法に対する自覚は、この「人民」の「自己立法」への意欲とも結びついて成立していたのではないかと思います。

Ⅳ.『三酔人経綸問答』の構図(1)——洋学紳士と「理義」〈raison〉

こうして「問答」への方法的な自覚に支えられた『三酔人経綸問答』が立ち上がっていく。ですから、三人の立場というのは違うけれども、それぞれが自立した根拠をもって展開されている。だから『三酔人経綸問答』は、論理的な対立、抽象的な論理の対立ではない。人格化された論理の対話として成立していくわけです。そこから『三酔人経綸問答』の面白さというものがでてくるわけですけれども、「狂せり」という言葉を浴びせかけられて、洋学紳士は自分の民主化の徹底、非武装の根拠ということをどうやって説いていくか。これ、とても難しい問題ですけれども、さっき紹介したプラトンの『国家』のなかでのソクラテスの言葉と通じる精神で、洋学紳士は自分の論拠というものを語っていきます。

その時に兆民が依拠していたのは、いろんなのがありますけれど、私は、いちばん大きなものはフイエの『理学沿革史』だったと思います。それはいろんな理由があるんですけれども、洋学紳士の議論は進化論だ、19世紀の進化論というのを読んで、それをもとにして議論を組み立てたんだという理解が、すべてではないかもしれませんけど、一般的にあります。しかし、フイエの『理学沿革史』のなかでは、〈progrès〉とか〈évolution〉というのは古代ギリシャ哲学からはじまるんですね。そして、ここでも「古今豪傑ノ士」というのが出てきてきます。この「古今豪傑ノ士」というのは、古代から「意ヲ創シテ大ニ発明スル」、そういう精神というものを発揮してきて、「理学」の歴史というのは、そういう伝統を負うことによって成立してきたんだと。それはもちろん、なかでは対立するかもしれないけれども。「理学ノ旨趣ノ進歩〈progrès〉ヲ計ルトキハ、以テ人事ノ進歩〈progrès〉ヲ権(ハカ)ルコトヲ得可シ」。それはどういうふうにはかられるか。その議論をたどっていくと大変ですから、もう簡単にいいますと、古代以来、完全性の追求ということが「理学」の一つのテーマであった。「「完粋ノ邦国〈l'État perfait〉」「天意ノ政府〈le cité céleste〉」への希求と近接」というふうに、3ページ目のところのいちばん上で書いておきました。それは、「世界庶物」の不完全性と、それに対立する完全性の世界というものをどのように媒介していくか、そういう問いのなかで、いろんな「古今豪傑ノ士」が試みてきた歴史、それが「理学」の歴史だと。

そのなかでですね、〈raison〉、理性、兆民はこれを「理義」と訳していきますけれども、「理義」の立場に立って、この問題をもっとも政治の世界に関して体系的に論じたものとして、フイエはモンテスキューをあげています。モンテスキューについてはとても長い記述を費やします。そしモンテスキューこそ、この完全性の世界と不完全性の世界というものを媒介する「事物進化ノ理」というものをもっとも〈raison〉の立場からよく説明した人だと。モンテスキューは〈la grande idée d'évolution ou de développment progressif〉という「理学」上の立場を鮮明にしたんだというふうに述べています。「真の人類の法〈loi〉」というのは、〈raison〉「是ナリ、而シテ地球上到ル処民タル者皆以テ之ニ循フコト有リ、若シ夫レ各邦設クル所ノ政法ノ如キハ特ニ此理義〈raison〉ヲ施為スル所ノ条項ト曰フニ過ギザルノミ」。あるべき法というのは〈raison〉に基礎づけられる。そして、延々とフイエの『理学沿革史』はモンテスキューの政体論を解説していきます。そしてそこで、それがモンテスキューの『法の精神』の理解としてどこまで当たっているかどうかという問題は別にして、『理学沿革史』のなかでの説明を紹介しますと、それは「君主専制〈despotisme〉」からはじまって、「民主政治」〈république〉にいたる道程であって、その中間に「君主政治ヨリ進ミテ民主政治ニ入ルノ站駅(タンエキ)」として、「一時仮設ノ制」というものが介在する。それが「立憲政体」。これは〈mixed monarchy〉、あるいは法によって制限された〈monarchie〉だというふうに述べています。その叙述というのは、ほとんど『三酔人経綸問答』における洋学紳士の三政体論、三政体進化論というのを非常に克明に根拠づける。両者の文章をつきあわすと、かなり重なります。

しかし、モンテスキューの説いた〈république〉というのは、じゃあ「完備精粋」というふうにいえるかというと、そうではないと。つまり、平等の制についての理解が行き届いてない。そこから、『三酔人経綸問答』はいきなりカントに飛んで、カントこそが「理学精粋の体裁」に政治を合せしむること行ったんだと。『理学沿革史』のもとの言葉でいえば、〈l'idee de perfection〉というものを政治の世界で政体論を通して示した。ルソーはすっ飛ばしているんです。〈raison〉の立場からいくとそう読むべきだというのが兆民の捉え方だと私は思います。『永久平和論』についての議論は後で立ち返ります。

Ⅴ.『三酔人経綸問答』の構図(2)――豪傑君と「行為の旨趣」〈motif des actions〉

豪傑君の話をこの「理学」との関連で考えてみますと、先ほど『理学鉤玄』のなかで、「実質説」の立場からする「古来豪傑ノ士」の理解の仕方ということを紹介しましたけれども、それは4ページの「4」のローマ数字のIIのところ、もういっぺん同じことを出しています。このいちばん最後のところ、その立場からみると、つまり行為の動機ということがいろいろあって、それはとても、それを考えることが重要だと。つまり、意識的に選択する「理義」と、その行為の〈motif〉、動機の次元とは違っているんだ。そして、人間の行為の動機ということについてだけ考えると、圧倒的な比重は「利害」〈intérêt〉や「快楽」〈plaisir〉。そもそも、人間は行為をいかにするか。〈désir〉、「願欲」というふうに兆民は訳していますけれども、〈désir〉の契機がなければそれは動かない。〈intérêt〉、〈plaisir〉、〈désir〉、こういった要素で人間の行動というものをみていく、これが必要だと。これは「実質説」つまり〈matérialisme〉だけの問題じゃない。〈spiritualisme〉の立場からいっても、〈sentiment〉という問題というのは、いかに大きな問題としてやっぱり考えられてきたかということを『理学鉤玄』のなかで、別のところで説いています。そこでも

「古来豪傑ノ士奮フテ偉業ヲ建立セシハ智ノ明以テ之ヲ導ク有リト雖モ、抑モ活発興起ノ情之ヲ激シテ然ルナリ」

で、「情」は両義的だと。「理義」を選ばせるだけではない。悪も選ばせる。だから、〈spiritualisme〉の立場からいったって、「行為ノ旨趣」ということが重要なんだ、それは分極させるんだ、ということをいいます。『三酔人経綸問答』のなかで東洋豪傑の議論が冴えわたっていくのは、この観点から政治行動を分析していくというところにいろんな形であらわれていますが、もう逐一はふれません。

だから、そういう観点からみると、〈raison〉の「完粋」「完備」の論理というのは、それだけでは行動に結びつかない。「是ニ知ル、カント家学士ノ所謂道徳ノ法令」、定言命法「ハ浮奇虚懸ノ空語ニシテ、其実ハ道徳モ亦利己ノ一念ノ変化シタルニ外ナラザルコトヲ」。ここに、洋学紳士に対する豪傑君の非難が、たんなる「狂」という非難だけではなくて、「理学」のなかに根拠づけられた批判として成り立つ側面が示されているといっていいだろうと思います。最大の快楽というのは何かということについて、東洋豪傑はいろんな議論をします。その極めつけは、「非凡派の豪傑」、通常の豪傑などではない、誰も経験したことのないような快楽というのを味わうことのできる、これが「非凡派の豪傑」。これは『三酔人』の中に直接出てきませんけども、豪傑の解釈のなかに、「非常ノ人有リテ、然ル後ニ非常ノ事有リ。非常ノ事有リテ、然ル後ニ非常ノ功有リ」。これはやっぱり司馬遷の『史記』の「司馬相如伝」のなかに出てくる言葉で、これはたんに利己主義だというのじゃないんです。「夫レ賢君位ヲ践ムヤ、豈ニ特ニ委瑣握齪シテ、文ニ拘リ俗ニ牽レ誦ニ循ヒ伝ニ習ヒ、当世ニ説ヲ取ルト云フノミナランヤ」。つまり、ありきたりの行動をするんじゃなくて、非常の時に非常の才を発揮して非常の事を行う、そこに最大の快楽を感じる、目指す。それが、豪傑君からみたときの真の豪傑。だから、そういう観点からいえば、彼が提起している、西洋列強が相互に対立している間に無防備なアジアの強国に進出していく、そこに最大の快楽を感じるということも出てくるわけです。正当化されるわけです。

で、この豪傑君と、それからさっきみた洋学紳士の間に鋭いやりとりが展開されていくのが、カントの永遠平和説をめぐる議論です。『理学沿革史』のなかでカントの「永世太平論」というのを紹介したときに、フイエは、「永世太平論」は「憑空ノ論」か、〈chimérique〉であるかという設問を立てて、カントはそうでないといっているというので、それを紹介しているわけで

すけれども、しかしカントの議論はまだ、洋学紳士の立場からいえば「理義」の極まりまで行っていない。「理義」の極まり、「完粋」の「理義」というのはどういう形でえられるかというと、たんに非武装連邦制というのをとるだけではない。国家の正当防衛権というものを放棄するというところまで行かなければ「理義」の説にならない、というふうにいうわけです。そしてこれは、ジュール・バルニの『民主政の道徳』のなかに関わる議論です。バルニ自身は、国家の正当防衛権は容認されるべきだという立場ですけれども、これ井田先生、指摘されているように、兆民はそれをこえてるというふうに、独自性を発揮しているというふうにいわれてます。私も、そういうバルニとの違いはとても重要だと思うんですけれども、バルニの議論をもう少していねいにあたってみますと、いろんな議論が、理学者の議論があるけれども、それは国家の防衛権というのを認めているという点ではだいたい共通している。そのいちばんみやすい例としてバルニが参照させているのは、モンテスキューの『法の精神』第10篇第2章です。レジュメの3頁の中ほどに紹介しておきました。もう読んでいる時間がないので下線の部分だけみます。

「社会間においては、自然的防衛の権利はときとして攻撃の必要を生ずる。ある人民が、これ以上平和を続けるならば他の人民が彼らを滅ぼすことができるようになると見てとり、そして、攻撃がこの滅亡を阻止する唯一の手段であると見てとるときである」

つまり、防衛的攻撃、先制攻撃というのも国家の自衛権のなかに含まれる。これ、モンテスキューの議論です。これに対して、サン・ピエールをばかにしたヴォルテールというのは『哲学辞典』でどんなことをいっているか、よくみておけという趣旨の発言があります。実際、『哲学辞典』を私もみてみたんですけれども、そこでこういうことを書いているんですね。

「有名なモンテスキューは人道的とみなされていたが、隣国民が出し抜く恐れがあるときは、彼らの国へ兵火をもちこむのは正当である、と述べている。もしそれが法の精神であるならば、それはボルジアとマキャベリの法の精神である。しかしそれが真実であるとすれば、その真理を反駁しなければならない」

というふうに述べています。兆民はヴォルテールをたくさん読んでいるので、おそらく読んだだろうと思います。で、さらにヴォルテールはこういうふうにいってるんです。

「もしあなたたちの隣人が平和の間に非常に強力になろうとしても、あなたたち自身が同じくらい強力になることを誰が妨げるでしょうか。もし隣国が同盟を作れば、こちらでも作ればいい。もし隣国が宗教で後れを取るものの、産業と兵士で上まわるのなら、その賢明な経済運営を真似すればよい。隣国が水兵で上まわれば、あなたがたの水兵を増やせばいい。これらは、すべて正義にかなっている。しかし、あなたたちの人民をもっとも恐るべき悲惨に曝すのは、余りにも多くの場合、あなたたちのあの公平な隣国の王が、あなたたちの愛する身内を抑圧しようとしているという妄想なのだ」

〈l'idée chimérique〉なのだ、というふうに述べています。これは、南海先生が二人の客を批判するときに、「過慮」、思いすごしだということをいいますけれども、兆民はどこまでそれをヴォルテールの言葉としてそこにふまえていたかどうか、私は分かりません。分かりませんけれども、しかしそれは、南海先生の議論であるかもしれないけれども、洋学紳士の議論ではない。洋学紳士は徹底した国家自衛権の放棄なんです。で、それはどこに根拠を見出していたか。『三酔人経綸問答』のなかでその言葉というのは、「理学」的旨趣からいえば、

「彼れ悪事を為すが故に我も亦悪事を為すと曰ふが如きは是れ即ち君の旨趣なり、何ぞ其れ鄙なるや」

というふうに述べています。悪事に対して悪事をもって対すということを、「鄙」、いやしいというふうに批判するのですけれども、その論拠として私は、やはりソクラテスの言葉というも

のにまで兆民はさかのぼって考えたんだというふうに思います。

行ったり来たりになりますけれども、レジュメの3ページから4ページにかけての引用をみてください。これは、ソクラテスの章で、ソクラテスがアテネの民衆の裁判にかけられて死刑を宣告されたときに、牢獄を訪ねた友人の脱獄のすすめというのを拒絶する言葉。これをフイエは非常に多くの言葉を費やして、『ソクラテスの弁明』と『クリトン』から引いています。

「汝若シ我レニ説クニ我ガ道理トスル所ニ勝サル者ヲ以テセザルトキハ、汝終ニ余ヲシテ図ヲ改メシムルコト能ハズ」

まあ、あなたが説得するのはいいけど、私がよって立っている「道理」というものを上回る根拠というものが示されなければ､私は動かない。どんなおどしに対しても動かない。下線の部分、

「余ノ自ラ誓フテ独リ余ガ中心ノ良智〈raison〉ノ声ニ聴従セザルコト一日ニ非ズ。今日豈遽ニ之ニ負クコトヲ得ン」

「不正ニ報ユルニ不正ヲ以テスルコトハ自ラ尊ブノ道ヲ知ラザル者ナリ」

「当ニ悪ニ報ユルニ善ヲ以テス可シ、悪ニ報ユルニ悪ヲ以テス可ラズ」

この言葉を紹介した後に、

「ソクラットノ唱説セシ所ノ諸旨義ハ独リ今日ニ伝フルノミナラズ、之ヲ永世ニ伝ヘテ不朽ナルヲ得ベシ」

と。これ、さっきの洋学紳士の言葉とぴったり重なるんですね。しかしその後に、それは果たして「道理」として説くことはできても､「経綸」の世界でそのまま通じるかというと、そうではないというただし書きがつけられます。しかし、洋学紳士は豪傑君や、さらに後に出てくる南海先生の批判、いずれも「狂」という言葉を使った批判ですけれども、それに最後まで肯んじません。その根拠は､「余ガ中心ノ良智ノ声ニ」耳を傾けるということにある。しかし、それが成り立つのは、大きな犠牲を払うことになる。ソクラテスにおいては「智」と「行」とが合一しているけれども､「智」と「行」が乖離しているのが人間だ。その世界で政治というのはどのような形をとることになるのか。これが最後の問題なんです。

VI.『三酔人経綸問答』の構図(3)――南海先生と「意欲」〈volonté〉

『三酔人経綸問答』を読む際に、南海先生の立場をどのように考えるのかというのは､「理学」の上でどのような立場に立っていると考えるのかということを考えるときに、やはり『理学沿革史』は非常に示唆的な叙述をしています。さっきいいましたように、フイエの『理学沿革史』は〈évolution〉や〈progrès〉を担ってきた〈raison〉の歴史ということについてくりかえし述べていますけれども、しかしそれがもっとも典型的に出てくるのは18世紀フランス、そしてフランス革命につながっていく「理学」の世界で、ここには三つの異なった論理というのが合流していたと。レジュメの4ページから5ページのところに､『理学沿革史』の一節を紹介しておきました。「法」とは何ぞやということをめぐる議論です。

「第十八紀ニ在リ。我法朗西学士ノ政術ニ係ル理学ハ其傾嚮蓋シ三種ノ別アリ。而シテ此三種ノ別ハ....尋常理学ノ三種ノ旨趣ト堅ク相応ズルヲ見ル」

第一の立場、

「即チ政術ノ最モ首ニ興リシ者ハ五官ノ感触ヲ以テ本旨トシテ斯ニ以テ利己ノ旨趣ヲ主トス」

これは〈utilitaire〉あるいは〈sensualiste〉の立場。「快楽〈plaisir〉ヲ旨トスル者ノ政術即是ナリ」。二番目､「其次ニ興リシ者ハ､智慧ノ承受スル所ノ旨趣ヲ以テ本旨トスル者」。〈rationaliste〉､

〈intellectualiste〉

「ニシテ、乃チ事物自然ノ理〈rapports nécessaires des choses〉ニ循フテ以テ法律ヲ建設セント欲ス。最後ニ乃チ一理学ノ更ニ高尚ナル者有リテ意欲ノ自由〈la volonté〉ヲ以テ本旨ト為シテ、而シテ其法律ヲ論ズルヤ以為ヘラク、是レ自由ノ意欲ヲ有スル衆生霊ノ相共ニ議シテ之ヲ定ムル所ナリト。....此レ蓋シ政治ノ極則ナリ。

此三人ノ政治ノ大旨ヲ嚢括（インカツ）スルニ、⑴ハ曰ク法律ハ五官ノ感覚ヨリ出ズ、⑵ハ曰ク、法律ハ事物ノ定理〈la raison〉ヨリ出ヅ。⑶ハ曰ク自由ノ意欲〈la liberté〉ヨリ出ヅ」

これは一、二、三、もうお分かりだろうと思います。エルヴェシウスあるいはヴォルテールというものをそこに加え、二番目の立場としてモンテスキューを加え、三番目の立場としてルソーを指摘しています。ルソーの立場というのは〈raison〉の立場じゃない、政治に於ける〈volonté〉の立場である。そして、〈volonté〉の立場というのは、一人の〈volonté〉ではない。「衆生霊」、多くの人間の「相共ニ議シテ之ヲ定ムル所」に成立するものだ。だから、事物必然の理などといったものとは違う、一定の「旨趣」、決まりきった不易の理とは違う「法」というものを作り出すところに、〈volonté libre〉の作り出す「法」の意味があるんだと。『理学沿革史』のなかで、モンテスキューはこの立場から批判されるんです。

そしてこの三番目の立場というのをもっと深く論じたもの、『社会契約論』を参照しろと。で、フイエはここというふうにいっていませんけれども、私が思うに、ルソーの『社会契約論』における「法」の定義というのは、第2編第6章のなかに出てきます。兆民はとても面白い、正確な、あるいは非常に補った訳をつけていますけれども、難しいので、ここでは現代語訳を紹介します、その相当する。

「およそ善であり、秩序にかなうものは、事物の性質からそうなので、人間の合意などに関係ないのである。正義はすべて神から由来し、神のみがその根源である。しかし、われわれが正義をかくも高いところから受け取ることができるならば、政府も法律も必要としないであろう。

明らかに理性のみから発する普遍的正義があるが、この正義がわれわれのあいだで承認されるためには、相互的でなければならない。....

自然の法とは何か、に答えたところで、やはり国家の法とは何か、をよく理解しえないだろう」

兆民はこの部分を『民約訳解』のなかで非常に正確に訳しています。そして、これについて長い「解」をつけています。5ページの一番最後にその「解」を紹介しておきました。もう時間がないので、その今私がお話しした趣旨というものをていねいに説明しています。

そして、この論理というのは、南海先生のなかに出てきます。

「邦国なる者は衆意欲の集合」

「進化神は、社会の頭上に厳臨するに非ず、又社会の脚下に潜伏するに非らずして、人々の脳髄中に蟠踞する者なり。是故に進化神は、人々思想の相合して、一円体を成す者なり」

「神」として上に君臨するのではない。また、自然の「法」、事物の自然法として「社会の脚下に潜伏する」ものではない。人々の自由な意志というものによって定められるものだと。その定め方、それが『民約訳解』のなかの根本的なテーマ。議事の正道について説いたものだというのが、兆民の理解する『民約訳解』の根本的なテーマ。これは私、昔兆民と立法というタイトルで書いたものでもあるんですけれども、そこで論じたものに対応しているかと思います。

南海先生は一見、冒頭に紹介しましたように、「時ヲ料」って「人情ヲ揆」る、それが大事だ、それをはからない奴は「狂戇」だといったわけですけども、それは決してその時々の状況に適合

しろといっているわけではない。その時において相互性をもった「理義」を「衆意欲」で選びとるということのなかに、「法」の根本的な対処の仕方があるんだというのが、南海先生の基本的な立場。だとすると、名前こそ提示していないんですけれども、私は南海先生の論理のなかにルソーの『社会契約論』の論理、兆民が理解する『社会契約論』の「法」の論理というのが非常にストレートにあらわれている。兆民は、それがいかに困難なことか、神にあらざる人間が立法をくわだてるということの難しさということについて、くりかえし指摘していますけれども、しかし、人々の意欲によって「理義」が選択される、相互性のなかでそれが選択されるということの重要性ということを最後まで放棄しない。そのことを最後に述べる。

洋学紳士の議論は、「狂戇ノ甚キ」ものとして否定されるのではなくて、意欲の論理のなかで別の形で受け入れられていく。兆民の「解」は、『民約訳解』のときの「解」とは違います。しかし、人々が自由な意欲によって選びとるべき「法」というのは、時間がかかっても正道なんだと。しかし、今強要されようとしているのは、「恩賜の民権」、上からの、民に臨む者、立法者が押しつける「法」であろうとしている。明治20年、まだ明治憲法はできていませんけれども、それがそういう形で欽定として制定されようとしている。どうすればいいか。ルソーの立場に立って考えれば、「恢復の民権」というものが必要なんだけれども、しかしそれは「恩賜の民権」というもののなかで、近づけていかなければならないんだ。これが南海先生の立場です。

しかし、南海先生はルソーの論理を19世紀の東洋の小国で生かそうとするわけですけれども、そしてその限りでいえば自慢の文章だといっているのですけれども、最後に「南海先生胡麻化せり」という言葉が出てきます。これをどう考えるか難しい問題ですけれども、兆民に即していいますと、この後『選挙人めざまし』という本を書きます。それは、もうこのレジュメのなかには、もう時間がないので入れませんでした。どういうことを議論しているか。ルソーの、主権は譲り渡すことはできないと同時に主権は代表されない、君主の専制も国会の専制も専制としては同じだ、だから「恩賜の民権」をじっくり「恢復の民権」に近づけるということを南海先生として語ったけれども、兆民は待っていられない、第一議会でいきなりこれをやろうとします。南海先生の目からみれば、第一議会の兆民は「狂戇ノ甚キ」ものとみえたかもしれませんけれども、しかし兆民がまさに「兆民」を名乗って出てきたときには、そうせざるをえないぎりぎりの状況に迫られていたんだと思います。南海先生は兆民自身に対して「狂戇」の言葉で批判しつくせない。それを兆民自身が行動を通して示してというふうに私は、その最後の付けたりを解釈します。「狂戇」の働く余地、「直」にして「狂」なることの働く場所、時ということがあるんだということを兆民自身が示したというのが、私の『三酔人』の読み方ということになります。

ほかにいろいろいいたいことがあるんですけれど、もう十分長い時間を使ってお話ししましたので、この辺で切り上げることにしたいと思います。（拍手）

司会　宮村先生、本当にありがとうございました。おそらくはもっといろいろな、お話しされたいことがまだまだたくさんおありと思います。ちょっと休憩を5分ほどとって、質疑という形でまたもう少し、とても深いお話なので、出しきれなかったところをまたもっと出していただければと思います。

〔休憩〕

司会　よろしいでしょうか。それでは、一部を再開させていただきたいと思います。宮村先生の方から非常に、本当に深い、大きな問題をいろいろいただいているので、いろいろご質問もある

と思うんですけれども、最初井田先生はやはり『三酔人』に関して「「東洋のルソー」中江兆民の誕生」ということで論文をお書きになっておりますので、井田先生から何かご質問とか、何かありましたらお願いしたいと思うんですけれども、いかがでしょうか。

井田進也　いやあの、突然のご指名で、いやこれはすごい議論だなあと思って、ただ感心してうかがっていて、何とも申し上げられないんですけれども、私自身は、今言及されました論文で、『三酔人』のなかで兆民がですね、ジュール・バルニの “La Morale dans la démocratie”『民主政の道徳』のなかから洋学紳士の永久平和論を引用しているというところをみつけましてですね、それで鬼の首をとったようなつもりになってあの論文を書いたわけなんですが、今の宮村さんのお話をうかがって、よくぞここまで、まあ特に『理学沿革史』、それからもちろん『民主政の道徳』を読みこなしてですね、ここまで議論を展開されたということにつきましては、ただ感服するばかりで何も申せないんですけれども、一つだけフイエの『理学沿革史』について、これは私が一つだけ考えたことだけですので、きちんとした質問なり、何といいましょうか感想など述べられないんですが、『理学沿革史』のなかでフイエがソクラテスの勇気について、つまり牢に、脱獄したらどうかとすすめにきた友人に対して、弟子でしたか、に対して、自分は脱獄しないといった、そういう勇気のことをですね、ジュール・バルニが『民主政の道徳』のなかで、特にまた同じソクラテスの例を、まったく同じソクラテスの例を引きまして、二つの、つまりジュール・バルニの『民主政の道徳』は前半が個人道徳というか個人のモラル、後半が〈publique〉公共のモラル、でその公共のモラル、政府の責任とかそういうのを論ずるところに出てくるんですが、そこでソクラテスの例を出しまして、市民には二つの勇気というものがあると。〈courage militaire〉軍事的な勇気と〈courage civile〉市民としての勇気。

宮村　バルニは、〈courage civique〉としていたかと思うのですが.... ？

井田　英語だったら〈civic〉で、フランス語だと〈courage civile〉ですね。市民的な勇気、社会的な勇気といっていいのか、それとあとは軍事的な、軍人としての勇気というのはよく分かることだけれども、つまりそのときにソクラテスがですね、正義というものがあるときに自分はそれにそむくことはできないと、決してさわがしい勇気というか、軍人のような華々しい勇気ではないけれども、そういうある意味で静かな勇気というんでしょうか、そういう議論が、先ほど私はほとんどついて行けないで困っていたぐらいなんですけれども、宮村さんがよくぞあそこまで読みこまれたフイエの議論とバルニの議論が、同じようなといっちゃいけないんですけれども、やはりそういう時代でもあるし、やはり兆民を媒介してになりますけれども、近いところにいた人なのかなという、たんなるそんな断片的な感想だけなんです。私も『全集』を作るときに、原文とフイエなどは対照で読みましたけれども、まさに今の話を聞いてますと、木をみて森を全然みなかったと。彼は森に見事にわけ入ったという感想を強くもちました。ただ感心するばかりです。

宮村　ありがとうございました。ジュール・バルニとフイエとが思想的にどういう共通性や違いというものをもっていたのか、同時代でどうなのか、バルニの方が少し早いわけですけれども、私もつめて考えたことはないんですけれども、両方ともルソーに対する敬愛とそれから批判と、両面もってますね。

井田　その時代が、そういう時代でもある。はいはい。

宮村　ええ。バルニは『民主政の道徳』のなかでルソーにふれることは多いんですけれども、ほめるときは『新エロイーズ』とか、それから『告白』とか、それから『エミール』とかだけで、『社会契約論』に一箇所だけ言及しているところがありますけれども、こてんぱんですね。

井田　こてんぱん、そうですね。これはアコラースもですね、はい。

宮村　こてんぱんですね、ええ。カントは非常に評価が高い。

井田　はい、はい、そうです。

宮村　ですからバルニが、さっきの三つの論理でいえば、ルソーの〈volonté〉の理論に関して必ずしも全面的にコミットしてないんです。

井田　まったくそうだと思います。同じ〈volonté〉でもですね、つまり一人の専制君主による専制も、despotisme もあれば、群衆による despotisme もあると。ルソーの人民主権論というのはまさにそれなんだと、非常にきびしいですね。

宮村　ええ、ええ。バルニとフイエは両方ともルソー批判ですけども、兆民の場合に即して考えますと、兆民が洋学紳士とそれから豪傑君を通して、いちばん〈raison〉の立場からいって完璧性を示した憲法は何かといえば、93年憲法だと。で、『政理叢談』の創刊号に93年の人権宣言の漢文訳が掲載されますね。だけども、その93年憲法を作ったジャコバンが、革命のもっとも惨烈な状況を作り出したという評価ですね。ですから、〈raison〉の次元と、それから行為の〈motif〉の視点からみた行動と、兆民の場合、非常にはっきりと分けますけれども、バルニのなかにどこまであったかは、私もそういう観点でバルニのあれをきちんと読んでないので、ここで何ともいえない。ただ、『社会契約論』に関してはすっ飛ばして、そしてカントだけは〈raison〉として評価するというのがバルニの立場で、フイエの方はそこは、モンテスキューの〈raison〉論と、それからルソーの〈volonté〉の論理を明確に区別しているという点では、バルニと違った理解を示しているというふうに思います。

井田　この時代のそういうルソー批判といいましょうか、特に人民主権論批判、これはアコラースなんかにも共通してますので、人として、あるいは自由とか正義ということを語ったという点では尊敬するけれども、人民主権論には同意、賛同できない、これはこの辺の、特に兆民が『政理叢談』として集めた人たちの間にほとんど共通した認識だと。後で私のところでちょっとその辺もう一度むしかえさせていただいて……。

司会　ありがとうございました。それではほかのみなさまからご質問、いろいろあるかと思うんですけれども。では、挙手をしていただければと思います。

質問者A　大変勉強になったんですが、ただ、今のお話のなかでですね、最後にちょっと出たことに関してちょっとコメントしたいと思うんですが、コメントというか少し聞きたいということと、それからコメントとなんですが。まず一つはですね、中江兆民がですね、〈raison〉の立場からもっとも完璧な憲法というのは93年憲法だとふうに理解……。

宮村　まあ、ちょっといいすぎですけどね。

質問者A　あ、そうですか。

宮村　いや、93年憲法を創刊号に、93年の人権宣言を出しているのはその通り。そして「不朽の典章」という言葉で93年人権宣言を表現している。これは『三酔人経綸問答』、はい。

質問者A　どういう点で、完璧な憲法というとちょっといいすぎたということですけども、どういう点で非常に評価しているのか、人民主権ということなのか……。

宮村　人民主権、だから国民主権と人民主権と区別する議論がありますけども、人民主権だと。つまり人民集会に法の批准権を与えている。そこが93年のいいところだと、ということです。

質問者A　なるほど。はい、はい、それで、いやちょっと、これはコメントというかフランス革命をやってますので、その立場からのコメントですけれども、93年憲法というのは実際には実施に移されてないんですが、93年6月の終わりにもちろん憲法として成立したんですが、それはもうそのまま憲法として……。

宮村　お蔵入りになるんですね。

質問者A　お蔵入り。で、93年10月10日にですね、サン＝ジュストが国民公会、議会で演説をして、それでそれをふまえて国民公会が、憲法は平和の到来まで無視してですね、革命的だと。要するにそれで革命政府というのは追認されるという形になるんですが、それで、ですから恐怖政治というのは憲法の存在しない状況のなかでおこっているということなので、その点だけちょっと指摘して……。

宮村　はい、そこはとても重要な点だと思います。だから、93年憲法は未完の憲法としてずっと継承され、共和主義者はみんな継承している。ジャコバンを批判する奴だって、93年憲法は理念としては受けついでいるという理解ですね。だから、兆民のなかで、そこの法の完成度という次元での評価と、それを振りかざした行動者としてのジャコバンに対する批判と、両立したんだと思いますね。それは、『革命前法朗西二世紀事』のなかで論じている。

井田　後で兆民の革命観についてちょっと。今のあれですかね、『政理叢談』の最初に載っているのは人権宣言ですよね。93年憲法じゃない……。

質問者A　93年憲法の人権宣言、前の方についている人権宣言……。

宮村　そう人権宣言。憲法そのものじゃないです。しかし兆民たちが依拠し全部訳出しようとしてたアコラスの『政治科学の哲学』、その結局は翻訳されないで終わった第二部は、全部幻に終わった「93年憲法の注釈」でした。

井田　憲法そのものではないですね。後でちょっと革命演劇について私の方でお話ししたいこと

がありますので、その時だとやはり91年憲法、兆民の許容しうるのは91年憲法じゃないかということを後で申し上げようと思っていますが、よろしくお願いします。

司会　ありがとうございました。

質問者B　すいません、先ほどの報告の中で、兆民は、〈spiritualisme〉というのを「精神説」というふうに訳して、〈sensualisme〉を「実質説」と訳してるでしょう。そうした訳語の上での対立性は、もともとの西欧での文脈とは別にあるように思われますが、どうなんでしょう。いちばん聞きたいことは、ここにも外部注入論が出てくるけど、自然に、まず兆民という人間がいて、そこで自己形成ができていて、それが中国の漢籍を自由に読めるというなかで、要は外部注入、それに対して。それからもう一つ、フランスでいろんなテクストに出会っていくという、そこに全部食い違いあうものが出てくる。だけど言葉として使うときには、すでに彼自身が使っている言葉が、たとえばテューダー・イングリッシュに相当するようなちゃんとした標準日本語としていったいどこにあったのかという、そういうことなんですが....。

宮村　それはとても重要な問題なんですけど、お答えするのは難しい。たとえばですが、〈spiritualisme〉を兆民は「精神説」という訳語も用いますが、もっと踏み込んで評価するときには、「虚霊説」と訳しているんです。「虚霊」というとわれわれには何か幽霊みたいなイメージをもつけれど、「虚霊」という言葉は、朱子学のなかの中心概念の一つ「明徳」に与えられた解釈である「虚霊不昧」から取っていると思います。曇りのない晴れ渡った心の状態で、人間の心のなかのもっとも重要な機能をあらわしているわけです。「衆理を具え、万事に応ずる」、そういう「虚霊不昧」という、朱子の注のなかに出てきますけども、兆民はおそらく「虚霊」という言葉を、後世のわれわれが感じるよりはもっと肯定的に使ったんだろうと思うんですよね。だから、〈spiritualisme〉を「虚霊説」と訳するとき、否定的な含意よりは肯定的な含意に即してみる見方ができる。「心の自由」への着目はその一例でしょう。しかし、彼の漢学で育ったもっとも基底部分の思想は、やっぱり超越的な神の存在、それに対する信仰というものを許容しない。あるいは「敬シテ遠ザクル」。それは世界観としての〈matérialisme〉というものと、いつどういう形で結びつくか、それは難しい問題です。基本的には対立する。しかし、それを全否定しない。だから、〈spiritualisme〉を「虚霊説」というふうに訳すこと自身が両義的な評価を示しているんだと、僕は思うんですね。お答えになったかどうか分からないけれど。

質問者B　いや、つまり、今日話を聞いていて、すぐ分かるようなくだりは一つもないんで、なんべんも巻き戻して聞きながら反芻して、いったいどの辺にそのあれがあるのかと、聞く方の能力がものすごく試される報告ですから、それはそれですばらしいんですけれども、私は多分そうだろうと思って聞けますから、能力の問題はありますが。ただ、訳語の問題として、つまり漢籍があってフランス語があって、じゃあ自分の日本語があって、日本語というのがどういうふうに、そういう経典とかドグマのレベルで日本語というのはどういう形で対抗できたのかという問題は、僕には分かりません。分からないけど、彼はそういうところで話さなきゃならないときに、逃げなかったんだろうと。だけど、僕は来るときに、『理学鉤玄』の後だから、『民約訳解』と『経綸問答』だろうというふうに予想してはいたんだけど、実はそれしか知らないから、難しいからね。だから、いったいどこに彼の位置を定めて見るのか、興味を持ってきました。ただ彼は全部自分で考えていると思うわけ。全部別なふうに。誰とぶつかっても。だから、それは外部注入で「精

神説」にもルソー主義にもならないで、どこまでも兆民は兆民たらんとして、そこのところを今日、四苦八苦して物の見事にそのプロセスを演じてくれたから、思想史というもののすごくエッセンスというのがよく分かったんですけどね。そこでもう一つ訳語の問題で、レジュメ2ページと3ページのところで、〈raison〉を「理義」と訳されて、それから〈conscience〉を「良智」と訳されて、それで3ページで〈raison〉を「良智」と訳されているという、この辺の揺れ方はどうなんですか？

宮村　確かに訳語として、ゆれがあります。『理学沿革史』のなかだけでみても、〈raison〉の訳は「理義」になったり「智恵」になったり「良智」になったりしますけども、さっきいいました〈intérêt〉と〈volonté〉と対比したときの〈raison〉に関しては、一貫して「理義」です。ですから、その文脈で考えるよりしょうがないと思いますね。

質問者B　〈conscience〉っていうのはどういう……。

宮村　それは井田先生が、あの訳語とフランス語の比較対照一覧というのを『理学鉤玄』の巻末につけておられて、私それ、大いに参照させていただいたんですけれども、〈raison〉の訳語は『理学鉤玄』のなかでも多様ですね。多様ですけども、さっきみた文脈のなかで使うときには、その意図ははっきりしていると思うんです。

質問者B　『リヴァイアサン』の第一部で、〈conscience〉って出てくるんです。それを水田さんは「共知」って訳しているわけです（第1部第7章）。それで、ところが〈conscience〉って、どちらかというと〈spiritualisme〉に親近性をもっている言葉じゃないんですか？　その辺は僕、分からないんだけど。もうこれ以上聞きません、すいません。

宮村　『理学沿革史』の冒頭は、〈conscience〉は「良智」として出てきますけども。「良智」という言葉が常に〈conscience〉と対照、対応しているかというと、文脈によって使い分けている。だからそこのところは、なかなか一筋縄ではいかないんですね。

質問者B　どうもありがとうございました。

司会　ほかにもいろいろお聞きになりたい方がいらっしゃると思うんですけれども、時間があまりないんですけれども、どうぞ。

質問者C　最初の井田先生とのやりとりに戻るんですけどね、端的な質問は、兆民はフイエやバルニを通してではなくて、カントそのものを、倫理学は直接どれだけ読んでいたのかということを聞きたい。フランス語ではもうすでにありますよね、あの段階でも。ルヌヴィエが実に、バルニも……。

宮村　バルニも訳してます。

質問者C　フイエもバルニも、広い意味では要するに、フランスにおける最初のカンティアンでしょう。それで、お話しにあったように、その時代にルソーの政治論はだいたい評判悪いだろうけれども、あなたのいう「理学」についてみれば、要するにカントが自分にひきつけて読んだ

ようなルソーの読み方というのは大いにありうるわけですよね。おそらくフイエや何かも。で、あなたが最後にいわれている〈volonte〉に即してルソーといって、ルソーを高く評価したというのは、倫理学としてみればカントもそういうふうに読んだんですよね。そういう意味で、つまり政治論ではなくて「理学」、哲学の問題として兆民はカントと直接対峙したのか。この問題は要するに、カントがルソーをカント流に読むのは、体系的にはカッシーラーが出てきてはっきり出てくるわけだけれども、すでに要するに先鞭はこの時代のフランスのなかにあるんじゃないですか。そうすると、兆民はあるいはそれに沿っていたんじゃないかという感じを、お話を聞いて。

宮村　ありがとうございます。そこも面白い問題で、今日はとてもそこまで踏みこめなかったんですけど、兆民の「理学」の世界で、倫理学に関連して非常にていねいに翻訳に取り組んだのは、ショーペンハウアーの『道徳の基礎』ですね。それは徹底したカント批判で、しかしその徹底したカント批判のなかからすくい出してくるルソーの唯一の立脚点は、共感理論ですね。世界をのみつくす〈désir〉や〈volonté〉は、それはエゴイスムの肯定になるけれど、しかし、そこから成立しうる唯一の倫理の基盤は〈pitié〉だと。そこでカントの『実践理性批判』は、ショーペンハウアーの紹介する限り非常にていねいに追いながら、最後、それの定言命法の空虚さということをショーペンハウアーが批判している部分、ここは非常にていねいに翻訳しています。だから、ルソー、カントというのはたしかにおさえているんだけども、倫理学の世界で兆民がルソー、カントでおさまらなかったのは、やっぱりショーペンハウアーのカント批判のなかにもあるように、最終的には道徳学を通して神の存在というものを肯定する、そういう道徳学には、彼はコミットできなかった。だから、カントではなくカント批判のショーペンハウアーを一生懸命勉強して訳したと。で、それは第三共和政になって、バルニ自身もそうなんですけど、やっぱり普仏戦争の経験をくぐると、カントにみられるような立場というのは、そのままの形では主張できなくなってくる。だから、最近バルニの研究書がいろいろ出てますけど、第二帝政期のバルニと第三共和政になってからのバルニの微妙な違いというようなことも指摘されていますし、そこには時代全体の、フランスの第三共和政初期の挫折感、そういったものが投影されていて……。だから『三酔人経綸問答』でいえば、豪傑君の論理が冴えわたってくるのは、民主化にともなって理性の比重が高まるんじゃなくて、逆に、たとえば普仏戦争後のフランスがそうであったように、復讐といったような感情の契機というのが前面に出てくる。そういう時代状況を、やっぱり兆民は直接か書物を通してかは分かりませんけども、感じとっていたんだと。だからルソー、カントだけで倫理学を終わらせない。そういう問題があったというふうに思います。

司会　ありがとうございました。それでは第二部の方もございますので、とりあえず第一部、これで一応締めさせていただいて、またほかに今の宮村先生のお話に関しましても、また井田先生のお話をいただいて、お二人の対談に関して、またそこからあらためて出てきた問題とあわせてご質問いただければと思います。15分ほど休憩して、45分からはじめさせていただきたいと思います。宮村先生、本当にありがとうございました。（拍手）

〔休憩〕

司会　よろしいでしょうか。それでは、第二部の対談の方に入らせていただきたいと思います。最初に井田先生からしばらくお話をいただいて、その後対談という形で進めたいと思います。またその後、みなさまからのご質問もいただきたいと思っております。それでは井田先生、よろし

くお願いいたします。

井田　宮村さんの大変高遠なお話の後で、ぐっとさばけましてということでお話しさせていただきます。

私が今ここにおりますのは、二つの因縁というか、ご縁にまで遡るのです。本来であれば私は宮村さんのずっと先輩になるはずだったんですが、東大の法学部政治学科に行かないで教養学科というところに行っちゃいましたんで、ちょっとそのときにニアミスで先輩になりそこねたのですが、そこから、先ほど最初にお話しくださった私のパリでの、中江兆民のフランス時代、1872年から4年、明治5年から7年までを窺う何か直接的な史料が、断片的な史料しか伝わっていませんでしたもので、何かこれはというのがないかという探索が始まったわけです。そういうように思ったのですが、何も出てこないので、こうなったら仕方がないから『政理叢談』の題目とその原著者名、全部これ日本語になってますので、原著者といってもひらがな、カタカナだったんですが、それが本といっても本そのものの題名なのか、たまたま紹介した章の題なのか、何もないところに勝手に題をつけたのか、皆目分からない状態で探して、それがなかなか、3、4年結局はいろいろ間違いだらけで、かかったんですけれども、ちょうどそれができたところに、今度は74年、5年にかけてまいりまして、調べて、2、3年、3、4年かかって78年の3月の、さっきご紹介いただいた『人文学報』というところに載せてもらったのが、「「政理叢談」原典目録ならびに原著者略伝」というやつです。

ちょうどその前の年に宮村さんが都立大学の法学部に来られて、それで献呈したのがおつきあいのはじまりです。たしかに最初におっしゃられたように、宮村さんはですね、フランス語をなさってなかった、その頃。それなもんで、これは大変だろうなと思ったんですけれども、その後5年間彼はフランス語を勉強して、先ほどのような見事な、私はとてもお話をうかがうだけで精一杯のような見事な、特に『理学沿革史』にしてもバルニにしてもですね、読みこなして、とうてい私なんぞはかなわないような見事な論述をなさった。敬服するばかりですが、それからほかにもいろいろ、実は成蹊大学にも実は私、ご縁がありましてですね、「原典目録」を作ったときに、ちょうどその前に成蹊大学の文学部の山口欣次先生、江藤文夫さんが中心になって『中江兆民の世界』というのを作られたんですが、私の恩師の平岡昇先生、ルソーでいろいろですが、から、『兆民の世界』の先生方に「原典目録」をお送りしなさいといわれて、いわれるがままにお送りしたところ、山口先生、江藤文夫さんから翌年、79年に成蹊に非常勤に来ないかということで、それから何と19年こちらに、文学部の文化学科で兆民周辺の話をさせていただきました。何せ都立大学は仏文ですので、中江兆民が、というわけにいきませんので、私の兆民論は、成蹊に来て、しゃべらせてもらったのを書いて、ということでありました。そういうわけで、成蹊には大変ご縁がございます。文学部からはある時成蹊の教員にとのお誘いもあったのですが、いろんな事情が重なって、ここでも宮村さんの先輩になりそこねたという次第です。以上が、話の枕ということで、本題に入ります。

この間、二人で新宿のさるところで予行演習をいたしましたときに、私の兆民論は主としてパリとかリヨンとかフランスの現地調査をしたのが元になっているのだから、これは宮村さんの提案で、パリ、リヨン、それからマルセイユの話を枕にしたらどうかというご提案を受けましたので、その限りにおいて、ほとんど紙芝居みたいなものですけど、させていただきます。

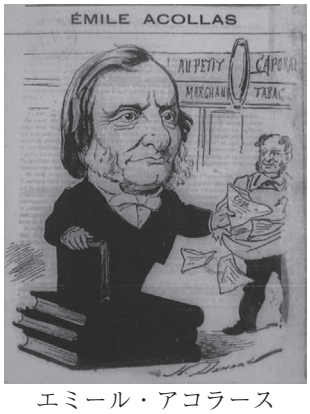
まずパリ、リヨン、マルセイユということでお話しさせていただきますが、映像を流しながらに……。先ほど宮村さんのお話にもありましたけれども、彼がパリに着きましたのは1872年、明治4年の岩倉使節団の船に同船して、津田梅子やなんかと一緒に同船して行っているわけです。

着いたのは72年の正月11日と、明治5年正月11日と当時の日本側の記録にありますが、1872年の2月の19日、厳寒のパリに着いております。ということはつまり、前の年の3月から5月まで、だいたい1870年には普仏戦争でフランスは敗れて第二帝政崩壊して、国防政府ができたときですし、その上さらにパリ・コミューンが終わってまだ一年たっていない時期に行ったわけです。主としてアドルフ・ティエールを中心とする第三共和政、まだ第三共和政が確立してませんで、確立に向けた動きと、それから王政復古、ヴェルサイユの議会は王党派が多数を占めてましたので、王党派の策謀とがせめぎ合う、そういう時期。ですから、中江兆民というと共和主義というふうに考えたいところですが、フランスが共和政になれるのか、それとも王政復古してアンリ四世の後を継ぐアンリ五世が誕生するのか、まだ分からない時期が大半。それが帰趨が決するのは、彼がもう帰ることがそろそろ心配になってくる翌年の10月に、正統王党派のシャンボール伯が国旗をですね、あくまで王室の白旗というんでしょうか、百合の花、真っ白の旗、それを拘泥して、三色旗を拒んだということで事実上王政復古はできなくなった。それまではどっちに転ぶか分からない、そういう時期でした。

で、そろそろこういう映像を使わせてもらいますけれども、兆民がパリにいた時期と、私は最初にどこに住んでいたんだろうかと、夏目漱石とか森鴎外のように、ことによったら下宿などはみつからないかと。ここのところがオデオン、今でもオデオンの周辺は盛り場ですけれども、オデオン座の横町の、このすぐ右の道にあったコルネイユ通り、劇場のそばですから劇作家が住んでいる。コルネイユ通りの5番地にコルネイユ館という宿があって、当時留学生などがいた。日本人もそこにいたことは分かっているんですが、もしもここじゃないかというふうに見当をつけるとしたら、このコルネイユ館の5階の屋根裏、6階かな、屋根裏部屋あたりと。というのは実は、パリにいたときに屋根裏部屋にいたということをちょこっと語っていたことがありますので、ほかの屋根裏部屋の可能性もありますが、この上ではないかと。ただこのオデオン座の周辺の6階建ての建物などを見て回りますと、見当をつけて行きますと、この建物は実は何十年前とかに一階上にのせたものであるとか、そういう話もありまして、上がったり下がったりしているんですね、案外。そんなわけで、あんまり6階建ての建物をみてもしょうがないということが分かったもので、こうなったら原典の調査でもするか、ということではじまったわけです。

しかし、今でもそうですが、日本人はカルチェ・ラタンに住んで、オデオン座周辺というのは、ここのところがオデオン座ですけれども、この辺にオデオン座があって、法学部ですとかソルボンヌに近いし、勉強するのにいいし、ちょっと川を渡って行けば遊びにも行けるという、日本人がかなりこの辺の道に住所のあった人が多い。そういう所です。

それで、ここでですね、パリ時代の少し映像というか写真その他を……。これは幸徳秋水の『兆民先生』のなかから、フランス時代にこういう連中と、真ん中に西園寺公望がいますが、光妙寺三郎とかですね、こういう人たちとつきあったということで、私の本の扉に写真や肖像を載せておいた……。ただ、この辺の人たちの情報は非常に断片的で、もうちょっとまともな話が、というか何か情報がないかなと思って探し出したわけなんですが、結論から申しますと、具体的な、個別的なことは何一つ出てきませんでした。

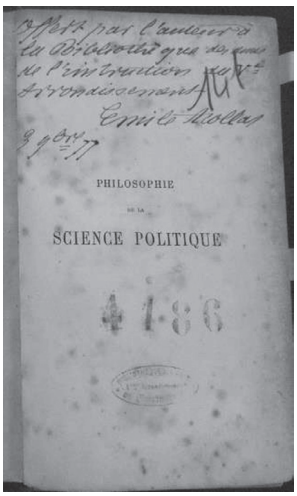


エミール・アコラース

これは、エミール・アコラースという、西園寺公望の法律の先生。正式なソルボンヌの教授じゃなくて、町の法律教師。この人に西園寺はついていて、おそらく一緒につきあっていたんだとしたら、一緒に遊びに行ったりなんかはしてるんじゃないかと思う

んですけども、その人の主著が“Manuel de droit civil”『民法提要』と、これは当時の日本の留学生の間で非常によく読まれたものです。大学入試の参考書みたいなものですけれども、このなかに実は法律、法学生のための選択書目というような推薦書目がありまして、結果的にですけれども、私は最初ただめくらめっぽう探しただけだったんですけれども、後で気がついてみると、このなかからかなり『政理叢談』の原典が選ばれているケースがよくありました。

で、さっき、バルニの話がたくさん何度も出てまいりましたが、バルニは哲学の教師、アグレガシオンという教師資格をとって教師をしてましたけれども、第二帝政、ナポレオン三世の12月1日のクーデターですが、あれで職をなげうって、貧乏しながらカントを訳していたという時期がありまして、それでジュネーブの大学に呼ばれて、そこで公開講座なぞを、夜間の公開講座をしていたのが、先ほどわれわれの間で議論になったバルニの『民主政の道徳』。あれは1864年から5年にかけて、二年間にわたって夜間講座で、しかも民衆を相手に講座で語ったのがあの本なんですが、そのバルニとですね、先ほどのエミール・アコラースとが非常に緊密な関係にある。というのは、1867年というのはパリ万博の行われた年なんですけれども、その年にですね、そのパリ万博はナポレオン三世がもちろん国威発揚のために開いた祭典ですけども、それに対してですね、今度は当時の民主勢力といいましょうか、共和勢力が同じ1867年のあれは9月でしたかね、万博に合わせてですね、スイスのジュネーブで万国平和同盟というものの大会を開きます。それを呼びかけたのが先ほどのジュール・バルニとエミール・アコラース。このアコラースの肖像というか漫画をパンフレットの中からとって、私の著書に紹介しておきました。ちょっとほかには映像はあんまり残っていないんですが、この人におそらく、ついたとまではいえないと思いますが、面識はあったろうし、この人の本、さっきの『民法提要』は、宮村さんが語られた『三酔人経綸問答』のなかでもバルニと一緒に引かれていましたので、かなり影響は蒙っただろうと思います。



『政治学の哲学』

ついでで、アコラース、まとめてやっちゃいますが、アコラースの本はもう一つありまして、これも非常に、兆民がルソーを知るきっかけになったんではないかと思われますものが、このおんぼろのこの本、『政治学の哲学』“Philosophie de la science politique”という本なんですが、それがこの、私の買った古本ではこういうエミール・アコラースの献辞がありました。4行目ぐらいに、みえますか？　彼はパリ第5区のカルチェ・ラタンですが、第5区の教育友の会の図書館に献呈するという献辞が77年の9月3日とありますので、兆民が帰った後ですけれども、これの第1ページ。これはタイトルページですね、『政治学の哲学』という、ここのところをみますと、「ああジャン＝ジャック」という呼びかけで始まるルソーへの献辞があります。さっき『三酔人』のなかでルソーでなくて、「ああジャン＝ジャック」というふうにルソーが出てくるというお話がありましたが、今でもそうですが、prénomで、ファースト・ネームで呼ぶのは、やはりフランス人にとりまして親しさの表現だろうと思います。ですからこのアコラースというのは非常に、さっきも出てきましたが、ルソーの特に人民主権論に対して非常にきびしい批判者でありますが、なおかつ「先師ジャン＝ジャックに捧げる」ということで、私はあなたの人柄には非常に惹かれて、尊敬するけれども、特に人民主権論に対しては同意することはできない、尊敬しながらなおかつ批判すると。これはバルニについても、おそらくフイエなんかでも、19世紀にはわりと一般、ルソーの正

ガブリエル・トレール

義とか個人の権利とかを強調した点は評価するけれども、人民主権論というのがどうも、あの頃のほとんどの人にとって躓きの石だったのではないかと。あれだけは同じえない。そういう意味で、このアコラースがルソーを敬愛しながら批判していたというのは、兆民理解にとっての一つのヒントになるのではないかと思います。

パリでの兆民に関して、一つどうしてもご覧に入れておきたい写真がございます。これが、フランスから持ち帰ったアルバムのなかにある写真です。福沢諭吉がアメリカに行ったときに写真屋のお嬢さんと一緒に撮った写真が有名ですよね。仲間に騒がれないように、船がもう出ちゃってから、どうだ、お前たちは、こういうの撮ったと自慢した。私がもし福沢関係の方に自慢しようとしたら、兆民にだってこういう絵があるんだぞ、ということでございます。これは調べてみますと、ガブリエル・トレールというコメディ・フランセーズの女優でした。帰ってくるまでこの人の写真を大事にアルバムに貼っていたということは、少なくともこの人からもらったのではないか、ブロマイドみたいに、と。これは想像です。大事にアルバムに貼ってありまして、今は国会図書館の憲政資料室中江兆民文書というところ、この間まではみられたんですけども、この間ちょっと必要があってまいりましたら、テープでしかみられませんでした。現物には触らせてもらえませんでした。この人については、後で、演劇とか何とか、やはり、兆民がコルネーユだとかをみたとか、あるいはヴィクトル・ユーゴーの劇をみたということをいってますので、やはりこの人が演ずるものを何かみていたのではないかと。ただ、この人にとって非常に不幸だったのは、サラ・ベルナールというとんでもない世紀の大女優が同じ時期にいましたもので、ちょっと影がうすくなって、後にはロシアなどへ行ったりしていたようです。後で、演劇との関係でもう一度お話しすることになるかと。

今度はリヨンです。兆民がリヨンになぜ行ったということも、これまでの兆民伝では分からないんですね。まあ元々フランス語を勉強したことさえも、なぜというのは分かりませんけれども。この映像は当時のリヨンで、赤く塗ったところの右側がリヨンの市庁舎で、赤くなっているところがテロー広場という市庁舎前広場。その右側にちょっと橙色の線が、これは坂になってまして、これはクロア・ルッスという丘になってます。この丘一帯が絹織物の機織り地帯で、ことあるごとに、何か事があると絹織物の労働者たちがですね、日本でいうと日枝神社の僧兵が京都の町へ駈け降りるような感じで、山を駈け降りてこのテロー広場でデモをするというようなことがしばしばありました。1871年のパリ・コミューンと前後してあったリヨン・コミューン、これ失敗に終わってますけれども、そこでもありました。

クロア・ルッスの丘

彼がどこに住んでいたか、あいかわらず分かりませんけれども、73年、明治6年ぐらいになると、後で申しますが、市長と国民議会との間が緊張しますので、パリから刑事が張り込んでいるんですね。そして情報を逐一パリの警視庁に報告している。というので、私もその刑事の報告書をパリの警視庁まで行ってで読んだことがあります。その限りでいいますと、市庁舎前広場の周囲に

はそういう共和派のアジトとしたようなホテルとか、カフェとかもあったようです。もしかすると、兆民がかつてリヨンの労働者としゃべって殴られたことがあるというふうな、こういうカフェなのではないかというふうに思いますが。この周囲が彼の生活圏であったろうし、少なくともリヨンにおけるいろいろな共和主義の生きた、生の共和主義というものを、デモですとかね、警官隊と衝突したりいろいろやっているわけですが、それを現場でみたのがこの辺だろうと思います。

それで、ちょっと細かくなりますけれども、これはですね、やはり国会図書館憲政資料室の兆民関連のアルバムのなかにある写真です。実はフランス人ですが、名前が分かりません。裏に、今は先ほど申しましたが、裏を写真に撮ってくれないものですから、今は裏はみられなくなっちゃってますが、以前に実際見た時には、とても判読できない複雑な、入り組んだ、つまり人に真似されては困るようなサインがしてありました。今でもそうですけれども、銀行員ですとか弁護士ですとか、やはり信用とかお金とかを扱う人は複雑なサインをします。ですから、普通の人じゃありませんというとおかしいですが、ビジネスマンだろうと。というと、兆民がつきあうようなただの友人だとか、あるいは先生だとか、そういうんではなくて。ということになりますと、実はですね、これも裏に書いてあったんですが、1872年の4月の19日と書いてあって、“Monsieur Nakae”と、で何とかと書いて、それは読めないんですけれど、4月19日というのは実は、兆民がリヨンへ行った日を、その日じゃなくても、その頃にパリからリヨンへ移ったのではないかと思わすヒントになる日だと思うんです。というのは実は、リヨンの関係の、リヨンそれからローヌ県行政年報というあちらの資料にですね、22日にですね、マルセイユから日本人のプリンス、貴公子三人を含む実業家とか学者、学生35人の団体がマルセイユからリヨンへ来たという記述が残っているのです。19日にたとえば、これは仮定ですけど、もしも兆民が19日に、日本人が来るから案内してくれというふうに、今でしたら旅行会社、当時だとおそらく銀行員なぞから頼まれて、それでマルセイユへ夜行かなんかで行って、それでその35人の団体客を連れてリヨンに戻ってきた。そうするとそれが22日に、その一行は22日にリヨン入りして、万博が開かれているはずだったのが、遅れてまだ開かれてませんでしたが、万博会場を見学して、4、5日でパリへ出て行っている、その団体は。その日がどうも兆民のリヨン入りと関係があるんではないかと。一応これ、仮説なんですが。

ところが、もしも22日に彼がマルセイユまで迎えに行って、戻ってきてリヨン入りしたとしますと、その23日に実は市長が交替しているんです。新しい市長はDésiré Barodetという人物で、これはさっそく半年ぐらいのうちにフランスの政治史を彩ることになりますけれども、そのDésiré Barodetという、自分で自分は筋金入りの共和主義者だという人物が市長になる。前の市長も共和主義者ですが、今でも地方自治体で中央政府と必ずしも同調しない市長がいますけれども、筋金入りの共和主義者のBarodetがたまたま助役だったもので、助役があんまり頑張るんで、前の市長が過労死で死んじゃったと。その後の市長がDésiré Barodet、筋金入りの共和主義者。その人物が市長になるとさっそくですね、市長、市議会と、それから先ほど申しましたが、普仏戦争後のフランスは王党派が議会多数派を占めてますので、王党派が多数を占める国民議会との争い。つまり、リヨン市という地方自治体と、国を代表する国民議会との争いが、もうさっそくはじまります。

で、先ほど申しましたリヨン万博、これ万博じゃありません。普仏戦争に敗れパリ・コミューンの混乱後ですから、一応「国際」を名乗ってはいますが小規模な、パリじゃ何もできないから、せめてリヨンでやろうという類の博覧会がありまして、さっきもうしましたマルセーユから来た日本人一行というのは、この博覧会に来たというわけです。

ついでだから話しておきましょうか。リヨンに行ったときに兆民はパレー先生と、状師、状師

というのは年賀状の状ですね、状師というのは古い、代理人のことを明治期では状師といっていたようですが、「状師パレー」と出てきたんですが、これもアルバムのなかに入ってまして、ジャン・バティスト、“J B”と書いてありますが、ジャン・バティスト・パレーとあって、これも今は裏はみられませんけども、「こうしてお互いの友人の顔をみられるのは楽しいことである」というようなことが、ちょこちょこっと裏に書いてありました。パレー先生のサインはごく簡単な、われわれでもやるようなやつです。その「パレー状師」のサインが残った漢文の本がですね、なぜ新たに、日本の古本屋から出てきて残っているんです。その『訂正国史略』という本の表紙真下に“A Mon maître Monsieur Paret”とあって、“votre Nakae Tokusuke”と書いてあるんです。中江兆民はフランス学者ですけれど、彼の書いた文章というものは、筆跡というのはほとんど伝わっていませんでした。これが唯一ぐらいではないでしょうか。手紙のなかにたまにちょこちょこっと、こういう辞書を送ってくれなんていうのはありますが、これはなかなかカリグラフィーというか、立派な字で書いてあります。まあ閑話休題です。

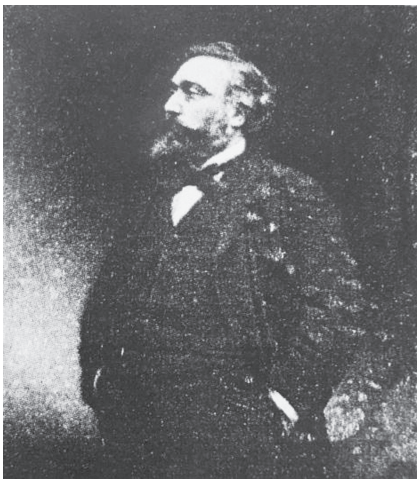
市庁舎、テロー広場

これが先ほど申した市庁舎ですね。この手前がテロー広場になって、この周辺にホテルやレストランがあって、そのなかに共和派のアジトがある。これは二つ写真を上下で写していますが、兆民のいた頃のリヨンはこんな感じです。真正面の列柱がみえています。これが裁判所で、パレー先生はどうも裁判所の、今でいう代理人というと、弁護士ではなかったようで、実はリヨンの弁護士団体の名簿を前に調べてもらったことがあって、それには入っていませんでしたので、弁護士ではないが、少なくともこの裁判所に関係ある人。ですからこの建物には彼はよく出入りしていたはずです。後ろの山に、上の写真では塔が立っている。古い昔からの塔が立っているんですが、下はフルヴィエールと、今はリヨンに行くと必ずケーブルカーで登る観光名所になってます。19世紀に建ったものですが、永井荷風なんぞはこれを、現代の醜悪な建物としてさんざんこきおろしています。これは、上の方はその前、兆民の見ていたフルヴィエールの丘です。

裁判所、フルヴィエールの丘

これが万博の景色。これは当時の同じ年の旅行ガイドからとったものですけれども、万博会場、テッド・トール公園。これは、下は大山巌がですね、夏休みだというのでスイスのローザンヌからパリへ出る途中でリヨンにおりて、中江生、書生のことは中江生といいますから、中江生とボートで遊んだと日記に記している池がこれです。少なくともですから、6月からいたことはたしかなんですが、ことによったらさっきの博覧会見学者案内の一件で4月の22日ぐらいに入っていたのではないかと。これは一応の推測です。

こうした経緯に拘るのは、写真をちょっと紹介しますが、例のガンベッタとの出会いがこの地であったのではなかったかということがあるからなんです。9月26日、大山巌がバカンスを終えて帰ってきたときには、もう一人の友人が出てくるんですが、兆民が顔を出しませんので、留守だったんじゃないかと思いますけれど、その直前の9月の21日には共和党の領袖のガンベッタが


ガンベッタ

リヨンに入ってきまして、当時の新聞なぞをみますと、各書店には「偉人来たる」というようなポスターが出ていたと。ガンベッタというのは、ティエールと並んで兆民の書いたもののなかによく出てくるフランス共和派の大政治家です。特に『一年有半』では、大政治家というのはこういうものだと、伊藤だとか山県とかいうのはもう全然わけが違うんだということで、大政治家の模範とされていますが、そのガンベッタがですね、兆民留守中の9月21日にリヨンに来るのですが、あまり大物すぎてですね、大都市のリヨンで彼が演説したら、これは大変なことになるという憚りがあったらしくて、サヴォア地方、グルノーブルとかを一週間ぐらいかけて演説して回っています。その中でもグルノーブル演説というのは今でも非常に有名な演説です。一言でいってしまいますと、彼は〈nouvelle couche sociale〉、「新しい社会層」今まではまあせいぜい金持ちのブルジョワなんぞに声をかけていた共和派がですね、労働者とか民衆、農民、そういう新社会層による共和政を樹立しなければならないということを、特にアルザス、ロレーヌが普仏戦争で負けてですね、プロイセンにとられていたもので、そういう人たちがフランス人になったらアルザス、ロレーヌを出なきゃならない、非常に大変な選択を迫られたわけですが、そういう、国を追い立てられたロレーヌの住民たちのことを語って、声涙共に下る名演説として有名なんですが、その演説を、ことによったら兆民は聞きに行ったんじゃないかと。

なぜそういえるかとお話ししますと、母親に送っている10枚ぐらいの写真が残っております。リヨンの博覧会もあるし、マルセイユの港なんかも出てるんですが、今のように絵葉書がありませんで、写真屋で買った写真の裏に書いて、「お元気ですか」と書いて送ったのが10枚ぐらい残っています。グルノーブルと、グルノーブルならまだしも観光に行ったということがあるんですが、シャンベリーという、ルソーがマダム・ヴァランスの世話になったシャンベリー、サヴォア地方の中心ですが、シャンベリーならまだ分かるんですが、シャンベリーとグルノーブルをつなぐその間の谷なんかの写真がある。何でこんな写真があるのか理解できませんが、自分のお袋さんに、「これはフランスの大事な観光地だから大事にとっておけ」なんて書いて送っている葉書にですね、自分で行かなかったところの写真を送るとは思えない。そうすると、シャンベリーとグルノーブルを結ぶ、そんな谷間にポンシャラとかいう小さな駅がある、そんなところで降りてわざわざ谷へ行ったのかなあと。そうしますと、ことによったらガンベッタのグルノーブル演説を直に聞いて、それでついでにその辺の観光をしてきたのかなあと。兆民のサヴォアめぐりというのがあったのかもしれない。一言もいってませんが、ただ、なぜそんな葉書が残っているのか。絵葉書ですね、写真ですが。

さっきもいいましたが、ガンベッタについては『一年有半』などで、伊藤博文とか山県有朋なんぞとくらべてます。「燃ゆるが如き熱誠と、至剛の気」ですとかですね、「文章の上々」とか評しています。「文章の上乗」というのは、そういう議会の演説などがありますと、翌日の〈Revue Bleu〉という、表紙が青いので〈Revue Bleu〉といわれたのでしょうが、そういうのが出るんですね。そういうのをきっと読んでいたんだろうと。

それで、先ほど申しましたパリの警視庁の密偵が入るのが、筋金入りの共和主義者であるDésiré Barodet市長とカントネという県令、県知事ですから中央から派遣されてますので、その

二人の間が非常に険悪になって、警視庁から刑事が送り込まれてきます。その刑事が、先ほどのテロー広場の労働者とか共和派の連中がたむろするカフェに張り込んでまして、毎日、ナンバー6という人物が警視庁に報告を送ってるんですが、私の兆民に関するリヨン情報は、もっぱらその刑事さんに負うています。それで、1月頃からそういうわけで、特にリヨン市の警察寮をめぐる確執が両者の間であって、それがリヨン市と国民議会の対立に発展していくということがわかります。

その73年というのは明治6年、ちょうど新暦になったところで、暦も一致するんですけれども、3月頃になってくると、今でこそ兆民先生ですが、当時はただの一介の留学生ですから、文部省から、早く帰ってこいという帰国命令が届く。みんな無視して帰らないんですが。3月には、私の推測したところ、留学生全員にですね、帰国命令、帰ってこいと。しかもそのとき、前にもそういう帰国命令が出てたんですが、誰も帰ってこないので、今度は九鬼隆一という九鬼周造の親父さん、文部省の役人、まだ21歳だったそうですが、首に縄つけて俺が引っ張って帰るということで、乗り込んでくるぞという情報が入ってくる。そうすると兆民先生も、これはそろそろ危ないかなと思っている時期が、その3月頃ですね。

4月4日になりますと、いよいよ国民議会が立法をしましてですね、リヨン市の中央政府というのを廃止してしまう。そうすると当然国からの干渉をもろに受けるわけですが、先ほどの刑事の報告書によりますと、コミューン派の三千人ぐらいの大デモが今、毎日のようにテロー広場にですね、展開している、その先頭に、Barodet市長が先頭を歩いているというような情報がパリ警視庁に伝えられています。それで、いよいよリヨン市が取り潰されてしまって、六つの区域に分解されちゃったわけで、それでBarodet市長が辞任して、今度はちょうど国政選挙の補欠選挙、セーヌ県というのはパリの近辺ですが、セーヌ県の補欠選挙に出馬します。そのときの選挙はですね、激烈な選挙戦があちこちであります。フランスの選挙制度のうちでいちばん最初に、この頃からめったやたらと、ああいう広告塔やトイレや何かにもめったやたらと選挙ビラ貼りつける、そういう選挙運動がはじまったということが、あの当時の文献に書いてあります。

バロデは4月12日にそういうわけで立候補、出馬を発表したわけですが、4月13日、これは『リヨン県行政年報』にあって、岩倉使節団が当時ヨーロッパをまわっていましたけども、明治6年の政変なんぞになるんでしょうね、大久保利通が早く帰ってきてくれということで、大久保はまず先、木戸がその後を追ってますが、先発して帰国してるんですが、日本の大蔵大臣の一行二〇人がやってきたということがリヨン市側の記録に残ってまして、そうすると当時の使節団というのは、必ずその土地の留学生を呼び出して案内させたり、留学生の方でも顔つなぎができるのですっ飛んでいくんですが、先ほどのアルバムのなかに、実はこの間、今日みなさんにご覧に入れたくて行ったんですが。撮ってきた写真に、侍姿、帯刀姿の日本人が写っていて、昔調べたんで忘れてたんですけど、帰ってきてインターネットで侍姿の大久保利通をみたら、どうも顔が違うんで、これはダメだと思って捨てちゃったんです。で、昔の記録を探してみたら、私がノートしたのをみたら、ちゃんと大久保とサインがしてある。大久保の「久」は、〈ku〉と書くとフランス人は「おきゅぼ」といっちゃいますから、〈u〉の字を〈ou〉と書いて大久保と書いています。本人が、やはり兆民がフランス語やっているんで、フランス語風にサインしたのかなと。もしも国会図書館にいらっしゃる機会がありましたら、帯刀の、双刀を帯びている写真は大久保利通。で、この大久保利通の写真が兆民のアルバムに残ったということは、私は、後の「策論」とか何とか出てきますけれども、その後の兆民にとって非常に大きな意味があるのではないかと思います。

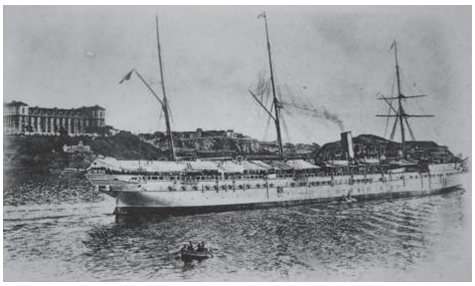
それで、4月27日に今度はですね、だいたい二週間後ぐらいに選挙がありまして、ティエールが大統領、第三共和政が成立してませんからまだ大統領といっていなくて、行政府長官のティエー

ルが推している現職の外務大臣、Rémusatという人物に対して、さっきのBarodetが圧勝するんですね。18万票対14万票ぐらい。圧勝してヴェルサイユ入りしてるんですけれども、その頃の、5月頃、それは4月27日ですが、5月頃はさっきの警視庁の密偵によりますと、急進派の群衆がテロー広場に集結して、まるでパリ・コミューンの頃のようだというような、緊張した状態を報告していますが、こういうときに、おそらくあのテロー広場周辺に兆民は住んでいたか、また例によって6階の部屋でかもしれませんが、うまくしたら共和派の連中のたむろしたホテルの上か何かにいたとすれば、こういう街頭行動なんぞを毎日みていたことになろうかと思います。

で、5月24日になりますと、ティエールが王党派の策動で失脚する5月24日事件、これは大事件。つまり、リヨンの市長が中央政府に乗り出したことで、ヴェルサイユに乗り込んだことで大統領が失脚すると。で、マクマオンという王党派が大統領になるのですが、そういうのをまざまざと市庁舎のすぐ近くでみていたことになります。

で、もちろん彼は一介の留学生ですから、いよいよあの九鬼隆一が首に縄をつけに来るという情報が伝わったらしくて、5月の末から6月のはじめにかけて、例の井上毅ですね、この井上毅が司法省の調査に当時リヨンにやってきていまして、それで兆民はおそらく、帰ってこいというんで大変だといって、泣きついたかどうかは分かりませんが、少し推薦状を書いてくれと頼んだんじゃないかと。それも、何も分かりませんけれども、少なくともこの人物は非常に優秀だと、私が責任をもつから留学延長させてやれというふうに使節団の仲間に、これは司法省使節団の仲間に宛てて認めた手紙が井上毅文書の中に残っています。

兆民がパリに出た時期が5月の末なのか6月のはじめなんですが、また一つ、明治6年6月4日付で、パリで〈Enomoto〉とローマ字で書いた日本人の写真が挟まっていまして、それが6月4日。ということは6月4日にはすでにパリにいると。というのが兆民のリヨン時代ということになります。リヨンでは、そういうわけでパレー先生という人について、普通学と、一応一般教養のようなものを勉強していたと思います。


イラワディ号

マルセイユについてはごく簡単に。先ほど申しましたように、ことによったらリヨン入りのきっかけがマルセイユに着いた日本人の観光団の案内だったのではないかなと憶測いたしますけども、これは「イラワディ号」という、兆民が帰ってくるときに乗った船の写真です。私は最初に問い合わせたとき、手紙で返事をもらいまして、フランス人の手紙でよく読めなくて、「イラワディ」なんて書くとは夢にも思いませんでしたので、それを「マウワディ」号だと、私の『中江兆民のフランス』で最初に「マウワディ」号と変な船の名前にしちゃいました。実は正しくは「イラワディ」号。この船に乗って彼は帰ったということになるわけです。

これもマルセイユの、これはもう、私のほんの個人的な体験です。これはマルセイユの、上にあるここのところが〈Vieux port〉、旧港と書いてあります。私、マルセイユへ行ったときに、この旧港の波止場の先頭に立ちまして、ああ、ここから中江兆民も伊藤博文もみんなここから船に乗ったんだなあと思って、感慨にふけったんですが、それは大はずれでした。実はもうその当時の地図に、ここにもすでに〈Vieux port〉と書いてあるんですね。行ったときは何か感激してましたけど、〈Vieux port〉だったとは気がつきませんでしたけど、次のこちらをみますと、もう〈Nouveau ports〉の、ここにもあるかな、この右側にですね、大きな外国船用の広い波止場が12

メーターとか、さらにそれでも足りなくて二つ三つ大きな波止場がこちらに。ですから、このところに着いて、この辺の通りを、税関や何かを通り抜けて彼は、あ、これは着いたあれで、帰るときに、日本から来た人はこの辺でおりてこの辺で税関を済ませて町の中心へ行く、そういうことになるわけです。これは兆民と何の関係もなくて、私がただたんにこの埠頭で感慨にふけったことをご紹介するだけです。

で、今のところがマルセイユまでなんですが、さてその後、どういうふうにしましょうか。奥宮先生の写真、奥宮先生をやっていいですか？　どうしましょう。

司会　もしあれでしたら、ここまでのところについて宮村先生から発言、コメントをいただきたいのですが....いかがでしょうか。

井田　はいはい。

宮村　ありがとうございます。井田さんの御著書『中江兆民のフランス』（1987、岩波書店）にまとめられた兆民のフランスでの足跡やそれを踏まえた作品の考察は、まさに「論文は足で書く」といわれる井田歴史学の独壇場で、私なんかが全然手のつけようがない兆民の足跡を丹念に洗われて、私は兆民の足跡についてはほとんどもう、井田さんの書かれたものだけでみてきたものなんですけども、今日のお話で、改めてその迫力に圧倒されます。とりわけ、兆民が在仏中日本の母親に宛てて書き送った10枚ほどのハガキ、これは絵葉書というか写真の裏に書かれたハガキなのですが、『中江兆民全集』には、裏といいますか表といいますか、折々の「息災」についての報告を書いた文章は収録されていますが、絵というか写真というか、そちらの面は収録していません。私は、井田さんとは逆に出不精で憲政資料室まで足を運ぶという手間を掛けたことがありませんし、全集に収録したハガキ文面も、ずいぶん律儀な孝行息子だったんだなあ、くらいにしか見ていなかったんです。しかしその画像を詳細に見つめ、同時代にフランスにいた留学生の日記や、フランス地方行政府の記録や、おまけに秘密警察の報告書、当時の新聞などといった資料と突き合わせて、それらの画像から、兆民の埋もれてきた側面に光を当てる。また写真や絵の現場にまで出向いて、兆民の視線と立ち位置を確認する。そして今日のお話が引き出されてくる。これには改めまして、脱帽するほかありません。しかし、それだけでは「対談」の体をなさないので、二つだけちょっとコメントさせていただきたいということがあるんです。

後の報告の話との関連するのかもしれませんが、一つはですね、共和派、しかも非常に急進共和派との接触があったんじゃないか、リヨンでのBarodetの動きというようなことを指摘されまして、私はそれで思い出したんですけども、兆民の全集のなかに入っている文章のなかで、唯一の在仏報告といえる書簡のことです。明治7年3月14日の日付で二種類あって、『新聞雑誌』という雑誌と『横浜毎日新聞』に掲載されたものですが、元は一つの書簡かと思われるものです。

井田　そうですね、はいはい。選挙の話ですね。

宮村　ええ、そこで、3月1日の選挙で「仏国有名ノ共和政治家（レドウユウローラン）」という「赤共和派」が勝った、という話です。

井田　そうですね、ありました。はいはい。

宮村　で、井田さんもお書きになってふれておられるんですけど、これは私なりにも考えことのある出来事なんです。この「レドウユウローラン」なる政治家とは、いうまでもなく、1848年二月革命の際の共和派を代表する政治家Ledru-Rollin（Allexandre-Auguste）1807-1874 のことですね。革命前の議会では若くして雄弁の弁護士として、ギゾーの手強い論敵として活躍したわけですが、二月革命では臨時政府の内務大臣をつとめ、更に『レフォルム』紙を発行して急進的共和派の理論的拠点を作り上げると共に、憲法制定国民議会では「山岳党」の指導者として最後まで共和政の擁護に尽くします。しかし、1848年12月の大統領選挙にはボナパルトに対抗して立候補しますが、落選、ただし翌年ボナパルトのイタリア遠征の野望を「憲法違反」として弾劾した議会での演説は、彼の雄弁家としての名声を高からしめたといわれています。結局彼は、1849年6月「憲法万歳」を唱えた平和的デモンストレーションの形をとった蜂起の失敗によりロンドンに亡命したわけで、そのレドリューロランは、普仏戦争、パリコミューンの後で、フランスに帰国しますが、政界からの引退の意志を表明していたところが、再び議員として姿を現した、その象徴的な出来事が、この兆民の報告する74年3月1日のヴァンクルーズ県での補欠選挙で、王党派候補者の2万4500 票を辛くも上回る2万8200 票を得て勝利を収め当選した。この出来事が、兆民の残し公に発表された唯一の在仏報告の伝える出来事だったわけです。

強制帰国の期限が迫るなか、直前のこの出来事を走り書きのように報告する手紙を兆民が書いている――おそらくその背景には、先程来井田さんがお話しされておられたようなリヨン時代の兆民の日常があった、そうした背景がなければ、この出来事への着目ということはなかったのではないか、そういうことを改めて思ったわけです。

ことのついでに、付け加えておきますと、ルドリュ＝ロランという人物について日本で触れられる最初の文献は、おそらく福沢諭吉の『西洋事情二編』（明治3年初版、明治6年再版）かと思いますが、福沢は、48年二月革命の中心人物の一人として「ロルリン」なる人物をあげて、「ロルリンの党は其議論甚だしきに過ぎ、貴賤上下の別を廃するのみならず、国財平均と称し、富人の物を取て貧人に分ち、国内に貧富の別もなからしむるの説を唱へり。物論喋々として決することなく、名は合衆政治なれども、其実は政談家の党與を分ち、兵力を玩て権柄を奪ふの策を施すのみ」（『福沢諭吉全集』1-p.596）と紹介しています。何かの書物からの知識で書いたものでしょうが、その突き放した視線は、福沢自身のものとも重なるように思います。

兆民の書簡でも、レドリュウロランについては、「当年六十余の老人にして当国にて赤共和家ととなへ、はげしき人物なり。故に王党又ナポレオン党の人には右の人をさして乱を好むの賊と誹謗せり」（⑯-9）と書いていますから、福沢のような評価が一般にあったことについてはわかっていたでしょう。現代の48年革命の研究者は、ルドリュ＝ロランの「共和政擁護」の一貫した態度を高く評価しながら、次のように書いています。

> 「今日に至るまで、彼についての記憶は、マルクスの嘲笑と、自らの先駆者に匹敵しえない後代の急進主義者からの追従という二重の負荷を背負っている。しかし彼げはこの二重の不運以上の価値を確かにそなえているのである。」（Maurice Agulhon, The Republican Experiment;1848-1852, Cambridge University Press,1983. p.15）

こんなことまで持ち出してくるのは、何も兆民がこの老急進共和主義者から特別な思想的影響を受けたなどということをいおうとするためではありません。しかし、兆民書簡で注目しておきたいことは、この1874年3月1日の出来事が含んでいるある歴史的文脈に彼が気づいていたことなのです。書簡の全文を、短いものですから、あえて紹介しておきます。

> 「今月一日仏国有名の共和政治家（レドリユウローラン）といへる人議院の名代人に撰れたり。其後五六日（ガルバルヂー）意答利より右レドリユウローランへ左の手紙を贈れり。

貴君の名代人に撰まれたるを聞き老衰の下拙も青年の昔に帰りたる思をなせり。今日世界不正の行わるゝ時貴君の如き人仏国の政府を補佐し正義の道を施し人間自由の権を獲ること実に仏国のみならず天下の大幸なり云々　恐惶謹言 ガリバルヂー

右レドリユウローラン当年六十余の老人にして当国にて赤共和家ととなへはげしき人物なり。故に王党又ナポレオン党の人には右の人をさして乱を好むの賊と誹謗せり。

三月十四日　中江」

すぐわかるように、書簡全体の重点は、かつての老共和主義者の政界復帰を祝うということよりも、さきに触れましたかつてのナポレオン三世のイタリア攻撃をフランス国内で批判したインターナショナリストとしての思い出と共に、その「正義の道を施し人間自由の権を獲ること仏国のみならず天下の大幸なり」として祝福するガルバルジーに注がれていたといえると思います。

兆民のフランス経験は、確かによく見通せないところがあります。しかし、その経験が、同時代の政府派遣留学生たちとは違った西欧世界の側面に触れるものであったことは、こういうところからも窺えます。そして、この経験の中で芽生えた視点は、兆民の中で忘れられるどころか、ますます深められていくことになると思うのです。『三酔人』の直後の文章に、こういう一節があります。

「近時一千八百六十七年には諸国の学士瑞西に相集まり万国平和会と号する一大会を開き三箇の問題を設けて反復討議し遂に力を竭して相共に此説を主張することに決せり。而して是平和会に於て始めに衆会員の驚訝を起し終りに衆会員の感激を起したる一事は彼の一呼して万衆を粛し再呼して王公を懼れしむる伊太利の老将軍ガリバルヂーの列席して尤も熱心に平和の説に同意を表せしこと是れなり。」（「土著兵論」⑪114-115）

ガリバルディが感動をもって迎えられたというこのスイスのジュネーブで開催された「万国平和会」は、先ほど井田さんがご指摘されたように、エミール・アコラースやジュール・バルニらによって呼びかけられたものでした。兆民は、「諸国の学士」が参集したと書いていますが、そこには、ルイ・ブラン、ヴィクトル・ユゴー、バクーニン、J.S.ミル、エミール・リトレ、エティエンヌ・ヴァシュロ、ジュール・シモンなど多彩な人々が含まれていましたが、そこでのガリバルディの列席と演説は、ここでもヨーロッパに於ける知識人の国際連帯の象徴として捉えられていました。

こうした西欧世界の側面は、普仏戦争以降急速に後景化していきます。しかし、兆民には、その後景化という現実を深刻に受け止めると共に、その出来事を「仏国のみならず天下の大幸」と考える理念とそれを支える人々の系譜の持続もまた「もう一つの西欧」の現実の一側面だという視点は見失われなかったということも疑い得ないことだと、改めて思います。そういう複眼的な西欧経験がなければ『三酔人』という「問答」作品もありえなかった、そういう意味で、井田さんのお話を興味深くお聞きしていたわけです。

もう一つは、兆民の法律修行についてですね。アコラス先生の『民法提要案内』、これ実によく読みこなして、井田さん書かれているように、兆民のフランス学の導きになって、法律もしっかり勉強した、それはたしかに。『兆民全集』のなかに一部しか入ってませんけれども、訴訟法の翻訳とか、よくこんなことをやったなあと、しかもものすごい分量の法律書、解説書の翻訳をやってるわけですね。それで、つまり法律修行もやったんだけども、そこからだんだん逸脱をしていって、歴史、哲学、政治、さらに文学の領域まで関心を広げていった。これ、幸徳秋水の『兆民先生』に書いてますね。井田さんは、先に触れました「『政理叢談』原著者および原典目録」をはじめとして、実際にその知的世界の広がりを確認して行かれた。現代ならインターネットと

いう手がありますが、井田さんや私の研究を始めた時代にはそんなものはなかったわけで、図書館や資料室での目録を調べ、逐一当たりを付けながら調べるしか手立てがない。私は井田さんのお仕事に導かれながら、その目録を順に見ていったわけです。今日のお話をお聞きしながら、改めて思い出し、そして考えさせられますのは、兆民とその前後の世代の西欧経験、とりわけ知的経験の在り方の相違ということです。

井田　はいはい。

宮村　明六社世代が幕末の多少なりとも「夷情探索」の使命からの脱皮の過程で西欧との知的出会いを果たしていくのに対して、兆民は、「一科ノ学」の「専修」の使命を受けて派遣される官費留学生の第一世代に属します。その新たな世代でもやはり元々の使命からの逸脱、脱皮の試みが生まれます。この点で、兆民と興味深い対照を示しているのは、森鴎外でしょうか。ただ鴎外その人というより、鴎外の小説家としての誕生を告げる『舞姫』の主人公、「太田豊太郎」です。太田豊太郎も「法律学修行」で官費留学生で留学する。彼はドイツですけど、「余を活きたる辞書となさん」という母からの期待、「余を活きたる法となさん」という「官長」の命令」、そういうものから、次第に「独立の思想」を作り上げていくのが、同時に「法制の細目」に拘泥する学徒から「法の精神をだに獲たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべし」という「広言」に変わっていく。それと、「舞姫」との出会いと恋愛・同棲とが重なるわけですね。先ほど井田さんは、「兆民と女性」についてはよくわからないと話されておられましたが、私もわかりません。しかし、それがどうであれ、「法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ漸く蔗を嚙む境」に行くという一種の逸脱を、太田豊太郎はしていく。問題は、鴎外は、その過程を「学の荒み」と評していることにあります。まあ、女性との恋愛がきっかけで「活きたる法律」志向から離れたというのであれば、「学の荒み」でも結構なんですが、「歴史文学に心を寄せ」ていく過程そのものまでが「学の荒み」というのは、どうでしょうか。

『舞姫』は小説で、太田豊太郎は仮構の人物ですが、同時に鴎外の「医学生」として派遣された留学経験も深く投影されているわけです。しかし「法学修行」については、少し単純化しているのではないかと思います。少なくとも、兆民の場合、逸脱は決して「学の荒み」などとは思わなかったわけです。ここには、新しく西欧の学問に接するとき「一科ノ学」という使命をどのように考えるのかという「学問」観の問題が介在しているのじゃないかと思います。

太田豊太郎の場合も、「学の荒み」は多分に反語的響きも伴っています。「法律学」からの逸脱は、「学」そのものの放棄ではなく、新しい「民間学」との出会い・接近でもありました。「今まで一筋の道のみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留学生などの大方は、夢にも知らぬ境地に到りぬ」というのは、新たな「学」への強い自負を示しています。また、伊藤博文その他の政府の政治家が、西欧の大学の大先生に在外公館を通じて面接し、極めて具体的な知識について学習するといった「学」の在り方とも違います。この点で、私は、兆民と鴎外の留学経験のある種の共通性を感じます。が、同時に、「綜括的」であろうとする在り方で、兆民との相違もあるように思います。

鴎外は、同郷ということもあって先代の留学生経験を持つ西周の伝記も書き、共感や共鳴を示しています。そしてその共鳴や共感は,西の『百学連環』という著書が示すような新たに専門分化した西洋学問をどこまで総合的に習得するのかという関心と結びついているように思われますが、兆民の場合はどうだったでしょうか。この点で,兆民が、西周の造語「哲学」を最後まで使用しないで、「理学」という伝統的な用語を使い続けるということとも関わっていたように思い

ます。新たな専門分化していく先進的な学問を前提にしてその「綜括」を考えるという志向と、「理一分殊」という伝統的な総体性の感覚を前提にした志向と、微妙な相違があるのではないでしょうか。

ずいぶん先まで話を勝手に進めてしまったようで、すみません。

井田　留学生制度そのものが兆民の世代と鴎外の世代では異なっているんじゃないですか。

宮村　そうそう。それがあります。それもある。しかしそれだけかというのが私の拘りで、だからそれが「理学」の出発点ということに繋げたいわけです。

井田　なるほど。

宮村　だからフランス時代の足跡を井田さんのご本から学びながら、私が勝手に憶測するのは、「経綸」と「理学」の最初のきざしというのは、フランス時代に芽ばえている。で、兆民はそれを決して「学のすさみ」だとは思わなくて、自分は学問の正道を歩んでるんだという、非常に強い自負心で逸脱していったと思うんですね。で、その足跡の根拠に、やっぱり兆民の「理学」、つまり漢学修業時代の「理一分殊」といいますか、つまり世界は究極的には一つの理で統合されていて、それは分節化されているけれども、しかしつながってるんだと。専門分化した学問というのを学ぶんじゃない。その根底から学ばなきゃいけない、という姿勢が、彼の漢学時代に作られたんじゃないか。ということで、お待ちいただいていた土佐時代の先生、奥宮慥斎先生のお話をいただきたいと存じます。

井田　それじゃ、今宮村さんから紹介していただいた奥宮慥斎先生、これは土佐の藩校時代の漢学の先生で、土佐は、もともとどこの藩校でも日本では朱子学が主流でしたが、この人は特に、土佐に陽明学を持ち込んだ人と、陽明学者としてむしろ知られている人なんですが、この人の、ここに肖像画があります。これは、土佐の画家で河田小龍という人が描いた肖像画になります。実はこの奥宮慥斎先生についてはですね、奥宮文庫というのがありまして、手書きのマニュスクリプトが山のようにあります。私はその兆民に関する部分を段ボール一つぐらい、以前、もう20年近く前にコピーとらしてもらって、なにしろ手書きの筆書きなもんですから、よほど腰を据えて読まないとちょっとやそっと、2日や3日読んでも歯が立たないんで、放置してあったんですけれども、そういう慥斎文庫のなかに、「多口子伝」という、ちょっとわけの分からない名前の人の伝記があります。これ兆民の自筆ということで、『兆民全集』にも写真版を載せてるんですが、これは明治8年の11月の日付で奥宮慥斎文庫に入っているんです。この「多口子伝」、最初のところに、この「多口子」といわれている人がみずから、自分は弁を好むと、若干自嘲気味に書いていまして、自分は一言多いもんでいろいろといっては差し障りがあると。それから具体的な叙述を読んでいくと、慥斎先生の伝記とし

奥宮慥斎肖像画

て読めるように思われてきたわけです。

最初にですね、「多口子伝」の最初は「多口子」、名前も知れなければ身分も分からないと。ただたんに九州人としか書いてない。最後のところにもまた、名前も分からない。これ実は、宮村さんには申し上げたんですが、これが慥斎先生のことだということが分かったときの報告にですね、得意になって私が宮村さんに申したことなんですが、最初と最後は韜晦されていると。物語としますとね。そうすると、『三酔人経綸問答』の最初と最後がちょっとこうユートピア風な、地理、歴史はあっても実際の地理、歴史とは違うんだと、先生の家、南海先生の家では。だから、帰り、終わりでも、一晩酒飲んで語っただけだけれども、家へ帰ったら2、3年ぐらい経っているというような、ちょっとこうユートピア的といいましょうか、そういう物語、『三酔人』の話自体が普通の次元から上にこう浮いているというか、ちょっとそんな構造になっている。この「多口子伝」の書き方は、最初九州人であって、名前も身分も分からない。最後にまた、名前も分からないがということが書いてある。

ところが、ちょっと調べていましたら、こういう、奥宮正由というのは慥斎先生の名前なんですが、「略伝」というのがありまして、このなかに、非常に親しい者でないと知らないような情報が入ってました。若い頃に江戸に留学して、とかく芝居をみたり、わりと遊芸に凝って、すってんてんになってしまって、たまたま昌平黌の前を通ってみたら、佐藤一斎という先生がいて、勝手に上がりこんでいって、「あんた、陽明学だそうですけど、何やってるんだ、たくさん本がある、こんな本を読んで何になる」と生意気いった。こんなふうに多口子は一言多いんですが、一斎先生に「まあそういわず少し勉強せい」といわれて、先生について勉強して、学成って立派な学者になったというようなことが書いてあるんですが、それもそういう若い頃の失敗談みたいなのを慥斎先生から聞いてる人物の書いたもの、それが「多口子伝」という文章の特徴の一つです、これがまず一つ。

『慥斎日記』ですが、明治期の日記は私でも読めるんです。せがれの一人が清書し直してますので、そっちをみると読めますし、最近それが島善高さんという早稲田の先生が活字に起こしたの（島善高「復刻　奥宮慥斎日記――明治時代の部」『早稲田社会科学総合研究』2009.3～2012.7、全11回）を宮村さんからコピーを送ってもらいまして、ますます読みやすくなりましたけれども、その日記を見ると、よく町へ遊びに行ったりする人、ゴチゴチの学者という感じではない、わりと遊芸を嗜まれたということが分かって、さらにですね、これが決定的といっていいんですけれども、佐藤一斎先生が死んだので国へ帰って、どこの誰ともいえないけれども、この人物は国へ帰って藩校の、殿様の侍講になったと。お付きの学者ですね、先生になったと。これは実は、奥宮慥斎はまさしく、佐藤一斎が死んだ安政6年ですかね、に同じ年に国に帰って山内豊範という山内容堂のせがれですね、容堂は早く隠居させられちゃったもので、その二代目が、その殿様の侍講になって、それこそ『荘子』や何かを読んで、やってるわけですけれども。

ということは、要するにこれは、慥斎先生の伝記を親しい人間が綽名なりに書いたものだと、そして、ここからが兆民との関係なのですが、「瀛海子曰く」として、二字ほど下げて、この先生はこういう人だったと、名前も知れないと。この「瀛海子」というのは誰か分からなかったんですが、『兆民全集』別巻でしたかね、兆民はいろんな号があって、そういう号の一つに「瀛海漁長」というのがあると出ています。そうしますと、要するに最後に顔を出してるのは兆民先生なんだろうと。兆民が先生の、奥宮慥斎のことをいろいろ話を聞いていて書いた。要するに「伝」というか、先生へのオマージュなんだろうと。そうすると、ほめられた文章を慥斎先生としても、あまりおおっぴらに自分でするのもおかしいし、慥斎文庫にそのままとどまっていたのではないか。そうしますと、先ほど「多口子伝」がですね、ことによったら、これはたんなる私の深読み

にすぎないんですが、『三酔人経綸問答』とちょっと、出だしと両方とも、前も後ろも韜晦しているとかですね、先生のところへは、日記をみますと後でちょっとご紹介しますが、よくしょっちゅういろんな学生が、書生が遊びにきてるんですが。『三酔人経綸問答』のペンネームは、兆民は「南海仙漁」、土佐の生まれですから「南海」なんでしょうね、「瀛海」。なので「南海先生」というのが出てくる。やはりこれは、「瀛海子曰く」というのは兆民自身で、兆民が慥斎先生のオマージュとして書いたものを、慥斎先生としては、兆民は後に有名になりますから、大事にとっておいたものだろうと。

この慥斎先生と兆民がこうした土佐時代からの親しい関係にあったということを前提にして、慥斎日記をみていきますと、明治初期、留学から返った後も、兆民は慥斎先生のお宅に顔をよく出していることがわかります。明治8年9月、10月、11月と、慥斎先生が集めた禅の会に兆民が行っていて、全部で17日も通ってきてる。兆民と禅、その仲立ちを慥斎先生がしている。

このことと関連するのですが、劉岳兵という中国人の南開大学の先生が、兆民と慥斎とのつながりについて書いておられます。『中日近現代思想与儒学』とか、『日本近代儒学研究』というような本を上海とか北京で出してる人で、私が前に、2001年に『兆民をひらく』という論集を編んで、それにも実は寄稿してもらってるんですが、この人はですね、さっきの宮村さんのお話の出発点になる「理学」の「自由」の話、これは『東洋自由新聞』に出ていた〈Liberté morale〉、〈Liberté politique〉と、その〈Liberté morale〉というのはいうなれば、兆民自身がこれは孟子の言葉で「浩然の気」と同じような、天地に対して愧ずるところのない、ああいう境地だということを兆民自身いってますけれども、それを劉岳兵氏は、奥宮慥斎が50年の思索の成果としてまとめた『聖学問答』という著作と関連づけて論じておられる。この本は、そんな厚いものじゃないんですが、「聖学」というのは朱子学とか陽明学すべてを含んでいて、彼がその漢学を50年学んだ結論をここに書いている。そのなかにですね、「自由」について「心胸自然、流暢洒落」と、要するに非常にすがすがしい心理状態であると、また「清涼軽快、自主自由の別境涯」というようなこと、こういう境地、これが兆民の〈Liberté morale〉に通じるものではないかと。

その後なんです、私がびっくりしたのは、この劉岳兵氏が指摘されているのですが、何のわだかまりもない自由の別天地といいましょうかね、浩然の気、そういうのに達するためには、常にいろんな問題に対して疑いを、疑って疑って疑ったその挙げ句の果てにようやく大悟する、悟ることができて、そこに「自由の別境涯」が開けてくるということを慥斎先生が論じている。これは、高谷龍洲のやっていた済美黌というところで出していた漢学雑誌に、兆民が明治11年に載せた「疑学弁」、結局は〈skepticism〉、懐疑論ですね、を弁護する「疑学弁」、あれだということで、兆民の先生は、慥斎なんじゃないかと。

その「疑学弁」、私も前に、なぜ兆民が「理学」、「理学」といいながら、アリストテレスもプラトンももちろん、カントもたくさんいるのにですね、なぜ古代ギリシャの懐疑派のピュロンという人物について弁護論を書いたのかと。試みに、ほかに能がないですからページ数を勘定したんです。『全集』で『理学沿革史』が1295ページあるんです。その中で1ページに満たないピュロンの記述をなぜ取り上げてわざわざ書いたのか。まさにそうすると、この疑いって、物事の善悪是非、善いの悪いのみんな議論しているけれども、ピュロンの場合にはとにかく判断中止ということをいっていますけど、それをもっと方法的にやるのがデカルトの方法的懐疑だと思うんですけれども、そういう疑いがすべての学問というか生活一般、全般の元にあると。疑いを疑いとしてとことんまで疑っていくことに、兆民は、兆民の抱いた「疑学弁」というものを書いたんではないかと。

それからもう一つ、先ほどちょうどこの「多口子伝」を書いた明治8年の11月でしたけれども、

8月、9月の頃に日記に両忘会と、今北洪川という禅の坊さんの開いている、両方とも忘れるという名前の禅の集まりに慥斎先生と行っている。慥斎先生の日記には、兆民が東大のそばに麟祥院という寺が今もありますが､あそこの禅の会に17日間詰めっきりで通ったらえらいことになる、と書いてあるところもありましてですね、両忘会という意味が、やはり善悪是非などの二元的対立を忘れる、両方の対立項を忘れるという意味の両忘会であると。というようなことで、これもまさに「疑学弁」、ピュロンの判断中止に通じるものであると。

今まで触れて参りました奥宮慥斎文書というのは、せがれの奥宮健之という人が幸徳秋水と同じ大逆事件にかかわって刑死しているようなこともありまして、活字になる機会をおそらく失ったんだと思います。なぜ明治期の日記が今読めて最近活字になったかというと、もう一人の、長男で裁判官になった人物が清書してるんですね。清書なら私でも読めるんですが、それ以前の明治期のは、これから腰を据えないと読めないわけですが、さてその日記の、明治になってからの日記ですから読めますんですが、明治3年というと、兆民が長崎から江戸へ出てきて、大学南校の大得業生という助手みたいなことをやってますかね、そろそろ、その頃の兆民が、これは中江とは書いてないんです。「前田」とか「前」何とかという人と、省略されて「前」､「中」と二人の生徒がやってきて､「高橋生」もやってきてとか、よく書生が遊びにくるんですね。

で、決定的なのは、明治3年8月16日､「中江生来話」と、話しに来たと。時に友人何某より鰻の蒲焼きをもらったといってやってきたというんで、先生としては、じゃあといって酒の用意をさせたと。で、尾張屋というそういう酒屋からですね、老婢、おばあさんの使いがやってきて、それで洋酒を一瓶もってきたと。値段もちゃんと書いてあるんです。一歩一朱四百銭、これ高いんでしょう、きっとね。それで砂糖と卵を加えて私は一杯飲んだと。先生、胃が悪いんで、何というんですか、卵酒をするんですね。で、書生どもは先生のそういう習性を知ってて、どっかからもらったとかいって鰻の蒲焼きをもってくれば、先生は酒出さないわけにいかないと。それで結局、卵酒は胃に大変よろしいなんてこと先生、書いているんですが、そのうち二、三人やってきて一緒に飲んで、半日ばかりそうやって飲んでいろいろ話をしたと書いてある。細話心事、心事を語るって、やはり先生のところへいろいろ相談、今こういうことを考えてるとか、就職の相談なんかもあるかもしれませんが、おのれの心事を細かく語ったと。そういう先生なんです。

ある意味で紳士君と豪傑君とが訪れる南海先生を彷彿とさせる、分かりませんけども。
この奥宮慥斎という先生が、兆民の身近にいたと。宮村さんのいう「理学」にも関係してくるような根本のところに、どうもこれがあったんじゃないかというような気がしましたんで、このような報告におよんだ次第です。

宮村　ありがとうございます。兆民のことを考えるときに、兆民の土佐時代、それから維新をまたいでの漢学の再学習、つまり兆民の基礎教養になる漢学をどういう形で身につけたかというのは、大きな問題として残っていまして、今井田さんが奥宮慥斎について詳細にお話しくださって、「多口子伝」というのは誰のことかというのは、私も分からないままずっときたんですけど、あれが奥宮慥斎についての略伝草稿に相当するんだというご指摘は、本当にびっくり仰天したんですね。つまり、土佐時代からの先生なんですけども、しかし兆民は土佐藩校に入っている。最初の、致道館ですか、文武館ですか。

井田　致道館。

宮村　兆民は、その致道館の創立時第一期生ですね。しかし、今までの兆民伝ではこの土佐藩校

の記録というのはほとんど論じられてないんですけれども、『日本教育史資料』ですね、文部省が明治時代に作った、各藩校のカリキュラムを集大成した資料集があって、土佐藩校のカリキュラムについても非常に詳細に記録してまして、私は兆民の漢学というのはもっぱら藩校での勉強が主だったんだろうと考えてきたんですね。といいますのは、5年、修行期間が正規に定められているのに、兆民は3年ぐらいで卒業しています。卒業するための試験科目というのもその資料の中に出てきて、漢文で策論を書く、つまり政策提言というのを漢文でできるというのがその試験科目の一つにあって、これをパスしたんだったら、これは相当なものだと思ってたんですね。カリキュラムについてもいろんな教科書が列記されていて、本当にこんなもの全部やったんかいなと思うぐらいたくさんの漢学の書籍が列記されてます。それは明治維新後のカリキュラムですけども、どういう試験科目が課せられるかということは当初の創立期から変わらないと書いているんで、さっきの話は兆民にも適用されたんだと思うんですね。

で、とびきりすごい成績をあげたやつは、藩主から特別のご褒美があって、そして希望に応じて留学できる、それは国内留学ですね、ということが書いてあって、私は兆民が長崎へ行けたのは、その制度のおかげだと思うんですね。いかに優秀であったか、証拠はないんですけども、その『日本教育史資料』のなかで、藩校の、藩校はその時はじめて全藩士に開かれます。兆民の家は足軽ですから、それまで藩校には入れなかった。開放された後も、10段階の身分ランクがあって、坂本龍馬なんてのは下だ下だっていってるけど、郷士は下から四番目ぐらいに位置づけられてるんです。一番下が兆民の家の足軽。しかも横目付なんていう、人に嫌われる職をつとめる足軽というのは一番下なんですね。ですから、10段階の身分のなかでの一番下にいた兆民が、藩校の門が開かれてはじめて入って、そして修得期間短縮して長崎に派遣される。これは驚くべき学習能力。つまり、漢学のカリキュラムをそれだけ身につけた。

私はだから、兆民の漢学というのは基本的に藩校で作られたものだと考えてきたんですけど、井田さんの今のお話を先日聞く機会があって、もういっぺん藩校の資料を読み直したんですけど、藩校のカリキュラムをちゃんとやるのは藩士たる者の義務だけど、私塾でやるのは自由だと、私塾で誰についても勝手次第、と書いてあるんです。そうすると、兆民は土佐時代に私塾で奥宮慥斎先生と出会っていたんじゃないか。それがとても大きな経験として兆民のなかに漢学を定着させていったのじゃないかと。私は慥斎先生の日記は、とてもこんなもの読む力はないんで、島善高さんが起こされたのと、今井田さんがご報告になったこと、これ、もうありがたいと思うしかないんですけど、そこでもし「多口子伝」が奥宮慥斎伝であり、そして慥斎日記が示すような兆民と非常に親密な関係があったとしたら、そこから兆民の漢学というのは、いったいどのようなものとして推測できるのか。

兆民の漢学は、漢学だけじゃないんですね。それは最初から禅に対する非常に深い興味もある。それから老荘に対する非常に強い関心、これはもう生涯変わらない。本格的な朱子学者だったらそんなことはしない。兆民の漢学というのは、じゃあ折衷主義かというと、私はどうもそういうふうにはみない。その根拠の一つはですね、今の井田さんのお話を聞きながらですね、思ったんですけれども、高谷龍洲の塾で書いた漢文論説「疑学弁」、たしかに疑いの重要さということを書いてるんですが、懐疑主義のすすめかというと、そうではないと私は思うんですね。つまり、老子にしろ荘子にしろ、孔子にしろ孟子にしろ、みんな疑いを積み重ねて仁なり誠なりといった境地に到達したんだと。最終的な到達点、それは自分のなかの信念として確立されるんだけれども、そのために疑いというものを自分で積み重ねることが不可欠の手続きだと。ですから、懐疑主義のすすめというふうにみてしまうと、「疑学弁」の主張と少しズレてくるんじゃないか。第一、『理学沿革史』のなかでピュロンは酷評されてますね。ですから、懐疑主義のすすめというふう

には読めない。

じゃあどういうふうに先ほどの慥斎先生の『聖学問答』その他の考え方とつながっていくのか。私は、兆民の愛用語の一つとして、気習からの「擺脱」という、「擺」はとても難しい字ですね、手偏にゼネストの時の総罷業というあの、を書く、それで兆民は「セン」と読ませる。「擺脱」という、つまりセミが殻を破っていく姿。何の殻を破るかというと、彼は気習、気の習い、つまり偶然的な外的な要因でもって第二の自然というふうになっちゃっているにすぎないものを脱け出していく。そこに理への道というのが出てくるんだと。そういう意味でいえば、禅に対する関心も、陽明学に対する関心も、そして朱子学に対する関心も、兆民のなかで一繋がりになっていたんじゃないか。これは推測です。でも、「擺脱」が兆民の愛用語で、彼の「理学」の世界というのは、そういう絶えざる自己超越、絶えざる気習からの脱却というモメントというのを、非常に重要なモメントとしてもっていた。そのことが、慥斎先生との出会い、それだけかどうか分かりませんけれども、しかし慥斎先生というのを通して身についていた。だから、彼の漢学に対するこだわりというのは、伝統的な文化に対する保守的なこだわりじゃない。つまり、気習を「擺脱」していく力、それをもともと陽明学であれ朱子学であれ禅であれ、そういうものをもっていたんだと、教えていたんだと。そういう、ある意味での気習「擺脱」のラディカリズムというのを、彼の漢学というのは当初からもっていたんじゃないか。私、今、井田さんの奥宮慥斎のお話をうかがって、それを非常に強く感じました。ですから、彼の漢学は、正規の藩校での漢学と私塾、奥宮慥斎先生と、いわば二本立てであったんじゃないか。あるいは、帰ってきてからの高谷龍洲その他の漢学の先生を通してももちろん学びますけども、いちばん出発点にあったのはそういうことじゃなかったのかなと。私は慥斎の書いたものを読んだことありません。お話を今聞いたかぎりでの推測と、兆民の文章そのものから受けてきた印象と、そこで一繋がりになる。今日はそういう意味では、とても井田さんのお話に教えられたという感じをもって、感謝したいと思うんです。

もう一つ、私はさっき井田さんがお触れになった慥斎先生の次男坊ですか、三男坊ですか、奥宮健之という、大逆事件で幸徳秋水と一緒に首をくくられる、それとのつながりということで私、みてきたんですね。奥宮健之は仏学塾の塾生になったか。私は、正規かどうか分からないけれども、なったと、出入りしたと。その証拠はですね、私の配った資料の5ですね、仏学塾教科書一覧の一番最後のページ、1884年2月の教科書の一覧、それのいちばん下の段になります。ずっと順番にいろんな、さっきのヂゥルダン、ルフェーブルの哲学講義とかいろんなのが出てくるそのなかの19番目に「ナッケー共和純理」というのがあります。“La république radicale”。で、奥宮健之はですね、『共和原理』としてこの本を全訳してるんですね。明治16年だったか17年だったか忘れましたけど。で、これ、誰に教わったか。ナッケーというのはやっぱり急進共和派なんですけれども、兆民はわざわざフランスから新聞“République Française”というのを取りよせていたんですけれども、そのなかでナッケーの動きは非常によくおさえてるんですね。何でおさえていたかというと、彼はブーランジスムの旗振り役をしていくんですね。それでこれ、第三共和政になって急進共和主義者が変質していくそのプロセスを、ナッケーを通してみていて、それでその『共和原理』というのを書いてるけれども、結局彼は第三共和政のなかでブーランジェをかつぐことになる。で、さっきの話になりますと、豪傑に「怪物の豪傑」というのがいて、本当の豪傑と違う、ブーランジェというのはどうもにせものの豪傑だというのを、兆民が明治21年の『東雲新聞』の論説で書いてるんですね。明治22年ですか、あの、それは、『東雲新聞』は東京を追放された急進派の民権派の集まった新聞ですけど、栗原亮一をはじめとする『東雲新聞』主流派は、新聞でブーランジェ礼賛だったんです。「武将軍論」というのでブーランジェを礼賛する。そう

いう論説をずっと書いている。で、それに対して兆民は、「ブーランジェ将軍」という論説を書きます。そして、ブーランジェを信用するな、彼は共和主義から逸脱している危険な人物だということを、その「ブーランジェ将軍」のなかで書いている。で、それが機縁かどうか分からないんですけども、その後から『東雲新聞』の主流から、東雲新聞社からたたき出されていく。で、恩赦があって東京へ戻ったりするんですけども、そういう経緯というのを、このナッケーというのの『共和原理』というのと、それからその後の足跡に対する非常に周到な追跡、そしてブーランジスムに対する非常にはっきりした拒絶、そういうものを私は読みとることができるように思うんですね。で、その後奥宮健之が幸徳秋水と同じ運命をたどっていく、これも非常に皮肉なことなんじゃないか。奥宮健之についてはいろんな噂がありますけれども、しかし、奥宮自身はナッケーからブーランジスムの方に行った。兆民とはそこで違う。兆民の方がいわばしっかりした共和主義だったというふうに私は思うんですけど、その根拠も、息子の方じゃなくて、親父さんの薫陶行き届いたところがあったんじゃないか。そんなことを、お話をうかがいながら思ったわけです。どうもありがとうございました。

井田　健之についていいことをいってくださいました。さっきこれはカットしようと思ってカットしちゃったんですけど、健吉というのは長男かもしれないんですが、同じさっきの鰻の蒲焼きにさげてきたその年、明治9年かな、の記事にですね、健吉というのは長男かもしれませんが、健吉、来来会という、よく来来軒なんていう中華料理屋がありますが、来来社会に行って、そこに集まったのは二、三〇人で、中江ともう一人広田という二人がそのなかでは親分格で、侃々諤々の議論をしてみんな黙っちゃったというふうなことがちょっと出てくるんですが、やはり、つまり慥斎先生は蓮池学舎という私塾を経営してまして、蓮池というのは蓮池町、兆民の実家の隣の町かなんか、まだちゃんと確認してませんが、たしか蓮池町というのがあって、蓮池学舎というのを経営してますので、おそらく先生の家へ行けば、それと自分の弟子と息子たちが一緒にどっか行ったりしてるのも記事に出てきまして、実はこの来来会、あれっと思ったのは、ちょうどこの頃、明治8、9年の頃に兆民がつきあっていた、やはり民権家ですが杉田鶉山というか、杉田、宮村さん、名前が出ないですが、まあいいや。

宮村　定一。

井田　定一だ、そう。詩集に序文書いたりしてますね。あの杉田鶉山伝のなかに、ちょうど元老院時代の、明治8、9年の頃の兆民が、数寄屋橋の来来会へ行ってどうのこうのと、これまさに時期も同じだし、来来社、社会というのは福沢でもそうですが、会社だったり社会だったりしてますんで、やはりそういう、何でしょうかね、慥斎先生のせがれも行くし、中江兆民も行くと。民権青年みたいのが集まって侃々諤々して、兆民とあと一人があんまりしゃべっちゃって、ほかの連中が黙っちゃったというような、そういう会にせがれも行っている。だから、仏学塾に顔を出すぐらいのことはいくらでも、これも推測にすぎませんけども。ちょっと、さっき私、オミットしたものだったので。

司会　いろいろと、また別の視点から面白い話をいろいろうかがえたんですけれども、時間もあまりないんですが、一部とのかかわりで、また先ほど、後ほどにということをいった覚えもありまして、先ほどの点でもう少し深めておきたい、あるいはこういう点をお聞きしたいということがありましたら、ぜひみなさんのなかからうかがって……。

質問者D　よろしいですか。宮村さんが出された兆民の漢学についての理解というか解釈なんですけども、さっきのお話のなかで、「理一分殊」という言葉が出てきて、これはいうまでもなく程子ですよね。「理一」というときの「理」は「太極」なわけで、そういうその宇宙に一つの確固たる実在があるという考え方とですね、それとたとえば禅とか陽明学で、特に禅はそうでしょうけども、「擺脱」というそれとは矛盾しないのかと。別のいい方をすると、今のお話だと「気習」、従来の習慣とか何とかそういうものを、いわば破って捨てて、次々とそれを不断に繰り返していくと。そのときに、これは「気習」だというふうに、「気習」を「気習」として判断する基準というのはいったい何なのかと、兆民にとって。それと、彼の儒学なら儒学の、あるいは漢学なら漢学でもいいんですが、それとはどういうふうに関係していて、かつそれとヨーロッパの「理学」、〈Philosophie〉のなかに彼がみいだしたものとは、どういうふうに関係してくるのか、それを知りたい。だから、別のいい方をすれば、〈conscience〉というものを「良智」とか、これは孟子ですよね、あるいは精神の自由ならそういうものを「浩然の気」であると、孟子の、そういうふうに解釈すると。そういうこと、一連のことがですね、宮村さんの解釈のなかではどういうふうにつながっているのかということを知りたい、というのが質問です。

宮村　ありがとうございます。兆民の「理学」を考えるときにその問題は重要なことなんですけども、「理学」という言葉を兆民はあえて〈Philosophie〉の訳語として使いつづけるわけですね。しかしそれは、特定の完結した理論体系によってすでに明らかにされているわけではない。特にヨーロッパへ行ってからは、古今東西の「理」についての学というのは非常に錯綜、さっきの『理学鉤玄』自身がそのあらわれですけど。それは究極的には到達できるかもしれない。しかしすでに「理学」の自明性、「理」が完結した体系として語られるという立場は、朱子学であれ陽明学であれ、それはもうありえないんだと。精神の運動としては教えられることはあるけれど、しかしそれは、それで完結しているわけではない。ヨーロッパでいったって、ヨーロッパには自己完結しているものは何もない。フイエの『理学鉤玄』自身がですね、ヘーゲルの哲学史に対する対抗意識、それからクザンの折衷主義に対する対抗意識、つまり完結した体系があって、それは秩序の安定にとって必要だという立場の哲学史に対する批判から出発しているわけです。絶えず、だから向上の真理と、上に向かう向上の真理と彼は使う。絶えずそれは更新されていく。じゃあそのときに懐疑主義に陥らないで何が支えになるか。それはおそらく、さっきのなかでも出てきた、やっぱり「人倫の学」としての、もっとも根幹にある「仁」とか「義」といった言葉。これは〈charité〉とか〈devoir〉とかというフランス語に置きかえて使われますけれども、それはどこでも同じ。そういう基盤というのはあるけど、しかしその内実に関してどのように考えるか。これを閉じた体系として考えてはならない。開かれてる。だから問答が必要なんだ、〈dialogue〉が必要なんだというのが、兆民「理学」の方法であり、その「擺脱」の意味だというふうに私は考えているんです。それ以上のことは私、今申し上げられないです。

質問者D　私のなかでは、儒学の、たとえば朱子学でも陽明学でも、あるいは禅でもいいんですけども、そこに前提されているある種の主体性というのと、それからヨーロッパで近代に生まれた主体性というものとは、根本的に違うものじゃないかという理解があるんですよ。それはだから、たとえば井上哲次郎が『日本朱子学派之哲学』のなかで、最初に新カント派の哲学と朱子学の類似性というようなことをいう。それを丸山眞男が引いて批判するというところまでさかのぼるわけですけれども、根本的にいえばそういう関心があるわけね。で、兆民という人が、そういう問題というのをどういうふうに考えていたのかということが、私にとっては非常に一貫して

問題に……。だからそれを、宮村さんはどういうふうに考えているかということを知りたかったということです。まあそれ、だから、いいです。

宮村　それはまた考えさせてもらうということで、今日はご勘弁……。

質問者D　あなたのお考えは分かりました。

司会　もう時間になってしまいましたので、ほかにもあると思うんですけれども、とりあえずこの場は宮村先生、井田先生、本当に貴重な、いろいろお話をありがとうございました。（拍手）あとは懇親会がありますので、残る疑問とか、もう少しお話ししたいということ、ぜひその場でまた、あるいは井田先生もまだお話したりないような、いろいろ素材を用意してくださっていることと思うんで、懇親会の場でまた少しお話しいただければと思います。十分な議論の時間がなかったことを申し訳なく思いますが、どうもありがとうございました。

［付記］

1. この記録は、基本的に、当日のテープ録音をもとにして復元したものであるが、論旨の整理のために部分的に修正と付加を施した。
2. 修正に当たっては、とりわけ宮村発言に関して、後日、平石直昭氏からのご指摘を生かした箇所がある。氏の適切なご指摘に感謝したい。また、井田発言の整理については、当日使用された映像資料の選択を含めて井田氏から委ねられ宮村の責任で施した。
3. 当日の出席者からの質問については、宮村の責任で、論旨を整理して示し、発言者の氏名は明記しなかった。発言者の皆様には、失礼をお詫びするとともに、有益な発言をしていただいたことに心から感謝したい。

レジュメおよび資料

Ⅰ．レジュメ

はじめに

［資料 1］

1. 『民約訳解』と『三酔人経綸問答』の間 ――「狂」ないし「狂戇」をめぐって

〈『民約訳解』〉

「聖人ノ教ヲ垂レ法ヲ示スヤ、六経炳燿(ヘイヨウ)トシテ、日月ト光ヲ争フ。人倫ノ道、至レリ。

其ノ政ヲ言フヤ、曰ク、「夏ノ時ヲ行ヒ、殷ノ輅(ロ)ニ乗リ、周ノ冕(ベン)ヲ服シ、楽ハ則チ韶舞(シャウブ)、鄭声(テイセイ)ヲ放チ佞人(ネイジン)ヲ遠ク」(1)ト。蓋シ政ナルモノハ時ト推移シ、人情ニ逆ハザル、斯レ美ナリト為ス。語ニ曰ク、「善者ハ之ニ因リ、其ノ次ハ之ヲ利道シ、最モ下ナル者ハ之ト争フ。(2)」（①67)

「節ヲ砥キ道ヲ直クシテ行フト雖モ、抑モ時ヲ料リ人情ヲ揆ラズ、何ゾ狂戇ノ甚キヤ」（①67）」

「吾ノ人ニ於ケルヤ、誰ヲカ毀シ誰ヲカ誉メン。如シ誉ムル所有ル者ハ、其レ試ムル所有リ。斯ノ民ヤ、三代ノ道ヲ直クシテ行フ所以ナリ（三代之所以直道而行也）」

〈『三酔人経綸問答』〉

「君は狂せしに非ざる乎。狂せり。狂せり。六尺男児、百千万人相聚りて一国を為しながら、一刀刃を報ぜず、一弾丸を酬ひずして、坐ながら敵寇の為に奪はれて、敢て抗拒せざるとは、狂人の所為に非ず乎。僕は幸に未だ狂せず、先生も亦狂せず、他の同国人も亦狂せず、何ぞ紳士君の言の如く...」(p.125)

2. 「経綸」から「理学」へ――『理学鉤玄』を中心に

「人或ハ将ニ余ニ問フテ曰ントス、「吾子ノ政ヲ論ズル、亦タ民ニ莅ム者ナル乎、将タ一邦ノ為ニ制作スル者ナル乎」ト。余ハ則チ之ニ応ジテ曰ントス、「吾民ニ莅ム者ニ非ズ、亦タ一邦ノ為ニ制作スル者ニ非ズ、此ノ著有ル所以ナリ」ト。

若シ民ニ莅ミ一邦ノ為ニ制作センカ、余ハ則チ余ノ言フ所ヲ為サンノミ、複タ何ゾ空言ニ託スルコト之レ為サンノミ。」

「理学」と仏学塾――（資料 2・3）

「旧君主を異にし生れ故郷を異にし封建の階級を異にし生業を異にし今日迄の交際を異にしたる等、総て偶然に生じたる社会的の牆壁」を打破すること（「懇親会員諸君の別の臨んで一言す」M.21.10.20、⑭273）

ルソーをめぐる分極

「精神ノ説<spiritualisme>ヲ守リテ失ハズ、以テ当時実質説<sensualisme>ノ蔓延スルヲ攻撃セリ。殊ニルソーハ著ハス所ノサウォアーノ一僧ノ懺悔録ト題スル書<教育書中ノ一節>（兆民注）ニ於テ五官ノ感触ノ力ヲ主張スル者ヲ排闢シテ雄弁ヲ極メタリ。」（⑥76、Fouillée,p.356)

「彼の哲学は、使い古された精神の哲学<spiritualisme>である。その真のテクストは、サヴォアの助任司祭の信仰告白である。....「時計仕掛け」にも似た精妙な法則に貫かれた世界の背後に実在する「神」、その「神」によって「自由意志」を授けられた存在としての「人間」、「悪」をも犯しうる自由意志の主体である人間を「善」と「幸福」に向かわせる「良心」の賛美、そしてそれを支える「霊魂不滅」への信仰――それが、そこで語られているすべてである。」(A.Lefêvre, p.371-3)

「形而上学的、また宗教的な反動のリーダー」<le promoteur de la réaction métaphysique et religieuse>(p.372)としてのルソー

「豪傑」像の分岐

「心ノ自由ノ性有ルコトハ之ヲ実際ニ考験スルトキハ尤モ明瞭ニシテ疑ヲ容レザルヲ見ズ。何ゾヤ。吾人夫ノ自知ノ能ニ頼リテ一タビ反観スルトキハ、我心ノ奥底ニ於テ活潑自由ノ性有リテ、善ヲ為シ悪ヲ為スコトヲ得可クシテ、乃チ自ラ決スルノ一事ノ自由ニシテ、少モ他ノ妨碍ヲ受ルコト無キコト極テ明ナリ。是ニ知ル、古来豪傑ノ士ノ或ハ戦陣ノ間ニ在リ身ヲ挺シテ国ノ為メニ節ニ殉ジ、或ハ倡説スル所有リテ以テ広ク人類ニ益セント欲シテ、一世ノ人ノ為メニ猜忌セラレ終ニ非命ノ死ヲ致セシガ如キハ、彼レ皆自ラ信ズルノ篤キガ為メニシテ是ニ至シタル者ニシテ、初ヨリ逡巡依違シテ肯テ他人ノ先ヲ為サズ、若クハ陽ニ其説ヲ変ジテ以テ禍ニ免ルルコトヲ得ルノ術ヲ知ラザルニ非ザルナリ。曩キニ此輩ヲシテ自ラ決シテ身ヲ保ツコトヲ思ハシメバ、特(ﾀﾀﾞ)ニ一瞬間ノコトノミ、彼レ唯正義ノ旨趣ト利己ノ旨趣トニ於テ選択スル有リ。是ニ於テ自ラ断ジテ正義ノ旨趣ニ従フ、是レ其躯命ヲ捐棄シテ自ラ避ケザル所以ナリ。」（⑦59)

「人々智識益々進ムニ及ビテハ、独リ飽食暖衣以テ身体ノ養ヲ遂グルコトヲ思フ而已ナラズ、亦学ヲ修メ理ヲ講ジ以テ益々其知ラザル所ヲ知ルコトヲ求メ、行ヲ慎ミ節ヲ磨キ以テ自ラ修励スルコトヲ求ム、是レ皆自ラ楽ム所以ニシテ其深情ヲ尋ヌルトキハ亦利害ノ念ノ出ダス所ナリ。

夫レ然リ。是ヲ以テ飲食酔飽シテ以テ自ラ楽ム者ト学芸ヲ勤メ践履ヲ慎ミ以テ楽ム者ト其迹相異ナルモ、其自ラ楽ム所以ハ則チ一ニシテ利害ノ念ニ外ナラザルナリ。

更ニ甚キ者有リ。夫レ人其初メ利己ノ一念ノ為メニ駆ラレ、既ニシテ邦国制度ノ設有リ、善悪義不義ノ旨義出ルニ及ビテハ、或ハ専ラ理義ヲ以テ楽ト為シテ性命ト雖モ亦之ヲ惜マザルニ至ル。即チ古来豪傑ノ士身ヲ挺シ節ニ殉ズルガ如キ是

レナリ。彼レ其躯命ヲ捐棄シテ敢テ辞セザル所以ナリ。若シ理義ノ楽無キトキハ豈徒ラニ身ヲ鋒鏑ニ膏スルコトヲ為サン哉。

是ニ知ル、カント家学士ノ所謂道徳ノ法令ハ浮奇虚懸ノ空語ニシテ、其実ハ道徳モ亦利己ノ一念ノ変化シタルニ外ナラザルコトヲ。」（⑦276）

3. 「理学」から「経綸」へ――『三酔人経綸問答』の方法

「問答」の精神

「真理ヲ啓発スルノ手段トハ、問答、是ナリ」（④190）。

「夫レ道理ナル者ハ、衆意思相触ルルノ間ニ爆発スル者ナリ。<La vêrite doit jaillir, <comme l'étincelle>, du frottement des idées.>」（④192)

「外ヨリ真理ヲ其人ノ心中ニ注入スルノ謂ニ非ズ」（④191)　　」

「世にも常識はずれなことが語られることになるだろうということが目に見えていた」が故に、「口にすることをためらわせていた」が、「さあ、とうとうわれわれが最大の浪にたとえていたものに、僕が直面するときがきた。だが、それは語られなければならぬ。たとえそれが、文字どおり笑いの大浪のように、嘲笑と軽蔑でぼくを押し流してしまうことになろうとも」（プラトン『国家』5-18、文庫、上、p.404）

「南海先生笑って曰く、豪傑君、姑く之れを待て。紳士君をして其論を畢らしめよ。豪傑の客笑つて曰く、唯。」(p.125)

4. 『三酔人経綸問答』の構図(1)――「洋学紳士」と「理義」<raison>

「理学ノ歴史ハ正ニ人類有スル所ノ良智<conscience>ニ係ル考察ノ歴史ナリ」（『理学沿革史』④12、F.p.ⅳ）

「古今豪傑ノ士<les grandes inventeurs>」による「意ヲ創シテ大ニ発明スル」営み<l'esprit de recherché et découverté>

「理学ノ旨趣ノ進歩<progrès>ヲ計ルトキハ、以テ人事ノ進歩<progrès>ヲ権(ハカ)ルコトヲ得可シ」（④21）。

「完粋ノ邦国<l'Etat parfait>」「天意ノ政府<le cité céleste>」への希求と近接

「世界庶物」の「不完」と「完粋」との間の関係

「三政体進化の理」と<raison>――モンテスキューと「事物進化ノ理<la grande idee d'évolution ou de développment progressif>p.359」」(F.p.351-2、p.358-374）

「真ノ人類ノ法律<loi>ハ理義<raison>是ナリ、而シテ地球上到ル処民タル者皆以テ之ニ循フコト有リ、若シ夫レ各邦設クル所ノ政法ノ如キハ特ニ此理義<raison>ヲ施為スル所ノ条項ト曰フニ過ギザルノミ」（⑥80)

「君主専制<despotisme>」→「立憲政体<monarchie mixté><monarchie réglée et limitée>」＝「君主政治ヨリ進ミテ民主政治ニ入ルノ站駅(ﾀﾝｴｷ)」「一時仮設ノ制<un transaction provisoire>p.367 ノミ」（⑥103)」→「民主制<république>」

カントと「完備精粋ト云フノ旨義<l'idée de perfection>p.393」(⑥158)「理学精粋の体裁に合せしむることを得たり」(岩波文庫 p.157)」

「永世太平論」は「憑空ノ論<chimerique>」か？

「国家の生命は人間の生命と同様である。人間には、自然的防衛の場合、人を殺す権利があり、国家には、自己自身の保全のため戦争を行う権利がある。自然的防衛の場合、私には人を殺す権利がある。なぜなら、私を攻撃する者の生命がその者に属するように、私の生命は私に属しているからである。それと同様に、国家は戦争を行う。なぜなら、国家の保全は他のすべての保全と同じように正しいものだからである。

公民間においては、自然的防衛の権利が常に攻撃の必要を伴うわけではない。公民は攻撃する代わりに裁判所に訴えさえすればよい。したがって、法律の救済を待っていては自分の生命を失うというような一瞬を争う場合にしか、この防衛の権利を行使しえない。しかし社会間においては、自然的防衛の権利はときとして攻撃の必要を生ずる。ある人民が、これ以上平和を続けるならば他の人民が彼らを滅ぼすことができるようになると見てとり、そして、攻撃がこの滅亡を阻止する唯一の手段であると見てとるときである。

この結果、小社会は大社会よりもしばしば戦争を行う権利をもつ。なぜなら、小社会は破滅させられはしないかと恐れる立場におかれることがより多いからである。（『法の精神』第 10 編、第 2 章、岩波文庫、上、p.262-3）

「有名なモンテスキューは人間的とみなされていたが、隣国民が出し抜く恐れがあるときは、彼らの国へ兵火をもちこむのは正当である、と述べている。もしそれが法の精神であるならば、それはボルジアとマキャベリの法の精神である。しかしそれが真実であるとすれば、その真理を反駁しなければならない。」（『哲学辞典』「戦争」1771 年版補足、高橋安光訳、法政大学出版局、p.225）

「もしあなたたちの隣人が平和の間に非常に強力になろうとしても、あなたたち自身が同じくらい強力になることを誰が妨げるでしょうか。もし隣国が同盟を作れば、こちらでも作ればいい。もし隣国が宗教で後れを取るものの、産業と兵士で上まわるのなら、その賢明な経済運営を真似すればよい。隣国が水兵で上まわれば、あなたがたの水兵を増やせばいい。これらは、すべて正義にかなっている。しかし、あなたたちの人民をもっとも恐るべき悲惨に曝すのは、余りにも多くの場合、あなたたちのあの公平な隣国の王が、あなたたちの愛する身内を抑圧しようとしているという妄想<l'idée chimérique>なのだ。」（Voltaire, Dictionnaire philosophique, Classiques Garnier, p.554)

「汝若シ我レニ説クニ我ガ道理トスル所ニ勝サル者ヲ以テセザルトキハ、汝終ニ余ヲシテ図ヲ改メシムルコト能ハズ。彼ノ庸衆ノ徒、我ヲ懼ドスニ童孺ヲ恐嚇スルノ道ヲ以テセント欲スルモ、、余豈之を懼レン哉。余ノ自ラ誓フテ独リ余ガ中心ノ良智<raison>ノ声ニ聴従セザルコト一日ニ非ズ。今日豈遽ニ之ニ負クコトヲ得ン。」（④216）

「不正ニ報ユルニ不正ヲ以テスルコトハ自ラ尊ブノ道ヲ知ラザル者ナリ。是ノ如キ者ハ事理ノ次序ヲ得ザル者ニシテ道学家ノ名ニ負クト謂フ可シ。我レ豈之ヲ為サン哉。夫レ言ヲ立ツル者、他人ノ謬妄ヲ駁スルニ於テ当ニ真理ヲ以テス可シ。一ノ謬妄ヲ駁スルニ他ノ謬妄ヲ以テスルノ理有ラン哉。行ヲ制スル者モ亦然リ。当ニ悪ニ報ユルニ善ヲ以テス可シ、悪ニ報ユルニ悪ヲ以テス可ラズ。我レ若シ逃走スルトキハ官家及ビ法律将ニ我ヲ以テ不正ト為サントス、我レ豈之ヲ為スニ忍ビン哉」（『理学沿革史』④2167）

「ソクラットノ唱説セシ所ノ諸旨義ハ独リ今日ニ伝フルノミナラズ、之ヲ永世ニ伝ヘテ不朽ナルヲ得シ。ソクラット早ク是ニ察スル有リ。是笑ヲ含ミテ終ヲ取リシ所以ナリ。」(④221)

5. 『三酔人経綸問答』の構図(2)――「豪傑君」と「行為の旨趣」<motif des actions>

Ⅰ「情<sentiment>ノ者タル皆我ガ心ヲ動カスニ足ルヲ以テ其道徳ニ於ケル極テ益有リテ亦極害有リ。何ヲ以テ之ヲ謂フ、曰ク吾人縦礼善ノ善タリ悪ノ悪タルヲ知ルモ、心実ニ善ヲ愛シ悪ヲ悪マザルトキハ、其善ヲ為シ悪ヲ戒ムルニ於テ其情恝焉トシテ活発ノ気象有ルコト無シ。故ニ古来豪傑ノ士奮フテ偉業ヲ建立セシハ智ノ明以テ之ヲ導ク有リト雖モ、抑モ活発興起ノ情之ヲ激シテ然ルナリ。是レ情ノ道徳ニ益有ルナリ。然ト雖モ情モ亦極テ害有リ。即チ善ヲ好ミ悪ヲ悪ムノ情ノ如キ固ヨリ美ナルニ論無キモ、過グレバ則チ失無キコト能ハズ。独此レノミナラズ凡ソ情ノ太熾ナル者ハ皆以テ智ノ判別ヲ擾リテ、人ヲシテ非義ニ陥イラシムルニ足ル、是ニ知ル、情ナル者ハ神ノ我レニ与ヘテ以テ善ヲ愛シ悪ヲ悪マシムル所以ノ者ニシテ、而テ其或ハ太過ニ至ルレハ我レノ不明乃チ善ラシムルコトヲ。」（⑦36）

Ⅱ「人々智識益々進ムニ及ビテハ、独リ飽食暖衣以テ身体ノ養ヲ遂グルコトヲ思フ而已ナラズ、亦学ヲ修メ理ヲ講ジ以テ益々其知ラザル所ヲ知ルコトヲ求メ、行ヲ慎ミ節ヲ磨キ以テ自ラ修励スルコトヲ求ム、是レ皆自ラ楽ム所以ニシテ其深情ヲ尋ヌルトキハ亦利害ノ念<intérêt>ノ出ダス所ナリ。

夫レ然リ。是ヲ以テ飲食酔飽シテ以テ自ラ楽ム者ト学芸ヲ勤メ践履ヲ慎ミ以テ楽ム者ト其迹相異ナルモ、其自ラ楽ム所以ハ則チ一ニシテ利害ノ念ニ外ナラザルナリ。

更ニ甚キ者有リ。夫レ人其初メ利己ノ一念ノ為メニ駆ラレ、既ニシテ邦国制度ノ設有リ、善悪義不義ノ旨義出ルニ及ビテハ、或ハ専ラ理義ヲ以テ楽ト為シテ性命ト雖モ亦之ヲ惜マザルニ至ル。即チ古来豪傑ノ士身ヲ挺シ節ニ殉ズルガ如キ是レナリ。彼レ其躯命ヲ捐棄シテ敢テ辞セザル所以ナリ。若シ理義ノ楽無キトキハ豈徒ラニ身ヲ鋒鏑ニ膏スルコトヲ為サン哉。

是ニ知ル、カント家学士ノ所謂道徳ノ法令ハ浮奇虚懸ノ空語ニシテ、其実ハ道徳モ亦利己ノ一念ノ変化シタルニ外ナラザルコトヲ。」（⑦276）

「豪傑」像の典拠――「非凡派の豪傑」

「蓋シ世ニ必ズ非常ノ人有リテ、然ル後ニ非常ノ事有リ。非常ノ事有リテ、然ル後ニ非常ノ功有リ。非常ナル者ハ固ト常ノ異トスル所ナリ。故ニ曰ク、非常ノ原、黎民懼ルト。ソノ成ルニ及ンデ、天下晏如タリ。」（『史記』「司馬相如伝」）

「夫レ賢君位ヲ践ムヤ、豈ニ特ニ委瑣握齷シテ、文ニ拘リ俗ニ牽レ誦ニ循ヒ伝ニ習ヒ、当世ニ説ヲ取ルト云フノミナランヤ。」

「真ノ豪傑」（洋学紳士から）

「士ノ特立独行、義ニ適(ｶﾅ)ウノミニシテ、人ノ是非ヲ顧ミザルモノハ、皆、豪傑ノ士」（韓愈「伯夷頌」）

「陳良ハ、楚ノ生マレナルモ、周公・仲尼ノ道ヲ悦ビテ北ノカタ中国ニ学ビ、北方ノ学者モ未ダ之ニ先(ﾏｻ)ルコト能ハズ。彼ハ、所謂豪傑ノ士ナリ」（『孟子』滕文公）

6. 『三酔人経綸問答』の構図(3)――「南海先生」と「意欲」<volonté>

「第十八紀ニ在リ。我法朗西学士ノ政術ニ係ル理学ハ其傾嚮蓋シ三種ノ別アリ。而シテ此三種ノ別ハ....尋常理学ノ三種ノ旨趣ト堅ク相応ズルヲ見ル。(1)即チ政術ノ最モ首ニ興リシ者ハ五官ノ感触ヲ以テ本旨トシテ斯ニ以テ利己ノ旨趣ヲ主トス<une conception sensualiste et utilitaire de la société>。....快楽<plaisir>ヲ旨トスル者ノ政術即是ナリ。(2)其次ニ興リシ者ハ、智慧ノ承受スル所ノ旨趣ヲ以テ本旨トスル者<une conception rationaliste et intellectualiste>ニシテ、乃チ事物自然ノ理rapports necessaires des choses>ニ循フテ以テ法律ヲ建設セント欲ス。(3)最後ニ乃チ一理学ノ更ニ高尚ナル者有リテ意欲ノ自由<la volonte>ヲ以テ本旨ト為シテ、而シテ其法律ヲ論ズルヤ以為ヘラク、是レ自由ノ意欲ヲ有スル衆生霊ノ相共ニ議シテ之ヲ定ムル所<rapports libres entre les volontés>ナリト。....此レ蓋シ政治ノ極則ナリ。

此三人ノ政治ノ大旨ヲ隴括(ｲﾝｶﾂ)スルニ、(1)ハ曰ク法律ハ五官ノ感覚<la sensation>ヨリ出ズ、(2)ハ曰ク、法律ハ事物ノ定理<la raison>ヨリ出ヅ。(3)ハ曰ク自由ノ意欲 la liberte>ヨリ出ヅ。」（⑥76-77、F.p.356-7）　（補注４）

「およそ善であり、秩序にかなうものは、事物の性質からそうなので、人間の合意などに関係ないのである。正義はすべて神から由来し、神のみがその根源である。いかし、われわれが正義をかくも高いところから受け取ることができるならば、政府も法律も必要としないであろう。

明らかに理性のみから発する普遍的正義があるが、この正義がわれわれのあいだで承認されるためには、相互的でなければならない。....

自然の法とは何か、に答えたところで、やはり国家の法とは何か、をよく理解しえないだろう。」（ルソー『社会契約論』第 2 篇第 6 章。井上幸治氏の訳文を、段落を付けて引用）

「邦国なる者は衆意欲の集合」(p.201)
「進化神は、社会の頭上に厳臨するに非ず、又社会の脚下に潜伏するに非らずして、人々の脳髄中に蟠踞する者なり。是故に進化神は、人々思想の相合して、一円体を成す者なり」(p.198)。

『民約訳解』第 2 篇第 6 章「律例」解
「道理なるものは、純一無雑、万古不易、律例を待ちて後に生ずるに非ず。又た真宰は高きに居りて卑きに聴き、衆善の長たり。然れども、人の真宰に於けるや、上下懸隔し、諄諄然として命を受くること能はず。然らば則ち国を為むる者、律例を舎きて別に治を為すの術なきなり。又た人の良智あるや、正不正を判別して、失錯あること無し。所謂道徳なり。然れども道徳は其の賞罰の柄なきを以て、君子競行として唯だ良智に是れ聴き、敢て悪を為さざるも、而も精進は肆然として自から法度の外に恣にす。則ち是れ君子つねに害を蒙り、精進つねに利を享く。故に道徳も亦未だ頼りて以て治を為すに足らずして、律例ついに設けざる可らず。此の段の大意、道徳律例二者の別を論じて、而して重きを律例に帰し、以て本章の提起と為す。読者、其れ以て之を察すること有れ。」

「凡そ事の善良にして理に合する者、本とおのずから此の如し。人の相約するを待ちて、而して後に然りと為すに非ざるなり。明神上に照臨し衆善の源を為す。則ちもし人たる者、常に直ちに神に稟して以て事に処するを得れば、為す所にして正を得ざること莫く、政と律例、固より用う所なし。」（『民約訳解』第 2 篇第 6 章）

Ⅱ．資料 1　中江兆民著作年譜

1847	土佐藩足軽身分の長男として生まれる
1862	藩校文武館に入学
1865	土佐藩留学生として長崎へ派遣。英学・仏学修業。
1870	大学南校大得業生。助教。
1871	岩倉使節に同行し、フランス留学。
1874	帰国。「仏学塾」開設。『民約論』翻訳草稿。
1875	東京外国語学校校長（一ヶ月で辞職）。元老院権少書記官。
1877	元老院辞職。以後、官職に就かず。
1881	西園寺公望らと『東洋自由新聞』刊行（3月18日~4月30日）。
1882	『政理叢談』刊行開始（2月8日~翌年12月17日）。『民約訳解』（『政理叢談』
1883	2月~翌年8月、中断を含み連載、未完）
1884	『非開化論』（ルソー『学問芸術論』の翻訳、上節8月、下節は土井言太郎訳）
1886	『理学沿革史』（A.フイエ原著、上巻2月、下巻4月）『理学鉤玄』(6月)『革命前法朗西二世紀事』（12月）
	『民主国ノ道徳』（J.バルニ原著（3月3日~5月13日、「未完」）
1887	**『三酔人経綸問答』**（5月）。保安条例による東京追放（12月25日）。
1888	『東雲新聞』『国会論』
1890	『選挙人めさまし』。第一回衆議院議員。
1891	衆議院議員辞職
1894	『道徳大原論』（ショーペンハウエル『道徳の基礎』の翻訳）
1901	『一年有半』『続一年有半』

Ⅲ．資料 2　Charles Jourdain, Notions de philosophie　と仏学塾

序論
　田中耕造（『政理叢談』No.3～6、M.15.3～15.5）、
　中江兆民（『理学鉤玄』M.19.6、第一章、第二章、⑦13-23）
　佐藤郁次郎（『儒氏論理学』上冊 M.19.11、下冊 M.20.6。「原序」上冊 p.5-46）、
第一篇（心理学篇）
　田中耕造（『政理叢談』No.7～45、M.15.5～M.16.8）
　中江兆民（『理学鉤玄』第三章～第八章、⑦23～66）
第二篇（論理学篇）
　中江兆民（『理学鉤玄』第九章、第十章、⑦67～88）
　佐藤郁次郎（『儒氏論理学』p.1～160、p.161-358）、

「哲学の諸科は孰も断崖絶壁にして弱行人の容易に歩を附くべきものに非ず。況て論理一科の如きは峻嶮の上にも峻嶮なり。佶屈の上にも佶屈なり。余嘗て青年時仏国「ポール、ロアャール」の論理書を読み、直に三日間頭岑々(ｼﾝｼﾝ)然たるを致せり。」（「帰納法論理学の評」、『江湖新聞』M.23.4.16、⑮83）

「学者若シ其詳ヲ得ント欲セバ、ウィクトル、クーザン訳スル所ノアリストットノ論理、「ポール、ロァイヤール」会ノ著ス所ノ論理ノ二書ニ就テ之ヲ講求ス可シ。」（『理学鈎玄』巻之一第十章「法式」、⑦79）

「「ポール、ロアャール」の論理書」とは、Arnould et Nicole, Logique de port-Royal ou art de penser, 1662 を指す（「解題」⑫401）

第三篇（神理篇）

中江兆民（『理学鈎玄』第十一章、第十二章、⑦89～105）

第四篇（倫理学篇）

中江兆民（『理学鈎玄』第十三章、⑦105～127）

伊藤大八、中江篤介校閲（『道徳論』M.22.8、「第一篇　論理道徳学」別 259-271）

参考

「泰西ノ政法倫理ヲ究メント欲シテ理学ノ大体ヲ講セサレバ、猶ホ漢書ヲ学フニ経典ヲ読マスシテ直ニ諸氏(ママ)百家ヲ窺フカ如シ、汎々乎トシテ其帰着スル処ヲ知ラス。徒ラニ望洋ノ歎ヲ起サンノミ。本邦洋文ヲ講スルノ日浅ク理学書ノ訳ヲ歴ル者甚タ鮮シ。蓋シ其義精微ニシテ皮相者ノ容易ニ手ヲ下スヲ得ヘキ処ニ非サルカ故ナリ。然リ而シテ理学ノ旨遂ニ明カナラサレハ斯ノ政理叢談ヲ世ニ公ニスルモ将タ何ノ益カ之レアラン。空ク廃紙ニ属センノミ。余謭劣ヲ省セス、敢テ此業ニ従事スル者ハ蓋シ理学ノ大体ヲ示スノミ。若シ夫レ完備スル者ハ則チ他日ニ待ツアラントス。」（「理学ﾌｨﾛｿﾞﾌｨ又哲学ﾄ訳ｽ）ノ旨」に付された訳者序文、『政理叢談』No.3、M.15.3.25））

「泰西理学ノ説、千差万別、僕ヲ更フトモ指数ス可ラス。而シテ之ヲ大別スレハ虚霊派(ｽﾋﾟﾘﾁｱﾘｽﾑ)、実質派(ﾏﾃﾘｱﾘｽﾑ)ノ二者ニ出テス。蓋シ虚霊派ハ人ニ肉身ト霊魂トノ二ツアリテ天神存在スル者トシ、実質派ハ霊魂アリトセス情智意ノ属悉ク脳漿ノ作用ニ帰ス。其説互ニ長短アリ。然レトモ理学ノ全体ヲ講明セント欲セハ何ソ彼ト此トヲ択ハン。寧ロ其義理明晰ニシテ秩序整然タル者ヲ採ランノミ。乃チ今仏人シァール、ジュールダン氏ノ著ヲ取テ之ヲ訳述ス。氏ハ千八百六十三年選マレテ翰林院(ｱｶﾃﾞﾐｰ)ノ学士ニ拝ス。其学虚霊派ヲ奉ス。」（『政理叢談』No.3）

☆「此四篇ニ盡美学(ｴｽﾃﾁｸ)ヲ添補スルモ可ナリ。蓋シ盡美学ノ技術(ｱｰﾙ)ニ於ルハ、猶ホ論理篇ノ智慮ニ、道徳篇ノ品行ニ効用アルカ如シ。」（同上）

「盡美学」：中江兆民（『維氏美学』上冊 M.16.11、下冊 M.17.3、一部野村泰享の訳）

☆「理学沿革史 ハ昔時博士輩ノ論説ヲ講究スルヲ旨トス。之ヲ理学書ノ終篇トス。蓋シ是レナケレハ、前ノ心理、論理、神理、道徳等ノ諸篇ヲ大成スルニ由ナシ。」（同上）

「理学沿革史」：中江兆民（フイエ『理学沿革史』上冊 M.19.2、下冊 M.19.4）、
酒井雄三郎、中江篤介校『泰西先哲政論』上之巻 M.16.8、中之巻
M.16.8、下之巻未刊）

Ⅳ．資料 3　J.Barni『民主政における道徳』（La Morale dans la démocratie, 1868）と仏学塾

緒言：　訳出されず

第一部　〈La morale privée〉

第一章　Introduction. La Morale et démocratie, pp.1-16.
(1) 野村泰亨　「民主政論」（訳者序文付き）『政理叢談』第 21,24,26,27
（M.15.12-M.16.2）
(2) 中江兆民　見出し項目なし「民主国ノ道徳」『欧米政典集誌』第 11（M20.1）

第二章　La morale dans l'individu, pp.17-32.
中江兆民　「第一章　各個人ノ道徳」『欧米政典集誌』第 12,13,14

第三章　La morale dans la famille:,Le mariage, les epoux et particulierement la femme
p.33-49.
中江兆民　「第三章　家族ノ徳行」『欧米政典集誌』第 15,19,20,

第四章　La morale dans la famille（suite）, pp.50-67.
中江兆民　「第三章　家族ノ徳行」『欧米政典集誌』第 21,22

第五章　La morale dans l'atelier, pp.68-89.
中江兆民　「第三章　居業ノ徳行（未完）」『欧米政典集誌』第 22（M.20.5）
但し、p.73 まで

第六章　La morale devant la misère, pp.90-105.
訳出されず

第二部　〈La Morale publique〉

第七章　La morale dans l'Etat, Ⅰ Les citoyens, pp.107-125.
訳者名無記載　「邦国論」『政理叢談』第 49、『政学協会雑誌』第
4,5,9,12（M.17.11）　但し、p.119 まで

第八章　La morale dans l'Etat（suite）, Ⅱ Les femmes, pp.126-138.
訳出されず

第九章　La morale dans l'Etat（suite）, Ⅲ Les devoirs du gouvernement, pp.139-158.
屋代健士　「政府ノ本分」『政理叢談』第 22,26,27,32、M.16.1-4（「畢」）

第十章　La morale dans l'Etat（suite）, Ⅲ Les devoires du gouvernement（suite）,
pp.159-177.
訳出されず

第十一章　La morale dans l'Etat（suite）, Ⅳ　La pénalité, pp.178-195.
(1) 訳者名無記載「刑罰論」『政学協会雑誌』第 13（M.17.12）
(2) 田部香蔵「刑罰論」『明法雑誌』第 1,2,3,4,6（M.18.2-8）（「大尾」）

第十二章　La morale dansnl'Etat（suite）, Ⅳ La pénalité（suite） La peine de mort.　pp.196-217.
　田部香蔵「死刑論」『明法雑誌』第 9（M.18.10）,11（M.19.1）　但し、p.200 まで
第十三章　La morale dans les rapports des Etats entre eux　pp.218-232.
（1）訳者名無記載「外交上ノ道義」『政理叢談』第 46,51,55（M.16.9-12）
（2）訳者名無記載「外交上ノ道義」『政学協会雑誌』第 1（M.17.3）
（3）佐藤郁次郎「各国交際ノ道徳ヲ論ズ」『仙台義塾雑誌』第 1,2,8,11　（M.17.12-M.18.9）
　（1）（2）は、同一訳者か。　（1）（2）および（3）は、訳文を異にするが、完訳。
第十四章　La morale dans les rapports des Etats entre eux（suite） La guerre et la paix ,
pp.233-258
訳出されず。但し、『三酔人経綸問答』の「洋学紳士」の発言には、同第 14 章からのかなりの引用が確認される（井田進也「「東洋のルソー」中江兆民の誕生」『中江兆民のフランス』pp.248-245、および pp.257-261）

〈Appendice〉

1）1867 年 9 月 9 日　万国平和会議　開幕宣言
1）3）討議記録
　『三酔人経綸問答』での「洋学紳士」発言

［資料付記］
本文中にあるとおり、当日の資料としては 1 から 5 までが配布されたが、頁数の都合上、資料 1－3 のみここに掲載した。

An Insight into Asian Trade Regionalism: Japan's Double Membership in the Exclusive Games of TPP, and RCEP.

Sebastian Bobowski*

Abstract

The paper is studying a phenomenon of trade regionalism in East Asia, basing on currently emerging mega-regional trade projects of TPP and RCEP. An author attempts to shed some light on Japan's approach towards membership in regional trade frameworks, pointing out the context of both intra– and extra–regional rivalry with China and the United States. The substance of the analysis has been drawn as *an exclusive game*, underlying evolution of Tokyo's trade diplomacy in recent years to challenge rapidly changing political and economic landscape of the Asia-Pacific region. An issue of membership is utilized to analyze the exclusive dimension of trade diplomacy. Author delivers an assumption of Japan's prioritization of dominating position within regional frameworks, therefore, tendency towards exclusion of the other influential states, perceived as potential rivals over leadership in a given framework. When studying TPP, author raise the question of China's exclusion – emerging regional rival of both Japan and the United States, while, in the context of RCEP, backed by Association of Southeast Asian Nations (ASEAN), however, intensively pushed by China – the question of exclusion of the United States. Therefore, author regards the way Japan is playing *China card* in TPP talks, so as *the US card* in RCEP talks to build its regional position.

Keywords: Free Trade Agreements (FTAs), Trans-Pacific Partnership (TPP), Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP), membership, exclusion
JEL Classification: F13, F15, F53

I. Introduction

Japan has been found as regional leader in terms of economic policy and development for decades, however, acceleration of the globalization in the 90s transformed political and economic landscape. Traditionally, Japan used to provide regional frameworks or engage in such, proposed by third countries, that excluded the United States, in order to secure its dominant position, however, rapidly growing China posed new kind of challenge, both in terms of intra- and extra-regional influences, to Tokyo. Then, Japan started to perceive trade coalition with the United States as an effective instrument of balancing China's rising hegemony due to consistency of Washington's and Tokyo's

* Wroclaw University of Economics

perception in this matter.

An idea behind balancing by Japan was to counter the United States' and China's political and economic expansion through provision of regional frameworks, built in favorable manner, both in terms of membership, so as agenda. It should be noted, however, that Japan hasn't been extremely active in regional trade diplomacy through the years, especially because of the aversion to full liberalization of agriculture sector, while insisting on harmonization of standards and trade promotion. Then, Japan tend to provide Economic Partnership Agreements (EPAs) recently – the most advanced form of trade regionalism, to compete with less comprehensive Regional Trade Arrangements (RTAs), especially Free Trade Agreements (FTAs), that induced domino effect in the Asian region, while securing exclusion of the most sensitive sectors from liberalization.

The Trans-Pacific Partnership (TPP) – mega-regional project led by the United States, however, originated in the early 90s, encouraged by trilateral free trade talks engaging New Zealand, Singapore and Chile, attracted a lot of attention recently, among others, due to exclusion of China, while involving Japan, ASEAN-4[1], Australia, New Zealand, Canada, Mexico, Chile and Peru. Japan, joining TPP talks in 2013 as the *latecomer*, potentially limited its influence within agenda setting process, while being evaluated by the other participants as a candidate. Abovementioned raised the concerns of Japan's lobbies representing sensitive sectors, with special regard to agriculture, being afraid of too-far reaching compromise at the expense of national economic interests, while questioning the strenght of Tokyo's voice in the pact led by the United States.

Meanwhile, Japan engaged deeply in intra-regional dialogue centered around ASEAN Plus Three (APT)[2], that inspired mega-regional project of Regional Compehensive Economic Partnership (RCEP) led by China, however, originally backed by ASEAN-10 trade diplomacy. RCEP has been found by many observers as counter-pact to US-led TPP, then, exclusion of the United States seemed to be a logic consequence of providing competitive agreement excluding China. Japan is the most powerful and influential state that represent subgrouping of partially overlapping mega-regional pacts - namely, Japan, ASEAN-4, Australia and New Zealand. In this context, Japan as a *latecomer*, not an initiator of any of those trade frameworks, is expected to play dual-track game to use *China card* in TPP talks, while using *US card* in RCEP talks. Potentially, the status of common denominator of two competitive trade pacts may strengthen Tokyo's influences and its bargaining power in both trade talks.

II. Theoretical frameworks of Asian regionalism

Regionalism as a phenomenon tend to gain massive interest of policy makers, and academic representing political sciences, economics or spatial economy. It seems that

[1] Association of Southeast Asian Nations (ASEAN): Brunei, Cambodia, Indonesia, Laos, Malaysia, Myanmar, Philippines, Singapore, Thailand, Viet Nam; ASEAN-4: Brunei, Malaysia, Singapore, Viet Nam.

[2] ASEAN Plus Three (APT): ASEAN Plus China, Japan, and the Republic of Korea.

geographical dimension of regionalism, so as the regions, has become one of core issues discussed by theorists. Nye assumed that "regionalism in the descriptive sense is the formation of interstate associations or groupings on the basis of regions; and in doctrinal sense, the advocacy of such formations" [Nye, 1968, vii, xii]. However, contemporary regionalism seems to lack spatial limitations, therefore, may expand beyond regions in geographical terms towards regions in socio-political terms. Katzenstein questioned spatial context of the region, perceiving it as a social construction [Katzenstein, 2000, 354]. Following Mack, and Ravenhill, regional institution building comes down to political process. Regions, as social constructions, are determined by involvement of states in the regional institutions, while the states located in the region activate through such regional forums [Mack, and Ravenhill, 1995, 7].

According to Gamble, and Payne, regionalism is a state-governed process of reorganization of a given regional space under agreed economic, and political assumptions, and rules [Gamble, and Payne, 1996, 2]. Noteworthy, both theorists pointed out the importance of non-state actors in contemporary regionalism, confirming Mack's and Ravenhill's statement as to the political character of regionalism, enabling, among others, reorganization of regions, therefore, establishment of many regions that differ both in economic, and political terms. Then, it is justified to claim, that regionalism embraces inter-governmental and non-governmental processes, conducting at state level. The latter, however, locate regionalism around the institution of state, as the major actor able to influence on agenda setting. In case of non-governmental, as it was stated by Woods, diplomatic dimension, including membership, is a subject of "radiation" by different kind of state and inter-state political structures [Woods, 1993, 6]. When studying regional institutions, however, only non-governmental initiatives that gained political legitimacy at the state level.

The concept of regionalism seems to manifest some analogies with international organizations building, both forum organizations and service organizations. Many regional forums that tend to lack organization frameworks, however, shouldn't be neglected or undervalued. As Acharya argued, regular expert and minister-level consultations, as observed in the Asian region, reflect gradualism of inter-governmental cooperation [Acharya, 1997, 319-346]. Such forums, as low-profile organizations, are expected to evolve through the years towards more advanced frameworks, that cannot be established in the short-term.

Many theorists of regionalism equalize terms of international or regional institutions with frameworks. For instance, Bhagwati defined free trade areas as regional frameworks [Bhagwati, 1993, 31]. It should be noted that regional framework as a term may be assigned to both institutionalized and non-institutionalized regional forums, and agreements.

Then, when finding regionalism as a process, regional framework may be defined as its product. Intensification of inter-state connections may, in the mid- or long-term, induce institutionalization of such forums to improve efficiency, or broaden agenda. Involvement of regional states do not determine institutional character of a given

forum, however, assign those actors a status of potential members of a future more institutionalized regional structure.

Regionalist policy, associated with regionalism as a process, may be understood as a policy focused on provision of regional frameworks, designed in the most favored manner in the context of interests of potential member states, including benefits, and costs of future membership [Hamanaka, 2010, 5]. Unquestioned challenge faced by regionalist policy is the response to potentially unfavorable regional frameworks proposed by other states, so as the exclusion from such a structure. Exclusion of a given state doesn't have to be, however, synonymous with isolation or marginalization, at most reconfiguration of bilateral relations. Such an ambigous approach has been manifested by Japan for decades in the context of the United States' regional presence – while attempting to exclude Washington from many regional frameworks, Tokyo tend to maintain strong bilateral relations.

Moreover, it should be noted, that the names of regional frameworks do not necessarily reflect the agenda of cooperation or geographical scope of a given structure. For instance, regional trade frameworks may address labor market or security issues, while "Asia-Pacific" term does not exclude the possibility of membership of New Zealand or the United States.

Asian regionalism, however, has emerged under different circumstances than the European, therefore, many theoretical concepts on the boundaries of disciplines of international relations and economics seem to be inconsistent to Asian experiences because of generalizations originated in the past empirical evidences of western hemisphere. Among crucial challenges in studying the role of Japan in the East Asian trade regionalism is to explain, among others, Tokyo's stance towards the United States' inclusion in regional frameworks, following the leading concepts of the discipline, namely realism, neoliberal institionalism, and constructivism. Following Hamanaka, author decided to broaden theoretical basis by addressing hegemonic stability theory, that deals with supply side of the process of institution building.

Balancing theory as the dominant realist theory, assumes creation of state coalitions to face external threat of both economic, and political character. Such a grouping, according to Hurrell, attract mainly weaker states, willing to pool potentials, strengthen bargaining power, so as benefit from economies of scale [Hurrell, 1995, 47]. However, when identifying incentives to build institutions, then, demand side of a process, balancing theory does not consider various attributes of such frameworks, such as membership. Forming regional coalitions enable to challenge current, and potential threats, such as expansion of communist China, and Viet Nam in the context of establishing Association of Southeast Asian Nations (ASEAN), expansion of Iran in the context of establishing Gulf Cooperation Council (GCC), expansion of the Soviet Union in the context of establishing European Communities, relatively strong bargaining power of the European Union at the General Agreement on Tariffs and Trade (GATT) forum during Uruguay Round in the context of establishing Asia-Pacific Economic Cooperation (APEC).

However, as mentioned above, balancing theory does not address the membership in regional frameworks. It should be assumed, that a source of a threat to other states in the region should be excluded from such a coalition, moreover, it is crucial to engage appropriately strong actors able to face the enemy, then, to protect weaker and smaller neighbours. In this context, it is hard to conceptualize Japan's attempts to exclude the United States from regional frameworks, when facing, among others, security and economic pressure of rapidly integrating Western Europe. Indeed, when analyzing Japan's regionalist policy through decades, it appears that the United States has become a subject of a policy of exclusion by Tokyo due to economic threat, notwithstanding, establishing regional coalition with Southeast Asian states couldn't have been found as effective counterbalance to American economic expansion.

Following Schweller, another important regionalist context of regionalism is engagement, related to "socializing the dissatisfied power", for instance, through placement of Germany – former aggressor – in the core of the Europen integration project [Schweller, 1999, 14]. Engagement theory represent demand approach to regional institution building, namely, a threat needs to be engaged, and "cornered", however, an issue of membership remains unsolved. According to engagement theory, powers engaged in a given structure should be strong enough to engage the "dissatisfied one". The problem in this context is that the inclusion of the United States appears to be logic due to perspective of successive engagement of China.

Then, following realist theories, in a face of a common threat, both external (balancing) or internal (engagement), a kind of coalition or a framework should be established, involving states able to challenge the situation. Therefore, realism does not provide rationalist explanations to Japan's regionalist policy of exclusion of the United States.

Neoliberal institutionalists address the process of institution building pointing out selfish interest of individual states, with special regard to absolute gains resulted of establishing regional framework, namely, economies of scale, reduction of transaction costs, and uncertainty, coordination of political activities, division of "rents". Although economic, and social regionalization may proceed, so as inter-state linkages, however, regionalism as a process is found crucial in regards of managing various externalities induced by lack of international coordination of national policies *ex ante*.

However, as pointed out by Hamanaka, institutionalists, including Keohane, tend to neglect supply side of regionalism, assuming that even significant changes in the balance of power, resulting of the collapse of hegemon, do not threaten the existence of institutions [Hamanaka, 2010, 13-14]. Then, demand approach to regionalism has been exposed by neoliberal institutionalism. Furthermore, institutionalists address the issue of membership, stating, that it is the matter of economic interconnections among the states. Facing common challenges, and problems, as Värynen argued, encouraged by material interests, may cross the spatial borders, and limitations [Värynen, 2003, 34]. However, when dealing with membership, institutionalists do not analyze the premises of exclusion from membership of concrete countries in details, so as the sources of institutional

erosion, mainly due to strong emphasis put on the demand aspect of institutions.

Following Keohane, institutionalism failed in the fields of determining evolutionary paths of already established institutions, so as projecting benefits from institutional projects that haven't come into effect so far [Keohane, 1984, 79]. Consequently, demand approach is focused on expected economic gains, while marginalizing the context of institution-supplier, able to influence on agenda, and the membership. Abovementioned justifies questioning of neoliberal institutionalist theories' utility in terms of explaining Japan's motives of exclusion of the United States from regional frameworks, when considering considerably strong bilateral economic ties.

Constructivism, stating that tje major aspects of international relations are historically and socially constructed, perceived regionalism through the prism of identity. According to Anderson, forming community cannot be done without existence of "the others", while nation, and nationalism should be treated as manifestation of consciousness [Anderson, 1991, 7]. Acharya equated the concepts of nationalism, and regionalism, recognizing – in the context of the latter – the importance of identification of "ours" and "theirs" in the process of regional community building [Acharya, 1999, 74]. In contrast to previously studied concepts of realism and institutionalism, constructivism pointed out intangible aspects such as consciousness and identity, while treating material premises of institutionalization as secondary. Therefore, demand, so as supply components of regionalism are neglected, meanwhile, regional identity is perceived in terms of a trigger of regionalism. It should be noted, however, that constructivism consider regions, and regional identity *post hoc*, as pointed out by Hamanaka, therefore, possibility of establishing community engaging the United States, and Japan cannot be studied due to lack of such a framework in practice [Hamanaka, 2010, 16]. As mentioned above, constructivism hasn't addressed supply aspects of regionalism, whilst regional identity, consciousness may become an instrument in hands of policymakers, willing to manipulate it in order to reach dominating position within a given regional framework, or exclude the other state from the structure to maintain the status of hegemon.

Hegemonic stability theory, deeply rooted in studies by Kindleberger, provides an assumption as to necessity of existence of stabilizer, a hegemon state that is powerful enough to deliver international shared goods such as international organizations (World Bank, GATT etc.) or economic order [Kindleberger, 1973, 305]. As it was argued by Russett, the essence of hegemony comes down to control over effects than concentration of material potential by the leading state, thus, tangible wealth of a country cannot be found as an explicit premise for international institution building [Russett, 1985, 207-231]. Furthermore, hegemonic stability theory provides valuable point of reference for studying supply aspects of regionalism, explaining motives of institution-suppliers such as desire to gain a dominant position within the framework. While Kindleberger assumed that hegemonic state is expected to act in the name of noble reasons when establishing international institution, Snidal stated, that hegemon may act on its own behalf, treating regional frameworks as a private property subordinated to its interests, not international shared good [Snidal, 1985, 582]. However, as already mentioned Russett claimed, both

benefits, and costs for hegemon, resulting of establishment of a new international institution, should be considered.

According to critics of hegemonic stability theory, hegemon may utilize institution to boost its own material potential, while dictating the rules to the other states, imposing quasi-taxes such as national contribution of individual members. For instance, World Trade Organization (WTO) used to perceive through the prism of domination of economic interests of "Big Three", namely The United States, the European Union, and Japan, while International Monetary Fund (IMF) used to be criticized for subordination to the United States' political, economic, and financial interests, manifested, among others, through quota shares, and effective veto rights assigned to Washington. Hegemon's abilities to induce a pressure or execute a given way of acting of the other state is the matter of discussion, however, as Snidal claimed, cannot be questioned even under anarchic international system.

On the other hand, however, advocates of the theory take into consideration vaiours costs of hegemon resulted of establishing international institution, starting with economics. Hegemon, as the leading state within the framework, is expected to open its borders to imports of member states' surpluses, so as providing short-, mid-, and long-term capital in the form of loans, swap lines, and foreign investments. Therefore, any kind of trade or financial regionalism is expected to impose concrete, tangible economic and financial liabilities on hegemonic state, that cannot be ignored by critics.

Following Hamanaka, one of the crucial intangible aspects of hegemonic position is prestige gained by dominating state [Hamanaka, 2010, 18]. As Kindleberger stated, accumulted material potential used to be a source of prestige, however, the latter may be strengthen through political instruments when economic attributes seem to be unadequate [Kindleberger, 1986, 845]. Prestige has been found as important trigger of institution building process, while inducing sense of power, and international influences. In this context, -Kratochwil, and Ruggie opted for shaping prestige in accordance to country's material potential to build balanced trans-border interactions [Kratochwil, and Ruggie, 1986, 756]. Following Morgenthau, establishing international institutions, organizing and hosting summits, and official meetings, strengthen hegemon's prestige, so as economic contribution, thus, prestige gains are not necessarily accompanied by material gains of a hegemon [Morgenthau, 1978, Chapter 6].

Hamanaka's translation of hegemonic stability theory at the regional level enables to identify hegemon within regional framework, however, in contrast to original studies by Kindleberger and others, regional system possesses surrounding, therefore, both benefits, and costs, may be affected by various externalities. As pointed out by Ravenhill, in case of regional frameworks there is a problem of free riders, then, third countries that may benefit from trade liberalization or financial arrangements within regional framework without any formal contribution [Ravenhill, 2001, 11]. For instance, rescue packages, repo lines or any kind of balance of payment facilities may benefit indirectly external partners of beneficiaries operating within a given regional framework. It is said, that hegemon's impact on the smaller member states is expected to supersede influences

of external parties. For instance, Trans-Pacific Partnership (TPP) may potentially affect World Trade Organization's (WTO) performance within Asia-Pacific region, so as project of Asian Monetary Fund (AMF) may potentially displace International Monetary Fund (IMF) within Asian region – in both cases reducing influences of international organization's hegemonic states.

It should be noted, however, that regional hegemons, acting on the behalf of the other member states at the international level, gain additional prestige. When considering political interests, leaders of trade regionalism benefit to a lesser extent than hegemons within regional diplomatic frameworks, mainy due to economic costs. In case of financial regionalism, costs of acting as stabilizer might be partially shared with the other members through national contributions to regional support facilities, reserve funds etc.

Summing up, hegemonic position in the regional trade framework seems to deliver relatively modest prestige, when compared to two other types of regionalism. As Hamanaka argued, hegemon's benefits results of individual account of both expanding influences on the smaller regional states, and costs associated with opening hegemon's borders to surplus production imported from the other member states [Hamanaka, 2010, 20].

Trade regionalism

In the literature there are usually four types of trade regionalism distinguished, namely regional trade forum, regional trade cooperation not sanctioned by treaty, regional trade arrangements (RTAs) sanctioned by treaty, and economic partnership arrangements (EPAs).

The first type, then, regional trade forums, or regular meetings, used to be less formal, therefore, less costly for potential leader, however, tend to evolve towards more advanced forms of trade regionalism due to interests of participants.

Regional trade cooperation, lacking treaty formula, may embrace various fields of international economic relations, such as industrial, and skills development, promotion of trade. Thus, depending on the content of agenda of economic cooperation, spectrum of decisions, and challenges to be faced, potential costs of hegemon may vary significantly.

Another type of trade regionalism mentioned above is regional trade arrangement sanctioned by treaty, usually taking form of free trade arrangement (FTAs), that assumes reduction or elimination of tariff barriers. According to Article XXIV of GATT, such an agreement should cover "substantially all trade" among signatory parties. Moreover, there shouldn't be any negative externalities for the third countries [Bobowski, 2011, 30]. Noteworthy, developing countries, including least developed countries (LDCs), as stated by Enabling Clause agreed during Tokyo Negotiation Round in 1979, are not required to follow even a little discipline of Article XXIV when designing FTAs, however, shouldn't "raise barriers to or create undue difficulties for the trade of any other contracting parties" and shall not constitute an impediment to the reduction or elimination of tariffs and other barriers on a most-favoured-nation basis [Ravenhill, 2003, 299-317; Hamanaka, 2008, 75-77]. Therefore, political attractiveness of such agreements is relatively high.

What might be a source of concern, as pointed out by Hamanaka, is a lack of definition of "developing country" in WTO regulation, thus, nearly all Asian countries, including China, with the exception of Japan, Republic of Korea and maybe Singapore, used to design FTAs excluding sensitive sectors such as agriculture, textiles or automotive industry, basing on Enabling Clause [Hamanaka, 2010, 125]. Furthermore, most FTAs based on Enabling Clause, although reciprocal, provide a space for manipulating costs of the leading signatory party, related mainly to opening domestic market for imports of FTA partners. Then, dominating country may offer assymetrical preferences to the other signatories, while maintaining protection of sensitive industries, that cannot take place under Article XXIV.

Next to FTAs, developed GATT member states used to sign RTAs in the form of preferential trade arrangements (PTAs) with developing partners, assuming lack of reciprocity. An example of such agreement is Lóme Convention, under which European countries provide preferences to their former colonies without mutuality.

Finally, trade regionalism may manifest itself in the advanced form of economic partnership arrangements (EPAs). Such an agreement does not only encompass tariff reduction or elimination, but also, among others, harmonization of standards. From the persepective of hegemon, EPA may be beneficial due to internationalization of its own norms and standards within trade framework.

III. Competing mega-regional trade blocks

The Trans-Pacific Partnership (TPP) project has been found by some observers as an instrument of balancing Chinese influences within Asia-Pacific region by the United States. Consequently, the Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP) used to be perceived as Beijing's response to American-led TPP. When studying exclusive aspects of both mega-regional projects, major feature of TPP is the exclusion of China, RCEP – exclusion of the United States [Aziz, 2013, 29-36; Petri, 2013, 333-359]. However, both multilateral partnerships embrace the third largest economy in the world in nominal terms, namely, Japan. Partially ovelapping memberships of TPP and RCEP cover seven states to date, namely ASEAN-4 (Brunei Darussalam, Malaysia, Singapore, Viet Nam,) Oceania (Australia, New Zealand), and Japan (see Figure 1 for details).

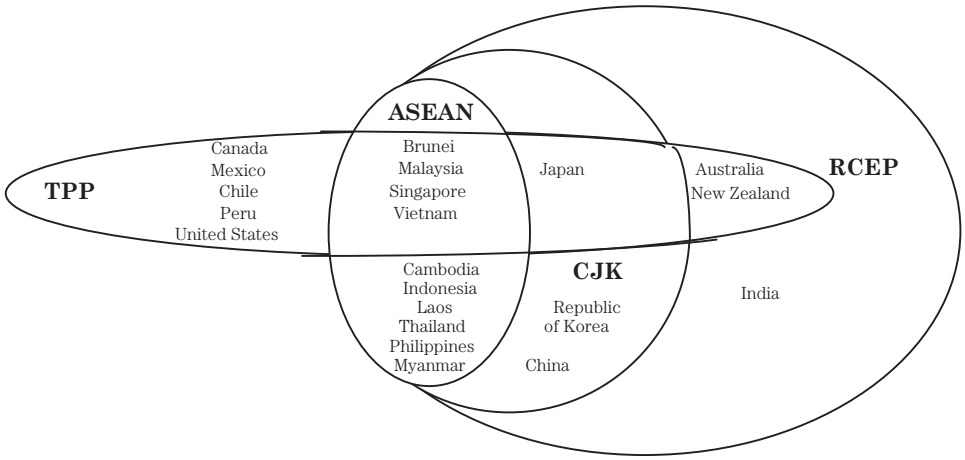


Figure 1. Overlapping memberships of TPP and RCEP.

Notes: **Association of Southeast Asian Nations (ASEAN)**: Brunei, Cambodia, Indonesia, Laos, Malaysia, Myanmar, Philippines, Singapore, Thailand, Viet Nam; **CJK**: China – Japan – Republic of Korea; **Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP)**: ASEAN + China, Japan, Republic of Korea, India, Australia, New Zealand; **Trans-Pacific Partnership (TPP)**: Singapore, Viet Nam, Brunei Darussalam, Malaysia, Japan, Australia, New Zealand, United States, Canada, Mexico, Peru, Chile.
Source: own elaboration based on: [Bobowski, 2014, 267].

As for now, Japan is the most powerful country attending both trade talks, however, "standing astride" may be pretty risky, mainly due contradictory interests of potential hegemons within competitive mega-regional frameworks, namely the United States (TPP), and China (RCEP). On the other hand, acting as a "common denominator" of TPP, and RCEP, may help to bridge two trade blocks, and, probably "socialize" China. As mentioned above, Tokyo's double membership can be found as strategic game with *US card* (by the RCEP negotiation table) and *China card* (by the TPP negotiation table), then, not a sign of disorientation or confusion, but conscious response to US-Sino rivalry over leadership in Asian regionalism.

Author assumes, that Japan cannot dominate any mega-regional trade block in Asia-Pacific, due to *latecomer* status in TPP and RCEP, however, both the United States, and China – anticipated hegemons, were, actually, *latecomers* too. Therefore, paradoxically, Japan acting as a "bridge state" may benefit from both projects, the question is how potential, to date pretty uncertain, inclusion of China by TPP will affect Japan's bargaining power, and geostrategic position. Abstract vision of merging TPP, and RCEP under US-Sino co-leadership may significantly undermine Tokyo's aspirations.

The Trans-Pacific Partnership (TPP)

As it was argued by Hamanaka, Trans-Pacific Partnership (TPP) is a product of evolutionary Asian trade regionalism since the 1990s [Hamanaka, 2014, 169]. Following Salazar, process started with bilateral free trade talks between Chile and New Zealand in the early 90s, however, without success [Salazar, 2005]. On the threshold of the new millennium, a FTA between Singapore, and New Zealand was signed, inspiring announcement of the "P3" project involving Singapore, New Zealand, and Chile during Asia-Pacific Economic Cooperation (APEC) Leaders Meeting in Brunei Darussalam in 2000 [Pakpahan, 2012]. Very soon, Australia, and the United States declared the willingness to enter "P5" talks within expanded formula of P3, howeverm it appeared to be too ambitious at that time. Consequently, Brunei Darussalam decided to join, in order to form "P4" under the name of Trans-Pacific Strategic Economic Partnership (TPSEP), that was formally signed in 2005, and entered into force a year later. In 2008, when investment and financial services's chapters of TPSEP agenda were negotiated, the United States applied for inclusion in trade talks. In this context, current TPP talks may be found as an extension of P5 (TPSEP) grouping, however, this translates into *latecomer* status of the United States, thus, Washington rather opted for a new trade agreement covering twelve states instead of "TPSEP Plus". Accordingly, accession clause of the latter appeared to be ambiguous:

> *"This Agreement is open to accession on terms to be agreed among the Parties, by any APEC Economy or other State. The terms of such accession shall take into account the circumstances of that APEC Economy or other State, in particular with respect to timetables for liberalisation"* [Hamanaka, 2014, 169].

As confirmed by Lewis, United States Trade Representative (USTR) official made it clear in remarks at the American Society of International Laws Annual Meeting that the United States were reluctant to enter TPSEP due to necessity of assumimg leadership through enforcement of completely new trade agreement (TPP) [Lewis, 2011, 27-52].

As a consequence of the United States' engagement in trade talks, Australia, and Peru, followed by Viet Nam, declared their participation in the negotiations. On 14 November 2009, during visit in Japan, new US president – Barack Obama announced engagement in TPP trade talks. In March 2010 negotiations were launched in Melbourne, involving P4 countries, the United States, Australia, Peru, and Viet Nam. In the followig months, other countries, among others, Canada, Mexico, and Malaysia, expressed interest in TPP membership. However, *newcomers* were expected to gain acceptance of existing member states. It should be noted, that Viet Nam decided to enter TPP talks following the United States that avoided *latecomer* status, whereas Malaysia expressed interest in membership in July 2010 due to dissapointing results of bilateral FTA talks with Washington. Consequently, Malaysia joined the second round of TPP talks in October 2010.

During APEC Leaders Meeting in November 2011, Canada, Japan, and Mexico declared their willingness to join TPP. Noteworthy, *newcomers* were provided with

pretty limited margin of flexibility in terms of negotiating agenda. Nine TPP members assumed that potential new members are not allowed to open already agreed chapters, so as to use veto right. Therefore, it was obvious that TPP members during trade talks in parallel with abovementioned APEC Leaders Meeting in 2011 tried to close as many chapters as possible before extension of membership. Interestingly, it appeared to be significantly important in the face of Japan's accession, due to concerns of, among others, New Zealand regarding Tokyo's bargaining power. As Stephens stated, both Canada, and Japan's membership were problematic, and deliberately prolonged, with special regard to the latter [Stephens, 2013].

Controversial issue in the context of TPP enlargement was a wide spectrum of preconditions imposed bilaterally by the United States on the *newcomers*, that effectively replaced accession criteria of "in-progess" mega-regional trade block. For instance, Mexico was obliged to sign Anti-Counterfeiting Trade Agreement (ACTA) [maquilaportal, 2014], Canada agreed on the phase-out of supply management control of dairy and agricultural products. According to Kelsey, extremely long list of prerequisities has been designed by Washington to affect the position of Japan, including, among others, sensitive sectors such as agriculture, and automobiles, so as medical devices, drugs, and insurances [japandailypress, 2014; Kelsey, 2011, Drysdale, and Ishigaki, 2001, 6]. Whereas Canada, and Mexico membership has been accepted by TPP members in June 2012, Japan had to wait till March 2013, and finally attended 18th meeting in Kota Kinabalu in July 2013.

Considering the United States' strategy in TPP talks it appeared that the only way to challenge American hegemon by any country is to propose/enter competitive trade framework, excluding Washington's influences. It should be noted, that TPP is not designed as regional-wide agreement, but, in fact, a set of bilateral FTAs. However, the United States tend to avoid re-opening of already established bilateral FTAs, attempting to negotiate separately tariff schedules with each TPP partner [Lewis, 2011]. As a consequence, future members of TPP are required not only to negotiate its own concessions, but also existing concession of all the member states at bilateral basis, that potentially inflate entry barrier. Thus, further enlargement of TPP appears to be uncertain, reducing possibility of balancing hegemonic position of the United States.

Summing up, TPP has been found as strategically important for the United States because of a few matters [Bobowski, 2014, 267]:

First, TPP may enhance the building of competitive regional trading architecture, moreover, superseding sluggish WTO Doha round negotiations.

Second, TPP may induce export promotion and competition between TPP and non–TPP members for US market. It is so because of the hybrid approach of US negotiators – on the one hand, concessions already guaranteed by bilateral FTAs are secured through avoidance of reopening of those documents, on the other hand – consultations on new tariff reduction and barrier removal with the countries without the "FTA link" with the United States proceed [Fergusson, Vaughn, 2010]. Then, the United States attempted to follow high standards imposed previously by P4 states as a *latecomer* only if convenient,

while imposing own rules within some fields as the most powerful party.

Third, through TPP potential political US alliance may be broadened, including more Asia – Pacific partners without previous closer trade relations materializing as bilateral FTA, ie Viet Nam, Malaysia, and New Zealand.

As it was mentioned before, TPP does not engage Beijing, at least for several reasons, ie difficulty in reaching agreements, escalating competition in rule – making and interference in regional production chains.

Namely, TPP encourages rule – making competition with the United States in terms of the degree of liberalization and integration. It must emphasized, that TPP is a high standard trade agreement of 26 chapters covering, next to the characteristic for ASEAN Plus FTAs customs border issues, WTO-plus elements such as environment, labor, intellectual property rights, and government procurement. Such kind of "competitive liberalization", as it was termed by Bergsten, may discourage China from sitting by the multilateral negotiation table, also because of the restrictive clause addressing state – owned and state - supported enterprises [Bergsten, 1996]. Furthermore, it can be assumed, that TPP may enhance dynamic competition for the US market between China and TPP members and affect Chinese outward FDI performance, especially in Mexico – top host location in the Latin America, and Viet Nam, deeply engaged in vertical division of labor with China [Tso, 2012].

Therefore, the entry barrier is relatively high for China, however, there is still some room for change. When studying Chinese strategy towards TPP it appears that as for now they stand aside but not behind. Several important steps were already taken. First, sectoral – level dialogue between China and ASEAN was launched in July 2011 to cover a broad range of industries [Nan, 2010]. Second, China concluded the Foreign Investment Protection Agreement with Canada in February 2012 [Kosich, 2012]. Third, China proceeds with FTA talks with Australia [Dobell, 2011]. Last but not least, China – Republic of Korea and CJK FTA talks were initiated.

Admittedly, none of those initiatives were undertaken as a direct response to the TPP, notwithstanding, contemporary multilateral context has assigned them an extra importance and new meaning.

The Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP)

RCEP project has originated in intra-regional rivalry between China, and Japan over dominance, hence, influences within core regional institution, namely, ASEAN. According to Rapkin, Japan's proposal of establishing an Asian Monetary Fund (1997) in the face of regional financial crisis, has been found as manifestation of hegemonic aspirations of Tokyo. However, the United States effectively blocked this initiative, preventing institutional competition with International Monetary Fund, dominated by Washington [Rapkin, 2001, 373-410]. Noteworthy, China maintained passive stance, in fact supporting American resistance.

Next to financial regionalism, trade regionalism has become a stage of Sino-Japanese rivalry, however, that time, Beijing's regional diplomacy provoked Tokyo's response. In

November 2000 China proposed free trade agreement to ASEAN, a year later, during ASEAN-China Summit, as a consequence of joint studies, parties agreed to establish FTA till 2010. According to Terada, China has made a policy turnaround then, manifesting serious commitment to regional trade diplomacy. The United States, followed by Japan, Singapore, and Indonesia, were truly concerned about rising position of Beijing within ASEAN Plus Three grouping [Terada, 2009, Okamoto, 2003, 246]. As a result, Tokyo proposed Comprehensive Economic Partnership (CEP) to ASEAN in January 2002. Two aspects seem to be obvious in this regard. First, Japan's proposal was a direct reaction to China's initiative. Second, CEP appeared to be much more ambitious, advanced, and comprehensive agreement than ASEAN-China FTA covering trade in goods. From the perspective of ASEAN, it was crucial to maintain a balance between two Northeast Asian neighbours, therefore, both initiatives were welcomed in favorable manner.

In the following years, direct competition between China, and Japan concentrated on trade regionalism, both in terms of membership, and agenda. In April 2005, at the initiative of China, joint studies on East Asia Free Trade Agreement (EAFTA) were launched. First results of joint studies were discussed at the ASEAN Plus Three Economic Ministers Metting (APT EMM) in August 2006, further analysis were recommended. Meanwhile, at the ASEAN Plus Six Economic Ministers Meeting (APS EMM), Japan proposed joint studies on Comprehensive Economic Partnership in East Asia (CEPEA). Noteworthy, both multilateral projects were analyzed in parallel – second phase of EAFTA studies was concluded only a month before two phases of CEPEA studies (Phase I: June 2007-June 2008; Phase II: November 2008-July 2009, respectively). Consequently, both reports were presented in August 2009, albeit EAFTA was discussed among ASEAN Plus Three states, while CEPEA – among ASEAN Plus Six states.

When considering attributes of both projects, membership issues seem to be as crucial as agendas. Firstly, EAFTA, promoted by China, assumed narrower membership, excluding Australia – an important ally of Washington, so as India, able to challenge Beijing's dominance, while Tokyo's idea of CEPEA engaged both abovementioned states with obvious intention to offset China's influences, that consequently secured Japan's hegemonic position. Secondly, CEPEA's agenda appeared to be much more ambitious, going beyond trade in goods, basically covering intellectual property, and investment, that would transform China's policy into more defensive directions, in contrast to EAFTA, favoring China with rapidly growing domestic market. Strictly speaking, both China, and Japan submitted competitive proposals of regional trade frameworks ensuring own hegemonic position while attenuating rival's advantages.

As already mentioned, ASEAN supported both projects to reduce tensions between Tokyo, and Beijing. Compromise solution to that moment was to establish four ASEAN Plus Working Groups responsible, respectively, for: rules of origin, tariff nomenclature, customs procedures, and economic cooperation. As it turned out very soon, both Beijing, and Tokyo were dissatisfied with ASEAN's strategy, the first due to usage of "ASEAN Plus" formula that potentially favors Japan's vision of extended membership, while the

second because of omission of intellectual property, and investment from agenda that potentially favors China's domestic market potential.

Important breakthrough has taken place in August 2011, when China, and Japan submitted joint proposal on East Asian economic cooperation to ASEAN, suggesting creation of three working groups working on EAFTA, and CEPEA, covering, as follows: trade in goods, trade in services, and investment. Moreover, it was agreed that future trade framework should be centred around ASEAN, thus, involving only ASEAN Plus FTA Partners. In November 2011, at the 19th ASEAN Summit in Bali, RCEP has been announced, resulting in only a short comment by East Asia Summit (EAS) taking place two days later. Noteworthy, EAS engaged the United States, that might attempt to block this exclusive regional trade framework. Following August the first ASEAN Economic Ministers Plus FTA Partners consultations were organized, engaging representatives of sixteen states, while excluding the United States. In November 2012, at the 20th ASEAN Summit parties agreed to launch formal negotiations on RCEP with six FTA Partners. Thus, establishing FTA with ASEAN has become a prerequisite to enter RCEP talks. According to Guiding Principles and Objectives for Negotiating RCEP:

> *"Any ASEAN FTA Partner that did not participate in the RCEP negotiations at the outset would be allowed to join the negotiations, subject to terms and conditions that would be agreed with all other participating countries (Principle 6)"* [Hamanaka, 2014, 176].

Noteworthy, as Pakpahan pointed out, RCEP assumed deeper economic cooperation than the existing ASEAN Plus FTA agreements, namely, it will open up more trade in goods and services, eliminate trade barriers, and gradually liberalise services and provide for greater foreign direct investment in ASEAN and its external trading partners [Pakpahan, 2012]. On the other hand, as Sally argued, RCEP:

> *"(…) will have weak disciplines on non-tariff regulatory barriers that are the biggest obstacles to trade in the region. It might end up agglomerating the noodle-bowl of FTAs among members rather than ironing out distortions among them. In such a scenario, RCEP will create little new trade and investment, and cause extra complications for global supply chains"* [Sally, 2014].

It should be noted, however, that tripartite FTA talks between China, Japan, and Republic of Korea were formally launched in parallel as a consequence of decisions of trilateral summit held in November 2012.

Moreover, parallel to the consultation on the RCEP (third round of negotiations took place in January 2014 in Malaysia) and the tripartite FTA, China and Republic of Korea conduct negotiations regarding a bilateral free trade agreement (since May 2012, there were eight rounds of negotiations), and may potentially direct further tripartite talks involving Japan. During the eighth round of bilateral talks in November 2013 the list of sensitive agricultural assortments was agreed, while the statements concerning the

flow of services, investments, intellectual property rights, competition, environment and employment were exchanged. It is worth mentioning that the bilateral free trade agreement Japan-Republic of Korea was negotiated in years 2003 - 2004, however, the following years brought deadlock– finally, in 2008, a consultation process was relaunched to provide more favorable climate for further talks. As it was announced by the South Korean Ministry of Foreign Affairs, the second and the last negotiation round so far at the general level took place in May 2011 [Bobowski, 2014, 268-269].

On the other hand, it should be emphasized, that trade negotiations are accompanied by mutual distrust and political tensions, concerning, among others, territorial disputes around the Senkaku/Diaoyu islands of the South China Sea between Beijing and Tokyo and Dokdo/Takeshima islets in the Sea of Japan between Tokyo and Seoul, as well as the "tolerant" stance of Beijing towards North Korean nuclear program [Buckley, and Jones, 2012]. Particularly strong animosities are observed between Beijing and Tokyo, being - as the second and third world largest economy in terms of nominal GDP, the natural competitors for leadership in the region [Haggard, 2011, p. 17].

Whereas, Japan has decided to enter TPP membership negotiations, perceiving such kind of trade pact as an opportunity to challenge deflation and stagnation of economic growth through export expansion [BusinessKorea, 2013]. Following official statement of prime minister Abe's administration, joining the TPP negotiations has become an integral part of the growth strategy. In fact, the first Abe administration of 2006–07 also emphasised the importance of making progress on Economic Partnership Agreements with other countries in East Asia in order to bolster economic growth in Japan by inducing overseas demand for goods, and services [Mulgan, 2013a].

In this context, the interest of Beijing– standing aside the US-led project - in tripartite agreement has increased, in order to counterbalance the potential impact of multilateral block, involving, around the negotiating table, next to Japan, Australia, Brunei, Chile, Canada, Malaysia, Mexico, New Zealand, Peru, Singapore, and Viet Nam [Global Post, 2013].

In this respect, joint statement of China, and Japan on East Asian economic cooperation addressing ASEAN in 2011 deserved extra attention. Beijing trade diplomacy's perspective was heavily focused on membership, therefore, RCEP excluding American rival gained interest even though negotiation agenda covered, among others, investment. As Hamanaka suggested, China was more confident as to its economic potential, when compared to EAFTA proposal in 2004, therefore, agreed on partially disadvantageous agenda, finally ready to challenge Japan. On the other hand, Japan could have used RCEP talks as an argument in TPP negotiations, namely, to use *China card* in order to soften the United States' restrictive stance towards its membership. Assuming, that initiation of RCEP talks at a critical moment of TPP negotiations was not a coincidence, it is obvious, that China was willing to create a counterbalance to TPP, while Japan seek for strong argument to gain US' approval for joining TPP talks. However, the latter condition has been already met.

Regarding RCEP membership, it should be noted, that future mega-regional trade

framework is expected to possess accession clause, while limiting potential spectrum of member states to FTA Partners of ASEAN. Futhermore, RCEP's Guiding Principles stated, that:

> *"Taking into consideration the different levels of development of the participating countries, the RCEP will include appropriate forms of flexibility including provision for special and differential treatment, plus additional flexibility to the least-developed ASEAN Member States"* [Hamanaka, 2014, 177].

Thus, developing countries – *latecomers*, may benefit from favorable treatment.

IV. Japan's strategy towards TPP and RCEP – what's the name of the game

While studying Tokyo's strategy towards two mega-regional trade projects, it is important, however, to start from the context of US-Sino rivalry. As written above, TPP is found as US-led project, while RCEP appears to be China-led, albeit centred around ASEAN. Furthermore, *latecomer* status of Japan by TPP table cannot be treated as a point of reference to RCEP process, mainly due currently blurred leadership shared by Beijing, and Tokyo, and even, to some extent, ASEAN[3].

The United States skilfully entered TPSEP trade talks avoiding *latecomer* status to determine restrictive accession clause, discouraging potential new entrants. As many observers claimed, an idea behind TPP was to attract anyone, except China, frustrated with rule-competition, on the one hand, potentially threatening American hegemony, on the other. Thus, Washington was willing to secure its dominating position, excluding major rival within Asia-Pacific region.

Whereas, China attempted to establish regional framework excluding the United States, in order to secure its hegemonic position. Then, Japan hasn't been perceived as an important rival anymore, mainly due rising economic power of Beijing, however, when accompanied by India, still challenging. Therefore, China's hegemonic position in RCEP has been secured through accession guidelines, limiting the scope of membership to ASEAN Plus FTA Partners, that naturally excluded American competitor. Initially,

---

[3] However, ASEAN-centric concept seems to be ambigous, when considering its bargaining power in RCEP when confronted with China, and Japan, potentially also India [Kassim, 2012; Cheong and Tongzon, 2013, 144-168]. Following Pakpahan, TPP membership of ASEAN-4 will profoundly influence the centrality of ASEAN. ASEAN aims to preserve its centrality to economic cooperation within Southeast and East Asia through initiatives such as the East Asia Summit and ASEAN Plus Three. If ASEAN does not respond effectively to any potential competition between the TPP and RCEP, ASEAN's role as a driving force in the various regional arrangements is more likely to decline. The rivalry between the US and China could also undermine the crucial role that ASEAN plays [Pakpahan, 2012]. When considering ASEAN's strategy towards TPP, and RCEP, Sally opted for "ambitious agreements" with maximum sectoral coverage, and restrictive discipline assigned, iwhereas indicating the importance of simplifying the rules of origin, and open accession clauses for non-members. Furthermore, author opted for accelerating progress of the ASEAN Economic Community (AEC) and strengthening provisions in existing FTAs to benefit from both trade, and investment flows within ASEAN [Sally, 2014].

Beijing insisted on ASEAN Plus Three formula to weaken Tokyo-led coalition, potentially supported by India, and close US allies, namely Australia, and New Zealand, all sharing democratic values [Terada, 2009]. Providing flexible treatment to developing countries, less ambitious, *goods-centric* agenda, open doors for Japan, distinguished this project from American project while minimizing the risk of failure. Moreover, rapid progress of TPP talks encouraged Beijing to accept extension of negotiation agenda under the pressure of Tokyo, with special regard to investment, and intellectual property. While Japan seemed to play *US card* to redesign RCEP agenda in favorable manner, China could have realized that advancing agenda with WTO-Plus elements will not strengthen Tokyo's position at unexpected scale to challenge China's hegemony. Alike TPP project, RCEP officially do not exclude the possibility of future coexistence of China, and the United States within a given trade framework, however, this would possibly lead to merger of both mega-regional projects. As Huang stated, emergence of two competitive mega-regional projects reflects the scale of mutual misunderstanding and mistrust bewteen Washington, and Beijing [Drysdale, 2014], therefore, consolidation into the single trade regime is pretty unlikely in the following years. Unquestionably, the TPP created the impetus for China, and Japan to compromise on the exact membership of regional cooperation. Following Huang, China should activate the strategic bilateral relationship with the United States to seek membership of the TPP. The TPP is only one area, as he stated, "(…) where China and the US can work together closely to develop a new major-power relationship. The two countries are already negotiating a bilateral investment treaty, successful conclusion of which could pave way for China's TPP accession. The two governments may also want to consider the possibility of establishing a bilateral free trade agreement (…)" [Drysdale, 2014]. However, as Drysdale argued, such a vision is still very far ahead, thus, the main goal as for now for China is to complete RCEP. According to Sally:

> *"President Obama's leadership is needed to conclude a 'high-quality, twenty-first century' TPP — and open the door to eventual Chinese membership. But Obama has conspicuously failed to lead on international trade. Similarly, the Chinese leadership has been defensive on trade policy for almost a decade. But there are signs that China is becoming interested again in regional and global trade liberalisation. It will take Chinese leadership to inject more ambition into RCEP"* [Sally, 2014].

Author is raising the question whether Japan might be a good loser, or, consciously, play a card game to consume future double membership in mutually competing mega-regional trade blocks. As mentioned above, Japan decided to join China's trade diplomats to announce new concept of East Asian economic cooperation – consequently leading to RCEP project - in August 2011, when TPP's table seemed to be still unreachable for Tokyo. Three months later, at the APEC Leaders Meeting in Honolulu on 13 November, Japan formally expressed its will to join TPP talks, afterwards, on 17 November, during ASEAN Summit, supported proposal of RCEP. Last but not least, on 19 November, East

Asia Summit, including the United States, delivered a short, neutral comment, and three Northeast Asian countries, namely, China, Japan, and Republic of Korea, agreed to start tripartite FTA talks. Such unprecedented scale of diplomatic dynamism, including Japan's vital engagement, undoubtedly challenged US' optics. Interestingly, on 20 November 2012, when RCEP talks were formally launched, prime minister Noda lobbied for US president Obama's support for Japan's TPP membership. Prime minister Abe's announcement of late February 2013 as to participation in TPP talks on 15 March, that completely surprised Japan Agriculture Organization, representing domestic farm lobby, confirmed unprecedented rush of the Japanese government induced by rapid progress of US-led trade talks [Mulgan, 2013; Mulgan, 2013b]. According to joint statement by Abe, and Obama:

> *"The two Governments confirm that should Japan participate in the TPP negotiations, all goods would be subject to negotiation' and that 'as the final outcome will be determined during the negotiations, it is not required to make a prior commitment to unilaterally eliminate all tariffs upon joining the TPP negotiations"* [Mulgan, 2013a].

Following events confirmed effective usage of *China card* by Japan to secure its inclusion in TPP, however, as February 2014 proved, Tokyo has been using argument of Sino-Japanese coalition as a threat to reduce pressure on tariff reductions within sensitive product lines from the side of major agricultural exporters, namely the United States, Canada, New Zealand, and Australia. Thus, while acting as *latecomer* by TPP table, Japan is playing *China card* to win as much as possible in "concession war". Following joint statement of bilateral summit organized on 23-25 April 2014 in Tokyo, Abe, and Obama declared, that they "have identified a path forward on important bilateral TPP issues (…) and this marks a key milestone in the TPP negotiations" [Togo, 2014]. However, the role of hegemon in this game has been already cast by the "US director". Noteworthy, due to Washington's pressure imposed on Tokyo to rebuild confidence in relations with Seoul, in March 2014 trilateral summit the United States – Japan – Republic of Korea was organized, so as bilateral talks between two Northeast Asian states.

It should be noted, however, that Japan's membership in TPP embraces both political, and economic costs. As Mulgan stated, Japan hasn't signed any FTAs with major trading partners, and developed countries, except for Switzerland in 2009, mainly due aversion to agricultural trade liberalization, thus, entering TPP, involving agricultural exporting powers such as the United States, and Australia, has raised justified concerns domestically. In fact, TPP is an extreme FTA, under which all tariffs are expected to be abolished within 10 years, with a very broad template that has implications for a host of Japanese regulatory systems including investment, competition policy, intellectual property, financial services and government procurement. Consequently, excluding "Your Party", all national political forces in Japan tend to perceive TPP mainly through the prism of costs, and losses for a country [Mulgan, 2012]. Critics have indicated the

problem of external pressure of the United States, defining TPP as "radical bilateral FTA", while questioning prime minister Noda's statement that TPP is opening Japan to the world – as a matter of fact, scope of membership does not reflect the world coverage, so as Asian, due to exclusion of major regional trading partners of Japan, namely, China, Republic of Korea, Indonesia, Thailand, and the Philippines. Noteworthy, in 2014 Japan has signed Economic Partnership Agreement (EPA) with Australia, providing – for the first time in the history at such a scale - important concessions on some key agricultural products, such as beef. Importantly, this has been assessed as a source of pressure imposed on the United States to find a compromise in the field of agricultural concessions by TPP table.

Meanwhile, Japan is playing RCEP game, challenging China's hegemonic ambitions with *US card*. Redefining agenda of RCEP to extend it much beyond trade in goods issues obviously disadvantaged China, however, intensified significantly after US acceptance for Japan's membership in TPP. For instance, in January 2014, during the third RCEP meeting, Japan pushed through the proposal of establishing new Working Groups, namely: on competition, intellectual property, economic and technical cooperation, and dispute settlement. Consequently, strict discipline in the fields of investment, and intellectual property – Tokyo's objective advantages over Beijing in trade policies – will be a subject of dispute settlement mechanisms instead of case-by-case political bargaining, as Hamanaka stated. Again, Japan tend to use its double membership deliberately to challenge "self-appointed" hegemons in both trade frameworks. However, according to author, hegemonic position of Beijing in RCEP is not a matter of political power, and legitimacy, like in case of Washington's domination in TPP, but economic power, that can be challenged by Tokyo-led coalition including India, and Oceania, potentially also some ASEAN states engaged in TPP, with special regard to Singapore. Importantly, abovementioned Japan – Australia EPA has been accompanied by bilateral Australia – Republic of Korea FTA signed in April 2014, while China is still out of the game in Oceania [Terada, 2014].

V. Conclusion

Japan hasn't retreat from regional rivalry over leadership, however, recent years have dramatically changed its position, mainly due rising China's hegemony, and accelerating integration within ASEAN towards economic community, so as internal problems, regarding demography, unefficient domestic demand, and reindustralisation.

When studying Asian trade regionalism through the prism of two mega-regional projects, namely TPP, and RCEP, Tokyo's stance appears to be reactive, however, dual in its nature. It seems that China, Japan, and the United States faced the problem of rapidly integrating, and expanding ASEAN, that, in fact, inspired "Plus Three", and "Plus Six" cooperation formulas, so as TPSEP. Consequently, Beijing submitted EAFTA proposal, Tokyo – CEPEA project, both expanding former bilateral ties through, respectively, FTA,

and EPA, with ASEAN, whereas Washington utilized its bargaining power to redefine and develop P4 grouping. Thus, three states manifesting hegemonic ambitions within Asia-Pacific region reacted to East Asian trade regionalism centred around ASEAN, in order to secure its dominating position. From its perspective, ASEAN tend to bridge Northeast Asian neighbours to seek for midpoint between EAFTA, and CEPEA, while being aware of intensifying Sino-Japanese race.

As mentioned before, both Beijing, and Tokyo were reluctant to intrusive US-led trade frameworks, however, an example of competition between TPP, and RCEP situated Tokyo in a very complicated position. On the one side, the United States attracted ASEAN-4, and Oceania into TPP trade talks, interfering East Asian trade regime, on the other, China responded through progressing RCEP talks to counterbalance American trade framework. Importantly, Japan wasn't able to react ofensively through submission of its own trade framework that exclude both China, and the United States to secure hegemonic position. It was obvious, that intra-regional situation doesn't favor Tokyo's leadership ambitions, therefore, it was critical to locate itself as best as possible in *an exclusive game* already played by Beijing, and Washington. *The golden mean* has been found in double membership, that might disdvantage, at least to some extent, both China, and the United States, locked within separate, competitive frameworks. In other words, TPP membership of the most powerful regional rival cannot be neglected by China informally leading RCEP, so as Japan's activism within single framework with China cannot be ignored by the United States under TPP.

However, hegemonic position of the United States within TPP cannot be referred to China's position in RCEP talks. When comparing two mega-regional projects, TPP has been found as more restrictive, and advanced in terms of agenda, while providing no preferential treatment to developing countries. Meanwhile, RCEP appeared to be less ambitious in terms of agenda, moreover, flexible in respect of interests of developing signatory parties. Commonalities are numerous, though. Firstly, both TPP, and RCEP will perspectively, according to author, take the shape of a set of bilateral agreements, as it was already observed in TPP talks, and "ASEAN Plus" agreements indicated, instead of single, multilateral pact - "one size fits all" in the manner of the WTO's Agreement on Trade-Related Aspects of Intellectual Property Rights (TRIPS) wouldn't attract developing states. Secondly, both frameworks are expected to be exclusive in terms of membership, although this seems to address, most of all, potential China's inclusion in TPP, and the United States' inclusion in RCEP. Thirdly, both China by RCEP table, and the United States by TPP table, are said to provide Japan's negotiators with new concessions, and exclusions, facing informal pressure resulted of Tokyo's parallel engagement in both mega-regional projects. The Japan – Australia EPA disadvantaged China in Oceania, while strengthening position of Tokyo in trilateral Northeast Asian trade talks engaging the Republic of Korea, already linked through FTA with Australia. Agricultural concessions provided by Japan under bilateral EPA would potentially soften Washington's stance regarding sensitive products under TPP, so as the progress of trilateral China – Japan

– Republic of Korea FTA, and RCEP talks under Sino-Japanese co-leadership[4] [Yunling, 2010, 225-226]. As it was manifested in case of Chiang Mai Initiative Multilateralization (CMIM) in 2009, Beijing, and Tokyo are able to overcome mutual resentments through equal contribution to regional financial facilities. In case of RCEP, China agreed on extension of agenda with WTO Plus elements that favors Tokyo's trade standards, and practices. Noteworthy, Sino-Japanese co-leadership is desirable from the perspective of ASEAN, willing to extend formula of regional trade framework in favor of Japan's optics, namely "ASEAN Plus Six", rejecting narrower China's concept of EAFTA. Japan-led coalition, potentially involving, among others, India, and Australia, so as a part of ASEAN, provide a counterbalance to China's rising hegemony, that is perceived as a threat by regional emerging markets. Meanwhile, Japan forced to operate within wider spectrum of regional actors is, to some extent, balanced, in terms of leadership ambitions, that are unwelcomed regionally though. However, according to author, in case of Japan it is hard to think in terms of socializing under equal terms to China, due to current political, and socioeconomic determinants of both regional powers. Then, RCEP, according to ASEAN, is expected to tame, and manage Japan's, but especially China's hegemonic aspirations.

Summing up, double membership makes Japan critical for success of both mega-regional projects due to rivalry among two hegemons – China, and the United States, willing to rule the membership and agenda of, respectively, RCEP, and TPP. As stated by Mulgan:

> *"(…) without Japan the TPP would be much less significant. Japan's participation amplifies both the economic and strategic importance of the TPP for the US. Japan's involvement enables the TPP to effectively compete with the China-led Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP), which involves Japan but not the US. Absent Japan, the TPP becomes a bit of a sideshow in the US strategic game against China and hardly the vehicle to facilitate the US rebalancing to Asia that America would like it to be. Hence threats to expel Japan from the TPP negotiations carry little weight"* [Mulgan, 2014].

When studying Tokyo's trade diplomatic strategy, it seemed to be oriented on, as Rix argued, "leading from behind" [Green, 2003, 225-227], instead of forceful assertive actions. Following former prime minister Takeshita:

> *"it is the role of the leader today not to pull people along, it is to get consensus of the people"* [Maswood, 2011, 22].

However, when following recent developments of both TPP, and RCEP, Japan seems to behave more as reactive state, however, assigned to the concept of consensual leadership

---

[4] Following Dent, Sino-Japanese relations may provide various outcomes, namely: contested leadership, division of labour, general co-leadership, alternative co-leadership, coalitional leadership, group consensus leadership, matrix or combination of the above simultaneously, null leadership [for further studies see: Dent, 2008, 23-24]

in favor of socializing, and balancing China within East Asian regionalism, while playing TPP game at the expense of China's influences within Asia-Pacific regionalism. According to author, notable risk faced by Tokyo's trade diplomats contemporarily is the potential US-Sino consensus that may result in consolidation of TPP, and RCEP – then, Japan's advantages resulting of double membership fade away, and the new rules of the game will be set by "G2"[5]. However, as long as two hegemonic states compete, the third one, namely Japan, has still much to win in mega-regional *exclusive game*.

References

Acharya A., 1997, "Ideas, Identity, and Institution-building: From the 'ASEAN Way' to the 'Asia-Pacific Way'?", *The Pacific Review,* no. 10(3)

Acharya A., 1999, "Imagined Proximities: The Making and Unmaking of Southeast Asia as a Region", *Southeast Asian Journal of Social Science*, no. 27(1)

Anderson B., 1991, *Imagined Communities: Reflection of the Origin, and Spread of Nationalism*, Revised Edition, Verso

Aziz I., 2013, "Trade Pacts in a "Second Best" World," *Strategic Review*, vol. 3, no. 4

Bergsten F., 1996, *Competitive Liberalization and Global Free Trade: A Vision for the Early 21st Century*, Working Paper 96-15, Peterson Institute of International Economics

Bhagwati J., 1993, "Regionalism and Multilateralism: An Overview", [in:] Melo J. D., and Panagariya A. (eds.), *New Dimensions in Regional Integration*, Cambridge University Press, Cambridge

Bobowski S., 2011, *Baldwin' "domino theory" of regionalism – its sources and implications for East Asian states,* [in:] *Faces of Competitiveness in Asia Pacific*, Skulska B., Jankowiak A. H. (eds.), Research Papers of Wroclaw University of Economics, No. 191, Publishing House of Wroclaw University of Economics, Wroclaw

Bobowski S., 2014, *Multilateral context of the project of trilateral China – Japan – Republic Of Korea Free Trade Agreement*, [in:] *International Business and Global Economy*, Research Papers of University of Gdansk, No. 33, Publishing House of University of Gdansk, Gdansk

Buckley Ch., Jones T. Y., 2012, "East Asian powers set to push trade pact talks", *Reuters*, 12 May; http://www.reuters.com/article/2012/05/13/us-china-summit-idUSBRE84C00V20120513

BusinessKorea, 2013, "Korea-China FTA. Latest Round of Talks Includes Liberalization of Some Farm Products, Noted Controversies", *BusinessKorea*, 25 November; http://www.businesskorea.co.kr/article/2267/korea-china-fta-latest-round-talks-includes-liberalization-some-farm-products-noted

Cheong, I. and Tongzon J., 2013, "Comparing the Economic Impact of the Trans-

[5] G2 acronym indicates grouping that involves China, and the United States.

Pacific Partnership and the Regional Comprehensive Economic Partnership", *Asian Economic Papers*, vol. 12, no. 2

Dent Ch. M., 2008, *What region to lead? Developments in East Asian regionalism and questions of regional leadership*, [in:] Dent Ch. M. (ed.), *China, Japan, and Regional Leadership in East Asia*, Edward Elgar Publishing, Inc., Massachusetts

Dobell G., 2011, "A trade deal without China", *The Interpreter*, 21 December; http://www.lowyinterpreter.org/post/2011/12/21/A-trade-deal-without-China.aspx

Drysdale P. and Ishigaki K., 2001, *East Asian trade and financial integration: New issues*, Asia-Pacific Press, Canberra

Drysdale P., 2014, "China and the future of Asia Pacific trade", *East Asia Forum*, 20 January; http://www.eastasiaforum.org/2014/01/20/china-and-the-future-of-asia-pacific-trade/

Fergusson I. F., Vaughn B., 2010, *The Trans-Pacific Partnership Agreement, CRS Report for Congress*, 25 June; http://fpc.state.gov/documents/organization/145583.pdf

Gamble A., and Payne A., 1996, "Introduction: The Political Economy of Regionalism and World Order", [in:] Gamble A., and Payne A. (eds.) *Regionalism and World Order*, Macmillan, Basingstoke

Global Post, 2013, *China, Japan, S. Korea conclude first round trade talks*, Agence France – Presse, 28 March; http://www.globalpost.com/dispatch/news/afp/130328/china-japan-s-korea-conclude-first-round-trade-talks

Green M. J., 2003, *Japan's Reluctant Realism. Foreign Policy Challenges in an Era of Uncertain Power*, Palgrave Macmillian, New York

Haggard S., 2011, "The Organizational Architecture of the Asia–Pacific: Insights from the New Institutionalism", *ADB Working Paper Series on Regional Economic Integration*, No. 71, January

Hamanaka S., 2008, *Comparing summitry, financial, and trade regionalisms in East Asia: from the Japanese perspective*, [in:] Dent Ch. M. (ed.), *China, Japan, and Regional Leadership in East Asia*, Edward Elgar Publishing, Inc., Massachusetts

Hamanaka S., 2010, *Asian Regionalism and Japan*, Routledge, London and New York

Hamanaka S., 2014, "TPP versus RCEP: Control of Membership and Agenda Setting", *Journal of East Asian Economic Integration*, Vol. 18, No. 2

Hurrell, A., 1995, *Regionalism in Theoretical Perspective* [in:] Fawcett L. and A. Hurrell (eds.) *Regionalism in World Politics: Regional Organization and International Order*, Oxford University Press, Oxford

Japan Daily Press, 2014, "Japan to ease regulations on US beef imports", 15 January; http://japandailypress.com/japan-to-ease-regulations-on-us-beef-imports-2221968/

Kassim, Y. R., 2012, "East Asian Regionalism: End of ASEAN Centrality?," *Eurasia Review*; http://hdl.handle.net/10220/8674

Katzenstein P., 2000, "Regionalism and Asia", *New Political Economy*, no. 5(3)

Kelsey, J., 2011, "TPP and US Anti-China Strategy," *"Scoop" World Independent News*; http://www.scoop.co.nz/stories/WO1111/S00589/tpp-andus-anti-China-strategy-conclusions.htm

Keohane. R., 1984, *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press, Princeton

Kindleberger Ch., 1973, *The World in Depression, 1929-1939*, Allen Lane, London

Kindleberger Ch., 1986, "Hierarchy Versus Inertial Cooperation", *International Organization*, no. 40(4)

Kosich D., 2012, "Historic Canada-China trade agreements benefit both mining sectors", *Mineweb*, 9 February; http://www.mineweb.com/mineweb/view/mineweb/en/page72068?oid=145108&sn=Detail

Kratochwil F., and Ruggie J. G., 1986, "International Organization: A State of the Art on Art of the State", *International Organization*, no. 40(4)

Lewis, M. K., 2011, "The Trans-Pacific Partnership: New Paradigm or Wolf in Sheep's Clothing?," *Boston College International and Comparative Law Review*, vol. 34, issue 1

Mack A., and Ravenhill J., 1995, *Pacific Cooperation: Building Economic and Security Regimes in the Asia-Pacific Region*, Allen & Unwin, St Leonards

Maquila Portal, 2014, "Mexico pressed to sign ACTA", *Maquila Portal*, 16 January; http://www.maquilaportal.com/index.php/blog/show/Mexico-pressed-to-sign-ACTA.html

Maswood S. J., 2001, *Japanese foreign policy and regionalism*, [in:] Maswood S. J. (ed.), *Japan and East Asian Regionalism*, Routledge, London and New York

Morgenthau H., 1978, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Third Edition, Alfred A. Knopf, New York

Mulgan A. G., 2012, "Why Japan is lagging on the TPP", *East Asia Forum*, 30 May; http://www.eastasiaforum.org/2012/05/30/why-japan-is-lagging-on-the-tpp/

Mulgan A. G., 2013, "Japan's TPP 'shock'", *East Asia Forum*, 8 April; http://www.eastasiaforum.org/2013/04/08/japans-tpp-shock/

Mulgan A. G., 2013a, "Will Prime Minister Abe's TPP strategy be successful?", *East Asia Forum*, 1 March; http://www.eastasiaforum.org/2013/03/01/will-prime-minister-abes-tpp-strategy-be-successful/

Mulgan A. G., 2013b, "What can we expect from Japan's Prime Minister Abe on the TPP?", *East Asia Forum*, 1 January; http://www.eastasiaforum.org/2013/01/15/what-can-we-expect-from-japans-prime-minister-abe-on-the-tpp/

Mulgan A. G., 2014, "Why the US struggles against Japan in TPP negotiations", *East Asia Forum*, 27 August; http://www.eastasiaforum.org/2014/08/27/why-the-us-struggles-against-japan-in-tpp-negotiations/

Nan H., 2010, "Conference strengthens cooperation in commerce", *China Daily*, 8 September; http://www.chinadaily.com.cn/regional/2010-09/18/content_11321859.htm

Nye J. S., 1968, *International Regionalism*, Little Brown and Co., Boston

Okamoto J. (ed.), 2003, *Whither Free Trade Arrangements? Proliferation, Evaluation and Multilateralization*, Institute of Developing Economies (IDE) Development Perspective Series

Pakpahan B., 2012, "Will RCEP compete with the TPP?", *East Asia Forum*, 28 November; http://www.eastasiaforum.org/2012/11/28/will-rcep-compete-with-the-tpp/

Petri, P. A., 2013, "The New Landscape of Trade Policy and Korea's Choices," *Journal of East Asian Economic Integration*, vol. 17, no. 4

Rapkin, D., 2001, "The United States, Japan, and the Power to Block: The APEC and AMF Cases," *The Pacific Review*, vol. 14, no. 3

Ravenhill J., 2001, *APEC and the Construction of Pacific Rim Regionalism*, Cambridge University Press, Cambridge

Ravenhill J., 2003, "The New Bilateralism in the Asia-Pacific", *Third World Quarterly* 24

Russett B., 1985, "The Mysterious Case of Vanishing Hegemony; or, Is Mark Twain Really Dead?", *International Organizations*, no. 39(2)

Salazar J., 2005, "A Chile-New Zealand CEP? The Concept of Coopetition and The Politics of Trade Liberalization," Lecture at Political Science and International Relations Programme of Victoria University of Wellington, Wellington, 15 March

Sally R., 2014, "Is bigger better for ASEAN in a mega-regional world?", *East Asia Forum*, 10 September; http://www.eastasiaforum.org/2014/09/10/is-bigger-better-for-asean-in-a-mega-regional-world/

Schweller R. I., 1999, "Rise of Great Powers: History and Theory", [in:] Johnson A. I., and Ross R. (eds.), *Engaging China: the Management of an Emerging Power*, Routledge, London

Snidal D., 1985, "Limits of Hegemonic Stability Theory", *International Organization*, no. 39(4)

Stephens H., 2013, "Canada and the TPP: Short Term Tactics and Long Term Strategy," Paper presented at CNCPEC Seminar: New Development & Future Direction of Asia Pacific Regional Economic Integration, Beijing, 14-15 November

Terada T., 2009, "The rise of China: the impetus behind Japanese regionalism", *East Asia Forum*, 26 July; http://www.eastasiaforum.org/2009/07/26/the-rise-of-china-the-impetus-behind-japanese-regionalism/

Terada T., 2014, "Australia, Japan take a 'domino approach' to regional integration", *East Asia Forum*, 30 July; http://www.eastasiaforum.org/2014/07/30/australia-japan-take-a-domino-approach-to-regional-integration/

Togo K., 2014, "Obama visit fails to strengthen US–Japan trust", *East Asia Forum*, 7 May; http://www.eastasiaforum.org/2014/05/07/obama-visit-fails-to-strengthen-us-japan-trust/

Tso Ch. - D., 2012, "Trans-Pacific Partnership and China-Japan-Korea FTA: Implications for Taiwan", *National Taiwan University*, 12 December; http://www.stimson.org/images/uploads/Trans_Pacific_Partnership_and_China_Japan_Korea_FTA.pdf

Yunling Z., 2010, *China and Asian Regionalism*, World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd., Singapore

Värynen R., 2003, "Regionalism: Old and New", *International Studies Review*, no. 5(1)

Woods L., 1993, *Asia-Pacific Diplomacy: Nongovernmental Organizations and International Relations*, UBC Press, Vancouver

Direct Investment of Chinese Enterprises on the European Market by Industries

Łopacińska Karolina*

Abstract

The progressing expansion of the Chinese economy is strengthening China's position on the international market. China dominates the world in terms of export volume, and the number of direct investments by Chinese companies, addressed to developed European countries, has also increased significantly. The object of this paper is the development of direct investments in European countries, including in particular developed European countries, with a focus on countries such as France, the United Kingdom and Germany. These are the countries where Chinese investors expect to generate the highest revenue.

This paper presents the structure of Chinese direct investments in Europe by industries, with a focus on selected examples of agreements of this type concluded between investors from China and European countries. Based on the analysis of such agreements, an attempt is made to determine the impact of the finalised mergers on the position of given enterprises on the European market.
Keywords: foreign direct investment, mergers, acquisitions, Chinese expansion

I. Introduction

For most countries, foreign direct investment is a chance for importing new technologies as well as organisational and managerial skills required for increasing the productivity level, acquiring the proper know-how, and obtaining better access to global markets. The progressing expansion of the Chinese economy is strengthening China's position on the international market. China dominates the world in terms of export volume[1], and the number of direct investments by Chinese companies located in developed European countries has also increased significantly. The object of this paper is the development of Chinese direct investments in European countries, including in particular developed European countries, with a focus on countries such as France, the United Kingdom and Germany. These are the countries where Chinese investors expect to generate the highest revenue.

The aim of this paper is to presents the distribution of Chinese direct investments in Europe by industries, with a focus on selected examples of agreements of this type concluded between investors from China and enterprises from European countries.

* PhD student of Wrocław University of Economics

[1] K.A. Nawrot, *Kierunki inwestycji Chin. Jakich inwestycji chińskich może oczekiwać Polska*, Poznań 2012

On this basis, an attempt will be made to determine the impact of the finalised mergers on the position of enterprises on the European market. The basis for the analyses and discussions carried out in this paper is reports by Rhodium Group, Centre for European Reform, and financial statements of the companies subject to the analysis, as well as statistical data obtained i.a. from websites of the Institute of Mergers, Acquisitions and Alliances, European Chamber of Commerce in China, Reuters, and The Heritage Foundation.

II. The structure of Chinese investments on the European market by industries

Foreign direct investment has constituted a pillar of the European economic and political integration for ca. 50 years. It is to a large extent based on that and general trade that relationships have been established and developed between the European Union and China. Implementation of the reforms aimed at opening the Chinese economy to the world, and introduction of the "Go Global" strategy in 1999, as well as China's accession to the World Trade Organisation (WTO) in 2001 also exerted a significant impact on shaping mutual relationships. The relationships between the EU and China are developing in various dimensions, i.e. in economic, political and cultural dimensions. The increasing interdependence of those entities, which are striving for the highest possible economic growth and development as well as other profits involved in using mutual potential, has permitted them to establish the second largest economic partnership in the world[2].

The annual proceeds to China's budget from direct investments in the period 2006-2009 tripled and the growth rate was maintained until 2011. As an effect, the level of export of Chinese products and technologies was USD 10bn per annum. At the same time, the number of the transactions the value of which was more than USD 1m doubled – from ca. 50 to almost 100 transactions, both in 2010 and 2011.

The scale of direct investments by Chinese enterprises in the period 2005 – June 2014 is presented in Fig. 1[3]. What arises from the presented data is that, in the past decade, China invested most, that is nearly USD 400bn, in the fuel and power industry, followed by over USD 130bn allocated to transport, more than USD 120bn invested in the metallurgical industry, USD 85.5bn in real estate, and almost USD 30bn-40bn in sectors such as finance, agriculture and infrastructure. Hence, China's aspirations for quick implementation of the programme for the country's modernisation and change of

---

[2] K.A. Nawrot, op. cit.; PWC Report, *China deals. A fresh perspective*, 2012, www.pwc.co.uk/china/./ (10/01/2015);
C. Grant, K. Barysch, *Can Europe and China shape a new world order?*, Centre for European Reform, London 2008

[3] T. Hanemann, D.H. Rosen, *China invests in Europe. Patterns, Impacts and Policy Implications*, Rhodium Group, 2012.

the major investment directions after the crisis of 2008 from emerging markets of Africa and South America to the strongest world economies is noticeable.[4] The slowdown of the Chinese economy, which was observed in 2012, enforced the necessary reforms and pursuit of a skilful urbanisation policy aimed at developing and reinforcing the service sector.[5]

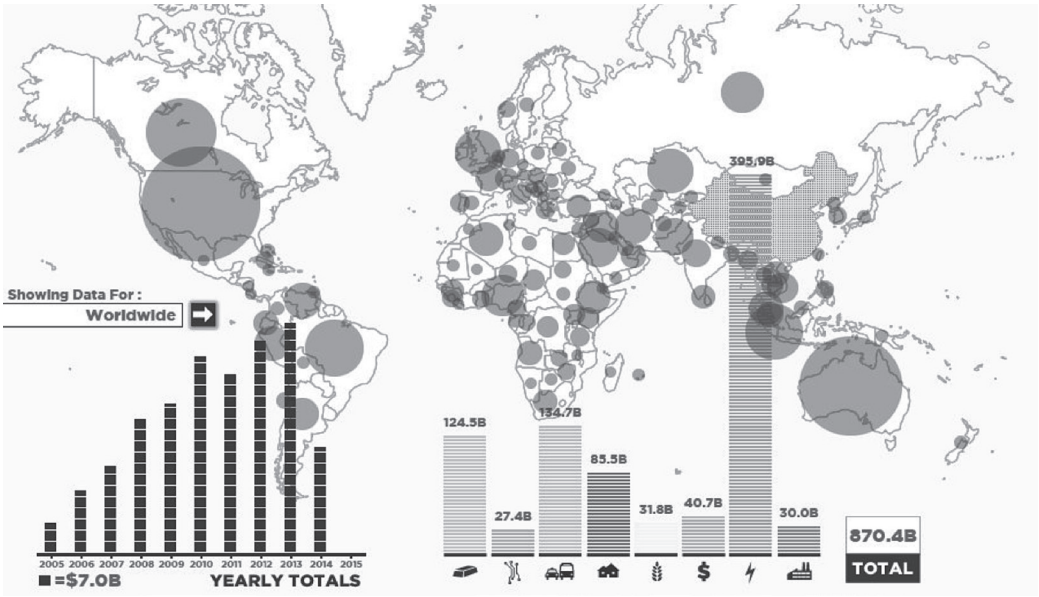


Fig. 1. Global reach of direct investments by Chinese enterprises by industries

Source: The Heritage Foundation, http://www.heritage.org// (12/01/2015)

As follows from the data included in Tab.1, the majority of the investments made by Chinese enterprises in the period 2000-2011 were directed to UE-15 countries, and in particular to the three largest European economies, i.e. the French, British and German ones. In that period in France, Chinese entrepreneurs concluded 70 agreements at the total value of USD 5.7bn, including as much as USD 3.2bn invested in Gas de France in 2011. In the UK, 95 agreements at the value of USD 3.7bn were concluded, mainly in sectors such as automotive, banking and real estate. Germany attracted more than one-third of all agreements concluded in Europe, the total value of which was USD 2.5bn. Hungary and Greece are also among the top countries in the ranking list of Chinese investments.

---

[4] B. Góralczyk, *Chińczycy zwiększają zagraniczne inwestycje*, 2013, http://www.obserwatorfinansowy.pl/ (02/01/2015)

[5] J. Winiewski, Sztuka zwalniania, Polityka, issue 31 (2918), 2013., pp. 41-43

Table 1. Investments by Chinese enterprises in EU-27 countries in the period 2000-2011

Country	Investment value (in USD)	Number of greenfield projects	Number of acquisitions	Total number of agreements
France	5,722	46	24	70
The UK	3,683	69	26	95
Germany	2,543	113	33	146
Sweden	2,251	14	6	20
Hungary	2,065	14	4	18
The Netherlands	1,164	32	15	47
Belgium	847	12	3	15
Greece	714	5	0	5
Italy	554	31	16	47
Austria	391	6	5	11
Romania	299	13	1	14
Poland	190	15	1	16
Spain	187	22	1	23
The Czech Republic	76	10	1	11
Finland	48	1	4	5
Portugal	47	5	0	5
Bulgaria	47	6	1	7
Luxembourg	46	1	1	2
Ireland	44	6	1	7
Denmark	30	6	1	7
Latvia	3,8	1	0	1
Cyprus	3	0	1	1
Estonia	0	0	0	0
Lithuania	0	0	0	0
Malta	0	0	0	0
Slovakia	0	0	0	0
Slovenia	0	0	0	0
TOTAL	**20,957**	**428**	**145**	**573**

Source: T. Hanemann, D.H. Rosen, *China Invests in Europe. Patterns, Impacts and Policy Implications,* Rhodium Group, 2012

In Hungary, a Chinese company invested in the chemical sector by purchasing shares of BorsodChem, a Hungarian isocyanate producer, worth USD 1.9bn. Greece, in turn, beneficially leased its largest port in Piraeus to the Chinese COSCO for a long term, which contributed to quick development of the port as a result of numerous COSCO's investments worth millions of euro. Along with the development of its activity in Piraeus, the Chinese COSCO decided to make additional investments in 2013, the total value of which will be EUR 500m, and Piraeus will be capable of managing 6.2m TEU (container volume) annually in the coming years, i.e. three times more than in 2012[6].

[6] www.news.xinhuanet.com/ (26/12/2014)

Furthermore, high positions in the ranking list in terms of the number and value of the located Chinese investments were held also by countries such as Sweden, owing to the acquisition of Volvo Cars by Geely Automobile, a Chinese automotive group, which was worth USD 1.5bn, and further investments arising therefrom, and Romania – as a result of several greenfield production projects, including construction of a tractor production plant by Shantuo Agricultural Machinery Equipment, a Chinese company.

Countries with a considerably lower number of Chinese investments and, what follows, lower positions in the ranking list, are i.a. Spain, Luxembourg, Denmark and Ireland. Spain and Ireland used to be the main directions for foreign investment, yet unfortunately, their economies withered exactly at the time of the Chinese investment boom, which was why the countries came down in Chinese investors' estimation, like other smaller European countries facing fiscal and structural problems, with the exception of Greece. However, when looking into the future, privatisation of the state assets in countries which are fiscally insecure could ensure attractive opportunities to Chinese investors. This is because assets with a stable long-term return on investment, such as elements of infrastructure, are an object of interest to Chinese investors oriented towards long-term activities, which can be exemplified by the fact of selling shares of Portuguese public utility enterprises worth USD 2bn to Chinese companies in early 2012[7].

When analysing the data of the past decade presented in Fig. 2, it can be noticed that the dominant country in terms of value of investments by Chinese enterprises located there from 2005 to June 2014 is the UK, where as much as USD 23.6bn were invested at that time, mainly in sectors such as: real estate, power industry and finance. France, with more than twice lower investment value, is ranked second, and Italy (USD 6.9bn) climbed to third position. They left Germany behind (USD 5.9bn), where the value of Chinese undertakings is very close to the value invested in Greece (USD 5.5bn) and Portugal (USD 5.4bn) in that period.

---

[7] *PWC Report, China deals. A fresh perspective 2012 , www.pwc.co.uk/china, (15/12/2014)*
T. Hanemann, D. H. Rosen, China Invests in Europe. Patterns, Impacts and Policy Implications, Rhodium Group, June 2012.

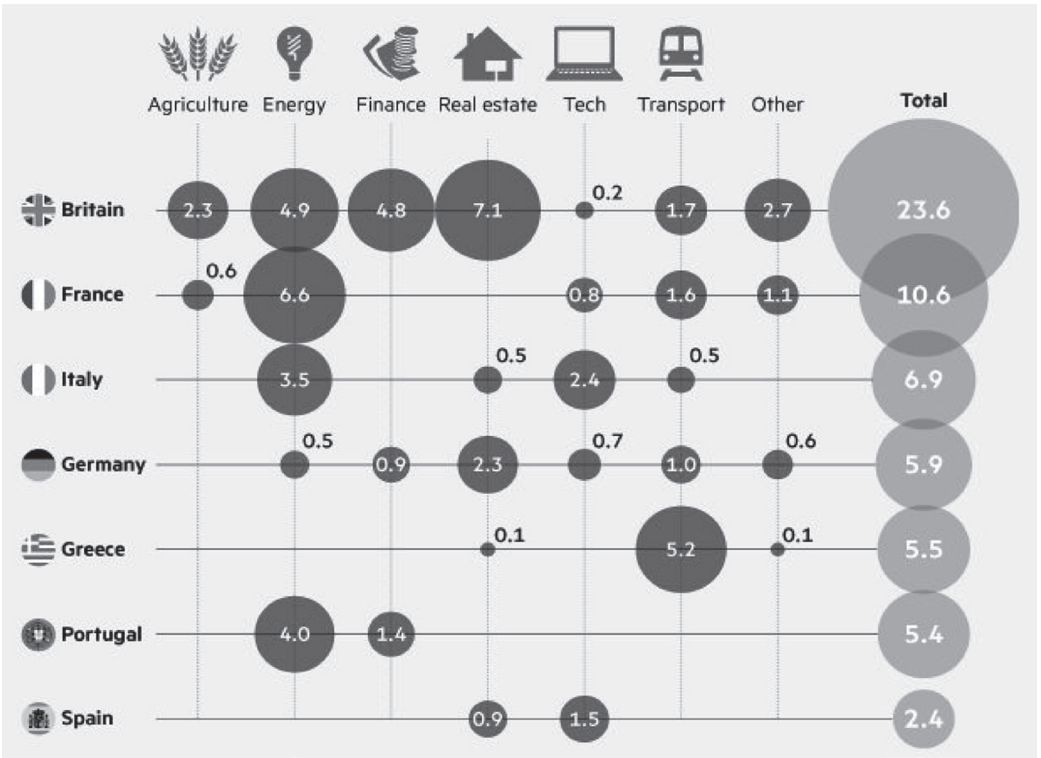


Fig. 2. Value of direct investments by Chinese enterprises by industries in selected European countries in the period 2005 - June 2014 (billion USD)

Source: http://www.ft.com/cms/s/2/53b7a268-44a6-11e4-ab0c-00144feabdc0.html#axzz3S71dsSXc based on data of The Heritage Foundation, http://www.heritage.org// (12/02/2014)

III. Premises for making foreign investments by Chinese enterprises on the European market

Enterprises have many motives for making investment on foreign markets. The major premises for Chinese enterprises' expansion in Europe include striving for facilitating Chinese export by overcoming trade barriers encountered by companies importing goods to the EU and most of all wishing to obtain strategic interest in companies from high and medium technology sectors. Apart from that, China's aspirations to become the largest technologically advanced economy in the world by 2020 are of particular importance. Distribution of investments made by Chinese companies in individual countries, with a special focus on greenfield projects, is presented in Tab. 1.

Yet the primary motive for expansion of Chinese enterprises is striving for competitive advantage since it is the key to increasing performance and generating higher profit.

It is also a confirmation of having a consistent concept and an effective strategy in the long term. Therefore, most enterprises endeavour to develop permanent competitive advantage on the market[8]. This is because competitive advantage permits achievement of higher value to both the consumer and the company.

Until recently, competitiveness of Chinese enterprises was based on producing labour-intensive goods of a low added value. Now, however, the competitiveness is not restricted to the traditionally used methods and areas. China successfully absorbs new foreign technologies, becoming a fierce competitor to companies from developed countries. Moreover, the Chinese government is aiming at using its innovation capacity, which is reflected in pursuing the goals set forth in the 12th Five-Year Plan for 2011-2015. The plan is oriented towards promoting domestic innovations and taking bolder actions for reforming and modernising the economy.[9]

The companies being global leaders assume specific strategies, which are seemingly different from each other in all respects, yet their nature and trajectory of actions are similar. Enterprises achieve competitive advantage through implementing innovations in the broadest meaning of this word. They include there both new technologies and new methods of action, as an effect creating new bases for competition. Hence, innovation might manifest itself in a new product design, in adoption of a new production process, marketing approach, or training method. It often develops the existing ideas that have not been implemented thus far. It always involves investment in skills and knowledge as well as reputation of the company and the funds it has at its disposal. Some innovations contribute to creating competitive advantage as they allow perception of new capabilities of a given market or interest in the market segment that is ignored by others. Yet when the company achieves competitive advantage through innovation, it can be maintained only through continuous improvement.

More and more Chinese enterprises face increasing challenges arising from internationalisation and globalisation. The dynamics of the continuously changing global market can be understood only through skilful market research and pursuit of its development trends. Adaptation of the common globally used models related to running business activities and quality of the offered products facilitates increase in the share of Chinese companies in international markets. This takes place due to growth in the sales volume and, in consequence, the earned profit and general improvement of Chinese companies' reputation. The skills of forecasting market trends are also important. Only such companies that are able to forecast behaviours of market actors and use the occurring chances can be competitive. Concern about efficient use of information is necessary for generating a higher value by Chinese companies, as a consequence increasing their competitiveness level on the market. It needs to be emphasised here

---

[8] C. Ehmke , *Strategies for Competitive Advantage*, M.S. Extension Educator, Department of Agricultural and Applied Economics, University of Wyoming , Western Center for Risk Management Education, http://cals.arizona.edu/arec/wemc/nichemarkets/05competitiveadvantage.pdf

[9] http://csis.org/ (05/12/2014)

that competing exclusively through low prices is impossible for a long time and therefore it cannot be the basis for creating permanent competitive advantage on the market. Both financial support and market share depend strongly on confidence earned among customers and efficient implementation of the corporate strategy in compliance with the globally adopted standards. Hence, when striving for a strong competitive position on the global market, Chinese companies need to put more emphasis on intangible assets, such as being concerned about reputation, building brand trust, and increasing reliability. Ultimately, success depends on implementing an effective corporate strategy based on creating innovations and efficient communication. This requires investing in human capital as well as building and using knowledge resources. Actions based on such values will permit Chinese companies to reinforce their competitive strength, thus contributing to building their competitive advantage on the market in the long run. If Chinese enterprises closed to changes, they would risk losing customer confidence in their financial and operational reliability.

IV. Benefits and risks for enterprises arising from mergers and acquisitions on the international market

The form of Chinese companies' expansion that is gaining in significance is international mergers and acquisitions. Based on an analysis of various mergers, major benefits arising from merger or acquisition agreements concluded by enterprises can be identified:

- Increased economic growth of the company and expanding its scale of activities.
- Access to the capital, in particular to new funds enabling development to companies. Purchasing high-quality production or distribution equipment is frequently more cost-efficient than developing it. For instance, many companies that make investments with inconsiderable profitability have high unused potential, which can be bought for a small surplus with respect to the net asset value.
- Cost reduction through the common budget and increase in the purchasing power of the established corporation.
- Access to a broader customer base and increase in market share.
- Diversification of the product and service offer, which contributes to expanding long-term prospects of the company. The ultimate company might offer new products or services through its own distribution channels.
- Achievement of cost advantage over competitors since purchasing intellectual property, products or services is often cheaper than their development by the company on its own.
- Acquisition of qualified personnel and additional skills in and knowledge of the industry and sector as well as other business data. Such benefits are provided by a company which has good process management systems, which enables the

purchaser improvement of its company's operating system. The best situation would be merger of enterprises with complementary systems, enabling them mutual complementation and, in effect, maximisation of efficiency of the actions taken[10].

In effect, companies commencing a merger might achieve various market, technological, relationship and image advantages. They are presented in Tab. 2.

However, evaluation of mergers and acquisitions requires also looking from the angle of risks and costs involved in such forms of integration.

The main reason is that companies do not devote enough time to the required assessment of the impact a given merger will exert on the employees of the merging companies, and it is problems with personnel management that play an enormous role in forming conditions for merger success or failure. In most cases, the employees of the merging companies are not properly informed about the premises and course of the merger process until the whole transaction has been completed. No or insufficient information arouse anxieties about the changes and their effects for the employees. In consequence, their work efficiency and performance drop. A source of special risks can be merger of enterprises with completely different cultural backgrounds, which translates in diversities in corporate culture. Cultural differences are rarely subjected to a proper analysis; in fact, they are often completely ignored. This is because companies wrongly assume that cultural differences are an element that can be easily overcome without paying much attention to their significance for the success of the transaction and directions of the company's development in the long run.

Success of an agreement with such a high degree of complexity like merger or acquisitions is possible only when the companies show each other respect in terms of their respective cultures and professed values, at the same time focusing on using differences between each other for their joint endeavours to achieve what they would not be able to achieve separately. Unfortunately, it is frequently the case that the buyer fails to appreciate the synergy effect of cultures and attempts to dominate the acquired company on concluding the agreement by the parties thereto, which destroys its creativity and visionary potential.

Yet even in the face of a conflict of cultures, success is still achievable on condition that the company responds to the arisen problems quickly and efficiently enough and prepares a relevant concept for solving them. An indispensable element is engagement of specialists, who will identify the sources of the problems and point to appropriate directions for actions. It is extremely important that the acquired companies have the opportunity to present their expectations about organisational, developmental and employment issues. These issues should be touched upon as early as at the stage of drafting the agreement.[11]

---

[10] Work based on www.mbda.gov / (28/12/2014)

[11] S Fister Gale., *Why Mergers Fail?*, 2003, www.workforce.com / (14/12/2014)

Table 2. Benefits and risks for enterprises arising from mergers and acquisitions

BENEFITS	RISKS
Economies of scale – gained when the larger company, which achieves higher performance indicators, can reduce total unit costs, which enables more beneficial prices offered to customers,	**High costs for the company's shareholders** – related to legal expenses, potential devaluation of equity, intangible costs, alternative costs, and purchase of a new company itself, which is not always profitable in the short run,
International competition – merger may help companies handle the risk of competition and prepare them for competing on the international scale,	**Inconveniences for consumers** – higher prices resulting from reduction of competition with simultaneous decrease in the quality and quantity of goods and services offered (reduction of the achieved consumer surplus), inefficient allocation, decrease in the scope of innovations offered, suppression of competing businesses (a smaller range of products offered=restricted choice), drop in the equity value and investment,
Strength on the market – one of the main goals for involving in mergers is to gain more market share, which in turn increases the company's dominance and enables application of higher prices (therefore mergers are frequently regulated by the government),	**Probability of lower business efficiency and discontinuation of production at the lowest point on the total average cost curve,**
Stimulation of investments in research and development – due to generation of higher profit, which permits production of higher quality goods for consumers,	**Risk of collusion with another entity,**
Achievement of higher performance,	**Increased barriers to entry, which reduces competition,**
Protection of the industry against collapse – mergers can be profitable in an industry being at risk of collapse, where companies struggle to survive on the market,	**Payment of lower prices to suppliers by the new strengthened company,**
Diversification – through merger of two companies from different industries, they can exchange knowledge useful in their industry,	**Risk of losing a job due to structural changes,**
Higher prestige for companies merging with stronger partners,	**Effects of overexpansion** – drop in efficiency, management difficulties, lack of appropriate economies of scale.
Risk reduction – through sharing it with the partner,	
Capability to increase the company's impact on other market entities and organisations.	

Source: Own work based on G. Kyriazopoulos, D. Petropoulos, What are the advantages and disadvantages that lead banks into mergers and acquisitions? Is Altman's score model for bankruptcy motivate banks for mergers and acquisitions? Evidence from the Greek banking system, International Conference On Applied Economics – ICOAE 2010, Technological Educational Institute of Western Macedonia

Therefore, success of the merger and hence maximisation of its potential benefits depend on adopting a careful approach based on a precise analysis of the company and market situation[12].

Apparently, concluding merger and acquisition agreements could bring companies numerous benefits, at the same time involving a multitude of risks.

There are various merger variants related to the companies' expectations from it. One of the variants is dominating the acquired company, i.e. the weaker one, by the acquiring company, i.e. the stronger one, which imposes its management style as well as its goals

[12] www.money.cnn.com/magazines/fortune/global500 / (18/12/2014)
www.forbes.com/global2000/list / (18/12/2014)

and assumptions. Another variant is cooperation in striving for mutual synergistic benefits. To make it possible, a similarity between the companies in terms of their potential and aspirations is required.

Effects of merger can be also extremely diversified and perceived differently by each of the companies being parties to this type of agreement. They may be related to emergence of new investments, greater operational efficiency, broader scale of activities, greater innovativeness, or introduction of a new more effective business model.

Therefore, it needs to be emphasised that the lack of a proper market analysis and underestimation of factors related to organisational culture of the companies commencing merger, as well as mistakes in human resource management are the major factors in a company's failure.

V. Types of merger as one of the forms of direct investment by enterprises on the European market by industries

The outbreak of the global crisis had an extremely adverse impact on many countries in the world. However, in the case of China, it contributed to significant growth in the number of foreign direct investments. Their value of USD 55.9bn doubled in 2008 compared to USD 26.5bn achieved in 2007, while USD 68.8bn in 2010 ensured China fifth position in terms of the scale of foreign direct investments made across the globe.

The highest number of Chinese investments diversified in terms of industries have been located on Asian and European markets. This is because investors are interested in investing in many fields, and in particular in the ones comprised by the 12th Five-Year Economic Plan as priorities. They include the following sectors: energy technologies, biotechnology, next generation information technologies, highly processed goods industry, as well as new materials, alternative energy sources, and biofuel-powered vehicles.

In 2008, Chinese investors became more interested in the European market in terms of locating foreign direct investment there and participating in public procurements as well as purchasing bonds. The value of foreign direct investments amounted to USD 876m and increased to USD 3,352bn in 2009, and then to USD 6,670bn in 2010. The highest number of Chinese direct investments were located in European countries such as Luxembourg (USD 5.8bn), Germany (USD 1.5bn), Sweden (USD 1.5bn), the UK (USD 1.4bn), the Netherlands (USD 487m) and Hungary (USD 466m). Poland was ranked among the top Central European countries with the value of Chinese investment equal to USD 140m.

The Eurozone crisis, which resulted in a significant reduction of the prices of European companies and a change in the investment policy of Chinese companies, caused another considerable growth in interest in the European market in 2011[13].

---

[13] www.gochina.gov.pl/ (20/12/2014); www.imaa-institute.org/ (20/12/2014); www.euccc.com.cn/ (20/12/2014)

The list of the major direct investments made at that time by Chinese companies in Europe in individual sectors is presented in Tab. 3.

As is demonstrated in Tab. 3, Chinese investments are located in many different industry and service branches. In each of the four most important sectors in terms of value, at least one acquisition on a large scale was made. In the public utility sector, cooperation between CIC and Gas de France stands out, in the chemical industry – acquisition of BorsodChem by Wanhua, in the transport sector – acquisition of Volvo by Geely, while in the power sector – purchase of Emerald by Sinochem.

Data analysis proves a relatively high diversification of Chinese investments with respect to industries: from machine building, to telecommunication, to consumer goods. Yet given the number of the transactions concluded, it is the machine building industry and renewable energy sector that triggered highest interest in Chinese investors. However, due to high capital intensity of those sectors, the value of the investments made by Chinese enterprises is not highest in those sectors.

Table 3. Examples of the major investments by Chinese companies in the form of mergers by industries

	INVESTMENTS
POWER SECTOR	• acquisition of Addax Petroleum, with its seat in **Switzerland** by Sinopec (USD 7.2bn – the largest acquisition by a Chinese enterprise)
	• acquisition of Emerald Energy (**the UK**) by Sinochem
	• acquisition of Awilco Offshore (**Norway**) by CNOOC
	• purchase of shares in INEOS (**France**) by CNPC
	• purchase of 21.35% of shares in Energias de Portugal (**Portugal**) by Three Gorges Corporation
	• purchase of 1.6% of shares in Total (**France**) and 1% of shares in BP (**the UK**) by SAFE
TRANSPORT SECTOR	• acquisition of shares in Volvo Car (**Sweden**) from Ford by the Chinese Zhejiang Geely Holding Group
	• acquisition of the Bulgarian Litex Motors by Great Wall Motors
	• acquisition of Burg Industries (**the Netherlands**) by China International Marine Containers
	• purchase of shares in Spyker Cars (**the Netherlands**) by Zhejiang Youngman Lotus and Pang Da Auto
	• agreement on beneficial lease of the port in **Piraeus** with COSCO Holdings (investments in the port in **Naples** are intended)
INDUSTRIAL SECTOR	• purchase of shares in BorsodChem (**Hungary**), chemical companies
	• acquisition of Rhodia (**France**)
REAL ESTATE SECTOR	• **investments in the construction industry** by Sany Heavy Industries in **Germany**, Sinoma in **Ukraine**, Zoomlion in **Italy**
	• investments in the tourism industry by HNA in **Spain**, BCEGI in **Greece**
FINANCIAL SECTOR	• purchase of shares in Cheuvreux and CLSA (**France**) by CITIC
	• purchase of shares in Apax Finance (**the UK**) by CIC
	• purchase of shares in Fortis (**Belgium**) by Ping An
	• purchase of shares in Barclays (**the UK**) by China Development Bank
MODERN TECHNOLOGY SECTOR	• purchase of shares in the **Spanish** Telefonica by China Unicom
	• acquisition of the **German** Medion by Lenovo

Source: www.gochina.gov.pl/ (20/12/2014).

VI. Impact of merger on the position of enterprises on the European market

In accordance with the report prepared by the ING Corporate Finance Asia team, China maintains a strong trend of making mergers and acquisitions in Europe. It is evidenced by the results achieved by Chinese investors in HY1 2014. At that time, Chinese enterprises concluded as many as 43 agreements in the form of mergers and acquisitions at the total value of USD 13.8bn, disclosing an impressive increase relative to 27 agreements at the total value of USD 5bn concluded in the same period in 2013.

It needs to be emphasised that the significance of the industrial sector, which constituted as much as 29% of the total value of the mergers and acquisitions made in HY1 2014, is growing. It is followed by agriculture, financial sector and service sector in terms of investment by Chinese enterprises, which proves the increasing need for modernisation of technology[14].

Investments by Chinese enterprises in the form of mergers and acquisitions affect the structure of the markets on which they are made, and influence the position of the enterprises covered by such agreements. The change in the position can be inferred based on the percentage market share, the company's market value, the value of the revenue it generates, brand and image popularity.

In March 2010, a merger was finalised resulting in Geely Automobile, a Chinese company, purchasing Volvo, a Swedish brand, from Ford Group for USD 1.8bn. It was the greatest foreign transaction performed by this Chinese company.

Under a technology transfer agreement, Geely has now full access to Volvo technology, the use of which on the Chinese market will permit achievement of its strategic goals. By means of Volvo technology, Geely intends to create a new Gelly Automobile brand for the mass Chinese consumer. Relationships between these two companies are described as partnership. There is no competition between them as they are oriented towards different target markets. Geely sells cars dedicated to the mass consumer, while Volvo aims at the luxury goods market. Therefore, the technological cooperation between Gelly and Volvo has been developing relatively well to date. A significant progress was achieved in 2013, which permitted the Group to further optimise the used resources and accelerate implementation of the platform strategy as well as standardisation and joint modernisation of product development. Owing to that, the Group achieved a strong and unique advantage over competitors. Furthermore, the changing attitudes of consumers, who have recently become more and more demanding in terms of performance, environmental impact, energy consumption

[14] Sino-Europe Outbound M&A Review 1H 2014, September 2014 , https://www.ingcb.com/media/972804/sino-europe-ma-newsletter_1h2014.pdf, (05/01/2015)

efficiency and safety expected of vehicles, undoubtedly has a positive effect and gives many opportunities for the future as regards development of the products offered by the Group. When observing the cooperation between the companies to date, it can be boldly said that, through the achieved synergy effects, Geely has solid grounds for fulfilling its long-term goal, which is achieving the position of the leading international vehicle manufacturer. So far, Geely has been improving the quality of its vehicles and thus enhancing its competitiveness on the market. In 2011, Geely Automobile recorded better growth than expected, i.e. 13% of net profit growth, followed by 19% in 2012 and 31% in 2013, disclosing constant growth of the company. The number of vehicles sold, that is 549,468, was higher by 14% in comparison to 2012, 22% (118,871 pcs) of which were sold to foreign markets, disclosing growth by 17% compared to the previous year. As a result of systematic improvement of the product range offered by the company, its 2013 financial results were far beyond its expectations, as they grew by 17%, reaching RMB 28.7bn (Fig. 3). What is worth emphasising is that the company managed to achieve so spectacular results despite increase in research and development expenditure related to the restructuring processes introduced to the company, which contributed to noticeable improvement of the product range offered in 2013[15].

The transformation of Volvo progressing in 2013, in turn, resulted in launching the largest renewable product line in the company's history, i.e. Drive-E units, which was reflected both in the net income growth by 4%, from SEK 272,6bn in 2013 to SEK 282,9bn in 2014, and the operating income level, which grew from SEK 7,9bn in 2013 to SEK 8,4bn in 2014. That result was a significant step towards the company's achievement of a sustainable profitability level. Owing to appropriate sales development and cost optimisation, Volvo managed to make up for the loss recorded in HY1 2013 and transform it into full-year profit. The company's retail sales, driven mainly by the growth achieved in China, was similar that year to the quantity of vehicles sold in 2012. Moreover, Volvo Car Group strengthened its long-term funding structure by concluding loan agreements with partners and financial institutions.

To date, the industrial expansion of Volvo Car Group has been progressing on the Chinese market in accordance with the adopted plan. The company concluded two joint venture agreements in Zhangjiakou and Daqing and established a plant in Chengdu, which commenced its operations in November 2013. It needs to be emphasised that the real turning point in the development of Volvo was its acquisition of 45% of Dongfeng, a Chinese company offering heavy or medium goods vehicles. This is because the strategic alliance proves a principal change in perceiving the company's potential on the Chinese heavy goods vehicle market, which – what needs to be emphasised – is the largest market in the world[16].

In 2015, Geely and Volvo are going to commence sales of jointly developed, safe and reliable vehicles. Geely hopes that this will let it enhance its reputation further by

[15] Geely Automobile Holdings Annual Reports , www.geelyauto.com.hk, (16/12/2014).
[16] Volvo Group Annual Report 2014, http://www3.volvo.com/ (16/01/2015)
Geely Sweden ab Annual Report 2013, http://www.volvocars.com/ (16/01/2015)

climbing to the top position of passenger car exporter in the country. Volvo, in turn, wishing to double its sales volume to 800,000 vehicles in 2020, commenced test drives in its first factory in China. CEVT (China – Euro Vehicle Technology), an independent research and development centre opened in Gothenburg in Sweden in 2013, has become the key platform for facilitating cooperation between both companies[17]. At present, the centre employs 200 specialised engineers, who are supposed to develop a new modular architecture and a set of components for C segment cars, with both Volvo Car and Geely Group's needs taken into account. Such components will not only supply world class technology but also permit considerable reduction of development, testing and supply costs, ultimately leading to generation of significant economies of scale. This will not only be beneficial to Volvo but it will also allow Geely to compete on the automotive market. As a result, this will translate into profits of the established corporation.

GEELY AUTOMOBILE HOLDINGS LIMITED - 5 YEARS FINANCIAL SUMMARY					
	2013	**2012**	**2011**	**2010**	**2009**
Turnover (RMB'000)	28,707,571	24,627,913	20,964,931	20,099,388	14,069,225
Profit before taxation	3,304,182	2,529,077	2,183,208	1,900,323	1,550,460
Profit for the year (RMB'000)	2,680,248	2,049,786	1,715,849	1,549,711	1,319,028
Annual Sales Volume (Unit)	549,468	483,483	421,611	415,843	326,710

Fig. 3. Financial results following the merger of Geely Automobile and Volvo for the Chinese company

Source: Own work based on Geely Automobile Holdings Annual Reports, www.geelyauto.com.hk

[17] www.europe.autonews.com/ (01/02/2015).

Another example of mergers and acquisitions by a Chinese company refers to the power sector. In October 2009, Emerald Energy PLC, a power company, was acquired by Sinochem Corp, the leading seller of chemical products. The company purchased the crude oil and natural gas mining company listed on the London Stock Exchange for GBP 532m, i.e. 750p per share, which is by 11.1% more than the share price on closing. The agreement concluded by the parties was to enable the Chinese company i.a. optimisation of the crude oil and natural gas reserve structure, and facilitation of strategic distribution of their resource mining in South America (Columbia) and Middle East (Syria), and in effect establishment of a solid foundation for the future development of the company in these regions[18]. Despite insignificant dimensions of that acquisition, its major goal was to stimulate Sinochem's mining activity. Emerald's assets have a large growth potential and its introduction to Sinochem Group contributed to reinforcing its position both in Middle East and South America. Moreover, it is an extremely important step in the strategy of building a position with a global reach pursued by the Chinese power company[19].

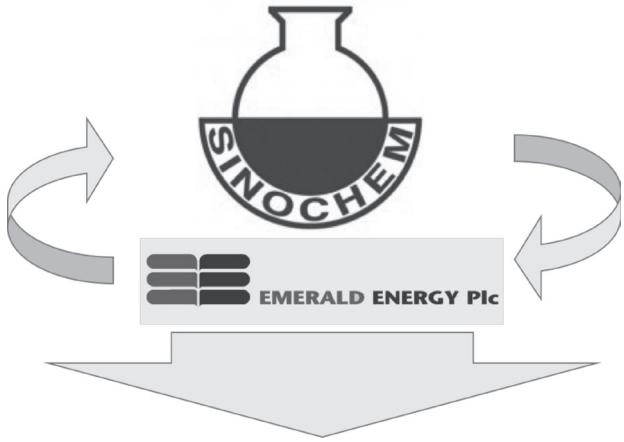
When analysing Sinochem Group's progress over years, it can be easily noticed that 2013 was a year of crucial significance from the viewpoint of strategic transformation of the company. This is when it obtained increased access to both crude oil and natural gas resources and renewable reserves, and improved its mining capacities, which paved its way to long-term sustainable development in the future. Moreover, the company not only achieved but also maintained stability relative to its operating results and offered quality with revenue from sales amounting to RMB 466.9bn and profit before taxation of RMB 10.87bn. It needs to be emphasised that the company's profit had maintained above the level of RMB 10bn for 3 years at that time (Fig. 4).

Furthermore, crude oil and natural gas production was 25.13m barrels (crude oil equivalent) in 2013, disclosing growth by 8% with respect to the previous year. Acting in accordance with the professed "Creating Value, Pursuing Excellence" philosophy, Sinochem is accelerating the transformation rate of its key business segments, including the power and mining segment, thus not only increasing their corporate value but also intensifying its presence in related industries. The company focuses on two strategic mining regions, i.e. Middle East and both Americas, where contracts were concluded on 34 crude oil and natural gas block in countries such as the USA, Columbia, Brazil, Syria, United Arab Emirates, and the Chinese Bohai Bay.

The purchase of 40% of interest in natural gas and crude oil reserves obtained from shale in Wolfcamp from Pioneer Natural, an American company, by Sinochem had a critical significance for expanding the company's activities in North America. Cooperation with a Columbian crude oil group, in turn, permitted Sinochem Group to pursue mining activities in three blocks along the Caguan river in Columbia. It needs to be emphasised here that the Brazilian National Agency of Petroleum recognised the company as a top

---

[18] www.english.sinochem.com / accessed on 01/03/2014); www.reuters.com/ (01/03/2014).
[19] www.bloomberg.com/ (01/03/2014).



SINOCHEM CORP - 5 YEARS FINANCIAL SUMMARY

	2013	**2012**	**2011**	**2010**	**2009**
Total operating income (RMB'0000)	46,690,479.68	45,315,859.76	45,895,329.18	33,532,679.83	24,178,816.19
Operating profit	937,197.04	987,773.80	1,281,584.29	897,035.33	564,324.62
Total profit	1,087,191.91	1,067,060.91	1,341,467.17	907,589.12	634,689.27

Fig.4. Financial results following acquisition of Emerald Energy by Sinochem Corp for the Chinese company

Source: Own work based on Sinochem Corp Annual Reports, www.english.sinochem.com /

class operator, i.e. A class, owing to which Sinochem can perform works on land, in shallow water and in the deep sea in Brazil. Moreover, at the same time, the company obtained qualifications permitting it to mine natural gas in China, thus creating bases for developing the domestic activity in the future.

It is worth stressing that the scope of Sinochem's activities has expanded its prevailing mining activity by a significant research profile in recent years. Currently, the company plays an important role in both industry modernisation and mining and development sector, slowly becoming an independent crude oil company.

When analysing Chinese enterprises' aspirations for dominance on various markets, it is worth pointing to another example of acquisition in the power sector. It regards the agreement concluded in 2011 between China Investment Corp (CIC), a monetary fund that is the largest in China and the fifth largest in the world, and Gas de France Suez (GDF), the top producer and distributor of electricity, natural gas and renewable energy, and at the same time the largest purchaser of gas and importer of liquefied natural gas in Europe.

At the end of October 2011, CIC and GDF Suez Gerard Mestallet signed an agreement under which CIC acquired 30% of shares in GDF Suez's mining and production for EUR 2,491m, and 10% of shares in liquidation of GDF Suez Atlantic's assets located in Trinidad and Tabago, at the value of EUR 672m. Gas de France Suez additionally undertook to supply China National Offshore Oil Corporation (CNOOC), i.e. the largest Chinese offshore crude oil producer, in ships enabling storage and regasification of liquefied natural gas. The contract was finalised in late 2011.

The main goal of partnership between GDF and China Investment Corp was to use the rapidly growing demand for liquefied natural gas in Asia and to establish close contacts with the Asian power industry as a result of the planned expansion[20]. The agreement between the companies changed the competitive power relations on the market, i.e. strengthened CIC's position and gave GDF an opportunity to generate high profits, enhancing the financial stability of the company and offering it new business development prospects worldwide[21]. When analysing the financial results presented in annual statements of China Investment Corp's activities, a considerable improvement is visible, followed by constant growth in investment income generated by the company, which increased from USD 48,589m, earned in 2011, to as much as USD 83,052m in 2012, and then to USD 92,500m in 2013. A similar upward trend in noticeable also in the case of the company's net revenue amounting to USD 86,901m in 2013 preceded by growth from USD 77,690m in 2012 and USD 48,422m in 2011 (Fig. 5).

A good example of changes on the international market resulting from expansion of Chinese enterprises is the acquisition of 100% of shares in BorsodChem Zrt, a Hungarian isocyanate producer, by Wanhua Industrial Group (Wanhua), the largest isocyanate producer in the Asia-Pacific region, which took place in 2011 in the chemical sector. The Chinese potentate bought out all shares of its previous majority owners, i.e. Permira and Vienna Capital Partners (VCP) Funds. That was an effect of the financial restructuring of the Hungarian company in 2010. Wanhua supported BorsodChem with funds at the amount of EUR 140m, which were used by the company to construct a new TDI-2 power station and nitric acid production plant. The total acquisition of BorsodChem by the Chinese investor, supported by a federation headed by the Bank of China, enabled further development of the Hungarian company in the long term, ultimately preventing mass redundancies.

[20] www.chinadaily.com.cn / (18/02/2014); www.ft.com/ (18/02/2014).
[21] http://www.gdfsuezep.no/en/GDF_SUEZ_group/GDF-SUEZ-EP/

CHINA INVESTMENT CORPORATION - 4 YEARS FINANCIAL SUMMARY

	2014	**2012**	**2011**
Total investment income	92,500	83,465	48,589
Operating Income	91,258	82,377	47,409
Net income	86,901	77,690	48,422

Fig. 5. Financial results following the agreement between CIC and GDF Suez for the Chinese company

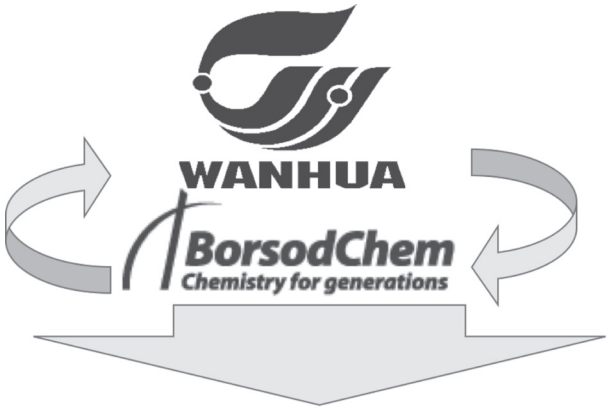
Source: Own work based on CIC Annual Reports, http://www.china-inv.cn/

The undertaking not only prevented BorsodChem from collapse but also, and foremost, caused transformation of two regional companies in a global corporation and achievement of the position of the third largest isocyanate producer in the world.

As an effect of the acquisition, Wanhua has become a modern company with efficient technology, serviceable production lines and a committed team of workers retained in the company. The company's success is reflected also in its financial results, and in particular in the total income value, which increased gradually from RMB 13,662m in 2011 to as much as RMB 22,088m in 2014 (Fig. 6)[22]. Operating within Wanhua Group's structure, BorsodChem is responsible for all transactions performed on the power market. Wanhua has gained favour with the former majority owners, i.e. the funds run by Permira and VCP, which supports the Chinese investor as a partner. President of Wanhua is planning to enlarge and enhance the acquired company until it becomes not only the largest employer in Hungary but also, and foremost, the largest isocyanate producer in Europe, ensuring it continuous development[23].

[22] http://www.bloomberg.com/research/stocks/financials/financials.asp?ticker=600309:CH

[23] www.borsodchem-group.com / (18/02/2014).



WANHUA INDUSTRIAL GROUP - 4 YEARS FINANCIAL SUMMARY

	2014	**2013**	**2012**	**2011**
Total Revenues (RMB'000)	22,088,4	20,238,0	15,942,1	13,662,3
Operating Income	4,602,1	4,519,1	3,896,3	2,879,6

Fig. 6. Financial results following the acquisition of BorsodChem Zrt by Wanhua Industrial Group for the Chinese company

Source: Own work based on
http://www.bloomberg.com/research/stocks/financials/financials.asp?ticker=600309:CH

When analysing the largest, in terms of value, agreements of Chinese companies on the European market, it is worth noticing the investment made by the biggest power company in China, which specialises in mining crude oil and natural gas, in 2013. China National Petroleum Corp (CNPC), which is referred to here, allocated USD 5bn for purchasing 8% of shares in Kashagan, a gigantic project pursued by KazMunaiGas, a Kazakh company, which has been the greatest discovery of crude oil at the Caspian Sea for 30 years. This is how it reinforced its position in this area and blocked attempts to gain access to this region by its major competitor, i.e. India.

The most significant investment made in HY1 2014, in turn, was the acquisition of the majority, i.e. 51%, of shares in Nidera Handelscompagnie BV, a Dutch company offering freight services and a supplier of solutions for global agricultural markets, by COFCO Group, the largest food processor and producer in China. This transaction is the biggest investment of this type for both COFCO and the sector of cereals and vegetable oils in China[24] and confirms the company's efforts to become a global producer and distributor

[24] http://www.bloomberg.com/news/articles/2014-10-29/china-grain-giant-cofco-planning-ipo-after-trader-acquisitions

of agricultural products, thus supplementing its role of the state food supplier for the largest rise, soya and wheat consumer in the world.

Conscious of the importance of ensuring development of strong relationships between each other, China and Europe concentrate their efforts on forming and building closer partnership. The sectors where the largest number of investments are to be located in the nearest future are mainly industry, real estate, power industry, including new energy sources, as well as creative sectors, focused on devising and developing new technologies, design and culture. Therefore, China's attention will be focused primarily on developed European countries, such as Benelux and Mediterranean Europe countries, but most of all still on Germany, France and the UK. Investments will increase along with the increasing awareness among Chinese entrepreneurs about the benefits than can be achieved[25].

VII. Conclusion

We are currently facing investment boom in Chinese enterprises. The rapid growth in China's interest in foreign markets is stimulated by commercial premises. However, a considerable role is played in this process by pressures from the continuously growing competition on the domestic market and perception of enormous development prospects on the European market. China's engagement in greenfield projects and conclusion of numerous merger and acquisition agreements with foreign partners contributed to growth in the generated annual average revenue from USD 1m in 2000 to USD 3m in 2009 and 2010, to as much as USD 10m in 2011. Even without smaller transactions, the number of Chinese investments was 573 at that time.

Activity of Chinese investors is intensified in OECD countries and in other developed economies. On the one hand, the Chinese see their chance for development on the European market, while on the other hand, Chinese investments constitute a great source of prosperity to Europe. It is estimated that the value of Chinese foreign direct investments will have reached USD 1tn-2tn by 2020, more than USD 250bn of which can be achieved by UE-27, which is ca. EUR 20bn-30bn per annum.

It is worth emphasising that regional diversification of Chinese investments made in Europe is gradually improving. Among the major European economies, Germany, the UK and France have still been concentrating the largest number of Chinese investments, yet their investment capacities have been decreasing due to excessively low rate of the economic recovery and complex business environment, like in the case of France. The

[25] Sino-Europe Outbound M&A Review 1H 2014, September 2014, https://www.ingcb.com/media/972804/sino-europe-ma-newsletter_1h2014.pdf, (05/01/2015)

mature business environment of Benelux countries is favourable to Chinese investments, while Central European countries attract investments in production and real estate sectors, and Scandinavia has remained conservative with respect to Chinese investments, demonstrating occasional engagement, mainly as regards new energy and industrial technology[26].

Chinese investors ensure not only fresh capital but also work, taxes and side effects of innovations to Europe. Currently, Chinese companies are employing even more than 45k Europeans, and given complementariness of needs of Chinese investors and volume of the European labour force, it is assumed that this number will continuously grow.

The cases of acquisitions of European companies by Chinese companies presented in this paper are good examples of expansion by China, which is striving for development and enhancement of its position not only on the local but also on the global market. These undertakings show the joint effort made by Chinese and European companies towards developing successful cooperation with the best use of mutual potential. The progressing slowdown of the Chinese economy arouses a particular anxiety in Europe, which found Chinese investments helpful in recovering after the crisis. In 2014 alone, China invested as much as USD 18bn in European Union countries, mainly in sectors such as: production, agriculture, power industry, real estate, food, automotive and finance. European countries' weakening by the crisis and vulnerability to acquisitions created favourable conditions for investments by Chinese enterprises, whose value of the invested capital grew by as many as four times in the period 2010-2012, from more than EUR 6bn in 2010 to more than EUR 27bn in 2012. At present, that rate of the Chinese economy has slowed down to the early 1990s level, China has recorded the greatest weakening of the Chinese currency relative to dollar for over two years and has not fulfilled the adopted economic goal for the first time in 15 years. Taking advantage of the period of economic upturn for the purpose of investments and export maximisation has led to overinvestment with a too low internal demand, significant slowdown on the real estate market, and surplus of production capacity persisting in certain sectors. In order to minimise the risks, it is necessary to use the consumer potential, since the Chinese society can no longer be perceived as cheap labour force. This requires, however, firm actions, and in particular pay rise and substantial improvement in the quality of life.[27] China is currently entering a new stage of transformations, both in the political and economic sphere. This is facilitated by actions taken by the Chinese government, such as i.a. pursuing an accommodative monetary policy aimed at driving the economy through increasing consumption and liberating interest rates. The years of economic upturn in China led to overinvestment with a low level of internal demand and unused consumption potential. This gave rise to the need for changing the model based mainly on investments and focusing on driving

[26] Sino-Europe Outbound M&A Review 1H 2014, September 2014 , https://www.ingcb.com/media/972804/sino-europe-ma-newsletter_1h2014.pdf, (05/01/2015)

[27] http://www.money.pl/gospodarka/wiadomosci/artykul/gospodarka-chin-zwalnia-nizsze-tempo-wzrostu,124,0,1728380.html

consumption. Despite apparent efforts of the government, the economic slowdown is expected to maintain for the time being, which is reflected by the decreasing trend in GDP growth rate from 7.7% in 2013 to 7.5% in 2014, and to 7% this year.

References

Ehmke C., *Strategies for Competitive Advantage, M.S. Extension Educator, Department of Agricultural and Applied Economics, University of Wyoming , Western Center for Risk Management Education,* http://cals.arizona.edu/arec/wemc/nichemarkets/05competitiveadvantage.pdf

Grant C., Barysch K. , *Can Europe and China shape a new world order?*, Centre for European Reform, London 2008

Fister Gale S., *Why Mergers Fail?*, 2003, www.workforce.com

Góralczyk B., *Chińczycy zwiększają zagraniczne inwestycje*, 2013, http://www.obserwatorfinansowy.pl/

Hanemann T., Rosen D.H., *China invests in Europe. Patterns, Impacts and Policy Implications*, Rhodium Group Reort, 2012

Kyriazopoulos G., Petropoulos D., *What are the advantages and disadvantages that lead banks into mergers and acquisitions? Is Altman's score model for bankruptcy motivate banks for mergers and acquisitions? Evidence from the Greek banking system*, International Conference On Applied Economics – ICOAE 2010, Technological Educational Institute of Western Macedonia

Nawrot K.A., *Kierunki inwestycji Chin. Jakich inwestycji chińskich może oczekiwać Polska*, Poznań 2012

Winiewski J., *Sztuka zwalniania*, Polityka, issue 31 (2918), 2013., pp. 41-43

The Heritage Foundation, http://www.heritage.org

PWC Report, China deals. A fresh perspective 2012 , www.pwc.co.uk/china

China Investment Corp Annual Report www.china-inv.cn/

Geely Automobile Holdings Annual Reports, www.geelyauto.com.hk.

Geely Sweden ab Annual Report 2013, http://www.volvocars.com/

Sinochem Corp Annual Reports, www.english.sinochem.com

Sino-Europe Outbound M&A Review 1H 2014, September 2014, https://www.ingcb.com/media/972804/sino-europe-ma-newsletter_1h2014.pdf

Volvo Car Group Financial Reports, www.volvocars.com.

Volvo Group Annual Report 2014, http://www3.volvo.com/

www.bloomberg.com

www.borsodchem-group.com

www.csis.org

www.chinadaily.com.cn

www.euccc.com.cn

www.europe.autonews.com

www.ft.com
www.forbes.com
www.gochina.gov.pl
www.gdfsuezep.no/en/GDF_SUEZ_group/GDF-SUEZ-EP/
www.imaa-institute.org
www.mbda.gov
www.money.cnn.com
www.news.xinhuanet.com
www.reuters.com

異文化理解のためのロールプレイゲームの開発と多国間比較実験の実施

Developing a Role-Playing Game for Cultural Understanding and Conducting a Comparative Experiment between Multiple Countries

中野 有紀子*
Yukiko Nakano

Abstract

In many countries, especially in Europe, many cultural, ethnic and religious groups must live and work together. However, cultural differences can lead to social stresses and sometimes outright conflict. eCUTE is an EU FP7 project aiming at developing innovative IT technologies to learn cultural awareness and understanding. This paper reports a cross cultural study which was conducted as our collaboration with European universities under the eCUTE project.

First, we describe the theoretical basis of the proposed serious game, and implement an agent-based role-play game TRAVELLER in which the users encounter animated agents with different cultural backgrounds. Then, we conducted a preliminary experiment to evaluate the role-play game using questionnaires. In our analysis, it was found that Japanese people felt more comfortable to interact with collectivistic agents compared to people in European countries. On the other hand European people felt that the individualistic agent was friendly, while Japanese people didn't. Further study is necessary by adding more data and using statistical analyses.

Ⅰ．はじめに

EU諸国では、加盟国間の人の移動は自由であり、旅行だけでなく、教育や労働を目的とした移住も盛んに行われている。そのため、EU各国では、様々な文化、人種、宗教の人々が、ともに生活し、働いているが、たとえ言葉は通じても、文化的な違いが社会的なストレスや人間関係における摩擦となっている。このような問題意識の中、情報技術を用いて異文化理解を推進する教育を行おうとする研究プロジェクトであるeCUTE（Education in Cultural Understanding, Technologically-Enhanced）が、2010年にEUのFP7プロジェクトとして採択され、5ヵ年にわ

* 成蹊大学理工学部、Faculty of Science and Technology, Seikei University
y.nakano@st.seikei.ac.jp

たり研究が実施された。本プロジェクトはHerriot-Watt University（スコットランド）のRuth Aylett教授を代表者とし、INESC-ID University（ポルトガル）、Sunderland University（イギリス）、Augsburg University（ドイツ）、Wageningen University（オランダ）、Jacobs University（ドイツ）、京都大学、成蹊大学の、8大学が参加する国際的共同研究であった。

本プロジェクトでは、異文化理解を深めるための教育を目的とした2つのシリアスゲーム（serious game）の開発が行われた。MIXER（Moderating Interaction for Cross Cultural Empathic Relationships）は9～11歳の子供をターゲットとし、文化理解や文化の違いへの気づきを促すことを目的としたゲームである。もう1つは、18～25歳の青年を対象としたTRAVELLER（TRAining for Virtually Every Location for Learning Empathic Relationships）である。このゲームでは、異文化コミュニケーションを学習することを目的としている。これらのゲームは、シナリオに沿ったロールプレイゲームの形式を採用しており、ゲームに登場するアニメーションのキャラクタ（以下、エージェント）とのやり取りを通して、異文化理解を深めることを目指す仮想学習環境（Virtual Learning Environments: VLEs）として開発された。

本稿では、eCUTEプロジェクトで開発されたTRAVELLERシステムを日本語化した日本語版TRAVELLERシステムの説明と、日本の大学生に使用してもらった実証研究の報告を行う。

Ⅱ．Hofstedeの理論

TRAVELLERでは、ゲーム中のエージェントの行動を、設定した文化的特徴によって変化させている。そこでの文化的特徴の記述に利用する理論的枠組みとしてHofstedeの理論（Hofstede, Hofstede, and Minkov 2010）を採用している（Degens et al 2012）。この理論で提案されている文化を特徴づける6次元について、以下に説明する。

Hofstedeの理論は、IBMの約7万人、53カ国にわたる社員を対象としたアンケート調査に基づき、各国の文化的特徴を表現する6つの次元を提案したものである。以下に各次元について説明する。

⑴ 権力格差の大小（power distance）：権力をもつものによる意思決定を受け入れる、あるいは権力的に下位の者が、意思決定に参加する程度に関する次元。

⑵ 個人主義－集団主義（individualism vs. collectivism）：個人がどの程度集団帰属的であるかに関する次元。

⑶ 男性らしさ－女性らしさ（masculinity vs. femininity）：性別による役割の違いに関する次元。

⑷ 不確実性の回避（uncertainty avoidance）：不確実性や曖昧性に対する耐性に関する次元。

⑸ 長期的志向－短期的志向（long-term orientation vs. short-term orientation）：長期的志向は、持続性や忍耐、節約に関連し、短期的志向は、伝統の尊重、社会的義務の遂行、面子の維持に関連する。

⑹ 放縦 - 抑制（indulgence vs. restraint）：放縦は、人間の基本的かつ自然な欲求を比較的自由に満たそうとする傾向を表し、一方、抑制は、厳しい社会的規範によって欲求を制限すべきだという信念を示す。

以上に示す、Hofstedeの理論では、これらの次元を合成することにより、文化的特徴を表現する。例えば、個人主義の評価値はドイツが67、日本が46である。ドイツは日本に比べてより個人主義的であり、日本はより集団への帰属意識が強い。日本は男性らしさの次元が非常に高く（95）、

Hofstede の調査対象の国では1位であった。また、日本は不確実性の回避傾向が強いのに対し（92）、ドイツは日本に比べて弱い（65）。日本はより長期志向的（88）であるが、ドイツは比較的短期的志向（30）である。

以上の6次元を用いて文化的特徴をパラメータ値で表現し、合成的な文化（synthetic culture）を定義することが可能である。TRAVELLERでは、これらの6次元により合成的な文化を定義し、エージェントの行動決定のパラメータとして利用している。

Ⅲ．TRAVELLER

1．システムの概要

TRAVELLERは、青年を対象とした異文化学習アプリケーションである。ユーザは様々な社会的シーンにおいて、エージェントとインタラクションすることにより、ロールプレイゲームを楽しみながら、文化による行動の違いについて理解を深めてゆく。図1にゲームの冒頭に提示されるゲームの場面設定の説明を、図2には最初のシーンである祖母のカフェでの会話のシーンを示す。

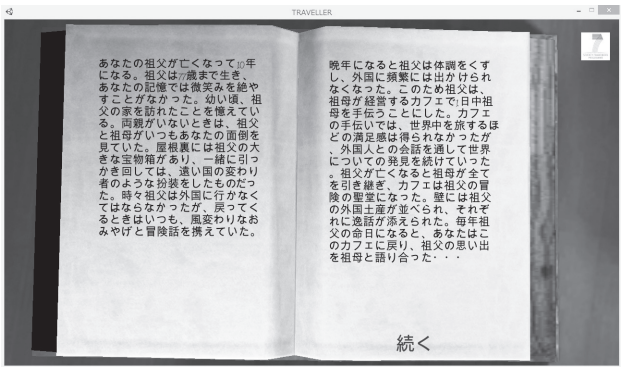


図1　ゲーム冒頭の場面設定の説明画面

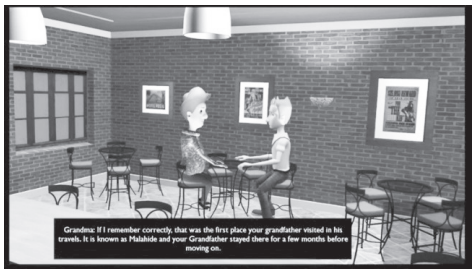


図2　祖母のカフェの場面

図3　海辺のバーの場面

TRAVELLERでは、場面ごとにシナリオに沿ったロールプレイを行うが、Ⅱ章で述べたHofstedeの理論を利用して、各次元のパラメータ値に応じて、登場するエージェントの行動が決定されるシステムとなっている（Mascarenhas et al 2010）。ここで、文化的要因を〈*D, M*〉であらわす。*D*はHofstede理論の次元（例えば、個人主義）、*M*はそれに対する正か負の重みを示す。

これらを用いて、以下の式により、各行動の社会的影響度の値（$V_{modified}$）が計算される。ここで、$Score(D)$はエージェントのプロフィールとして与えられた文化における次元Dのスコア（$0 \leqq D \leqq 100$）を示す。

$$V_{modified} = V_{initial} + |V_{initial}| * M * \frac{Score(D)}{100}$$

表1は海辺のバーでのエージェントの取りうる行動の例であるが、いくつかの行動について、個人主義的文化ではマイナスの重みが設定され、社会的影響度が低い値をとる。これは、個人主義的文化では集団主義的文化に比べて、ユーザとエージェントとのインタラクションの制限がより緩和されることを意味する。具体的には、集団主義的文化を持つエージェントはユーザに個人的な意見を求めず、くだけた挨拶や隣に座ることは適切でないと考える。個人主義のスコアが高い文化を設定した場合には、飲み物の注文を拒絶することと、泊めてくれるかどうかを聞くことのみが不適切な行動となる。

表1　海辺のバーの場面における行動とパラメータのセット

行動	パラメータ		
A	V	D	M
ask-personal-opinion	25	IDV	-0.4
how-are-you-question	30	IDV	-0.5
warm-greeting	20	IDV	-0.8
seat-near-group	22	IDV	-0.4
refuse-to-order	35	-	-
ask-for-place-to-stay	40	-	-

2. 日本語版TRAVELLERの開発

EUでの実証実験のために開発されたTRAVELLERは、英語を使用していたため、日本での実験を行うために、日本語版TRAVELLARを開発した。場面や登場するエージェントのデザインは同じものを使用し、表示されるテキスト部分とエージェントのせりふを日本語に翻訳した。具体的には、図1に示す、各場面を説明する本のページ、および、図3に示すような、各シーンでユーザが選択できる行動、およびエージェントのせりふの日本語化を行った。また、エージェントのせりふは音声で出力されたため、翻訳したせりふを日本語音声合成装置により、日本語音声に変換した。2種類の音声合成ソフトウェア（xpNavo2[1]、ドキュメントトーカ[2]）を使用し、女性音声2種類、男性音声4種類を各シーンにおいて使い分けた。

Ⅳ．実証実験

1. 実験の手順

EUで行われた実験の手順書を翻訳し、同じ手順で日本人大学生を対象とした実験を実施した。

[1] http://www.knowlec.com/?page_id=268
[2] http://www.createsystem.co.jp/DTalkerSapil.html

被験者には、まず、異文化理解に関する質問紙であるCQSと、自身の性格特性についてたずねるTIPI（付録1、2）の2種類の質問紙に記入をしてもらい、その後に、TRAVELLERのゲームについて簡単な説明書が手渡された。説明書には、おじいさんが残した隠された宝物を見つける冒険をつづける若者という想定でのロールプレイゲームであること、また、簡単な使用方法として、動作を選択したり、どのように進めるかの決定が求められる際には、選択したほうの手の形のカーソルでクリックすればよいことが記されている。「海辺のバー」の場面については、詳細な分析を行うため、この場面の終了後に付録3に示す質問紙に回答してもらった。その後、ゲームを再開してもらい、最後の場面まで完了してもらった後、再度CQS質問紙に回答してもらった。

2. 被験者と実験デザイン

被験者は日本人大学生10名（男性：5名、女性：5名）である。半数の被験者には集団主義的パラメータセットによるエージェント、残りの半数には、個人主義的パラメータセットによるエージェントとインタラクションしてもらった。

3. 結果と考察

CQSの全21項目A～Uの実験前（pre）と実験後（pos）の平均値を図4に示す。「A：異なる文化を持つ人と関わるときには、自分の文化を意識している。」や「T：異文化コミュニケーションで必要とされる場合には、非言語行動を変化させる。」、のように事後に自己評価が上がっている項目がある一方、「B：なじみのない文化から来た人とかかわるとき、文化についての知識を相手に合わせて調整する。」、「D：異なる文化から来た人とかかわるとき、自分の文化的知識の正確さを確認する。」、「G：他の文化の文化的価値や宗教的信仰を理解している。」、「O：異なる文化での買い物事情にうまく適応できる自信がある。」、のように逆に自己評価が下がっている項目がった。評価値の上昇した項目はいずれも、文化の違いへの意識の高まりを示しており、評価の下がった項目は、これまでの自分の異文化理解が不十分であったことを自覚したことを示唆している。

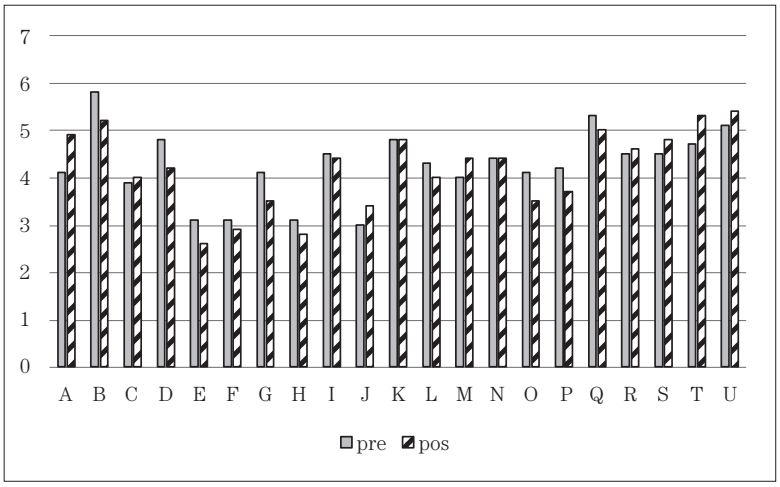


図4　CQS各項目の実験前・実験後の比較

次に、A ～ Uの項目を、行動ストラテジ（ストラテジ）：A ～ D、知識：E ～ J、動機：K ～ O、行動：P ～ Uの4種類に分類した。これらの各次元の平均値ついて、実験前・実験後の比較を行った結果を図5に示す。同じ下位分類の中でも項目によって、事後の評価が上がる場合と下がる場合があったため、全体の平均では大きな差は見られなかった。

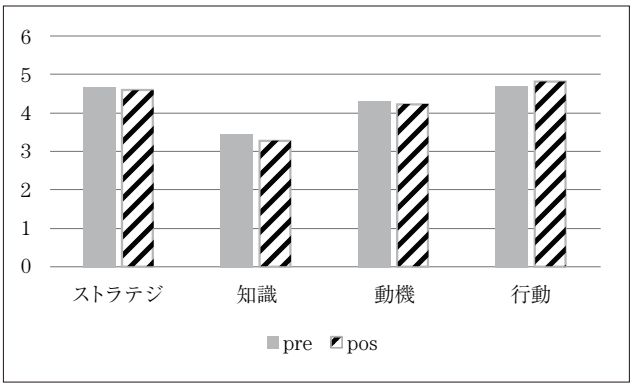


図5　CQSの下位分類による事前・事後比較

次に、「海辺のバー」の場面においてのみ、より詳細な質問紙を実施し、個人主義的エージェントとインタラクションした被験者（個人主義群）と集団主義的エージェントとインタラクションした被験者（集団主義群）との比較を行った。

以下に示す、エージェントへの印象を7段階のリッカート尺度で尋ねる質問、6項目（1-a ～ 1-f）の結果を図6に示す。1-dと1-fについては、個人主義的振る舞いをするエージェントとインタラクションした被験者群のほうが、集団主義的振る舞いをするエージェントとインタラクションした被験者よりも高い値を示した。

1-a：私のこれらの登場人物についての全体的な印象は肯定的です
1-b：登場人物たちは私に対して適切にふるまった
1-c：登場人物は私を歓迎されない気分にさせる
1-d：登場人物たちは私を自分たちの仲間として扱った
1-e：私の存在は登場人物たちを不快にしていた
1-f：登場人物達は私とやり取りするのを楽しんでいた

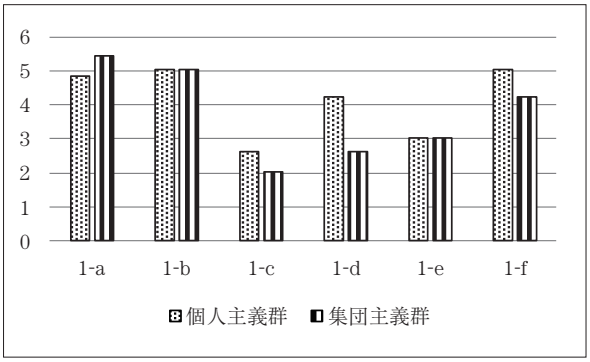


図6　エージェントに対する印象を尋ねる質問の分析結果

エージェントとのインタラクションに対する印象を尋ねる以下の4つの質問2-a ～ 2dについても同様の分析を行った。その結果を図7に示す。ここでは、被験者群による大きな差は見られなかった。

2-a：登場人物たちとやり取りするのはイライラする
2-b：私は登場人物とのやり取りを楽しんだ
2-c：海辺のバーでのやり取りの間退屈だった
2-d：私は登場人物たちに対して適切にふるまった

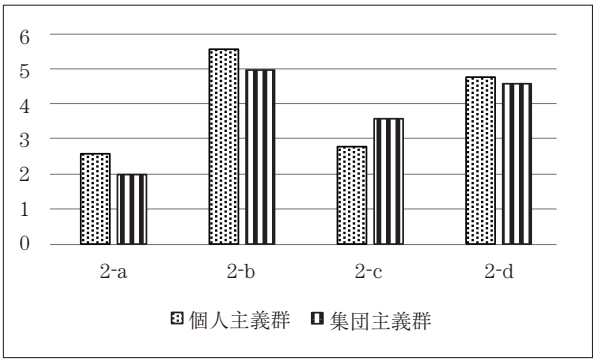


図7　エージェントとのインタラクションに対する印象を尋ねる質問の分析結果

最後に、形容詞対を用いた印象評価の結果を図8に示す。これらも7段階の評価尺度を用いた。興味深い点は、エージェントの親しみやすさが、個人主義群よりも集団主義群のほうが大幅に高いこと、また、個人主義群のほうがよりエージェントに対して、快活な印象を持っていることがわかった。

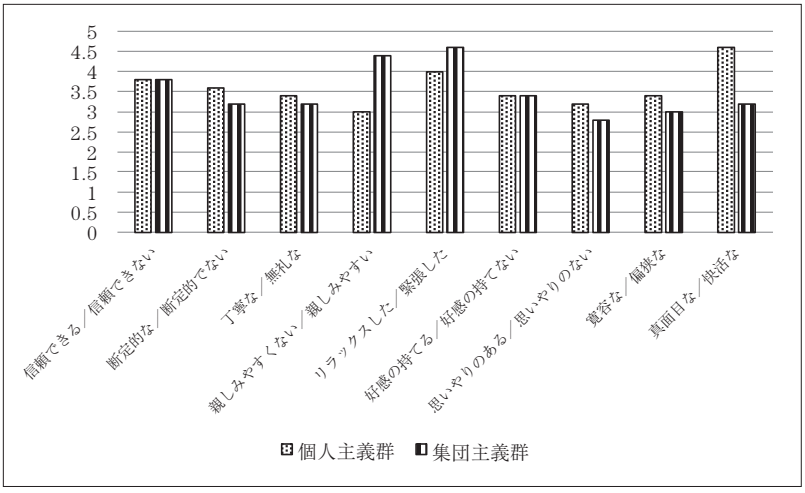


図8　形容詞対による印象評価

Ⅴ．異文化間比較

1. 分析

前章で行った、「海辺のバー」に関する分析について、オランダ、ポルトガルの2カ国との比較を行った。被験者数は、オランダ37名、ポルトガル35名である。Hofstedeの6次元の値を用いた、日本を含めた3カ国の文化的特徴を表2に示す。両国において、およそ半数の被験者が個人主義群に、残りの半数が集団主義群に割り当てられた。被験者の平均年齢はポルトガルが23歳、オランダが22歳であり、両国とも被験者の多くは大学生である。オランダでは女性の被験者が35%、ポルトガルでは22% であった。

表2　3カ国の文化的特徴

	権力格差	個人主義	男性らしさ	不確実性の回避	長期的志向	放縦
日　　本	54	46	95	92	88	42
オ ラ ン ダ	38	80	14	53	67	68
ポルトガル	63	27	31	99	28	33

図9、10は、エージェントに対する印象を尋ねる質問について3カ国を比較したグラフである。

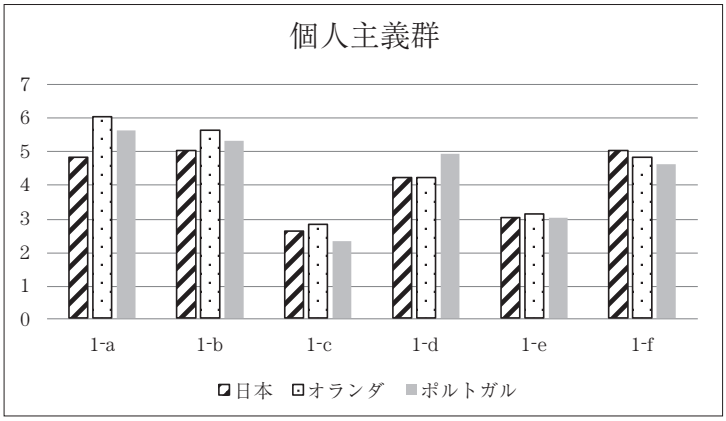


図9　個人主義群におけるエージェントに対する印象の3カ国間比較

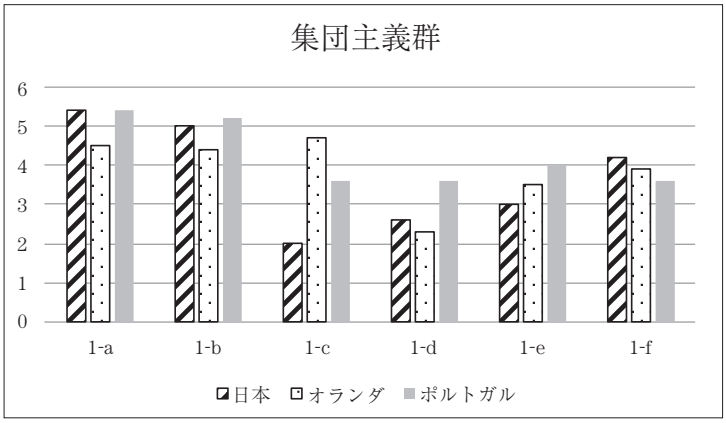


図10　集団主義群におけるエージェントに対する印象の3カ国間比較

個人主義群では、3カ国に大きな違いは見られないが、集団主義群では、1-cの質問：登場人物は私を歓迎されない気分にさせる、に対して、日本人に比べて、他の2カ国では、強い反応（歓迎されていないと感じる）を示している。

次に、図11、12に、エージェントとのインタラクションに対する印象の3カ国間比較を示す。

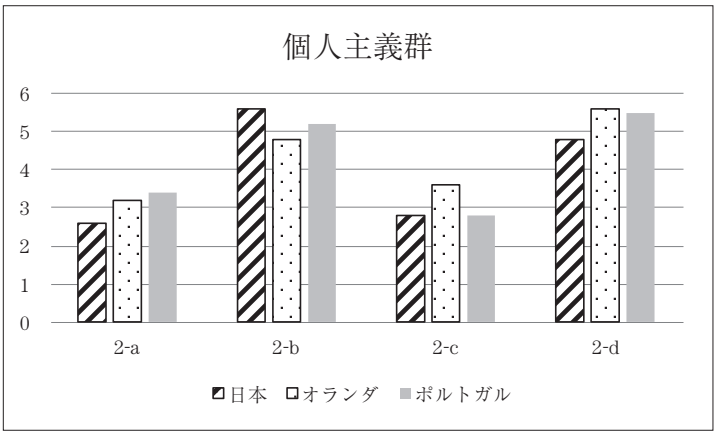


図11　個人主義群におけるエージェントとのインタラクションに対する印象の3カ国間評価

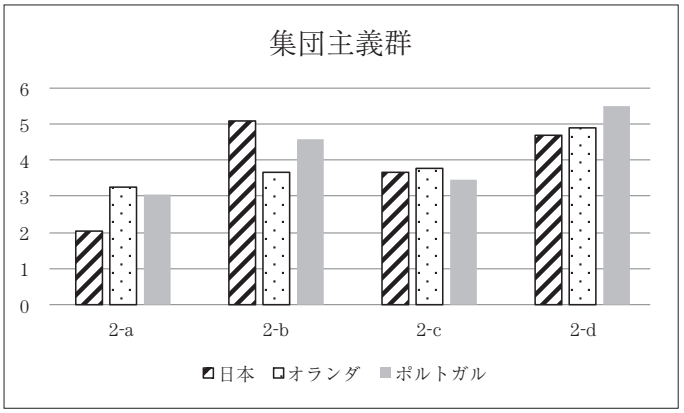


図12　集団主義群におけるエージェントとのインタラクションに対する印象の3カ国間評価

ここでも、集団主義群の日本人は他国に比べて、エージェントとのインタラクションへのイライラが少なく、特にオランダと比べて、エージェントのやり取りを楽しんだと感じる被験者が多い傾向が見られた。

最後に形容詞対による印象評価の3カ国比較を図13、14に示す。顕著な違いは、個人主義群において、他の二カ国はエージェントの親しみやすさの評価が大変高かったのに対し、日本では、

他の二カ国に比べて親しみやすさの評価が大幅に低かった。一方、集団主義群では、他の二カ国では、エージェントに対し、あまり思いやりがないと感じているのに対し、日本人は、集団主義的に振舞うエージェントに対し、思いやりがあると感じている。

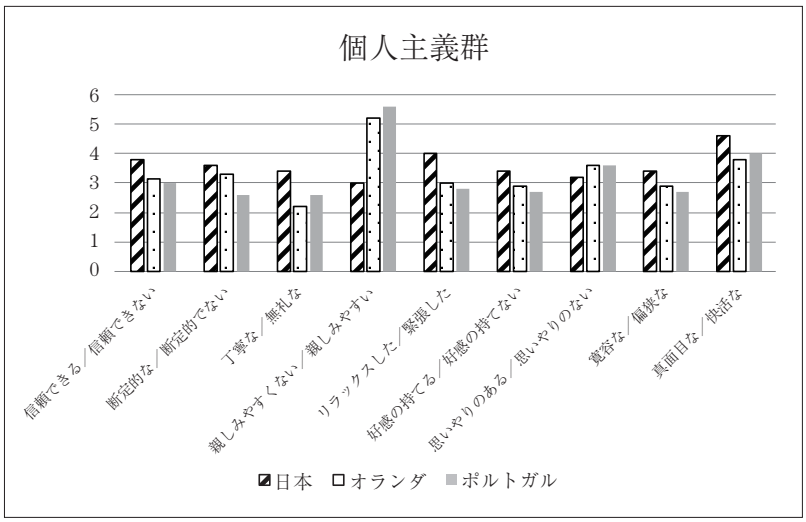


図13　個人主義群における形容詞対による印象評価の三カ国間評価

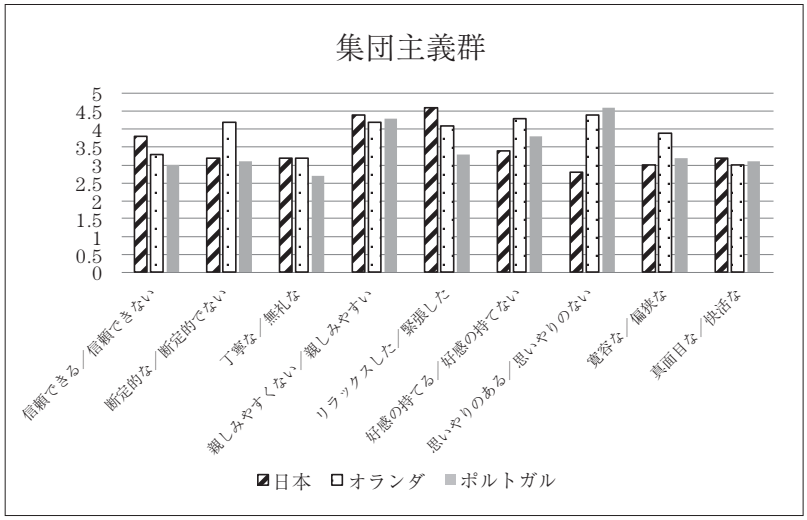


図14　集団主義群における形容詞対による印象評価の三カ国間評価

2. 議論

3カ国を比較し、特に日本人と他の二カ国とが顕著に異なる点に着目して分析したところ、日本人は集団主義的に振舞うエージェントに対し、親しみやすく、思いやりがあると感じ、エージェントとのやり取りを楽しんでいるが、他の二カ国では、これとは逆の傾向を示すことがわかった。Hofstedeの理論において、日本は集団主義的文化であると位置づけられていることから、集団

主義的に振舞うエージェントに対し、抵抗なく接することができたと考えられる。

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では、アニメーションエージェントを用いた異文化理解のための仮想学習環境を構築し、オランダ、ポルトガルとの共同研究による比較実験を実施した。被験者を2群に分け、個人主義的―集団主義的の次元のパラメータ値を変化させた2種類のロールプレイゲームを使用してもらったところ、日本人とヨーロッパの被験者とでは、集団主義的エージェントに対する印象が大きく異なることがわかった。しかし、本研究は、まだ少数の被験者で実施した予備実験の段階であり、統計的分析を行うには、データ数が不十分である。今後、さらに実験を進め、十分な被験者数のデータを収集し、統計的な分析により、本予備実験で得られた考察を定量的に実証してゆく必要がある。

参考文献

Degens, N., Hofstede, G.J., McBreen, J., Beulens, A., Mascarenhas, S., Ferreira, N., Paiva, A. & Dignum, F. 2012. When agents meet: empathy, moral circle, ritual, and culture. *Workshop on Emotional and Empathic Agents at the 11th International Conference on Autonomous Agents and Multiagent Systems (AAMAS 2012)*, June, 4–8, 2012, Valencia, Spain.

Hofstede, Geert, Gert Jan Hofstede, and Michael Minkov. 2010. *Cultures and Organizations -Software of the Mind-* (McGraw Hill).

Mascarenhas, S., Dias, J., Prada, R., and Paiva, A. 2010. A dimensional model for cultural behaviour in virtual agents. *International Journal of Applied Artificial Intelligence*, 24 (6), pp. 552-574.

付録1　日本語版CQS質問紙

INTERCULTURAL TRAINING PROGRAMME

THE CQS

以下の文を読んで、該当する箇所に○印をつけてください。

（1＝全く同意しない；　7＝大変同意する）

A　異なる文化を持つ人と関わるときには、自分の文化を意識している。

1　2　3　4　5　6　7

B　なじみのない文化から来た人とかかわるとき、文化についての知識を相手に合わせて調整する。

1　2　3　4　5　6　7

C　異文化コミュニケーションを行うときに自分が用いている文化的知識を意識している。

1　2　3　4　5　6　7

D　異なる文化から来た人とかかわるとき、自分の文化的知識の正確さを確認する。

1　2　3　4　5　6　7

E　他の文化の法制度や経済システムを理解している。

1　2　3　4　5　6　7

F　他の言語の規制（例、語彙、文法）を理解している。

1　2　3　4　5　6　7

G　他の文化の文化的価値や宗教的信仰を理解している。

1　2　3　4　5　6　7

H　他の文化の婚姻制度を理解している。

1　2　3　4　5　6　7

I　他の文化の美術や工芸を理解している。

1　2　3　4　5　6　7

J　他の文化での非言語行動の表現ルールを理解している。

1　2　3　4　5　6　7

K　異なる文化から来た人とかかわるのを楽しむ。

1　2　3　4　5　6　7

ecute

Education in Cultural Understanding, Technology Enhanced

L なじみのない文化において、地元の人とうまく付き合ってゆける自信がある。
1 2 3 4 5 6 7

M 目新しい文化に適応するストレスにきっとうまく対処できる。
1 2 3 4 5 6 7

N なじみのない文化に住むことを楽しむ。
1 2 3 4 5 6 7

O 異なる文化での買い物事情にうまく適応できる自信がある。
1 2 3 4 5 6 7

P 異文化コミュニケーションを行うときには、言語的な行動（例、アクセント）を変える。
1 2 3 4 5 6 7

Q 異文化コミュニケーションで必要とされる場合は言語的な行動（例、アクセント、抑揚）を変える。
1 2 3 4 5 6 7

R 様々な異文化コミュニケーションに適応するために、休止や無音を使う。
1 2 3 4 5 6 7

S 異文化コミュニケーションで必要とされる場合には話速を変える。
1 2 3 4 5 6 7

T 異文化コミュニケーションで必要とされる場合には、非言語行動を変化させる。
1 2 3 4 5 6 7

U 異文化コミュニケーションで必要とされる場合には、表情の使い方を変化させる。
1 2 3 4 5 6 7

付録2　日本語版TIPI

INTERCULTURAL TRAINING PROGRAMME

THE TIPI

各性格特性について、同意する/同意しない程度を下の表現の番号を用いて記入してください。各性格特性の組において、あなたに当てはまる程度が異なり、どちらか一方が他方よりより強い場合でも、各組に対して当てはまる程度の評定値を選んで下さい。

1=全く同意しない

2=中程度に同意しない

3=少し同意しない

4=同意も非同意もしない

5=少し同意する

6=中程度に同意する

7=大変同意する

私は自分のことを～だと思う:

外向的、熱狂的_____

批判的、喧嘩早い_____

便りになる、自制力のある_____

心配な、動揺しやすい_____

経験に開放的な、複雑な_____

寡黙な、無口な_____

共感的な、心温かい_____

順序／秩序立っていない、不注意な_____

物静かな、感情的に安定した_____

慣習的な、非創造的な_____

ecute
Education in Cultural Understanding, Technology Enhanced

付録3　異文化コミュニケーション質問紙

質問紙

この質問紙への回答を始める前に，このイントロダクションを読んでください．

以下の質問は海辺のバーでのやり取りについてです．

あなたの正直な意見を答えてください．答えに正誤はありません．

我々にご協力いただく時間と労力に感謝いたします．あなたのご意見は我々の研究には大変貴重なものです．

*必須

1. ユーザ名 *

_____

以下の質問についてあなたの答えを記述してください．

2. 登場人物は，社会的に適切にふるまっていましたか？もしそうでないなら，どの場面において社会的に不適切であったか述べてください．*

_____
_____
_____
_____
_____

3. キャラクタとのやり取りの間，あなたは何に集中していましたか？ *

_____
_____
_____
_____
_____

4. 以下の記述についてのあなたの意見をもっともよく表す選択肢を選んでください．*
1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く同意しない	同意しない	やや同意しない	同意も非同意もしない	やや同意する	同意する	大変同意する
私のこれらの登場人物についての全体的な印象は肯定的です	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物は私を歓迎されない気分にさせる	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物たちとやり取りするのはイライラする	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物達は私とやり取りするのを楽しんでいた	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物たちは私の存在に困惑していた	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
私の存在は登場人物たちを不快にしていた	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
私は登場人物たちに対して適切にふるまった	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物たちは私に対して適切にふるまった	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
私は登場人物とのやり取りを楽しんだ	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
登場人物たちは私を自分たちの仲間として扱った	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯
海辺のバーでのやり取りの間退屈だった	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

5. バーでやり取りした登場人物たちについて，以下の形容詞に関してどのように評価しますか *
1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く信頼できない	信頼できない	やや信頼できない	どちらでもない	やや信頼できる	信頼できる	大変信頼できる
信頼できる／信頼できない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

6. *
1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く断定的でない	断定的でない	あまり断定的でない	どちらでもない	やや断定的である	断定的である	大変断定的である
断定的な／断定的でない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

7. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く尊敬できない	尊敬できない	あまり尊敬できない	どちらでもない	やや尊敬できる	尊敬できる	大変尊敬できる
尊敬できる／尊敬できない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

8. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	大変無礼である	無礼である	やや無礼である	どちらでもない	やや丁寧である	丁寧である	大変丁寧である
丁寧な／無礼な	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

9. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	大変親しみやすくない	親しみやすくない	あまり親しみやすくない	どちらでもない	やや親しみやすい	親しみやすい	大変親しみやすい
親しみやすい／親しみやすくない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

10. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	大変緊張した	緊張した	やや緊張した	どちらでもない	ややリラックスした	リラックスした	大変リラックスした
緊張した／リラックスした	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

11. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く好感の持てない	好感の持てない	あまり好感の持てない	どちらでもない	やや好感の持てる	好感の持てる	大変好感の持てる
好感の持てる／好感の持てない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

12. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	全く思いやりのない	思いやりのない	あまり思いやりのない	どちらでもない	やや思いやりのある	思いやりのある	大変思いやりのある
思いやりのある／思いやりのない	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

13. *

1 行につき *1* つだけマークしてください。

	大変偏狭である	偏狭である	やや偏狭である	どちらでもない	やや寛容である	寛容である	大変寛容である
寛容な／偏狭な	◯	◯	◯	◯	◯	◯	◯

14. *
1 行につき *1* つだけマークしてください。

	大変快活である	快活である	やや快活である	どちらでもない	やや真面目である	真面目である	大変真面目である
真面目な／快活な	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐

あなた自身についての基本情報を記入してください

15. 性別 *
1 つだけマークしてください。

- ☐ 男性
- ☐ 女性

16. 年齢 *

_____

17. 国籍 *
1 つだけマークしてください。

- ☐ Afghanistan
- ☐ Albania
- ☐ Algeria
- ☐ American Samoa
- ☐ Andorra
- ☐ Angola

（中略）

最後に，コメントや提案があれば以下にご記入ください

18.

_____

_____

_____

_____

_____

以上です！ありがとうございました！

Who Issues Debt Securities in Emerging Economies?

Mamoru Nagano*

Abstract

This paper is the first to focus on firm capital market inaccessibility in emerging economies and investigate it as one of the determinants of firm debt securities issuance in emerging economies. The following results are derived from the empirical analysis. First, country panel analyses show that the debt securities market development and domestic equity market development are positively related. Second, firm panel data analyses of ASEAN countries suggest that debt securities issuers and frequent equity issuers overlap. Third, analyses of daily stock price data of ASEAN firms reveal that debt securities are not issued for infrequent equity issuers, regardless of the stock price, whereas frequent equity issuers choose debt securities issuance as a funding tool when the stock price is low. Fourth, as compared to accessible frequent equity issuers, market-inaccessible firms are less sensitive to the financial cost of debt securities issuance.

JEL Classification Code: O16, G15, G30
Keywords: Debt Securities Issuance, Asian Bond Market, Corporate Finance

I. Introduction**

A number of existing corporate finance texts have discussed determinants of debt securities issuance in the past. These texts assume that a mature, developed debt securities market exists in the country. Actually, the comprehensive debt securities market statistics published by the Bank for International Settlements suggest that the number of debt securities-issuing firms is extremely small in emerging economies, while hundreds of firms have issued debt securities in the United States, the United Kingdom, and other developed countries. It appears that the number of countries in which a mature, developed debt securities market exists is rather small, and most firms presumably cannot choose the desirable funding tools, including those financially advantageous for them, depending on the degree of the funding market development. Accordingly, it is common for firms in these countries to continuously face a limited number of financing tools.

This paper assumes that potential debt securities issuers face various stages of

* Corresponding author, Professor, Seikei University, 3-3-1 Kichijoji-Kitamachi Musashino City, 180-8633, Japan, Tel/Fax: +81-422-37-3924, Email: mnagano@econ.seikei.ac.jp

** The author thanks various seminar participants for their helpful comments and suggestions. This research is financially supported by Center for Asia and Pacific Studies' Pilot Project of Seikei University.

market development, although the existing literature presupposes the existence of a mature, developed debt securities market in different countries. In other words, we regard that immature stages of funding market development influence the managerial funding decision of the firms especially in emerging economies. Few existing studies have discussed who issues debt securities in emerging economies.

Corporate financing papers have pointed out that trade-off theory and pecking order theory are two major determinants of firm capital structure. Trade-off theory asserts that a firm's securities issuance decisions move its capital structure toward an optimum that is determined by a tradeoff between the marginal costs and benefits. Bankruptcy and agency costs are typical examples of such costs, and typical benefits include debt tax shields and reduction of free cash flow problems. The recent study of Van Binsbergen et al. (2011) empirically verify these costs of debt and compares differences across the various costs. Pecking order theory asserts that firm managers are better informed than external investors. This theory stipulates that outside investors require better information when the firm is funded by equity issuance. In such cases, investors undertake some probability of future loss of the original principal of the investment, but the future investment return is often higher than fixed-income securities. Myers and Majlufs (1984) and a number of other studies support the idea since then. However, recent studies have provided empirical evidence that neither of these theories explain firm funding behaviors in the real world of business.

Trade-off theory suggests that a firm issues debt securities when the stock price is high, since an increase in the market value of capital lowers the funding cost of debt. However, Graham and Harvey (2001) assert that a firm employs equity issuance when the stock price is high in the equity market. Baker and Wurgler (2002) also support the idea that a firm issues equity when the stock price is high. Baker and Wurgler (2002) contribute the idea that firms issue equity when the stock prices are high if a high stock price coincides with low adverse selection. Other studies, such as that of Asquith and Mullins (1986), also support this "timing theory." While the empirical evidence presented by Graham and Harvey (2001) and Baker and Wurgler (2002) cast doubt on the validity of the trade-off theory, the very influential study of Fama and French (2005) conclude that more than fifty percent of the U.S. firms violate the pecking order theory. The "timing theory" and "time-varying theories" are accordingly regarded as new trends of corporate financing theory concerning a firm's securities issuance decision.

Dittmar and Thakor (2007) develop the above recent "timing theories," suggesting that a firm issues equities when the future perspectives of stock price and corporate performance of managers and shareholders are consistent, not necessarily when a stock price is high. Billiet et al. (2007) also point out that a firm does not always issue equities when a stock price is high but is likely to issue equity when the growth opportunity is high. The firm often chooses to prolong the maturity of debt securities depending on the types of debt securities' covenants, since it mitigates agency costs of debt. Datta et al. (2005) suggest that the ownership structure of the firm also influences the debt maturities regardless of the stock price. The existing literature mostly assumes that

firms automatically issue debt securities when they do not issue equity. Although there were a number of determinants of equity issuance studies, there has been relatively little scholarship on debt securities. Most previous studies hypothesize that firms issue debt securities when they do not choose equity issuance and their empirical analyses support this. Hence, determinants of equity issuance studies virtually investigate determinants of debt securities issuance to derive conclusions for when firms do not choose equity issuance. Therefore, the literature on determinants of equity issuance studies can be translated as the examination of determinants of debt securities issuance.

Many studies have predominantly employ U.S. firm data as empirical samples and assume that equity issuance and debt securities issuance are two alternative financing tools depending on stock price. In contrast, Brav (2009) focuses on firm capital market accessibility and provides evidence that it influences firm financing decisions. His study examines both publicly listed firms and private firms and points out the differences of the funding decision behaviors. A chief conclusion of the study is that accessibility to the market, rather than agency costs and stock price, is the major factor in determining financing. The study also posits that even the developed U.K. capital market is of a two-layer structure; that is, the corporate financing behaviors of market-accessible firms and inaccessible firms are different, with the determinant of securities issuance varying by layer. Goyal et al. (2011) also employ this approach in examining eighteen European firms. They conclude that firm debt choice decision is also different between market-accessible and inaccessible firms in other European countries. Although Billet et al. (2011) do not directly focus on the determinants of firm debt securities issuance, they examine the relationship between capital market accessibility and post-issuance firm performance. This suggests a trend in recent studies focused on examining the differences between market-accessible firms and inaccessible firms.

The purpose of the present study is to examine the determinants of firm debt securities issuance in emerging economies, where the number of market users is smaller than that in developed countries. In this study, we take the following approach. First, we empirically verify the relationship between the equity market and debt securities market development in emerging economies. This empirical analysis is designed to verify that equity market development induces debt securities market development under macroeconomic financial deepening process. Second, we verify the relationship between the number of equity issuers and that of debt securities market users with the firm data of four emerging economies in the ASEAN group (Indonesia, Malaysia, Thailand, and the Philippines.) Third, we examine the relationship between firm stock price and debt securities issuance in these four countries. Lastly, we focus on the differences of firm market accessibility in emerging economies and analyze its influence on the firm debt securities issuance. Based on the empirical evidence derived from the above analyses, we conclude that stock market development induced debt securities market development and stock price and financing costs influence the debt securities issuance for frequent equity issuers. However, the number of these market-accessible firms is extremely small in emerging economies, and the inaccessible firms tend not to issue debt securities no

matter what the stock price and financing costs are.

II. Data

We prepare four datasets. The first comprises a 27-country panel data from 1990 to 2008. The purpose of this dataset is to examine the relationship between equity market development and debt securities market development within emerging economies. The second dataset is the firm panel data from 1997 to 2008 of the four ASEAN countries: Indonesia, Malaysia, Thailand, and the Philippines. This data serves to examine the relationship between firm capital market accessibility and the debt securities issuance. The third dataset comprises ASEAN individual firm daily stock prices and data about firm managerial performance. This dataset is prepared to verify the relationship between stock price and debt securities issuance. The fourth dataset also comprises ASEAN firm panel data that examines the different funding behaviors between capital market-accessible firms and inaccessible firms. The difference between the fourth and second datasets is that while the latter excludes firms from the sample once they have issued debt securities during the sample period, the former includes firms even after the debt securities issuance and some firms issue debt securities more than twice during the period.

The first dataset is obtained from the Thomson Reuters, the Bank for International Settlements and the International Monetary Fund. We obtain the number of debt securities issuers, the number of equity issuers, and other related financial market data from the Thomson Reuters "Thomson Bank One." We obtain the total amount of outstanding sovereign bonds data from the Bank for International Settlements website. The market interest rate, total amount of outstanding bank lending, and gross domestic products are obtained from the IMF International Finance Statistics Yearbook CD-ROM version. The countries in the country panel data include Indonesia, Malaysia, Thailand, the Philippines, Hong Kong, Australia, New Zealand, Singapore, Korea, China, India, Japan, Argentina, Brazil, Chile, Mexico, Czech, Hungary, Russia, Turkey, Poland, Italy, Germany, France, United Kingdom, Canada, and the United States. Among these original countries, we define the ten lowest per capita income countries (Indonesia, Malaysia, Thailand, the Philippines, Argentina, Brazil, Chile, Mexico, Turkey, and Poland) as emerging economies and compare the empirical results of the original sample with that of emerging economies.

The second dataset is obtained from Thomson Reuters "Thomson Bank One." The data include equity issuance, debt securities issuance, and firm financial information. The data are drawn from publicly listed non-financial firms of both debt securities issuers and non-issuers in 1997–2008. We define that "frequent equity issuers" approximates "capital market-accessible firms." We regard that for a firm to be considered capital market accessible, it has to issue public equity more than twice. The purpose of the second analysis is to examine who issues debt securities in emerging economies. Therefore, we exclude the firm data once the firm issued debt securities in 1997–2008. In other words,

the maximum frequency of debt securities issuance is “one” for all sample firms and firms do not exist in the sample after the issuance. In addition, reflecting a study of Billett et al. (2007), which focus on types of debt securities covenants, we exclude firms that issued secured debt securities, warrant bond, convertible bond, and maturity bonds of less than one year.

The third dataset is prepared to examine the relationship between firm stock price and debt securities issuance. The above second dataset defines market-to-book ratio, that is, the market value of equity issued plus the book value of liability, divided by the book value of total assets, as a proxy of financial year-end corporate value. In the third analysis, to demonstrate the relationship between stock price and debt securities issuance, we employ firm individual daily stock price and financial data. We verify the relationship between firm stock price and debt securities issuance by using market-adjusted 3-month, 6-month and 12-month stock price returns preceding the issue. The daily stock price data is obtained from Bloomberg. The dataset employs data for firms issued equities or debt securities in 1997–2007.

The fourth empirical analysis employs the firm financial data of the four aforementioned countries. The purpose of the analysis is to verify the differences of fundraising behaviors between market-accessible firms and inaccessible firms. The employed data are obtained from Thomson Reuters “Thomson Bank One” as well as the second analysis data, but the fourth dataset includes financial data of frequent debt securities issuers in the post-issuance period.

Table I Geographical and Annual Data Distribution

(A) Annual Distribution of Country Panel Data

(a) The Number of Sample Countries

	Model A-B	Model C	Model D-E
1990	20		19
1991	20		19
1992	20		20
1993	21		20
1994	21		21
1995	22		21
1996	22		22
1997	22	22	22
1998	24	24	23
1999	24	24	24
2000	25	25	24
2001	27	27	27
2002	27	27	27
2003	27	27	27
2004	27	27	27
2005	27	27	27
2006	27	26	27

2007	27	26	27
2008	27	26	27
	457	308	451

Source: Thomson Reuters, *Thomson Bank One*, International Management Development (IMD), *World Competitiveness*, various years, and the Bank for International Settlements, http://www.bis.org/statistics/index.htm

Note: The number of sample countries varies because Eastern European countries, (Czech Republic, Hungary, Poland, etc.) were added to the original source in 1995. Besides, IMD survey data started the questionnaire surveys concerning "shareholders' rights" in 1997 in *World Competitiveness*. The number of countries targeted for the research varies year to year.

Table I-*Continued*

(b) Annual Average of the Number of Securities Issuers in Sample Countries

	1990-1995	1996-2000	2001-2005	2006-2008	1991-1995	1996-2000	2001-2005	2006-2008
	Debt Securites Issuers				Equity Issuers			
Indonesia	13	18	24	29	22	34	47	21
Malaysia	14	37	80	119	26	35	71	91
Thailand	35	36	36	42	6	28	56	56
Philippines	9	16	24	38	14	19	26	45
Hong Kong	21	59	69	45	26	148	219	379
Australia	32	122	291	415	8	27	754	1,451
New Zealand	2	5	5	8	9	7	30	33
Singapore	10	31	65	62	14	35	66	129
Korea	162	329	619	225	8	20	249	558
China	4	7	6	58	9	25	25	141
India	2	6	110	238	46	27	42	198
Japan	423	629	368	365	61	220	331	292
Argentina	35	83	16	8	15	20	2	3
Brazil	100	119	63	65	43	38	10	37
Chile	11	18	34	44	36	43	13	5
Mexico	122	51	67	66	30	26	5	8
Czech	1	0	1	4	1	6	2	1
Hungary	0	0	2	4	3	10	2	0
Russia	0	3	14	44	2	8	9	25
Turkey	1	3	1	4	1	8	4	10
Poland	0	1	1	1	2	22	7	23
Italy	52	44	102	202	31	34	38	38
France	243	178	217	296	44	85	71	62
Germany	434	683	523	329	74	78	53	62
United Kingdom	106	301	241	359	115	285	448	489
Canada	95	174	235	240	18	20	165	688
United States	1,539	2,895	1,871	1,217	880	967	911	952

Source: Thomson Reuters, *Thomson Bank One*

Note: Debt securities are defined as the total of fixed income securities excluding those with less than one-year maturity, the secured debentures, convertible debentures and warrant debentures. The definition of equity issuance is issued ordinary common shares, but it does not include initial public offerings.

(B) Annual Distribution of ASEAN Firm Panel Data

	Indonesia			Thailand			Malaysia			Philippines		
	Total Sample Firms	Debt Securities Issuers	Equity Issuers	Total Sample Firms	Debt Securities Issuers	Equity Issuers	Total Sample Firms	Debt Securities Issuers	Equity Issuers	Total Sample Firms	Debt Securities Issuers	Equity Issuers
1997	116	31	26	192	19	3	288	50	22	100	14	10
1998	114	0	24	191	7	49	308	25	15	100	9	20
1999	127	2	19	193	38	26	316	10	39	113	9	7
2000	149	14	14	193	33	22	335	18	64	136	4	5
2001	185	6	9	263	11	28	506	109	30	173	7	2
2002	200	10	11	267	36	16	560	30	49	172	16	3
2003	212	26	9	283	36	43	596	35	88	178	17	2
2004	214	34	25	300	33	50	648	55	74	188	17	3
2005	216	18	15	337	42	48	713	92	41	195	16	7
2006	216	17	9	373	32	35	754	100	41	188	19	11
2007	216	16	12	386	49	32	740	83	95	183	22	33
2008	211	10	7	382	45	62	712	76	44	175	15	12
Total	2,176	184	180	3,360	380	414	6,476	683	602	1,901	166	115

Source: Thomson Reuters, *Thomson Bank One*

Note: The data includes firms that issued debt securities after the second issuance in 1997–2008. The definition of equity issuance does not include initial public offerings but does include preferred stocks and subordinated debentures. Debt securities are defined as the total of fixed income securities excluding those with less than one-year maturity, the secured debentures, convertible debentures and warrant debentures.

III. Empirical Models

1. Analysis of Country Panel Data

The first analysis of this paper examines the relationship between stock market development and debt securities market development on the macroeconomic level. In addition to corporate financing studies, Wurgler (2000), Demirguc-Kunt and Levine (2001) and Bondt (2005) also assert the significant relationship of the above two markets. These studies verify the hypothesis that the financial markets and economic development are positively correlated under the financial deepening process led by economic development. What they explain is that initial fixed costs are embedded in a firm when the firm initially issues equities. Therefore, marginal costs do not increase when the firm additionally issues any securities following the disbursement of the initial fixed costs. The fixed costs include those related to the prospectus of securities issuance, reform costs

for intra-firm accounting system, costs for investor relations such as quarterly financial disclosure, and costs for enhancing the bilateral relationship with a lead managing underwriter.

It is also important to add control variables to examine the positive relationship between stock market and debt securities market development. Previous studies also suggest that various factors other than equity market development influence the debt securities market development. In particular, Davis (2001) and Bolton and Freixas (2006) suggest that a limit of growth in the domestic bank lending market induces debt securities market development. Their theoretical model asserts that many firms depend on commercial bank borrowings at the initial stage of economic development. However, commercial banks soon face a limit of growth in their bank capital and the fast-growing bank borrowing demands of non-financial firms exceed the required bank capital in a high-growth economy. Those non-financial firms are accordingly forced to fund the debt securities market, thereby promoting market development. In addition, Bondt (2005) concludes that the financing costs of debt securities issuance compared with the costs of equity issuance and bank borrowings is also important in determining a firm's choice of funding tool. He calculates the relative financing cost of debt securities issuance by comparing other alternative financing costs, that is, bank borrowing costs and equity issuance costs, and concludes that the relative cost influences the funding decision whether the firm chooses debt securities issuance or not.

Reflecting the existing literature, we employ the number of firms that have undergone debt securities issuance divided by the number of publicly listed firms (*DSIssue*) as a dependent variable and the number of firms issued equities divided by the number of publicly listed firms (*EquityIssuer)* as an independent variable in Model A. We add independent variables that represent the size of the domestic bank lending market (*BankLoan*), financial cost (*FinanceCost*), the degree of macroeconomic development (*PerCapitaGDP*), and the size of sovereign bond market (*Sovereign*) as control variables. We employ deposit money bank claims on private sector to nominal GDP as a proxy of the size of the bank lending market. We calculate the relative cost of debt securities issuance by using the national averages of debt securities interest, bank borrowing interest rates and the inverse of stock price earnings ratio. The natural logarithm of U.S. dollar-denominated per capita GDP is employed as a proxy for macroeconomic development, and outstanding sovereign bond issued to nominal GDP, as a proxy for the sovereign bond market development.

In Models B-E, we additionally employ the following four variables: the intersection of *BankLoan* and *PerCapitaGDP*, the degree of legal system development in finance (*Legal*), the ratio of publicly offered debt securities to total debt securities issued (*PublicOffer*) and the ratio of local currency-denominated debt securities (*Currency*) to the total debt securities issued. As for the degree of legal system development in finance, we employ as a proxy variable the international comparative scores of "Shareholders' Rights" based on survey research by the International Institute for Management Development (IMD). An additional two variables—the ratio of publicly offered debt

securities to total debt securities issued and the ratio of local currency-denominated debt securities to total debt securities issued—are calculated by using data from Thomson Reuters. We employ these data because investors more aggressively participate in the debt securities market when their rights are legally protected. Investors also bolster market confidence when the market has a high publicly offered ratio. Especially, foreign investors are willing to participate in the market when the local currency of the country circulates internationally and when a high ratio of debt securities denominated in that currency are issued there. We employ the methodology of panel data estimates.

$$\begin{aligned} DSIssue_{it} = {} & \alpha_0 + \alpha_1 EquityIssuer_{i,t} + \alpha_2 BankLoan_{i,t} + \alpha_3 FinanceCost_{i,t} \\ & + \alpha_4 PerCapitaGDP_{i,t} + \alpha_5 Sovereign_{i,t} + \alpha_6 Dev_{i,t}^{k} \\ & + \sum \beta_t^1 YearDummy + \sum \beta_{ind}^2 IndustryDummy + \varepsilon_{i,t} \end{aligned} \tag{3. 1}$$

Table II Definition of Variables and Descriptive Statistics: Country Panel Data

(A) Definition of Variables

	Definition	Expected Sign of Parameter	Source
$DSIssue_{i,t}$	Number of debt securities issuers divided by number of publicly listed firms in country i at year t	Dependent Variable	Thomson Reuters
$EquityIssuer_{i,t}$	Number of equity issuers divided by number of publicly listed firms in country i at year t	+	Thomson Reuters
$BankLoan_{i,t}$	Outstanding commercial bank loan divided by nominal gross domestic product in country i at year t	+	IMF *International Financial Statistics CD-ROM*
$FinanceCost_{i,t}$	Relative financing cost of debt securities in country i at year t; Averaged corporate bond yield-{0.5*averaged interest payment/outstanding liability +0.5*1/(price earning ratio+annual change in consumer price index)}	-	Thomson Reuters
$PerCapitaGDP_{i,t}$	Natural logarithm of dollar-denominated per capita gross domestic product in country i at year t;	+	*International Financial Statistics CD-ROM*
$Sovereign_{i,t}$	Outstanding government bonds issued to nominal GDP in country i at year t	+/-	*Bank for International Settlements*
$Legal_{i,t}(Deb_{i,t}^{1})$	IMD survey score of the degree of investor protection legal system development, titled survey score of "Shareholders' Right" published in "*World Competitiveness*" in country i at year t	+	IMD Business School, *World Competitiveness* 1997–2008
$PublicOffer_{i,t}(Deb_{i,t}^{2})$	Ratio of public offering debt securities to total debt securities issued in country i at year t	+	Thomson Reuters
$Currency_{i,t}(Deb_{i,t}^{3})$	Ratio of local currency denominated debt securities to total debt securities issued in country i at year t	+	Thomson Reuters

Table II-*Continued*

(B) Descriptive Statistics

		DS Issue	*Equity Issuer*	*Bank Loan*	*Finance Cost*	*Per Capita GDP*	*Sovereign*	*Legal*	*Public Offer*	*Currency*
All Countries (N=27)										
1990	Mean	0.349	0.267	63.716	0.044	8.573	0.707	N.A.	0.328	0.423
	s.d.	0.615	0.482	46.575	0.090	1.274	0.374	N.A.	0.422	0.426
1995	Mean	0.678	0.645	68.020	0.051	8.829	0.761	N.A.	0.406	0.450
	s.d.	0.715	0.513	47.047	0.063	1.275	0.300	N.A.	0.339	0.336
2000	Mean	0.275	0.191	69.386	0.143	8.759	0.826	6.376	0.527	0.591
	s.d.	0.450	0.285	45.178	0.100	1.257	0.240	1.329	0.366	0.340
2005	Mean	0.201	0.166	73.446	-0.011	9.164	0.796	5.932	0.444	0.573
	s.d.	0.208	0.212	40.516	0.252	1.214	0.197	1.135	0.331	0.324
2008	Mean	0.236	0.326	81.177	0.054	9.526	0.790	6.110	0.503	0.706
	s.d.	0.288	0.494	45.098	0.131	1.100	0.209	1.078	0.368	0.308
Total	Mean	0.388	0.300	72.034	0.057	8.882	0.739	6.180	0.429	0.537
	s.d.	0.868	0.556	46.063	0.096	1.258	0.281	1.223	0.361	0.372
Emerging Economies (N=10)										
1990	Mean	0.691	0.392	36.441	0.088	7.587	0.715	N.A.	0.254	0.286
	s.d.	0.866	0.624	28.186	0.051	0.829	0.423	N.A.	0.428	0.488
1995	Mean	0.356	0.381	43.416	0.074	7.857	0.799	N.A.	0.372	0.421
	s.d.	0.363	0.309	47.296	0.040	0.912	0.256	N.A.	0.361	0.363
2000	Mean	0.205	0.071	45.890	0.136	7.829	0.771	6.166	0.580	0.559
	s.d.	0.287	0.044	39.117	0.095	0.965	0.344	0.725	0.390	0.387
2005	Mean	0.134	0.046	45.938	-0.074	8.091	0.762	5.681	0.393	0.525
	s.d.	0.124	0.040	38.648	0.159	0.866	0.264	0.806	0.323	0.353
2008	Mean	0.273	0.290	41.144	0.040	8.526	0.720	6.004	0.489	0.711
	s.d.	0.429	0.581	31.857	0.006	0.834	0.266	0.768	0.373	0.327
Total	Mean	0.382	0.218	46.247	0.065	7.885	0.709	6.041	0.370	0.484
	s.d.	0.007	0.320	44.695	0.106	0.900	0.294	0.855	0.344	0.405

Note: "Emerging Economies" are the lowest 10 per capita GDP countries/regions of Indonesia, Malaysia, Thailand, the Philippines, Argentina, Brazil, Chile, Mexico, Turkey, and Poland of the sample countries.

2. Analysis with ASEAN Firm Data

(a) Capital Market Accessibility and Debt Securities Issuance

The second empirical analysis of this paper employs ASEAN firm data to analyze the relationship between the firm equity issuance and the debt securities issuance. We verify the hypothesis that the more a firm issues equities in the stock market, the more it also issues debt securities. We estimate empirical equation (3.2) and examine the relationship between the equity issuance and debt securities issuance to verify our hypothesis. We employ the dependent variable $Bond^1$ that equals the value of firm j's

debt securities issued at year t divided by the book value of outstanding liability at year t-1. The independent variables include the cumulative frequency of equity issued since 1996 (*EquityIssueFreq*) by year *t-1*, proxy of firm *j*'s growth opportunity (*MBR*) at year *t*, relative financial cost of debt securities issuance (*FinanceCost*) at year *t*, firm *j*'s future earnings per capita at year *t+1*, proxy of firm *j*'s internal funding ability (*ROA*) at year *t-1*, firm size (*ASSET*) at year *t*, and debt to equity ratio (*DER*) at year *t-1*. The positive significant parameter of the independent variable of *EquityIssueFreq* is expected to fulfill the above hypothesis. The parameters of *MBR*, *FinanceCost*, *EPS*, *Post*, *ROA*, and *DER* are all expected to be negative. We estimate (3.2) by the Tobit estimator.

$$\begin{aligned} Bond^{1}_{j,t} &= \delta_0 + \delta_1 EquityIssueFreq_{j,t} + \delta_2 MBR_{j,t} + \delta_3 FinanceCost_{j,t} \\ &+ \delta_4 EPSPost_{j,t+1} + \delta_5 ROA_{j,t-1} + \delta_6 ASSET_{j,t} + \delta_7 DER_{j,t-1} \\ &+ \sum \mu^{1}_{t} YearDummy + \sum \mu^{2}_{ind} IndustryDummy + \kappa_{j,t} \end{aligned} \tag{3.2}$$

$$\hat{P}(Invest) = \Phi(Z_{j,t})$$

$$\begin{aligned} Z_{j,t} &= \lambda_0 + \lambda_1 MBR_{j,t} + \lambda_2 ROA_{j,t-1} + \lambda_3 ASSET_{j,t} + \lambda_4 DER_{j,t-1} \\ &+ \sum \xi^{1}_{t} YearDummy + \sum \xi^{2}_{ind} IndustryDummy + \tau_{j,t} \end{aligned} \tag{3.3}$$

We also estimate equations (3.2) and (3.3) according to Heckman's two-step estimation, which serves to confirm the robustness of the above empirical results by considering possible existing sample biases. Some firms may have a strong funding demand for fixed asset investment and others might not, a difference that may influence the firm's debt issuing decision. The first-step estimation takes the fixed asset investment dummy ($Z_{i,t}$) as the dependent variable and performs a probit estimation of the likelihood that the sample firm has a strong funding demand and increases fixed asset investment at year *t*. The second step is the linear regression of the determinants of debt securities issuance as expressed in (3.2). In model (3.3), dependent variable of firm *j* equals one when the firm's net increase in the fixed investment is a positive value at year t. We employ *MBR*, *ROA*, ASSET, and *DER* as independent variables in model (3.3).

(b) Stock Price and Debt Securities Issuance

The third part of this paper investigates the relationship between firm stock price and the debt securities issuance. We extract equity-issuing and debt security-issuing firms and matched their daily stock price and financial data. The stock prices are average market-adjusted three-, six-, and twelve-month returns preceding the issue. The market-adjusted returns are defined as raw return minus market index return. We also employ *FinanceCost*, *EPS_Post*, *ROA*, *ASSET*, and *DER* as independent variables in this model.

$$Bond_j^1 = \omega_0 + \omega_1 StockPrice_j + \omega_2 FinanceCost_j + \omega_3 EPSPost_j + \omega_4 ROA_j + \omega_5 ASSET_j + \omega_6 DER_j + \sum \nu_t^1 YearDummy + \sum \nu_d^2 FirmDummy + \zeta_j \quad (3.4)$$

We use publicly listed non-manufacturing firms that experience equity or debt securities issuance in 1997–2008. Individual firm dummy variables are added to the equation since several firms issued securities more than twice. The hypothesis of this analysis is that a firm tends to issues debt securities in emerging economies when the stock price is low. To support this hypothesis, the expected sign of the parameter of the variable "*StockPrice*" is negative.

3. Capital Market Accessibility and Debt Securities Issuance

The forth analysis of this paper investigates the relationship between capital market accessibility and debt securities issuance of the firm by using ASEAN data. The employed dataset is partly consistent with the dataset used in empirical model (3.2), but this dataset includes sample firm financial data after the debt securities issuance.

$$\begin{aligned} Bond_{j,t}^2 = {} & \theta_0 + \theta_1 EqMBR_{j,t} + \theta_2 NonEqMBR_{j,t} + \theta_3 EqFinanceCost_{j,t} \\ & + \theta_4 NonEqFinanceCost_{j,t} + \theta_5 EqROA_{j,t-1} + \theta_6 NonEqROA_{j,t-1} \\ & + \theta_7 EqASSET_{j,t} + \theta_8 NonEqASSET_{j,t} + \theta_9 EqDER_{j,t-1} \\ & + \theta_{10} NonEqDER_{j,t-1} + \sum \varsigma_t^1 YearDummy \\ & + \sum \varsigma_{ind}^2 IndustryDummy + \xi_{j,t} \end{aligned} \quad (3.5)$$

The empirical equation (3.5) employs dependent variable $Bond^2$, which equals one when firm j issues debt securities at year t. The independent variables that we employed are the proxy of firm j's growth opportunity (*MBR*) at year t, relative financial cost of debt securities issuance (*Finance Cost*) at year t, proxy of firm j's internal funding ability (*ROA*) at year *t-1*, firm size (*ASSET*) at year t and debt to equity ratio (*DER*) at year *t-1*. The regression includes a constant, year dummies and two-digit SIC code dummies. The major difference between equations (3.5) and (3.2) is that (3.5) employs the intersected variables with equity issuance and non-issuance dummy variables that equal one when the firm experienced equity issuance and did not experience the issuance in 1997–2008. Equity Issued X (Equity non-Issued X) is the variable X interacted with a dummy equal to one (zero) if the firm is a frequent equity issuer and zero (one) if it is an infrequent equity issuer. I report for each variable X the p-value of the test of equality of coefficients Equity Issued X = Equity non-Issued X. Since the model is not linear, I additionally compare the partial effects of the explanatory variables on frequent equity issuers and infrequent equity issuers' odds ratio of a debt securities issuance relative to the alternative of no debt securities issuance.

The expression in equation (3.5.1) depends on the value of the explanatory variables. Therefore, I calculate the values of the expression in equation (3.5.1) for both frequent

equity issuers and infrequent equity issuers at the mean of the sample characteristics. I first compute for each infrequent equity (frequent equity) issuer the partial effect of the given explanatory variable on the odds ratio and the partial effect if it were a frequent equity issuer (infrequent equity issuer). I report the percentage of observations in which the partial effect is larger in absolute value if the firm were a frequent equity issuer versus if it were an infrequent equity issuer.

$$\frac{\partial OddsRatio(DebtIssue \cdot NoIssue|x)}{\partial x_j} = exp(x\pi_{DebtIssue})\,\pi_{DebtIssue,\,j} \tag{3.5.1}$$

where

$$\partial OddsRatio\,(DebtIssue \cdot NoIssue|x) = \frac{P(DebtIssue)}{P(NoIssue)} = exp(x\pi_{DebtIssue}) \tag{3.5.2}$$

The hypothesis of this analysis is that the higher the capital market accessibility of the firm, the more frequently the firm will issue debt securities. Therefore, the parameters of *EqMBR* and *EqFinanceCost* are expected to be negative since our hypothesis is that market-accessible firms issue debt securities when the growth opportunity is low and that they are sensitive to financing costs. On the other hand, we also hypothesize that capital market-inaccessible firms will not issue debt securities regardless of the growth opportunity and financial costs. Therefore, the parameters of *NonEqMBR and NonEqFinanceCost* are expected to be insignificant.

Table III Definition of Variables and Descriptive Statistics: ASEAN Firm Data

(A) Definition of Variables

Variables	Definition	Expected Sign of Parameter	Source
$Bond^{1}_{j,t}$	Firm *j*'s value of debt securities issued at year *t* divided by book value of outstanding liability at year *t-1*	Dependent Variable	Thomson Reuters
$Bond^{2}_{j,t}$	Equals "1" when firm *j* issue debt securities, otherwise equals "0" at year *t*	Dependent Variable	Thomson Reuters
$EquityIssuanceFreq_{j,t}$	Firm *j*'s cumulative frequency of equity issuance excluding initial public offering since 1996 at year *t*	+	Thomson Reuters
$MBR_{j,t}$	Market value of capital plus book value of liability divided by book value of total assets of firm *j* at year *t*	-	Thomson Reuters
$FinanceCost_{j,t}$	Relative financing cost of debt securities of firm *j* at year *t*; Corporate bond yield-{0.5* interest payment/ outstanding liability +0.5*1/(price earning ratio+annual change in consumer price index)}	-	Thomson Reuters, Bloomberg
$EPS_Post_{j,t+1}$	Firm *j*'s earnings per stock at year *t+1*	-	Thomson Reuters
$ROA_{j,t-1}$	Firm *j*'s return on assets at year *t-1*	-	Thomson Reuters
$SIZE_{j,t}$	Natural logarithm of book value of total assets of firm *j* at year *t*	+	Thomson Reuters
$DER_{j,t-1}$	Firm *j*'s debt to equity ratio at year *t-1*	-	Thomson Reuters

$Z_{j,t}$	Equals "1" when firm *j*'s net fixed asset investment at year *t* increases, otherwise "0"	Dependent Variable	Thomson Reuters
$StockPrice3Month_{j}$	Firm *j*'s market-adjusted stock price return (raw return–market index return) averaged for 3 months	-	Bloomberg
$StockPrice6Month_{i}$	Firm *j*'s market-adjusted stock price return (raw return–market index return) averaged for 6 months	-	Bloomberg
$StockPrice12Month_{i}$	Firm *j*'s market-adjusted stock price returns (raw return–market index return) averaged for 12 months	-	Bloomberg
$EqMBR_{j,t}$	Firm *j*'s MBR interacted with a dummy equal to one if the firm issues equities by *t*	-	Thomson Reuters
$NonEqMBR_{j,t}$	Firm *j*'s MBR interacted with a dummy equal to one if the firm has not issued equities by *t*	Insignificant	Thomson Reuters
$EqFinanceCost_{j,t}$	Firm *j*'s FinanceCost interacted with a dummy equal to one if the firm issues equities by *t*	-	Thomson Reuters, Bloomberg
$NonEqFinanceCost_{j,t}$	Firm *j*'s FinanceCost interacted with a dummy equal to one if the firm has not issued equities by *t*	Insignificant	Thomson Reuters, Bloomberg
$EqROA_{j,t-1}$	Firm *j*'s ROA interacted with a dummy equal to one if the firm issues equities by *t-1*	-	Thomson Reuters
$NonEqROA_{j,t-1}$	Firm *j*'s ROA interacted with a dummy equal to one if the firm has not issued equities by *t-1*	Insignificant	Thomson Reuters
$EqSIZE_{j,t}$	Firm *j*'s SIZE interacted with a dummy equal to one if the firm issues equities by *t*	+	Thomson Reuters
$NonEqSIZE_{j,t}$	Firm *j*'s SIZE interacted with a dummy equal to one if the firm has not issued equities by *t*	Insignificant	Thomson Reuters
$EqDER_{j,t-1}$	Firm *j*'s DER interacted with a dummy equal to one if the firm issues equities by *t*-1	-	Thomson Reuters
$NonEqDER_{j,t-1}$	Firm *j*'s ROA interacted with a dummy equal to one if the firm has not issued equities by *t-1*	Insignificant	Thomson Reuters

Table III-*Continued*

(B) Descriptive Statistics

(a) ASEAN Firm Financial Variables

	Debt Securities	Equity Issuance	Equity Issue Freq	MBR	Finance Cost	EPS Post	ROA	ASSET	DER
					Indonesia				
					Securities Issued Firms (N=227)				
mean	2.24E-04	4.41E-04	1.103	1.348	0.017	0.695	0.063	9.473	2.820
s.d.	0.001	0.003	0.641	0.989	0.192	2.326	0.113	1.492	8.357
					Securities Non-Issued Firms (N=1,489)				
mean	0.000	0.000	0.000	1.231	0.012	0.513	0.060	8.929	4.770
s.d.	0.000	0.000	0.000	0.873	0.431	2.130	0.126	1.517	5.138
Difference									
mean				0.116 **	0.004	0.182 *	0.004	0.544 ***	-1.950 ***
median				0.051 **	0.011 **	0.135 **	0.008	0.811 ***	-1.096 ***
					Thailand				
					Securities Issued Firms (N=509)				
mean	0.000	0.002	1.148	1.280	-0.101	0.262	0.032	8.355	2.175
s.d.	0.001	0.029	0.759	0.852	0.155	4.184	0.167	1.575	5.650
					Securities Non-Issued Firms (N=2,451)				
mean	0.000	0.000	0.000	1.103	-0.476	0.190	0.017	7.809	4.271
s.d.	0.000	0.000	0.000	0.776	0.195	1.414	0.162	1.312	6.177
Difference									
mean				0.177 ***	0.375 ***	0.071 ***	0.015 *	0.545 ***	-2.096 ***
median				0.115 ***	0.417 ***	-0.053 ***	0.013 ***	0.475 ***	-0.150 ***

(Continued)

(b) ASEAN Firm Financial Variables-*Continued*

Malaysia									
Securities Issued Firms (N=862)									
mean	0.002	0.014	1.172	1.131	0.008	0.101	0.030	6.020	2.352
s.d.	0.014	0.070	0.661	0.686	0.149	0.908	0.098	1.597	7.715
Securities Non-Issued Firms (N=4,614)									
mean	0.000	0.000	0.000	1.168	0.022	0.051	0.023	6.004	2.668
s.d.	0.000	0.000	0.000	1.057	0.203	0.890	0.109	1.514	7.854
Difference									
mean				0.037	-0.014 **	0.050 *	0.007 *	0.016	-0.316 ***
median				0.019 *	-0.004 **	0.019	0.005 **	0.186 ***	-0.023
Philippines									
Securities Issued Firms (N=155)									
mean	0.000	0.003	1.082	1.408	0.044	0.492	0.029	8.752	2.918
s.d.	0.001	0.027	0.431	0.819	0.498	3.386	0.194	2.174	8.260
Securities Non-Issued Firms (N=1,756)									
mean	0.000	0.000	0.000	0.525	0.112	0.234	-0.006	7.964	4.654
s.d.	0.000	0.000	0.000	0.865	0.573	1.049	0.281	1.833	15.497
Difference									
mean				0.882	-0.069 **	0.258 ***	0.035 **	0.788 **	-1.736 **
median				0.179 ***	-0.035 ***	0.056 **	0.031 ***	0.921 ***	-0.280 ***

Note: This table indicates the mean and median value of the capital market-accessible and inaccessible firms. The difference column is a matched paired t-test of equality of means, and in the median statistics, is a matched paired z-test of equality of medians using the Wilcoxon signed-rank test. *, **, and *** denote statistical significance at the 10%, 5%, and 1% level respectively.

Table III-*Continued*

(c) ASEAN Firm Price Variables

		Debt Securities Issures	Equity Issures	Difference	
a) Indonesia					
Market adjusted 3-month return	mean	0.098	0.369	-0.271	***
	s.d.	0.040	0.141		
Market adjusted 6-month return	mean	0.105	0.692	-0.587	***
	s.d.	0.045	0.172		
Market adjusted 12-month return	mean	-0.041	0.933	-0.974	***
	s.d.	0.049	0.257		
Observations		92	102		
b) Thailand					
Market adjusted 3-month return	mean	0.051	0.076	-0.025	***
	s.d.	0.022	0.037		
Market adjusted 6-month return	mean	0.054	0.271	-0.216	***
	s.d.	0.022	0.065		
Market adjusted 12-month return	mean	-0.031	1.001	-1.033	***
	s.d.	0.048	0.132		
Observations		145	193		
c) Malaysia					
Market adjusted 3-month return	mean	0.075	0.144	-0.068	***
	s.d.	0.025	0.046		
Market adjusted 6-month return	mean	-0.040	0.242	-0.282	***
	s.d.	0.038	0.067		
Market adjusted 12-month return	mean	-0.026	0.527	-0.554	***
	s.d.	0.078	0.129		
Observations		283	209		
d) Philippines					
Market adjusted 3-month return	mean	0.026	0.154	-0.128	***
	s.d.	0.027	0.032		
Market adjusted 6-month return	mean	0.087	0.244	-0.157	***
	s.d.	0.027	0.073		
Market adjusted 12-month return	mean	0.095	0.435	-0.341	***
	s.d.	0.039	0.254		
Observations		75	94		

Note 1: The above table provides means and standard deviations for prior period stock returns for the debt securities and equity issuing groups. *** indicates the two groups are significantly different.

Note 2: The employed market indices are Jakarta Composite Index, SET 100 Index, Kuala Lumpur Composite Index, and Philippine Composite Index and for stock prices of firms in Indonesia, Thailand, Malaysia, and the Philippines, respectively.

IV. Empirical Results

1. Results of Country Panel Data Analysis

Table IV reports empirical results of the relationship between equity market development and debt securities market based on country panel data. Empirical results (i)–(v) are those obtained by the 27-country panel data estimation, and results (vi)–(x) are derived from the data of ten emerging economies. These results suggest that the parameters related to the number of equity issuers (*EquityIssuer*) and per capita GDP (*PGDP*) are all significantly positive. These results are consistent with our hypothesis that equity market development promotes debt securities market development. The stage of economic development is proxied by per capita GDP in the empirical analysis. This result is also consistent with the discussion by Rajan and Zingales (1998) that point out that the economic development induces external funding market development as the financial deepening process progresses. Although we do not report the empirical results in Table IV, we first employed the natural logarithm of U.S. dollar-denominated national GDP instead of per capita GDP, but the parameters are insignificant in all ten equations.

Our results reflect those of Wurgler (2000) and Rajan and Zingales (1998), that firms in a country where a highly developed equity market exists are likely to choose debt securities issuance as a funding technique. According to Bondt (2005), frequent equity issuers cover fixed costs of securities issuance in the past issuance, while additional costs decline as the firm repeatedly issues other securities. The macroeconomic data our study employed provides further evidence of this position. We employed several additional variables as proxies of the degree of equity market development, such as the number of publicly listed firms instead of the number of post-IPO equity issuers (*EquityIssuer*), but those results did not reflect strong performance. Accordingly, we did not include equity IPO as the frequency of the firm equity issuance in the second and fourth analyses to follow, which investigate determinants of debt securities issuance by firm micro-data.

For (i) Model (A), the parameter of the outstanding bank loan divided by nominal GDP (*BankLoan*) is significantly positive. The intersected variable between *BankLoan* and *PerGDP* is also significantly positive in (ii) Model B and (vii) Model B'. Davis (2001) and Bolton and Freixas (2006) state that the debt securities market develops when the growth rate of bank lending market expansion is larger than the growth rate of commercial bank capital. Our results are consistent with those of these studies. The parameter of the degree of financing legal system development (*Legal*) is significantly positive in (iii) Model C and (viii) Model C'. This suggests that financing a legal system that protects investors' rights is another key to developing debt securities market development.

The parameters of the ratio of public offering debt securities (*PublicOffer*) and the ratio of local currency-denominated debt securities (*Currency*) are also significantly positive in (iv) Model D and (v) Model E, respectively. We employ the variable *PublicOffer* as a proxy of the degree of market transparency and fairness for investors. Our interpretation of this result is that national regulatory efforts to improve market

fairness and transparency also invites investors and contributes to the debt securities market development. A result of (v) Model E also suggests that when the local currency of the country is internationally circulated, it promotes foreign investor participation. This is because the local currency-denominated debt securities have high liquidity as the denominated currency internationally circulates. The securities denominated in internationally circulated currency are purchased and traded by foreign investors, which promotes market development. However, the parameter of this variable is insignificant in (x) Model E since most local currencies in the sample emerging economies do not circulate in the international market.

Table IV Estimated Results of Relationship between Equity and Debt Securities Market Development

	(i) Model A		(ii) Model B		(iii) Model C		(iv) Model D		(v) Model E	
	Dependent Variable : DS Is s ue (All Sample Countries)									
	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value
Equity Issuer	0.064 ***	(2.600)	0.068 ***	(2.630)	0.078 ***	(2.880)	0.087 ***	(2.790)	0.080 ***	(2.710)
Bank Loan	0.002 ***	(3.300)	0.014	(0.570)	0.002 **	(2.010)	0.001 **	(2.120)	0.002 **	(2.190)
Finance Cost	0.042 **	(2.290)	0.040 **	(2.160)	0.023 *	(1.940)	0.049 **	(2.430)	0.052 **	(2.350)
Per GDP	0.174 ***	(2.660)	0.228 ***	(2.210)	0.200 ***	(3.780)	0.119 *	(1.830)	0.151 **	(2.010)
Sovereign	0.025	(0.140)	0.023	(0.120)	0.090	(0.710)	0.048	(0.230)	0.046	(0.220)
BankLoan*PerGDP			0.006 *	(1.740)						
Legal					0.031 ***	(2.950)				
Public Offer							0.005 ***	(3.620)		
Currency									0.002 *	(1.650)
const	-4.724 ***	(-2.640)	-6.165 **	(-2.220)	-5.465 ***	(-3.810)	-3.594 **	(-2.030)	-4.320 ***	(-2.110)
YearDummy	Yes		Yes		Yes		Yes		Yes	
Wald chi2	42.94 ***		43.30 ***		59.94 ***		56.24 ***		46.04 **	
Breush Pagan	272.0 ***		271.9 ***		314.2 ***		232.6 ***		202.2 ***	
Model (Fixed or Random)	Random		Random		Random		Random		Random	
Observations	454		454		315		454		454	
Countries	27		27		27		27		27	

(continued)

Table IV-*continued*

	(vi) Model A'		(vii) Model B'		(viii) Model C'		(ix) Model D'		(x) Model E'	
	Dependent Variable : DS Issue (10 Emerging Economies)									
	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value	Coefficient	z-value
Equity Issuer	0.860 ***	(6.280)	0.871 ***	(6.210)	0.776 ***	(7.950)	0.864 ***	(5.900)	0.823 ***	(5.510)
Bank Loan	0.005	(0.570)	-0.002	(-0.540)	-0.003	(-0.450)	0.001	(0.150)	0.005	(0.560)
Finance Cost	-0.009 *	(-1.720)	-0.010 *	(-1.760)	-0.013	(-1.320)	-0.017 *	(-1.800)	-0.018 *	(-1.830)
Per GDP	0.369 ***	(6.330)	0.333 ***	(4.190)	0.754 ***	(7.940)	0.388 ***	(6.700)	0.379 ***	(6.450)
Sovereign	0.544	(1.480)	0.557	(1.530)	0.380	(1.440)	0.683	(1.220)	0.671	(1.700)
BankLoan*PerGDP			0.010 ***	(3.540)						
Legal					0.105 ***	(2.920)				
Public Offer							0.048	(0.370)		
Currency									-0.002	(-1.460)
const	-9.973 ***	(-6.400)	-9.031 ***	(-4.310)	-20.846 ***	(-8.460)	-10.376 ***	(-6.760)	-10.055 ***	(-6.400)
YearDummy	Yes		Yes		Yes		Yes		Yes	
Wald chi2	133.42 ***		137.37 ***		228.96 ***		134.75 ***		132.77 ***	
Breush Pagan	43.3		44.2 ***		123.6 ***		76.2 ***		107.4 ***	
Model (Fixed or Random)	Random		Random		Random		Random		Random	
Observations	169		169		108		169		169	
Countries	10		10		10		10		10	

Note 1: *, **, and *** denote statistical significance at the 10%, 5%, and 1% level respectively.

Note 2: “10 Emerging Economies” are the lowest 10 income per capita countries of Indonesia, Malaysia, Thailand, the Philippines, Argentina, Brazil, Chile, Mexico, Turkey, and Poland.

2. Results of ASEAN Firm Data Analysis

(a) Frequent Equity Issuers and Debt Securities Issuance

Results of the determinants of debt securities issuance of the ASEAN firms are presented in Table V. The parameters of cumulative equity issuance frequency (*EquityIssueFreq*) at the time debt securities are issued are significantly positive in Indonesia, Thailand, Malaysia, and the Philippines based on a Tobit estimation. The parameters of *EquityIssueFreq* are also significantly positive across the four countries according to Heckman's two-step estimation. These results are accordingly robust and consistent with our hypothesis that high capital market accessibility of a firm induces debt securities issuance. In other words, the result indicates that the more frequently a firm issue equities in the stock market, the more the firm issues debt securities.

Another important variable for our hypothesis, parameters of a proxy of growth opportunity, *MBR*, is significantly negative for Indonesia and Malaysia while insignificant for the other two countries, contradicting our expectation that it would be negative.

Further investigation examines the influence of daily stock price data in the next empirical analysis. The parameter of the relative finance cost of debt securities issuance (*FinanceCost*) is significantly negative in Malaysia and insignificant in the other three countries. Our interpretation of the results is that the interest expenses of debt securities influences the debt securities issuance decision in Malaysia but does not determine financing decisions in the other three countries.

The results also suggest that firm size (*ASSET*) also positively influences the debt securities issuance. Studies by Harris and Raviv (1991) and Rajan and Zingales (1995) support that a large size firm is allowed to have a high debt to equity ratio. However, the debt in these texts assumes both outstanding bank borrowing and debt securities and does not discuss the difference between bank borrowing and debt securities issuance. Our result suggests that the larger the firm asset size, the greater degree the firm issues debt securities. Our interpretation of the result is that much time has passed since the establishment of many of these countries' large firms. Therefore, we consider that most of these firms have historically experienced equity issuance and, accordingly, debt securities issuance.

The parameters of return on asset (*ROA*), debt equity ratio (*DER*) and earnings per stock (*EPS_Post*) are mostly insignificant. We proxy *ROA* as a firm's internal funding ability, *DER* as dependency on bank lending (since most of the debt comes from bank lending in ASEAN countries) and *EPS_Post* to analyze investors' perspective on future profitability of the firm. We attribute the insignificance of many of these parameters to the inclusion of numerous non-issuers in the dataset.

Table V Estimation Results of Determinants of Debt Securities Issuance: Frequent Equity Issuers and Debt Securities Issuance

	(A)Indonesia			(B)Thailand		
	(A)Panel Tobit Estimates	(B)Heckman Two-Step Estimates		(A)Panel Tobit Estimates	(B)Heckman Two-Step Estimates	
Dependent Variable	Debt Securities Issuance	Debt Securities Issuance	Probit Fixed Asset Investment	Debt Securities Issuance	Debt Securities Issuance	Probit Fixed Asset Investment
Equity Issue Freq	3.74E-05 ***	0.001 *		1.68E-03 ***	2.00E-04 **	
	(3.760)	(1.770)		(2.630)	(2.400)	
MBR	-1.68E-06 **	-0.001 *	0.062 *	5.00E-07	-0.001	0.023
	(-2.090)	(-1.610)	(1.630)	(0.030)	(-0.590)	(0.610)
Finance_Cost(-1)	-1.72E-04	-0.004		1.10E-04	-4.13E-07	
	(-0.330)	(-0.700)		(1.140)	(-0.030)	
EPS_Post	-1.16E-06	3.56E-06		9.48E-06	0.001	
	(-0.250)	(0.180)		(0.790)	(0.840)	
ROA(-1)	-7.38E-06	0.006	-0.703 **	5.97E-03	0.002	1.107 ***
	(-0.060)	(0.360)	(-2.060)	(0.680)	(0.910)	(5.285)
ASSET	2.23E-05	0.005	0.097 ***	7.67E-03 ***	0.005 ***	7.79E-05 ***
	(1.400)	(0.240)	(3.170)	(4.610)	(3.460)	(3.050)
DER(-1)	-1.41E-07	-0.431	-0.006 *	-2.23E-06 *	-8.40E-06 *	-0.024 ***
	(-0.140)	(-0.030)	(-1.620)	(-1.680)	(-1.610)	(-6.370)
Const	3.44E-04	0.014	-1.101 ***	0.001 ***	-0.005 **	0.351 *
	(0.170)	(0.300)	(-3.660)	(3.600)	(-2.100)	(1.650)
Year Dummies	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Industrial Dummies(2digit)	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Inverse Mills Ratio			-0.002			0.003
			(-0.310)			(0.750)
Wald chi2	19.74		22.25	177.83 ***		176.67 ***
Number of Obserbations	1,373		1,373	2,651		2,649
Number of Firms	222			387		

(*continued*)

Table V-*Continued*

	(C)Malaysia			(D)Philippines		
	(A)Panel Tobit Estimates	(B)Heckman Two-Step Estimates		(A)Panel Tobit Estimates	(B)Heckman Two-Step Estimates	
Dependent Variable	Debt Securities Issuance	Debt Securities Issuance	Probit Fixed Asset Investment	Debt Securities Issuance	Debt Securities Issuance	Probit Fixed Asset Investment
Equity Issue Freq	0.001 ***	0.001 ***		0.010 *	0.008*	
	(4.226)	(3.350)		(1.730)	(1.670)	
MBR	-0.004 ***	-0.005 **	0.074 ***	8.75E-07	-7.84E-07	-0.013
	(-2.720)	(-2.290)	(2.730)	(0.600)	(-0.050)	(-0.860)
Finance_Cost	-5.52E-04 *	-1.24E-04 *		9.75E-07	1.30E-04	
	(-1.660)	(-1.610)		(0.020)	(0.280)	
EPS_Post	1.66E-05	1.00E-04		0.000	2.78E-06	
	(0.150)	(0.920)		(0.030)	(0.130)	
ROA	0.002	0.004 *	2.224 ***	1.05E-04	3.57E-06	0.747 *
	(1.450)	(1.600)	(8.270)	(0.070)	(0.020)	(1.710)
ASSET	4.00E-04 ***	0.002 **	0.054 ***	3.30E-04 **	0.000	0.294 ***
	(2.660)	(2.450)	(2.850)	(1.970)	(1.290)	(6.700)
DER	-1.99E-05	-0.001	-0.048 ***	-1.39E-06	-4.09E-06 *	-0.010 *
	(-1.050)	(-1.100)	(-8.710)	(-0.650)	(-1.650)	(-1.690)
Const	-0.003 **	-0.003 *	0.139	-2.44E-04 *	-3.83E-04	-1.453 ***
	(-2.510)	(-1.810)	(1.050)	(-1.700)	(-1.110)	(-4.010)
Year Dummies	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Industrial Dummies	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Inverse Mills Ratio			0.001			0.002
			(0.630)			(0.530)
Wald chi2	92.64 ***		103.42 ***	34.55		28.69
Number of Obserbations	3,915		3,883	813		813
Number of Firms	745			181		

Note: *, **, and *** denote statistical significance at the 10%, 5%, and 1% level respectively.

(b) Stock Price and Debt Securities Issuance

Table VI illustrates the determinants of debt securities issuance of ASEAN firms, specifically, the relationship between stock price and debt securities issuance. In this dataset, we focused on only securities market user firms. The results show that nine of the twelve parameters of stock price (*StockPrice 3months, 6months, 12months*) have a significant negative influence on the debt securities issuance in Indonesia, Thailand, Malaysia, and the Philippines. The results indicate that most of the parameters are significantly negative in each country; only three parameters—*Stock Price 3months* in Indonesia and *Stock Price 3months* and *6months* in Thailand—are not significant. The negative parameter is consistent with our hypothesis that a capital market-accessible firm would issue debt securities when the stock price in the emerging economies is also not high.

Widely cited studies by Baker and Wurgler (2002) and Dittmar and Thakor (2007) focus on the relationship between stock price and timing of equity issuance in U.S. firms. Our study, in turn, focus on the relationship between stock price and debt securities issuance in emerging economies. Dittmar and Thakor (2007) assume that a firm automatically chooses debt securities issuance as a funding tool when equity issuance lacks "good timing." Our results also support that a firm in an emerging country chooses debt securities issuance when equity issuance is not under "good timing." Unfortunately, owing to limitations of the data, it is not possible for us to investigate another determinant of Dittmar and Thakor's, namely, the consistency of future prospects between firm insiders and shareholders for firm profitability. Therefore, we cannot mention which is more appropriate in emerging economies, "timing theory" or the "disagreement theory" of Dittmar and Thakor (2007). However, our results suggest that debt securities issuance in emerging economies is not sufficiently explained by traditional theories of trade-off theory or pecking order theory, but by the fact that the financing tool of debt securities issuance is chosen when the stock price is low.

Another significant parameter that table VI reports is that that of relative financing cost of debt securities issuance (*FinanceCost*). Although these parameters are entirely insignificant in the previous analyses, they are negatively significant for Indonesia, Malaysia, and the Philippines. The major difference between the previous and this analysis is that only securities-issuing firms are employed by this dataset. Bondt (2005) asserts that the financing cost influences the debt securities issuance in Europe. His empirical results suggest that relative financing cost influences the debt securities issuance decision. We can also support the view that relative financing cost (*FinanceCost*) influences the debt securities issuance decision only for interest payment-sensitive firms, while the number of those firms is extremely small compared with non-sensitive firms in emerging economies.

Table VI Estimation Results of Determinants of Debt Securities Issuance: Stock Price and Debt Securities Issuance

	(A)Indonesia			(B)Thailand		
Dependent Variable	Debt Securities Issuance=1, Equity Issuance =0			Debt Securities Issuance=1, Equity Issuance =0		
	Model A	Model B	Model C	Model A	Model B	Model C
Stock Price 3month	-0.501			-0.065		
	(-1.520)			(-0.260)		
Stock Price 6month		-0.492 **			-0.501	
		(-2.450)			(-1.400)	
Stock Price 12month			-0.263 **			-0.149 *
			(-2.430)			(1.640)
FinanceCost	-0.003 ***	-0.003 **	-0.001 *	0.012	0.022	0.018
	(-2.460)	(-2.160)	(-1.770)	(1.100)	(0.810)	(1.110)
ROA	-1.186 *	-0.974	-0.776	-0.290	-0.723	-0.641
	(-1.620)	(-1.460)	(-0.820)	(-0.270)	(-0.650)	(-0.610)
ASSET	0.059	0.056	0.016	0.443 ***	0.424 ***	0.435
	(0.960)	(0.860)	(0.230)	(7.840)	(7.430)	(7.570)
DER	-0.006	-0.007	-0.002	-0.072 ***	-0.079 ***	-0.085 ***
	(-0.310)	(-0.320)	(-0.080)	(-3.910)	(-3.930)	(-3.900)
Const	1.119	-1.274 *	-0.813	3.881 ***	3.707 ***	3.841 ***
	(-1.560)	(-1.670)	(-1.030)	(6.840)	(6.470)	(6.650)
Year Dummies	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Industrial Dummies(2digit)	yes	yes	yes	yes	yes	yes
LR chi2	25.99 *	33.38 ***	32.68 ***	124.05 ***	129.83 ***	126.44 ***
Pseudo R2	0.100	0.135	0.139	0.298	0.313	0.309
Number of Obserbations	194	194	194	338	338	338

(continued)

Table VI-*Continued*

	(C)Malaysia			(D)Philippines		
Dependent Variable	Debt Securities Issuance=1, Equity Issuance =0			Debt Securities Issuance=1, Equity Issuance =0		
	Model A	Model B	Model C	Model A	Model B	Model C
Stock Price 3month	-0.484 **			-0.322 **		
	(-2.230)			(-2.160)		
Stock Price 6month		-0.188 *			-1.455 ***	
		(-1.870)			(-3.050)	
Stock Price 12month			-0.201 *			-0.450 *
			(-1.920)			(-1.680)
FinanceCost	-0.046 **	-0.033 **	-0.044 **	-0.110 **	-0.112 *	-0.112 *
	(-2.450)	(-2.220)	(-2.260)	(-1.990)	(-1.920)	(-1.870)
ROA	-0.848	-0.805	-0.812	-9.562 ***	-9.454 ***	-9.476 ***
	(-0.710)	(-0.680)	(-0.700)	(-3.055)	(-2.990)	(-3.070)
ASSET	-0.427 ***	-0.423 ***	-0.426 ***	0.381 ***	0.408 ***	0.368 ***
	(-4.940)	(-4.940)	(-4.920)	(3.350)	(3.350)	(3.380)
DER	0.048	0.053	0.048	0.041	0.038	0.021
	(1.120)	(1.230)	(1.160)	(1.020)	(1.240)	(0.710)
Const	2.566 ***	2.545 ***	2.533 ***	4.988 ***	5.081 ***	4.767 ***
	(4.560)	(4.550)	(4.600)	(3.680)	(3.610)	(3.710)
Year Dummies	yes	yes	yes	yes	yes	yes
Industrial Dummies(2digit)	yes	yes	yes	yes	yes	yes
LR chi2	64.80 ***	63.98	64.50 ***	84.33 ***	94.83 ***	82.82 ***
Pseudo R2	0.252	0.248	0.224	0.442	0.433	0.385
Number of Obserbations	492	492	492	169	169	169

Note: *, **, and *** denote statistical significance at the 10%, 5%, and 1% level respectively.

3. Capital Market Accessibility and Debt Securities Issuance

Table VII demonstrates the determinants of the firm debt securities issuance. We repeat the examination of the differences between capital market-accessible firms and inaccessible firms by another empirical approach in this analysis. Brav (2009) investigates the difference of capital market accessibility between publicly listed firms and private firms in the United Kingdom and concludes that corporate financing patterns vary between these two groups. Our empirical model employs this approach and verifies the difference in financing behaviors between capital market-accessible publicly listed firms and inaccessible listed firms in ASEAN countries. Our hypothesis is that the accessible firms choose debt securities issuance in their corporate financing activities while inaccessible firms do not.

To examine the above hypothesis, we estimate empirical model (3.5) and then tested the differences of the parameters and the predicted value means. The first test we made is to examine the difference of a pair of point estimators of each variable interacted with dummy variables. *Equity Issued X* (*Equity non-Issued X*) is the variable X interacted with a dummy equal to one (zero) if the firm is a frequent equity issuer and zero (one) if an infrequent equity issuer. In other words, "Test 1" reports the p-value of the test *Equity Issued X = Equity non-Issued X*. The second test we made is to examine the difference between the debt securities issuance-predicted values of capital market-accessible firms and inaccessible firms. We compute each observation of the predicted debt securities issuance of equity issuers and non-issuers. "Test 2" reports the means of these predicted values and statistically tested differences. *, ** and *** denote statistical significance at the 10 percent, 5 percent and 1 percent level, respectively.

Table VII indicates that the parameters of *EqMBR*, *EqFinaceCost*, *and EqASSET* are significant in all the sample countries. The parameter of *EqMBR* is negatively significant, suggesting that capital market-accessible firm issued debt securities when the corporate value is low. The parameter of *EqFinanceCost* is also negatively significant, which suggests that the relative interest payment size influences the debt securities issuance for capital market-accessible firms. The parameter of *EqASSET* is positively significant, indicating that capital market-accessible firms are statistically large.

"Test 1" indicates that parameters differ significantly between that of *EqMBR* and that of *NonEqMBR*. Those of *EqFinanceCost* and *nonEqFinanceCost* are also significantly different. Judging from these results based on the above point estimator results, we conclude that corporate value of the firm and finance cost influence the corporate financing decision for capital market-accessible firms, but they do not for inaccessible firms. In addition, as shown in "Test 2," the predicted value of dependent variable (debt securities issuance = 1 at year t) of market accessible firms is statistically higher than that of market inaccessible firms.

Table VII Probit Analysis of Determinants of Debt Securities Issuance

	(A)Indonesia		(B)Thailand		(C)Malaysia		(D)Philippines	
Dependent Variable	Debt Securities		Debt Securities		Debt Securities		Debt Securities	
Equity Issued MBR	-0.115	*	-0.632	*	-0.006	*	-6.85E-06	**
	(-1.750)		(-1.900)		(-1.670)		(-0.330)	
Equity non-Issued MBR	-1.753		-6.77E-01		-4.81E-06		2.40E-07	
	(-0.010)		(-0.010)		(-0.340)		(0.340)	
Equity Issued Finance Cost	-4.02E-04	***	2.73E-01		-0.014	***	-3.00E-04	*
	(-2.910)		(1.160)		(-3.110)		(-1.660)	
Equity non-Issued Finance Cost	1.30E-05		-4.58E-01		-0.008	**	-7.67E-06	
	(0.474)		(-0.001)		(-2.110)		(-0.230)	
Equity Issued ROA(-1)	-1.174		-1.98E+00		-1.76E-04	*	-6.37E-06	
	(-0.740)		(-1.010)		(-1.950)		(-0.040)	
Equity non-Issued ROA(-1)	-0.805	*	1.19E+00		4.83E-05		2.98E-04	
	(-1.690)		(3.250)		(0.630)		(0.200)	
Equity Issued ASSET	0.372	**	1.068	***	0.001	***	2.86E-04	***
	(2.070)		(5.780)		(12.980)		(2.870)	
Equity non-Issued ASSET	-0.724		-7.02E-01		-3.40E-04	***	5.88E-06	
	(-0.001)		(-0.010)		(-1.430)		(0.550)	
Equity Issued DER(-1)	-0.394	*	-2.89E-01	**	-0.034	**	-5.88E-06	*
	(-1.930)		(-2.410)		(-2.270)		(-1.630)	
Equity non-Issued DER(-1)	-4.60E-03		2.26E-02		-0.014		-8.63E-08	
	(-0.020)		(0.310)		(-1.030)		(-0.050)	
Const	-5.859	**	-10.529	***	-1.33E-04	***	-4.84E-04	***
	(-2.580)		(-5.570)		(-0.190)		(-0.380)	
Number of Obserbations	1,716		2,960		5,476		1,881	
Number of Firms	241		414		790		199	
	Test 1							
MBR	0.000	***	0.000	***	0.687		0.070	*
Finance Cost	0.000	***	0.112		0.000	***	0.071	*
ROA	0.090	*	0.000	***	0.023	**	0.867	
ASSET	0.012	**	0.989		0.000	***	0.000	***
DER	0.000	***	0.009	***	0.023	**	0.141	
	Test 2							
Predicted Pr^{Equity}[DS Issuance]	14.46%		19.12%		29.65%		14.69%	
Predicted $Pr^{non\text{-}Equity}$[DS Issuance]	5.48%		3.41%		5.25%		1.63%	
P-Value(Pr^{Equity} [DS Issuance]=$Pr^{non\text{-}}$Equity [DS Issuance])	0.000	***	0.000	***	0.000	***	0.000	***
Pr^{Equity} [DS Issuance]>$Pr^{non\text{-}}$Equity [DS Issuance]	100.0%		100.0%		100.0%		100.0%	

		Test 3			
MBR	$PE^{Equity}>PE^{non\text{-}Equity}$	99.12%	95.66%	54.28%	79.41%
Finance Cost	$PE^{Equity}>PE^{non\text{-}Equity}$	91.26%	75.35%	94.62%	98.99%
ROA	$PE^{Equity}>PE^{non\text{-}Equity}$	98.00%	99.46%	97.11%	69.32%
ASSET	$PE^{Equity}>PE^{non\text{-}Equity}$	99.60%	90.10%	100.00%	100.00%
DER	$PE^{Equity}>PE^{non\text{-}Equity}$	94.76%	99.61%	99.14%	84.74%

Note 1: *, **, and *** denote statistical significance at the 10%, 5%, and 1% level, respectively.

Note 2: Test 1 reports for each variable X the p-value of the test Equity Issued X = non-Equity Issued X.

Note 3: In Test 2, for each observation of an infrequent and frequent equity issuer, this analysis computes its predicted debt securities issuance probability (dependent variable) if it were a frequent (infrequent) equity issuer.

Note 4: Test 3 compares between frequent and infrequent equity issuers' partial effect of each of the explanatory variables on the odds ratio, accounting for the nonlinearity of the model.

V. Conclusions

Using country panel data and ASEAN firm data, this paper examined the determinants of debt securities issuance in emerging economies. The first conclusion we derived is that the number of equity issuers that proxies the degree of stock market development and the degree of debt securities market development are positively related in emerging economies according to macroeconomic variables. Second, while a frequent equity issuer often issues debt securities, a less frequent equity issuer does not choose the debt securities issuance in emerging economies, based on microeconomic data from non-financial ASEAN firms. The third conclusion we derived is that a firm issues debt securities when its stock price is low, but infrequent equity issuers do not issue debt securities regardless of the stock price. Fourth, a firm's market-to-book ratio and financial cost of debt securities issuance influence the debt securities issuance only for market-accessible firms, under the assumption that frequent equity issuers approximates capital market-accessible firms.

The results of this paper have important implications for the relevant literature. A firm's stock price and financial costs influence the firm's financial policy in the capital market-accessible firms of emerging economies. These results are consistent with other studies, but a unique quality of firms in emerging economies is that the significant number of capital market-inaccessible firms in these countries means they tend not to choose debt securities issuance regardless of stock price and finance costs. We speculate that they have not disbursed initial fixed costs for securities issuance in the past. These firms are not influenced in their financial policy by stock price or financial costs. This indicates a dichotomy in corporate financing patterns between market-accessible firms and inaccessible firms.

Why is the debt securities market undeveloped in emerging economies and what

policy is necessary to promote its development in emerging economies? This paper concluded that too many developing countries are hindered by capital market-inaccessible firms. This paper also suggests that promoting debt securities market development by government intervention is not always appropriate, although equity market development policy or the related promotional equity market development policy might eventually serve as the driving force behind the debt securities market development. Finally, we complete this paper by indicating a few tasks that we could not perform. Emerging economies naturally face various stages of an undeveloped debt securities market. Although we excluded emerging country firms for which the number of debt securities issuers was extremely small, we expect that future research will examine the above corporate financing pattern in these countries depending on the development stage.

References

Asquith, Paul, and David Mullins, (1986), "Equity Issues and Offering Dilution," *Journal of Financial Economics* 15, pp.61-89.

Baker, Malcolm P., and Jeffrey Wurgler, (2002), "Market Timing and Capital Structure," *The Journal of Finance* 57, pp. 1-32.

Billet, Matthew, Tao-Hsen Dolly King, and David C. Mauer (2007), "Growth Opportunities and the Choice of Leverage, Debt Maturity, and Covenants," *The Journal of Finance*, VOL. LXII, NO 2, pp.697-730.

Billet, Matthew, Mark Flannery, and Jon Garfinkel, (2011), "Frequent Issuers' Influence on Long-run Post-Issuance Returns," *Journal of Financial Economics*, February 2011, 99, pp.349-364.

Bolton, Patrick, and Xavier Freixas, (2000) "Equity, Bonds and Bank Debt: Capital Structure and Financial Market Equilibrium under Asymmetric Information," *Journal of Political Economy*, April 2000, 2, 108, pp.324-351.

Bolton, Patrick, and Xavier Freixas, (2006) "Financial Architecture in Emerging Market Economies," Working Paper290, Inter-American Development Bank.

Bondt, Gabe D., (2005), "Determinants of Corporate Debt Securities in the Euro Area," *The European Journal of Finance*, Vo. 11, No.6, pp.493-509, December 2005.

Brav, Omer, (2009), "Access to Capital, Capital Structure, and the Funding of the Firm," *The Journal of Finance*, Vol. LXIV, No. 1, February 2009, pp. 263-308.

Datta, Sudip, Mai Iskandar-Datta and Kartik Raman, (2005), "Managerial Stock Ownership and the Maturity Structure of Corporate Debt," *The Journal of Finance*, Vol. LX, No. 5, October 2005, pp. 2333-2350.

Davis, E. Phillip, (2001), "Multiple Avenues of Intermediation, Corporate Finance and Financial Stability," *IMF Working Paper*, 01/115.

Demirguc-Kunt, Asli, and Ross Levine, eds. (2001), *Financial Structure and Economic Growth: A Cross-Country Comparison of Banks, Markets, and Development,*

Cambridge, MA: MIT Press.

Dittmar, Amy K., and Anjan V. Thakor, (2007), "Why Do Firms Issue Equity," *The Journal of Finance*, Vol. 62, No. 1, February 2007, pp.1-54.

Fama, Eugene F., and Kenneth R. French, (2005), "Financing Decisions: Who Issues Stock?," *Journal of Financial Economics* 76, pp.549-582.

Goyal, Vidhan K., Alessandro Nova, and Laura Zanetti, (2011), "Capital Market Access and Financing of Private Firms," *International Review of Finance*, Volume 11, Number 2, June 2011, pp. 155-179.

Graham, John R., and Campbell R. Harvey, (2001), "The Theory and Practice of Corporate Finance: Evidence from the Field," *Journal of Financial Economics* 60, pp.187-243.

Harris, Milton, and Artur Raviv, (1993), "Differences of Opinion Make a Horse Race," *Review of Financial Studies* 6, pp.473-506.

Rajan, Raghuram G, and Luigi Zingales, (1995), "What Do We Know About Capital Structure: Some Evidence From International Data," *The Journal of Finance*, VOL. L, No. 5, pp.1421-1460.

Rajan, Raghuram G., and Luigi Zingales, (1998), "Financial Dependence and Growth," *American Economic Review*, 88, pp.559-586.

Van Binsbergen, Jules H., John Graham, and Jie Yang (2011), "The Cost of Debt," *The Journal of Finance*, Vol. 65, No. 6, pp.2015-2444.

Wurgler, Jeffrey, (2000), "Financial Markets and the Allocation of Capital," *Journal of Financial Economics*, 58(1-2), pp.187-214.

ポリビニルアルコールのネットワーク構造を利用したジオポリマー粉末の調製

Preparation of Geopolymer Powder Using Network Structure of Polyvinyl Alcohol

井上元基*、天野未津紀、野口美由貴、本郷照久**、山崎章弘
Motoki Inoue, Miduki Amano, Miyuki Noguchi, Teruhisa Hongo, Akihiro Yamasaki

Abstract

We developed geopolymer powders using network-structure of polyvinyl alcohol for the use of water purification at developing region. Geopolymer powders with different diameter were obtained by different condition such as PVA concentration, the ratio of geopolymer precursor to PVA solution and drying procedure. Prepared geopolymer powders were characterized with X-ray diffraction and laser diffraction particle size analyzer. The lead removal ability of geopolymer powder was investigated using inductively coupled plasma atomic emission spectroscopy. Geopolymer powder with small median diameter tend to easier to remove lead compared with geopolymer prepared using well known method.

Ⅰ．はじめに

世界の人口は国際連合の統計資料によると、2012年に約70億人を突破したとの推計が報告された。このうちアジア・太平洋地域の人口は約43億人と世界全体の半分以上を占めている。特にアジア・太平洋地域の開発途上国では、都市への人口集中が進んでいる。この背景にはマンパワーのみならず熱帯林や海洋資源、鉱物資源等の豊富な天然資源にあると考えられる。しかしながら、これらの地域では経済成長と人口の増大と都市への人口集中に起因して、大気汚染や水質汚濁等の様々な公害が引き起こされている。なかでも河川・湖沼等の水質汚濁は生活廃水や無処理の工業廃水の混入により人への健康影響が懸念されるほど深刻さを増し社会問題化しつつある。また、地方都市においても生産性向上を狙う農業用化学物質の過剰な使用による余剰成分の公共用水域への流出により安全な食糧生産や飲料水の確保が困難になるなど、生活だけでなく産業の根幹である農業分野への悪影響も懸念される。アジア太平洋地域の開発途上

* 明治薬科大学 分子製剤学研究室
Department of Molecular Pharmaceutics, Meiji Pharmaceutical University
E-mail: minoue@my-pharm.ac.jp
** 独立行政法人労働安全衛生総合研究所
National Institute of Occupational Safety and Health, Japan.

国において上述の問題を解決するためには、安価な原料を簡便な処理をするだけで得られる高機能な環境浄化材料の開発が必要であると考えた。ジオポリマーは原料の組成を変えるだけで容易に親–疎水性や構造制御できるだけでなく、イオン交換能を有することが知られている。ジオポリマーの原料となるケイ素およびアルミニウムは、火力発電での石炭灰や金属製造工程で排出されるスラグ（目的の金属以外の成分）等の廃棄物に高い割合で含まれていることが知られている。ジオポリマーはその構造に由来した高い力学強度を有するが、様々な形状の廃水処理装置に対応できないことが問題である。そこで、ジオポリマーを微細な粉末に加工が可能となれば様々な形状の装置に対応することができるため、開発途上地域での水環境の改善に役立てられるのではないかと考えた。

そこで本研究では、汎用高分子であるポリビニルアルコールが形成するネットワーク構造をテンプレートとして利用することでジオポリマー粉末を調製し、得られた粉末の特性を物理化学的な手法により検討した。さらに、実際の汚染排水中に多く含まれる重金属である鉛の除去能を評価した。

Ⅱ．ジオポリマー粉末の調製条件の最適化

ジオポリマーは図1に示すケイ素およびアルミニウムの酸化物からなるネットワーク構造とその負電荷を補償するためのアルカリ金属イオンを含む無機高分子である（Davidovits, 1991, Duxsou, 2007, Hajimohammadi, 2010, Khale, 2007, Provis, 2005, Huang, 2011）。そのため、ジオポリマーを利用すれば廃水中の重金属の除去が可能であることが考えられる（Yursheng, 2007, Xu, 2006, Cheng, 2012）。

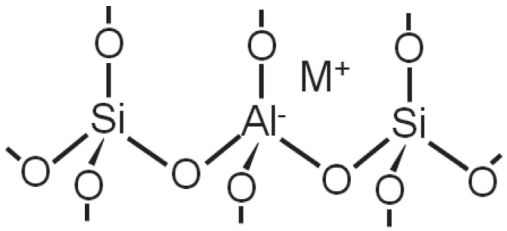
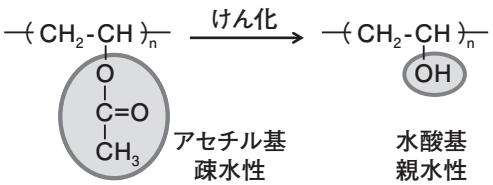


図1. ジオポリマーの3次元網目構造
Al：アルミニウム、Si：ケイ素、O：酸素、M^+：ナトリウムまたはカリウム等のアルカリ金属イオン

ポリビニルアルコール（polyvinyl alcohol：PVA）は図2に示す合成高分子で、一般的に、モノマーである酢酸ビニルを重合して得たポリ酢酸ビニルのアセチル基（疎水性）をアルカリで水酸基（親水性）にけん化することで得られる（Sakurada, 1985）。PVAはけん化度の違いにより、異なる親水–疎水性にすることができるため工業分野で汎用されている（Finch, 1973）。数％程度のPVA水溶液はゾル状態であるが、凍結–融解の繰り返し（Stauffer, 1992）または熱処理（Byron, 1987）により水酸基同士が分子間または分子内で水素結合し、3次元ネットワーク構造のゲル状態になることが知られている（図3）。



けん化度＝水酸基/（水酸基+アセチル基）×100

図2. ポリ酢酸ビニルからポリビニルアルコール（PVA）へのけん化とけん化度

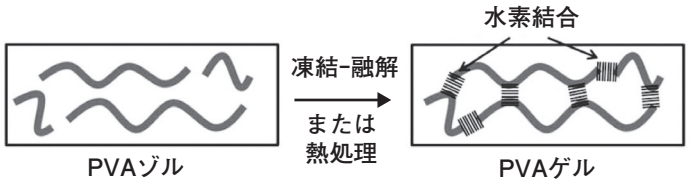


図3. 凍結–融解または熱処理による PVA のゾル状態からゲル状態への変化

ジオポリマーは硬化体で得ることは容易であるものの、粉末として得ることは困難であることから、水処理材料として用いるには困難であった。そこで、図4に示すようにPVAが形成する3次元ネットワーク中にジオポリマー前駆体を分散させ、その状態でジオポリマーを硬化させた後、PVAが可溶な温水で処理することで、PVAが除去でき、微細な粉末を得られると考えた。

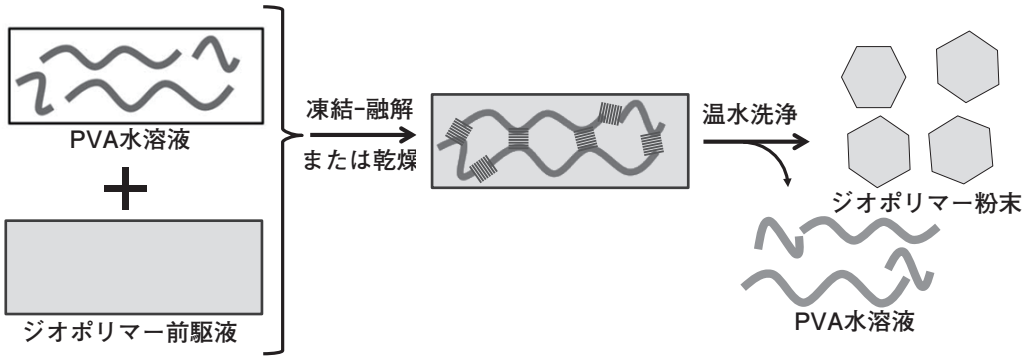


図4. PVAが形成する3次元ネットワーク中で形成されるジオポリマー粉末のイメージ

1. 調製

(1) 方法

カオリナイト（カオリンクレー・RC-1竹原化学工業）を750°Cで電気炉にて3時間焼成し、メタカオリンとした。メタカオリンとシリカを所定濃度の水酸化カリウム水溶液中に溶解させ、100 rpmで5分間撹拌した後、けん化度（98%または69.5%）の異なるPVA（クラレ製、平均重合度：1700）水溶液を所定比添加し、さらに5分間撹拌した。なお、固液比は0.4、組成比は $SiO_2 : Al_2O_3 : K_2O = 60 : 20 : 20$ となるようにした。引き続き、3日間デシケーター中で乾燥させ、

PVAならびに余剰のアルカリを取り除くために過量の沸騰水で中性になるまで洗浄を繰り返した。得られたスラリーをろ取後、デシケーター内で乾燥させることで各種の粉末を得た。なお、ジオポリマー形成の確認はX線回折測定（XRD）装置（Ultima IV, リガク社製）を用いて行った。得られた粉末の粒子径はレーザー回折法（SALD2100, 島津製作所社製）により測定した。

(2) サンプル調製条件

a. ジオポリマー前駆体とPVA水溶液の混合比の影響
ジオポリマー前駆体と7%PVA水溶液（けん化度）の混合比を1：3または3：1に変化させたものをそれぞれサンプル①、②とした。

b. 乾燥条件の影響
組成比で調製したサンプルを凍結乾燥または通常の乾燥と変えたものをそれぞれサンプル③、④とした。

c. PVA水溶液の濃度の影響
PVA水溶液濃度を5，7，10% と変化させたものをそれぞれサンプル⑤、⑥、⑦とした。

2. ジオポリマー粉末が得られる条件

表1は異なる組成で調製した粉末の粒子径を示す。ジオポリマー前駆体とPVA水溶液の混合比を1：3にしたものは3：1にしたものと比較してメディアン径が小さく表面積の大きいものが得られることがわかった。乾燥条件の検討では、凍結乾燥したものは粉末状とはならず、塊として得られることがわかった。PVA濃度を変化させると､PVA濃度が7% の場合に最も小さなメディアン径の粉末が得られることが明らかとなった。得られた粉末がジオポリマーであるかをXRD測定により検討した。なお、標準のジオポリマーサンプルとして、PVAを添加しないで調製したジオポリマーを機械的に粉砕し、過量の水で洗浄後、100μmメッシュのふるいで篩過したものを使用した。図5は各サンプルのXRDパターンを示す。通常、ジオポリマーは標準品のように結晶に由来するピークの見られない非晶質である。今回の検討で得られたサンプルはいずれもピークは見られず、標準品とほぼ同様の傾向を示したことから、ジオポリマーであることが推察された。なお、この実験でサンプル4は塊状のものを粉砕した試料の結果を示す。

表1. 調製した粉末の組成とメディアン径

Sample	ケン化度	PVA濃度(%)	GP:PVA	乾燥条件	メディアン径(μm)
1	98	7	1/3	乾燥	5.1
2	98	7	3	乾燥	19.4
3	69.5	7	1/3	乾燥	39.2
4	69.5	7	1/3	凍結乾燥	−
5	98	5	1/3	乾燥	18
6	98	7	1/3	乾燥	11.6
7	98	10	1/3	乾燥	14.1

−：粉末は形成されず

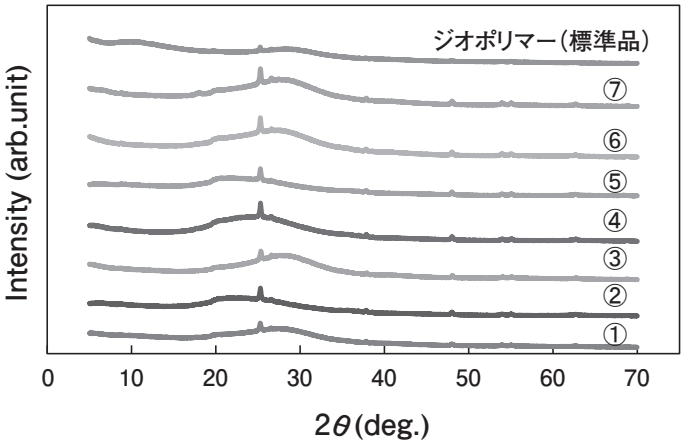


図5. 得られたジオポリマー粉末のXRDパターン

Ⅲ. ジオポリマー粉末の鉛に対する除去能の評価

鉛化合物には無機化合物と有機化合物があり、無機化合物は水に溶けにくいものが多いため急性中毒を起こすのは稀であるが、排泄を上回る量の無機化合物を長期間摂取した場合、体内に蓄積されて毒性を示す。一方、有機化合物は、脂溶性を示し細胞膜を通過して直接体内に取り込まれる。鉛化合物の毒性は急性と慢性の2種類があり、それぞれの以下の症状を示す。急性中毒は灼熱性腹痛、悪心、嘔吐、下痢および虚脱が起こり、筋萎弱、疼痛、下肢に攣縮が起こりやすい。また、中枢神経症状もおこり、頭痛、不眠、知覚異常、昏睡場合によっては死に至る。一方、慢性中毒は消化管、神経・筋、脳の3つの症状がおこりうる。消化管症状としては、食欲不振、便秘に続いて不定の腹痛、さらに進むと鉛疝痛が起こる。神経・筋形としては、胃弱または筋・関節痛を示す。脳症状としては脳障害や末梢神経障害が引き起こされる。上述の通り、鉛の摂取は人に対して多大な健康被害をもたらすため、排水からの除去が不可欠である。本研究では重金属の一例として鉛の除去能について検討した。

1. 鉛除去実験方法

種々の濃度の鉛水溶液は、硝酸鉛（和光純薬工業製）を水に溶解させることで得た。鉛水溶液を100 mL中にジオポリマー粉末を0.05 g投入した。実験は、マグネティックスターラーを用いて350 rpmで攪拌し、所定時間後に鉛のサンプリングを行った。サンプリング溶液は10倍希釈（高濃度の場合はさらに10倍希釈）した鉛濃度はそれぞれ高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES, Thermo, iCAP6000）を用いて定量した。なお、比較にはPVA非添加で調製したジオポリマー硬化体を機械的に粉砕したジオポリマー粉末（粒径：100 μm以下）を用いた。

2. ジオポリマー粉末の鉛除去能

図6は得られた鉛に対するジオポリマー粉末の鉛除去割合を示す。本手法で調製したジオポリマーは調製条件によって（サンプル3、6、7）、通常の方法で得たジオポリマーと同等以上の鉛吸着率を示した。ジオポリマー前駆体とPVAの割合は3/1よりも1/3の方が高いことがわかった

(サンプル1と2の比較)。これは、PVA割合が高い方が形成されるネットワーク構造の割合が多くなり、ジオポリマーの粒子径が小さくなるものと考えられる。一方、乾燥条件を変えたところ、凍結乾燥よりも通常の乾燥の方が小さいメディアン径の粒子を得ることができた（サンプル3と4の比較)。これは凍結乾燥をさせるとPVA分子間で形成するネットワーク構造を形成しやすくなり、ネットワーク構造間にジオポリマー前駆体が入りにくくなった結果、メディアン径の大きなジオポリマーが形成されたと考えられる。PVA濃度の最適化の検討では、PVA濃度7%の時に、最も小さなメディアン径のジオポリマー粉末を得ることが明らかとなった。

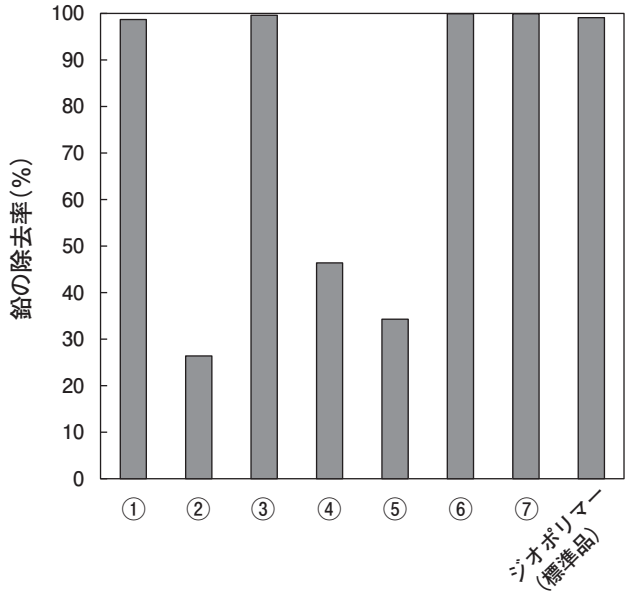


図6. ジオポリマー粉末の鉛に対する除去能

Ⅳ. 結論

ポリビニルアルコールが形成するネットワーク構造をテンプレートとして利用することでジオポリマー粉末が調製できた。PVA濃度、ジオポリマー前駆体とPVAの混合比、乾燥条件を変えることで異なる粒子径のジオポリマー粉末が得られた。本手法得たジオポリマー粉末は通常の方法で得たジオポリマーと同等の鉛除去能を発揮した。ジオポリマーを鉛等の重金属の除去剤として応用する上で、従来の機械的粉砕と比較して本手法は少量の汎用高分子をジオポリマー調製時に添加するだけで粉末化することができるため、有用な手法の一つであると考えられる。さらに、ジオポリマーの原料となるケイ素およびアルミニウム分をスラグ等の廃棄物にすることで安価なジオポリマー粉末の調製が可能となり、開発途上地域の水環境の改善に役立てられると考えられる。

参考文献

Davidovits, J. *Journal of Thermal Analysis* 1991, *37*, 1633.

Duxson, P.; Fernández-Jiménez, A.; Provis, J. L.; Lukey, G. C.; Palomo, A.; Deventer, J. S. J. *Journal of Materials Science* 2007, *42*, 2917.

Hajimohammadi, A.; Provis, J. L.; van Deventer, J. S. J. *Chemistry of Materials* 2010, *22*, 5199.

Khale, D.; Chaudhary, R. *Journal of Materials Science* 2007, *42*, 729.

Provis, J. L.; Lukey, G. C.; van Deventer, J. S. J. *Chemistry of Materials* 2005, *17*, 3075.

Huang, Y.; Han, M. *Journal of Hazardous Materials* 2011, *193*, 90.

Yunsheng, Z.; Wei, S.; Qianli, C.; Lin, C. *Journal of Hazardous Materials* 2007, *143*, 206.

Xu, J. Z.; Zhou, Y. L.; Chang, Q.; Qu, H. Q. *Materials Letters* 2006, *60*, 820.

Cheng, T. W.; Lee, M. L.; Ko, M. S.; Ueng, T. H.; Yang, S. F. *Applied Clay Science* 2012, *56*, 90.

Sakurada, I. *Polyvinyl alcohol fibers*; CRC Press, 1985; Vol. 6.

Finch, C. A. *Polyvinyl alcohol; properties and applications*; John Wiley & Sons, 1973.

Stauffer, S. R.; Peppast, N. A. *Polymer* 1992, *33*, 3932.

Byron, P. R.; Dalby, R. N. *Journal of Pharmaceutical Sciences* 1987, *76*, 65.

Review of Asian and Pacific Studies

Editor-in-Chief: Chonghwa Lee
Editorial Committee: Fuhito Endo, Kayo Hasamoto,
Fumihiko Fuchi, Masaki Yamamoto, Aoe Tanami
Assistant Editors: Akiko Kanda, Hiroyoshi Sekijima, Sachiko Nakayama

Review of Asian and Pacific Studies is published once a year by Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University. The review invites papers and articles concerning broad spectra of social, economic and political problems as well as technology transfer and environmental protection in the Asia-Pacific region. Papers should be within 10,000 words in English or 24,000 characters in Japanese including tables, figures, bibliography and notes. Body text and endnotes should be double-spaced in A4-paper (or equivalent of this form) and should be submitted by e-mail to caps@jim.seikei.ac.jp, or by mailing a copy to the editorial office. A 300-word abstract should be attached at the time of submission. After refereeing, the editorial office will notify the author(s) its final decision concerning publication within three months after receiving the paper. Responsibility concerning facts and views rests solely with the author(s), and not with the editors of the review. For details, please see the website of the Center: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/english/05publication/journal.html#call.

編集後記

今号の特集「〈アジア〉を読む／聴く　記憶・アイデンティティ・共生」は、この特集のために新たに執筆頂いた４つの論文と、アジア太平洋研究センター主催の別々の３つの企画に関するレポートからなっています。

特別掲載というかたちをとりました「アジアの思想を読む　中江兆民を中心に」は、2015年２月22日に行われた同名のワークショップを基にしています。これは宮村治雄氏・井田進也氏という長年中江兆民研究に携わって来られたお二人に報告と対談をして頂くという貴重な機会でした。

2015年７月10日と11日には、花崎皋平氏の講演会および同氏と弓野恵子氏、孫和代氏によるワークショップが開かれ、本ジャーナルにはそのうち講演会の内容を掲載させて頂きました。それに先立ち、ワークショップの共催団体でもあったピープルズプラン研究所では、花崎氏を囲む連続講座が丸一年にわたって開かれており、その講座に関わっていた川本隆史氏、金井淑子氏に本誌への寄稿をお願いしました。

７月12日に行われたワークショップ「浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ　旅するカタリ、千年さすらいかもめ組」の発案者である姜信子氏に、新たに稿を起こしていただきました。そのほか、「〈アジア〉を読む／聴く　記憶・アイデンティティ・共生」というテーマを自分の研究分野に引き付けるかたちで、当センターの研究員である田浪亜央江と村上陽子がそれぞれ論文を執筆しました。

センターの2015年度の招聘外国人研究員および各共同プロジェクト担当者からも早々と報告論文を寄せていただき、充実した誌面を作ることが出来ました。御協力くださった各位に、改めて御礼を申し上げます。

（アジア太平洋研究センター所長　李 静和）

2015 All rights reserved
Published by Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
3-3-1 Kichijoji-kitamachi, Musashino-shi, Tokyo 180-8633, Japan
TEL: 0422-37-3549 FAX: 0422-37-3866
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
Cover Design by Atsushi Yamaguchi
Printed and bound by Tokyo Engineering Service Co., Ltd. Tokyo, Japan

Review of Asian and Pacific Studies 2015

アジア太平洋研究 No.40

Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
成蹊大学アジア太平洋研究センター